
Mystic world

ロンロンの弟子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M y s t i c w o r l d

【Nコード】

N 8 6 9 8 G

【作者名】

ロンロンの弟子

【あらすじ】

神奈川県に住む高校生、茅野泰人^{かやのたいと}。普通の生活をしていた彼が、変な生物に出会い異世界に旅立つ物語。

序章（前書き）

初めまして。初投稿のロンロンの弟子と申します。
話はかなり自分なのですが、良かったら見てください。
投稿はできるだけ早く頑張ります。

序章

ここは神奈川県のとある高校。

時間は午後5時を過ぎ、生徒たちはそれぞれ友達と部活に行ったり帰宅したりしている中1人悲しく帰宅している男がいた。

男の名は、茅野泰人^{かやのたいと}。高校二年生の帰宅部で、趣味は特にない。常に腰にはメジャーを身につけている。奇想天外な性格で、あまり人には好かれない。

泰人「あーあ、今日もなんか普通に終わったな。家に帰る前にどこかに寄りたい気分だ。」

そう考えていた時、後ろから声がする。

??? 「おーい、泰人！」

泰人は呼ばれたのに気づき振り返る。

そこにいたのは、泰人の友人である谷田沙汰^{たにださた}だった。泰人と同じ高校2年生で趣味はパソコンを弄ること。泰人とは小学校からの付き合いでたった一人の親友である。人をあまり信用しないので、友達が少ない。

泰人「なんだ、お前か。今日も帰りに一人でネットカフェにでも寄って行くのか？」

沙汰「まあな。俺、友達お前しかいないし。どうだ、一緒に行かないか？ 駅前に新しくできたところなんだ。」

泰人「俺以外に友達いないってはっきり言うなよ。でも、どっかに寄りたい気分だったし行くか。」

沙汰「よし、じゃあ行こうか！」

こうして二人は駅前のネットカフェに向かった。

・・・3時間後。2人はようやく店から出てきた。

泰人「ふう、お前長すぎだよ。2時間くらい暇だったんだぞ。」

沙汰「いやいや、これくらい普通だよ。長い時間で半日はいるよ。」

泰人「・・・そうだったな。」

そうこうしている内に家の近くまで来た。2人の家は歩いて2分位の距離しかない。

泰人「じゃあここで。また明日な。」

沙汰「おう。またな!」

2人は別れてそれぞれの家路についた。

<茅野家>

泰人「ただいま!母さん、夕飯頼むぜ。」

すると台所から泰人の母が出てくる。

母「まったく、もう20時30分じゃない。遅くなるなら、ちゃんと連絡しなさいと言ってるでしょ。」

泰人「悪かったよ。悪かったから夕飯食わしてくれよ。」

母「まったく、しょうがないわね。今温めなおすから少し待ってて。」

夕食後、泰人は自分の部屋にいた。

泰人「うーん、明後日は土曜日だけど特に予定がないな。どうしようか?」

泰人が休みの日の予定を考えている時、トントンとドアを誰かがノックする。

???「お兄ちゃん、入っていい?」

ドアの外から少女の声がする。

泰人「ん、莉麻か。いいよ!」

すると、泰人の部屋に少女が入ってくる。

彼女の名は、茅野莉麻^{かしのりま}。中学2年生の家庭部で、趣味は料理。2人兄妹なので、かなりのお兄ちゃん子である。

泰人「どうした、こんな時間に。なんか用か?」

莉麻「うん。お風呂あがったから、次お兄ちゃん入ってね。」

泰人「おう。サンキュー!」

再び考え始めようとする泰人。すると、

莉麻「あのさ、お兄ちゃんは明後日暇？」

泰人「ん、暇だけどうした？」

莉麻「実は、その日に料理教室があるんだけど一緒に行かない？」

泰人少し考えて、

泰人「うん、いいよ。」

と答えた。すると莉麻は嬉しそうにして、

莉麻「本当に？約束だからね。」

泰人「分かった。」

莉麻「うん。それじゃあお休み、お兄ちゃん。」

泰人「お休み、莉麻。」

一通り話を終え、部屋から出ていく莉麻。

泰人「よし、予定も決まったし風呂入って寝るか。」

その後、泰人は言ったとおりお風呂に入って眠りについた。

第一章（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。

今回で変な生物が出ます。

楽しんでもらえたら光栄です。

第一章

＜茅野家＞

次の日の午前6時、茅野家は母親が最初に起きる。そして準備を始める。

6時30分、父親起床。

母「おはよう。昨日は残業で夜遅かったみたいだけど、大丈夫？」

父「なあに、君がいてくれるから大丈夫さ。」

母「あなた、ありがとう。」

父「こっちこそ。」

仲のいい夫婦である。

そして7時、茅野兄起床。妹を起こしに行く。

泰人「おーい、朝だぞ。起きろよ！」

莉麻「うーん、まだ眠いよお。」

泰人「何言ってるんだ、遅刻するぞ。」

莉麻「分かったよお、起きるう。」

莉麻は朝に弱かった。

こうして毎日茅野家は始まるのだ。

朝食を家族4人で食べ終え、泰人が最初に家を出る。

泰人「行ってきまーす！」

親「行ってらっしゃーい。」

莉麻「お兄ちゃん、待ってよー。」

こんな感じで家を出る。・・・普通ならば。

そんな普通も終わりを告げる時が来た。

泰人が家を出ると家の前に変な生物がいた。

泰人「・・・・なんだ、この気持ち悪いの？」

そう、確かに気持ち悪いのだ。見た目は狐だが、頭に兎の耳が生えている。

そしてその生物は、

変な生物「ティルス！」

と鳴いたのだ。

泰人（うっわー。やべーよ、これ。）

そう思っているうちに、家から莉麻が出てくる。

莉麻「お兄ちゃん、待っててくれたの？ 嬉し……」

莉麻の言葉が止まった。変な生物が目にはいったからだ。

変な生物「ティルス！」

追い打ちをかけるように鳴く変な生物。

これはヤバいな、と泰人は思った。しかし、

莉麻「わぁー！ この子かわいいね。この子どうしたの？」

この瞬間、妹が心配になる泰人だった。

泰人「……いや、ドアを開けた時からいたんだよね。まあ気にしても仕方ないし学校に……」

莉麻「じゃあ、今日一日でも預かろう。お母さん！！」

と言って家の中に戻る莉麻。1分もしないうちに、母親を連れてきた。

莉麻「ねえ、私たちが学校から帰るまで面倒見てて。帰ったら責任もって飼い主さん探すから。」

母「うーん、……分かった。でも、帰ったらちゃんと泰人と一緒に飼い主さん探すのよ。」

莉麻「はい、じゃあ行ってきたーす。」

母「行ってらっしゃい。」

莉麻は家を出て学校に向かった。

泰人「……俺も行こう。」

変な生物「ティルス！」

変な生物に見送られ、泰人も疲れた顔をして学校に向かった。

<高校>

4時間目が終わり昼食の時間、泰人は沙汰と一緒に昼御飯を食べていた。

沙汰「どうした？ いつもおかしいな泰人君、今日は暗いね。」

泰人「まあ、確かに少しおかしいかなって自分でも気づいてるけどさ。実は朝変な生物に会っちゃって、帰ったらそいつの飼い主探しなくちゃいけなくなっただよ。」

沙汰「なるほど！どんな奴？」

泰人「それが狐に兎の耳が生えた変な生物で、ティルス！って鳴く・・・」

沙汰「面白そうだから俺も付き合う。そいつ見たい。」

泰人「・・・まったく。分かった、じゃあ帰ったら俺の家に来い。莉麻も一緒だから。」

沙汰「OK！」

一通り会話してご飯を食べ終わる二人。そうして午後の授業が始まった。

放課後

高校を後にしてそれぞれの家に帰る二人。

泰人「じゃあ、すぐ来いよ！」

沙汰「おう！」

そして家に着いた泰人。家の前には変な生物がいて、制服姿の莉麻と母が何か話している。

母「この子について、動物飼育センターに行ってきたの。そしたらこの子、他の人には見えないみたいなの。お父さんは見えたのに。」
莉麻「じゃあ、私たちにしか見えない幽霊なの？普通に触れるけど。」

莉麻「変な生物を撫でる。でも、変な生物は無表情だ。」

そこで泰人は二人と目が合う。

母「泰人！いいところに帰ってきたわね。実は・・・」

泰人「話は大体聞いたよ。どういうことなんだろう？」

三人は、その場で腕を組み考え始めた。そこに沙汰がやってきた。

沙汰「こんにちは。どうしたんですか？」

母「沙汰君、いらっしやい。」

莉麻「沙汰さん、この子見えますか？」

変な生物を指さして莉麻が言う。

沙汰「・・・何が？」

どうやら沙汰には見えないらしい。三人は少し残念そうだ。

母「ま、いつまでも落ち込んでられないわね。お母さんは夕飯の準備でもしようかな。じゃあ沙汰君、ゆっくりしてってね。」

沙汰「ありがとうございます。」

それを聞いて、母は家に入った。

沙汰「ところで、例の生き物見せてくれよ。」

沙汰は顔を輝かせて言う。この時、茅野兄妹は（今日の前にいるのにな。）と思った。

変な生物「ティルス！」

沙汰「ん、変な鳴き声が聞こえるな。」

どうやら声は聞こえるらしい。

その時、変な生物が

変な生物「テテテテテテテテテ」

と鳴いた。何事かと茅野兄妹と沙汰は音をするほうを見た。

なんと変な生物からすごい勢いで白い光が噴出しているのだ。

それに三人は気付いたが遅かった。

光がやんだ時にはもう三人の姿はなかった。

第二章（前書き）

こんばんは。今回はかなり単調すぎるかもしれませんが。説明ばかりですが良かったらどうぞ。

第二章

・・・あれから1時間は過ぎようというとき

泰人「うーん、どうなってるんだ。」

泰人が目を覚まし、辺りを見回す。見渡す限り森の中にいるようで、泰人以外には誰もいないみたいだ。

泰人「ここはどこだろう？まず歩いてみるかな。」

そう呟くと、泰人は森の奥に歩いて行った。

しばらく歩いていると、一人の見知らぬ少年が倒れている。

泰人「おい、大丈夫か？」

泰人は慌ててその少年に近寄る。するとその少年は目を覚ました。

「？？」「あ、泰人さん。こんにちは。やっと話せましたね。」

どうやら少年は泰人のことを知っているようだ。

泰人「ん？君はいったい。」

「？？」「僕はティルスです。あのときは獣の姿でしたけど。」

泰人「はい？どういうことなんだ。」

ティルス「話は後にして、お二人を探しましょう。」

泰人「・・・分かった。」

またしばらく歩くと、小屋みたいなものがある。どうやら誰も住んでいないみたいだ。

泰人「中に二人がいるかもしれない。」

ティルス「分かりました、入りましょう。」

泰人は小屋の扉を開けた。思った通り、中には二人がいた。

沙汰「おう、大丈夫だったか？」

莉麻「その子、誰？」

泰人「大丈夫だったよ。この子はあの変な生物らしい。」

ティルス「へ、変な生物って。まあとりあえずすべてをお話ししましょう。」

「？？」「待ってください、ティルス様！私がお話しします。」

声をした入口のほうを見ると、小さな妖精が飛んでいた。

ティルス「サミー！よくここが分かったね。」

サミー「私はあなたの付き人ですから。」

一同（人じゃないじゃん。）

サミー「では、自己紹介から。私はサミー。ティルス様のお世話担当です。」

莉麻「わたしは、茅野莉麻。宜しくね！」

沙汰「俺は、谷田沙汰。」

泰人「・・・俺は、茅野泰人。莉麻の兄だ。」

サミー「はい、分かりました。ではお話します。」

一呼吸置くと、サミーは語りだした。

サミー「まず初めに、あなた方が一番知りたいであろうこの世界について説明しましょう。この世界はディオールと呼ばれていて、あなた方のいた地球とはかなり異なります。違いとしては、まず、普通の人間はこの世界にはいません。必ず何かしらの能力を持っていることになります。」

莉麻「例えばどんなの？」

サミー「例としては、翼が生えていたり木々と会話ができるといったところでしょうか。他にもありますが、追々説明します。次に魔道具についてです。この世界には魔道具職人という者がいます。魔道具とは、だいたいアクセサリーみたいなもので、身につけているだけでさっき挙げた中で自分にはない能力を使うことができます。でもみんな高価なものばかりですから簡単には手に入らないでしょう。」

泰人「ふむふむ。一つ聞いていいか？」

サミー「何でしょう？」

泰人「俺たちは何でこの世界に呼ばれたんだ？」

すると、サミーは思い出したような顔をして

サミー「あ、忘れてた。」

泰人「忘れんなよ。」

サミー「すみません、では。」

サミーはコホンと咳ばらいをして

サミー「あなた方をこの世界に呼んだのは、ティルス様の護衛をお願いしたいからです。」

3人「護衛!？」

サミー「はい。ティルス様は王族の血を受け継いでいませんが、次期後継者の証を持っているので時期王候補なんです。」

泰人「その証って何だ？」

サミー「それが、ディオールと地球を行き来できる時空移動の能力なのです。」

莉麻「あのピカッて光ったやつだね。」

サミー「はい。しかし、王にも子供がいます。時空移動能力は生まれつきつくもののようですが、その男にはなかったようです。」

沙汰「んで逆恨みにティルスを消そうとしてるわけだな。ティルスがいなくなれば、そいつが後継者になるからな。」

サミー「その通りです。」

泰人「でもなんで俺たちなんだ?他にいないのか？」

ティルス「それは僕が説明します。」

今までしゃべらなかつたティルスが名乗りを挙げた。

ティルス「まずは茅野泰人さんと莉麻さんは僕が見えました。何でかわかりませんが、不思議な感覚がしました。」

莉麻「家は、お父さんが少し靈感があるだけであとは普通だよ。」

ティルス「そうですか。沙汰さんも声は聞こえたようなので。」

沙汰「まあ、俺は楽しければいいけどね。」

サミー「では最後に。あなた方がこの世界に居られるのは7日です。それを過ぎるとこの世界から出れなくなります。」

泰人「ていうか、あれから3時間くらい経ってるからせめて家に連絡させて欲しいんだけど。」

ティルス「その点は大丈夫です。地球にいるはずのあなた方がいなくなったことにより、時間は止まっていますから。」

泰人「ていうか俺達護衛なんてできないぞ。」

サミー「その辺は大丈夫。あなたたちの長い間使ってる大切なものって持ってきてる？」

泰人「祖父の形見のメジャーなら。」

莉麻「大事なエプロンなら。」

沙汰「長い間じゃないけど、手作りのミニパソが宝物。」

サミー「まあ、大丈夫！」

泰人「ていうか地球帰りたいんだけど。」

莉麻・沙汰「えー、まだいいじゃん。」

ティルス「すみません。時空移動は3日に1回しかできないので。」

泰人「・・・分かった。」

サミー「うん！今日も遅いしもう寝ましょう。」

泰人（納得してないけどな。）

莉麻・沙汰（これから楽しみー！）

こうして異世界に来て、最初の日は終わった。

第三章・前編（前書き）

できました。今回は前後編です。今回もかなり趣味ようですが、良かったらどうぞ！

第三章・前編

翌日、泰人達は目を覚まし出発の準備を終えた。

泰人「じゃあ、行こうか。」

サミー「その前に昨日言った大切なものを見せてほしいの。どれ位大事にされてどんな思いが宿っているか確かめたいの。」

3人は、特に断る理由もないので了承した。

莉麻「じゃあ、私からね。お母さんが中学に入ったら着てねってずいぶん前にもらったエプロンなの。ずっと着れなかったけど、去年ようやく着れるようになったわ。」

そう言うと、莉麻は鞆から黄色い花柄プリントのエプロンを取り出した。

サミー「どれどれ、……すごい優しい気持ちになれるね。癒しの効果がありそう。」

沙汰「次は俺だな。こいつは中3の頃に親父にも手伝ってもらって造ったポケットサイズのパソコンだ。インターネットに繋げない、メールと文章作成と添付された画像を見て保存することしかできないが俺の宝物だ。」

沙汰はポケットからミニパソを取り出した。

サミー「うんうん、……これもかなり大切にされてるわね。実体的な効果が期待できそう。」

泰人「最後は俺か。このメジャーは亡くなった爺ちゃんがくれたもので、これについて色々聞いた気がするけど、名前がラルゴって事意外忘れた。そのうち思い出すと思うけど。」

そう言うと、泰人は腰のメジャーを外しサミーに見せた。

するとサミーはとても驚いた。

さみー「こ、これは……。ものすごい力を感じる。過去にこの世界で使われた形跡がある。本人との呼吸が合えば強化しないですぐに使えそう。（でもこのメジャーとラルゴって名前、どこかで・

・・・。」

ティルス「では、行きましょう。目的地は森を出てすぐの村、テミールです。そこで色々準備をしましょう。」

目的地も決まり、泰人達は出発した。
森の中を歩く泰人達。見知らぬ草花に興味を持つ莉麻と沙汰を横目に泰人は考え事をしていた。

泰人（・・・異世界の存在を認めるしかないか。そういえば、こっちに来てから、爺ちゃんのことを何度も思い浮かぶんだけどなんだろう？）

そんな中、サミーとティルスはこんな話をしていた。

サミー「ここまでは何もありませんでしたが、何があるかわかりません。まだあの3人も素人ですし。」

ティルス「そうだね。早くテミールに行かなきゃね。」

そして、ついに森の出口に辿り着いた泰人達。

だが、そこには変な人がいた。

変な人「こんにちは。そしてさようなら。」

やはり変な人だった。

一同「無視しよう。」

泰人達は華麗にスルーした。

そのままテミールに着いた。

サミー「じゃあ私と莉麻と沙汰は鍛冶屋に行きましょう。じゃあ泰人はティルス様を頼むね。」

そう言う二人と一匹は鍛冶屋に向かった。

泰人とティルスは宿屋をとって部屋にいた。

泰人「暇だし散歩してくるよ。」

ティルス「では僕は部屋で休んでます。」

泰人は宿屋を出て町はずれに来ていた。

泰人「俺は強化しなくていいって言われたけど、このメジャーにはどんな力があるんだろう？爺ちゃんになんか聞いた気がするけど、・・・思い出せない。」

メジャーを見ながら考え込む泰人。

そこにあの変な人が現れた。

変な人「なるほど、君が持っていたのか。それは実に危険なので渡してもらおう。」

そう言うのと殴りかかってくる変な人。

泰人「え!？」

気づくのが遅く殴り飛ばされる泰人。

そこで気が遠くなる。

今から12年前、泰人の祖父が生きていた頃泰人はラルゴを渡された。

泰人「いいの?これ爺ちゃんが大事にしていたものでしょ。」

祖父「ふむ、今のうちに教えておこうと思ってな。」

泰人の祖父は思い出すように話した。

祖父「1、お前がもし力が欲しいと思ったとき、このラルゴを掲げよう唱えるがいい……………」

泰人は目を覚まして起き上がる。

泰人「…………一つ思い出した。」

変な男に向き合う。

変な男「…………なんだ、さっきとは雰囲気が違う。」

そして、ラルゴを前に掲げ唱える。

泰人「いくぞ、我発動す……………」

瞬間、ラルゴから光が溢れる。

変な男「な、なんだ!？」

泰人「・・・・・・・・ラルゴ・ウィツプ!!」

第三章・後編（前書き）

少し掛かりましたが、ようやく後半ができました。
良かったら見てください。

第三章・後編

泰人「……ラルゴ・ウィップ！」

光が少し治まり、泰人の姿が見える。

特に変わったところは見えないが、ラルゴが光っている。

変な人「……発動したか。だが、すぐには使えまい。」

そう言うと、変な人は棍棒を取り出し殴りかかってくる。

泰人は冷静に祖父に言われたことを思い出し

泰人「……んじゃ、思いっきりいくぜ！」

泰人は念じる。すると、メジャーの測る部分が自在に伸びだした。

変な人「……もう使えるのか!？」

泰人「ぶっ飛べ！」

勢いをつけ、変な人めがけて測りの部分を振り投げる。ぐんぐん伸びていき、腹部にクリーンヒットする。

変な人「ぐふう……。 (まさかこれほどの力とは……。) 」

変な人は吹っ飛び、木に体を強打し気絶する。

それを見た泰人は、肩の力を抜き

泰人「……アウト。」

と呟く。メジャーの光も完全に治まり一息つく泰人。

泰人「思い出したのは良かったけど、……爺ちゃんの言ってたこと本当だったんだ。だとすると……。 」

色々考えながら、変な人は放置し宿屋に戻る泰人だった。

宿屋に着いたところには日も暮れ、全員一つの部屋に集まっていた。

サミー「おかえり。遅かったじゃない！」

泰人「まあ、ちょっとな。」

泰人はさっきあったことを説明する。

泰人「……というわけだ。ラルゴが何なのか分からないし、ウ

IPP以外はまだ思い出せない。」

サミー「・・・大体分かったわ。じゃあ、今日あったことを整理しましょう。」

サミーが仕切る。

サミー「まず、明後日には一度あなた方の世界に帰ります。明日は時間あるから、三人とも力の制御の練習をするからね。そして戻った後、準備ができたらまたこっちに戻ってくる。ティルス様がそっちの世界にいれるのも7日だから、それまでにはお願いね。」

頷く三人。

泰人「分かったけど、二つ聞いていいか？」

サミーが頷く。

泰人「護衛しろと言ってたけど、いったいどうすればいいんだ？」

サミー「実はね、王になるには5つの試練があるの。その試練の護衛は別世界の住民じゃなきゃ駄目らしいわ。」

沙汰「・・・王になるには色々知ったほうがいいから、別世界の奴と組ませるんだろう。」

サミー「その通りだよ。」

莉麻「5つの試練ってどんなの？」

サミー「詳しいことは分からない。その試練の場所しか分からないわ。」

その言葉に泰人は少し考え、

泰人「・・・分かった。んで、もう一つなんだけど、ラルゴって何なんだ？」

サミー「そのことについても分からないわ。ここには図書館がないし、もう少し大きな町に行けば分かるかも。」

と他にも色々話をし、大体みんな把握した。

ティルス「ではそろそろ自分の部屋に戻りましょう。」

それぞれな部屋に戻る一同。

こうして夜は更けていった。

次の日は、三人とも修行をしていた。莉麻は癒しの力、泰人はウィップ、沙汰は・・・ただミニパソを弄っていただけだったが、それぞれ有意義には過ごせたようだ。
しかし、ラルゴの二つ目以降の力はまだ謎だった。

そしてデイオールに来て三日たった。ついに帰る時が来た。

泰人「じゃあ頼むぜ、ティルス！」

ティルス「分かりました。」

サミー「私はこっちで待ってるから。」

莉麻「うん、ちゃんと戻ってくるからね。」

ティルス「では参ります。」

ティルスは例の呪文を唱える。すると、光が溢れ泰人達は姿を消した。

サミー「・・・ティルス様を頼むわね。」

サミーは呟いた。

第三章・後編（後書き）

次から現実に戻ります。まずあれから終わらせないと・・・。
では、また次回お会いしましょう。

第四章（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。ついに帰ってきました。2, 3
話は現実の話を予定しています。それではどうぞ。

第四章

ついにディオールから泰人達が帰ってくる。

とうか、地球では時間は全く経っていない。

茅野家前では再び光が溢れ、消える。そこには泰人、沙汰、莉麻、変な生物がいた。

泰人達は辺りを見回し、帰ってきたことを確認する。

泰人「帰ってきたけど、あんまり実感ないな。」

沙汰「まあ、たった3日だったからな。」

どうやら実感が湧かないらしい。まあ、こちらでは、時間も経っていないし3日しかいなかったので無理もない。

莉麻「そういえば、ティルス君はこの姿なんだね。かわいいけど。」
そういうとティルスを抱きかかえる莉麻。

ティルス「ティルス！」

高らかに鳴くティルス。この姿ではやはりしゃべれないらしい。

沙汰「んじゃ、俺帰るわ。疲れたし。日曜にでもまた来るよ。」

じゃあな、と言って帰る沙汰を見送る泰人と莉麻。

沙汰が見えなくなるのを見届けると

莉麻「ねえ、ティルス君も家に入れる？」

と莉麻が言う。

泰人「そうだな。外じゃかわいそうだし、母さんに事情話して中に入れるか。」

うん、と莉麻が嬉しそうに頷き家の中に入った。

（茅野家）

二人「ただいま！」

母「お帰り・・・ってどこにも行ってないでしょ。」

母は笑いながら突っ込んでくる。実際はちよつとした旅に出ていたのだが。

泰人「まあ、いいじゃん。それより話があるんだけど。」

泰人が母に言う

母「ちょっと待ってね、夕飯の途中だから。リビングで待ってて。」
そう言うのと台所に戻る母。

15分後、一区切りついたのか母はリビングに入ってくる。

母「話って何？」

泰人「実は……。」

泰人と莉麻は今まであったことを全て話した。特にこれからもデイ
オールに行かなくてはいけないことを重点的に。一通り話すの話を
聞き

母「……信じがたいけど、ティルスちゃんのことを考えると納得
するしかないわね。」

どうやら、母は納得したようだ。

母「ティルスちゃんは家の中に飼ってもいいわよ。というか元々人
ならそれが普通だしね。」

二人「ありがとう、母さん。」

嬉しそうに言う二人。

母「後、護衛の話だけど、かなり危険みたいだから本当は行くなっ
て言いたいんだけど、そうもいかないでしょ。」

その言葉に真剣に頷く二人。

母「……仕方ないわ。ただし、無事に帰ってくるのよ。」

優しく話す母に二人は

莉麻「うん、絶対帰ってくるよ。」

泰人「莉麻はちゃんと俺が面倒見るからね。大丈夫さ。」

なんだかんだいって、泰人も乗り気になったようだ。

母「うん、お父さんにはお母さんが言っておくから。じゃあご飯に
しましょう。」

3人は夕飯の準備を始めた。

夕飯を終え、父にも納得してもらった。泰人と莉麻はティルス連れて泰人の部屋にいる。

泰人「色々あったな。そういやこっちの世界でも能力使えんのかな？」

泰人は詠唱を始める。しかし、何も起こらなかった。

莉麻「どうやらできないみたいね。」

ティルス「ティルス！」

そうだよ、とでも言いたいようにティルスが鳴く。

泰人「よし、今日は寝るか。莉麻、先に風呂入ってくれ。」

莉麻は頷き部屋から出ていく。

1人残された泰人は、ティルスを見て

泰人「・・・やっぱり好きになれん。」

その後は、泰人も風呂に入って寝た。

ちなみにティルスは泰人の部屋の床で寝た。

こうして夜も更ける・・・と思っていたが

その頃の沙汰。

沙汰は自分の部屋で普通のパソコンとミニパソをつないで何かしている

沙汰「・・・次に行くまでに少しでもデータを移さねば。」

この男の夜はまだ終わらないようだ。

第四章（後書き）

今回は帰ってきただけでした。次回こそはあの話を……。ではまた次回お会いしましょう。

第五章（前書き）

ロンロンの弟子です。今回はついに料理教室の話です。少し話も動きます。それではどうぞ！

第五章

泰人達が元の世界に帰ってすぐのこと。

ディオールのとある街道を歩く変な人の姿があった。

彼の名はシュパルツ。泰人にやられたが、すぐに意識を取り戻しテミールから結構離れた街道を移動している。どこかに向かっているようだ。

シュパルツ「とりあえず、あいつの所に行きましようか。」

そう呟くと、しばらく道なりに歩く。

10分くらい歩くと、町が見えた。町の名はゴルデルといい、お金持ちが暮らす街だ。

シュパルツは中でも最も大きいお屋敷に入った。

そのメイドたちに連れられ、大きな客室に通される。そこには一人の少年がいた。

彼の名はティライズ。王子である。今は用事がありこの町にいる。

シュパルツ「久しぶりですね。元気そうですねによりです。」

嫌な笑みを浮かべながら話すシュパルツ。

ティライズ「・・・何しに来た。要件を言え!」

ティライズは不機嫌そうに話す。

シュパルツ「まあ、落ち着いて。ついにティルスを見つけましたよ。」

ティライズ「何?」

ティライズは驚いた。行方不明だったもう一人の王候補が見つかったのだ。無理もない。

ティライズ「彼には何もしていないだろうな?」

その言葉にシュパルツは笑みを浮かべ

シュパルツ「今のところは何もしていませんよ。ただし、面倒なやつが護衛をしていますがね。早めに消します、あなた様のために。」と答えた。

ティライズ「ふざけるな！私は彼こそ王にふさわしいと思っている。人や精霊に好かれ、時空転移も使える彼こそ適任だ。貴様らのふざけた情報操作のせいで彼と敵対してしまった。消えるのは貴様らだ！」

ティライズは興奮して話す。貴様らと言っているところを見て、シュパルツには仲間がいるのだろう。

シュパルツ「そうはいきませんよ。我らはあなたになっていただかなくては困るのですから。それではこの辺で。」

そう言う姿を消すシュパルツ。

ティライズ「・・・こうなれば早くティルスに会わなくては。」
考え込むティライズだった。

場所と時間は変わり、茅野家。

土曜日だというのにいつも通りに起きる茅野一家。・・・莉麻を除いて。

母は食事の支度をし、父は出勤の準備をしている。どうやら休日も仕事があるようだ。

泰人は、休みの日は30分くらい家の周りを散歩している。ティルスも一緒のようだ。

8時になり父も出勤し朝ごはんを食べ終える。9時になりようやく起きる莉麻。母曰く、休みの日くらいは寝かせたいということらしい。莉麻も遅めの朝食をとり、料理教室に向けての準備を始める。

莉麻「お兄ちゃん、1時に文化センターだからね。私はケーキ作から！」

泰人「分かった、分かった。」

莉麻と母は出発し、家には泰人とティルスだけとなった。

泰人「時間まで余裕あるし、ラルゴのメンテナンスでもするか。でもラルゴの後ろのネジ1本取れてんだよな。どんなネジも合わないし・・・。」

ぶつぶつ言いながらメンテナンスを始める泰人。後ろでティルスも見ていたが、表情は変わらない。

その後、適当に朝食を済ませて文化センターに向かった。ティルスは留守番だ。

家から文化センターまで、自転車で5分ほどの近さなので時間はかからない。

ちょうど1時に着いた泰人。料理教室内では幼稚園児から老人まで、たくさんの人たちがいる。みんな講師の先生に教えてもらい頑張っ
て作っている。その中でも一際目立っているのが母と莉麻だ。どう
やらチョコレートケーキを作っているみたいで、とても手際がいい
ので皆の手本になっている。泰人は外の待合室から見ていて、それ
に気づいた莉麻が手を振ったので振り返す。

3時間ほど経ち、ようやくみんなの料理が完成した。

試食の時間で泰人は母と莉麻のケーキを食べさせてもらった。元々
甘いものが好きだった泰人だが、このケーキはいつも以上に美味し
く感じられたみたいだ。

泰人「うん、美味いよ。」

母「莉麻が頑張ってたから、お母さんの出番が無かったよ。」

母は答える。

莉麻「えへへ、お兄ちゃん、いつでも作ってあげるよ。」

莉麻はとても嬉しそうだった。

その後の片付けは泰人も手伝い早く終わった。

友達と話している莉麻を見て、早めに帰ることにした泰人。

泰人「母さん、俺帰るから莉麻宜しく!」

母「はい。」

文化センターを出て、いつもの道を走る泰人。しかし公園の前を通
り過ぎたとき

??? 「その少年。ちょっと止まってくれんか?」

見知らぬおじいさんに話しかけられた。

公園の中のベンチに腰かけると、おじいさんが話しかけてきた。

老人「君が玄武の孫か。」

玄武というのは泰人の祖父の昔のあだ名である。

泰人「・・・そうです。祖父の知り合いですか？」

老人「うむ、ということは君が泰人君か。実はな、君に話があるのだ。」

泰人「話・・・ですか？」

泰人は聞いてみた。

老人「実は、玄武に君を任されてな。困ったことがあれば頼ってくれ。」

いきなりで泰人は混乱した。

老人「・・・例えば異世界についてとかな。」

その言葉に驚く泰人。

泰人「デイオールについて何か知っているんですか？」

老人「まあな。だが今は教えられん。本当に困った時に来なさい。」

そう言うとな家の住所の紙を泰人に渡し、去って行った。

泰人はあまり理解していなかったが、紙をポケットに入れると家に帰った。

その後、老人のことを気にしつつも泰人は就寝した。

その頃、沙汰の家では

沙汰「よし、いい感じだぞ。もう少しだ。」

まだ何かやっていた。

第六章（前書き）

今回は日曜のゆっくりした話です。
それではどうぞ！

第六章

次の日。

茅野家の日曜日の朝はゆっくりだ。父が休みなので、朝食は9時。それに合わせて起きることになる。でも、母は8時に起きて朝ごはんの支度をし、泰人も朝の散歩をするのでゆっくり寝ているのは父と莉麻だ。

朝食を終え部屋に戻る泰人。今日は午後から沙汰が来る予定なので、とりあえず午前中は勉強をすることにした。ちなみに、ティルスは莉麻の部屋で遊んでいる。なにやら楽しそうな声が聞こえてきたが、集中する泰人。どうやら泰人が勉強していると分かっているのか、莉麻は部屋まで来なかった。

昼食も終え午後になった。家のチャイムが鳴り、沙汰が来た。とても眠そうだ。

沙汰「・・・おはようございます、おばさん。」

母「あらあら、おはよう沙汰君。さあ、入って入って。」
母が出迎える。

沙汰「・・・んじゃ、お邪魔します。」

そう言うのと真っ先に泰人の部屋にきた。ドアが開く。

泰人「よお、元気か・・・。」

泰人は啞然とした。入ってきたと思ったら、勝手に人のベッドで横になる。

沙汰「・・・寝かせてくりえ。」

そう言って寝てしまった。さすがの泰人もなんか言ってるのかと思ったが、彼のミニパソが目に入っただけで少し中を覗かせてもらう。すると、ディオールに行く前よりもデータファイルが大量に保存してある。前よりも性能が上がっているようだ。

泰人「・・・こいつはこいつなりに頑張ってるようだし、今ぐらい寝かせてやるか。」

そう呟くと沙汰を起こさないように勉強を再開した。

その頃、莉麻はティルスを連れて散歩をしていた。特に行くあてもなく気分転換の為だ。

そんな莉麻が昨日泰人も通った公園の前を通ると、また例のおじいさんがいた。

老人「そこのお嬢さん、ちょっといいかね？」

その言葉に振り向く莉麻。

莉麻「え・・・、私ですか？」

老人「ふむ、君は茅野泰人君の妹君だね。」

それに驚く莉麻。

莉麻「私と兄を知ってるんですか？」

老人「まあな。実は・・・。」

莉麻は昨日の泰人と同じ説明を受ける。

老人「それで何だが、これを彼に渡してくれぬか？ いざというとき以外は開けるなどの忠告も言っといてくれ。」

そう言う小さな箱みたいなのを莉麻に渡した。

莉麻「あ、はい。」

老人「では、頼んだぞ。」

そう言って立ち去る老人。不審に思いながら、莉麻も家に帰ることにした。

それから時間が経ち、夕方になる。ようやく沙汰も起きたので、莉麻とティルスも呼んで話し合いをする。

泰人「明日、学校から帰ったら行こう。準備忘れるなよ。」

その言葉に頷く二人。無表情だがなんとなく了解したっぽい雰囲気を出すティルス。

沙汰「俺はバッチリだ。必要なデータも入れたし、バージョンアッ

プさせたから。丸々二日掛ったけどな。」

ティルス「ティルス！」

莉麻「私も大丈夫。・・・そういえば、おじいちゃんの知り合いの人からお兄ちゃんについてこの箱頼まれたんだった。必要なとき以外開けるなって言ってたよ。」

ポケットから箱を出し泰人に渡す。

莉麻「お兄ちゃんが昨日会った人だよ。」

泰人「そうか、ありがとな。（昨日の老人か。何者なんだろう？）」
考える泰人だった。

沙汰も帰り夕食も終え部屋に戻った泰人は、明日の準備をしていた。
泰人「必要最低限のものだけにしないとな。メンテナンス道具は必須だし、この箱も何か分かんないけど持っていくか。」

中身を見ないとところを見て、約束は守るみたいだ。

泰人「よし、じゃあ寝るか。」

そして準備を終え、眠りについた。

第六章（後書き）

次回から再び向こうに行きます。話も大体考えているので、できるだけ早く投稿したいです。

それではまた次回お会いしましょう！

第七章・前編（前書き）

こんばんは。

今回は、ついに異世界に戻ってきました。

そして戦闘が始まります。あの人も動きます。
では、良かったらご覧ください。

第七章・前編

次の日、月曜日。

泰人達は学校から帰ってくると早速行く準備をする。

そして、一通りの準備が済み茅野家の前に集まる。

泰人「準備はいいか？」

頷く二人。ティルスが奇声を上げる。

ティルス「テテテテテテテテ。」

すると、光が溢れその場から消える泰人達。

しばらくして目を覚ます泰人達。見渡してみると、どうやらテミールではない違う町の外れにいるようだ。

ティルス「ここは、最初の試練の神殿がある古代都市・エンシエルアです。」

いつの間にか人間化したティルスが説明する。

泰人「そーいやサミーはどうするんだ？」

ティルス「この町の宿で夕方会う予定をしています。なので、すぐにでも神殿に行きましょう。」

そういうと神殿に向かうティルス。それを見て、

泰人「ちよっと待て。まず宿で荷物おろしてからにしよう。な？」

その泰人の言葉に、

ティルス「すみません、焦ってました。」

とティルスが言うとは一同は宿屋に向けて歩く。

その頃、一人の黒いマントを被った少年がエンシエルアに向けて歩いていた。

少年「多分彼はエンシエルアかウィンディームにいるはずだ。まずエンシエルアに行ってみるか。」

どうやらティルスとの知り合いらしい。

その反対方向からもエンシエルアに向かう男がいた。なにやら大きな玉に乗っているので大道芸人のようだ。

芸人みたいな男「情報によるとあの町にいるようだな。まあ、早めに終わらせて帰るか。」

そう言うと、まるでボールを手足のように動かしスピードアップする男だった。

場所は戻り、泰人達は宿に寄り神殿に向かって町外れを歩いていた。莉麻「ねえ、あれかな？」

莉麻が指さす。そこには古いながらも威厳のありそうな建物があった。

ティルス「はい、ここですよ。」

扉の前に立つ泰人達。すると、

扉「試練を受けに来たか。候補のもの一人のみ入ることが許される。さあ、入るがいい。」

突然喋る扉。そして少しずつその扉が開いていく。中の様子は暗くてよく見えない。

ティルス「では、行ってまいります。」

そう言うとき扉の中に入り、また閉ざされた。

ティルスは中を歩いた。扉が閉まってから少し明るくなったので、歩きやすかった。

少し歩くと、銅像のようなものが立っていた。獅子の形をしている。獅子「王候補のものよ。試練を受けにきたか？」

突然喋る銅像。ティルスは少し驚いたが、ティルス「・・・はい。お願いします。」

なんとか話せた。

獅子「ふむ。ここでは試練というより、お前が王候補として適任かどうか確かめる。手を出すがいい。」

手を出すティルス。すると、その手に噛みついた。

ティルス「え!？」

びっくりするティルスだが、痛くないことや検査すると言っていたので冷静に戻る。

ティルス「(でも、僕は王の血筋ではないしな。もしかしたら駄目かもしれない。やっぱりティライズくんがいいよね。)」

そう思っていると、終わったのか獅子はティルスの腕をはなし元の位置に戻る。

獅子「王の血筋、能力を確認。合格だ!」

ティルス「はい!？」

一瞬何が何だか分からないティルスだった。

神殿の前では泰人達が座っていた。空を眺めて暇そうにしている。

泰人「暇だ。」

沙汰「暇だ。」

莉麻「暇ね。」

男「ちようどいいな。」

・・・目の前にボールに乗った男がいた。

沙汰「うわ!なんだお前は?」

沙汰が驚いたように声を上げる。

男「俺の名はボルス。早速だがラルゴ使いのお前は俺と勝負してもらう。」

泰人を指さして言う。

泰人「・・・マジかよ。しょうがない、二人とも下がってろ。」

泰人は二人を逃がす。そして

泰人「ていうか、なんで俺がラルゴ持ってるって知ってんだ?」

当然の疑問を口にする。

ボルス「シュパルツに一発喰らわせたようだな。楽しみだぜ。」

ああ、あの変な人かと泰人は考えた。

ボルス「まずはこれだ！」

右腕を前に出す。すると、歪みが発生し大量の野球ボール位の球が発射される。

泰人「うお、ビビるよ。だったら……ラルゴ・ウィップ。」

ラルゴが光る。どうやら一度発動させれば、名前を呼ぶだけでいいようだ。

泰人「行くぞ!!」

そう言うラルゴ・ウィップを自分の前で回転させる。すると、強力な風が生じ球を吹き飛ばす。

ボルス「ふむ、なかなかやるな。」

泰人「今度はこっちだ。」

泰人は間髪入れずに間合いを詰め、ウィップで叩きにかかる。しかし、ボルスはボールから降り次々と攻撃を避ける。

泰人「ぐ、当たらない。」

焦る泰人。ボルスは再び間合いを取る。

ボルス「さて、次はこれかな。」

そう言うとき再び歪みからボールが発射される。バスケットボール位の大きさで一つしかないが、鋭い棘が無数に生えている。

泰人「……やばい。」

咄嗟にかわす泰人。しかし、それには追尾機能が付いているらしくまた泰人を襲う。今度は避けられない。

泰人「ぐあ……。」

左肩に無数の傷跡が残り痛そうだ。思わず倒れる泰人。

莉麻「お兄ちゃんが！」

泰人のもとに向かおうとする莉麻。しかし沙汰はそれを止める。

沙汰「駄目だ。今行ったら君までやられるぞ。ここは我慢するんだ。何かの時は俺が泰人を助けるから。」

沙汰は優しく呼び止める。

莉麻「・・・分かりました。」

莉麻も分かったようだ。

ボルス「ではこれで最後だ。」

ボルスは右手を掲げる。すると大きな歪みが生まれ、そこから巨大なボーリングの球が現れる。

泰人「・・・こうなったらしょうがない。」

泰人はポケットに入れてある箱を取り出し開けようとする。しかし箱は開かない。

泰人「・・・嘘だろ。まだ時じゃないのか。」

完全に希望を碎かれた泰人。絶望的だ。

ボルス「ふ、どうやらここまでだな。潰れるがいい。」

巨大なボーリングの球が放たれる。

莉麻「・・・お兄ちゃん!!」

沙汰「ちい。」

沙汰はミニパソを取り出すが間に合わない。

巨大なボーリングの球を見て

泰人「・・・ここまでか。」

そう思ったとき、泰人の意識が遠くなる。

また12年前の記憶の世界だ。

泰人「へえ、ういっぷって何？強いのか？」

ちび泰人が質問する。

祖父「ウィップとは鞭のことだ。振り回したり、敵を捕まえたり色々できて強いぞ。」

祖父は答える。

泰人「そうなんだ。でも攻撃ばかりでもいいのかな？」

泰人はけっこう頭が回ると祖父は思った。

祖父「うむ、だから次の能力だ。これは特殊じゃぞ。」
そういうと一息入れる。

祖父「2、お前を守る衣が必要になったとき、ラルゴを掲げこう唱えるがいい……」

泰人は意識を取り戻す。

泰人「まだ終われない。」

ラルゴを掲げて唱える。

泰人「我発動す……」

ウィップと同様光が溢れる。だがウィップのときより優しく温かい光だ。そして

泰人「……ラルゴ・ウォール!!」

第七章・後編（前書き）

おはようございます。今回は第二の能力が発動します。さらに新しい仲間？も入ります。
それでは良かったらご覧ください。

第七章・後編

泰人「・・・・・・・・ラルゴ・ウォール!!」

迫る巨大なボーリングの球。これは絶対に避けられない。
ボルス「勝った。」

勝ちを確信するボルス。しかし次の瞬間

泰人「・・・・・・・・それはどうかな。」

巨大なボーリングの球と泰人の間に何かが割って入る。

それは、・・・・・・・・巨大化したラルゴだ。

泰人を守るため巨大ラルゴ、いやラルゴ・ウォールが盾になる。しかし、ウォールは球の半分くらいの大きさだ。

ボルス「・・・・・・・・どうせ見かけ倒しだ。押しつぶせ!!」

ボーリングの球が落ちてくる。そして、ウォールと接触する。当然潰されると誰もが思った。泰人を除いて。

・・・・・・・・次の瞬間を見たボルスは驚いた。自分が出せる中で最強の球が、ウォールに接触した瞬間に跡形もなく消滅したのだ。

ボルス「バ、バカな!・・・・ありえん。」

無理もなかった。今まで防がれたことがない球を防がれたのだ。動揺くらいするだろう。

だがその動揺で隙ができてしまう。

泰人「今だ!!」

泰人はこの時を待っていたのだ。

泰人「・・・・・・・・アウト&ウィップ!」

瞬時にウォールからウィップに切り替える。そしてボルスを捕まえる。

ボルス「・・・・・・・・し、しまった。」

焦るボルス。しかし、両腕ごとウィップに巻きつかれているので球も出せない。

泰人「・・・食らいやがれ!!」

痛みに堪え、ボルスを持ち上げる。そして渾身の力で地面に叩きつける。

ボルス「ぐふぁ・・・。」

ドオンと鈍い音が鳴り地面に倒れたボルスの意識が飛ぶ。それほどダメージを受けたのだ。

泰人「やったぜ・・・。」

力を使い果たし倒れる泰人。ウォールは触れたものを分解し消滅させる能力がある。しかし、強力な技を防ぐ程体力を消耗するのだ。巨大なボーリングの球を無力化した泰人にはほとんど体力は残っていないだろう。

莉麻「お兄ちゃん!」

もう大丈夫と思ったのか莉麻が駆け寄る。沙汰は何やらどこかと連絡をしているようだ。

そこで泰人は気を失った。

その後は沙汰と莉麻が頑張った。莉麻は泰人に回復呪文をかける。だが回復量が少なかったため、少し時間がかかったが傷は治った。

沙汰はエンシェルの警察に連絡し、ボルスは連行された。ボルスが抵抗しても、警官なら誰でも持っている能力無効の手錠があるから安心だ。

3時間ほどですべてが終わった。

意識が回復した泰人はベットの上で寝ていた。その部屋には沙汰と莉麻は勿論、ティルスとサミーもいた。どうやら試練は終わったようだ。

ティルス「僕のせいでこんなことに。すみません。」
謝るティルス。

サミー「大丈夫? 来るのが遅くてごめんなさい。」

サミーも一緒になって謝る。

泰人「・・・大丈夫だよ。逆にいい経験になったさ。」

清々しく話す泰人。もう痛くないようだ。

泰人「それで試練はどうなった？」

本題を出す泰人。

ティルス「実は・・・」

ティルスが話そうとしたその時、急にドアが開きマントをかぶった少年が入ってくる。一同は驚いた。

少年「久しぶりだね、ティルス。私にも聞かせてくれないかい？」

少年はマントを脱ぐ。その正体は・・・王子、ティライズだった。

ティルス「ティライズ君！？久しぶりだね。でも、どうしてここに？」

嬉しそうだが当然の疑問を口にする。

ティライズ「それなんだけど、実は君を狙っているやつらがいるんだ。私はその内一人にあったんだが、そいつらは君を王にしたいな」と言っていた。」

ティルスは平然と聞いている。そこまではなんとなく分かっているようだった。

ティライズ「だからそのことを君に話すためにやってきた。家のほうは色々と話をつけてきたから大丈夫さ。」

すると今まで黙っていた莉麻が

莉麻「えっと、この人が王子様だよ。んじゃ、挨拶しないと。」

と口をはさむ。そして泰人達は一通り挨拶をする。

ティライズ「なるほど、それは大変だったね。それに君がああの伝説のラルゴの新しい所持者か。」

気になる言葉を口走るティライズ。

泰人「ラルゴについて何か知っているのか？」

気になって聞いてみる泰人。

ティライズ「いや、昔の王の護衛をしていた親衛隊四人組の一人が使っていたことしか知らないな。」

十分知ってるじゃん」と泰人は思ったが、口にはしなかった。

ティルス「それじゃあ話を戻すよ。」

それていた話を戻すティルス。

ティルス「実は試練は合格したんだけど、気になる話を聞いたんです。」

そこでティライズが

ティライズ「え？ 試練に合格ってことは……。」

ティルス「そう、僕にも王の血筋があるってことみたいなんだ。」

驚く一同。しかしティライズは冷静に分析する。

ティルス「……ならすべてが合うな。よし、実は明日行きたい所があるんだ。一緒に来てくれないか？」

その言葉に悩む一同。

泰人「どこに行くんだ？」

泰人が質問する。

ティライズ「城下町のとある病院です。そこですべてが分かるとと思いますよ。」

なるほどと納得する一同。一緒に行くことを決意する。

ティルス「では、今日はゆっくり休みましょう。」

それぞれの部屋に戻り休息を取る。

泰人「そういえば、ウォールには特殊な能力があったような……。」

考えるが、やっぱり思い出せなかった。

この日はこうして更けていった。

次の日、準備ができて外に出る。

泰人「よし、城下町に行くぞ。」

そう言うと、泰人達はエンシェルアを出発した。

その上空にシュパルツが浮かんでいた。
シュパルツ「ボルスを倒すとはなかなかやりますね。まあ次こそ彼らは全滅しますよ。天才医師によってね。」
そう呟くと姿を消す。
どうやらまた何かありそうだった。

第八章・前編（前書き）

こんばんは、6月初の投稿です。今回も前後編です。それではどうぞ。

第八章・前編

泰人達はエンシエルアから城下町までは遠いので、列車を使うことにした。

ティライズ「ここから近くに城下町行きの列車がある駅があります。行きましょう。」

ティライズに導かれ駅へと着く泰人達。列車に乗り込み、城下町を目指す。城下町につくまでは結構かかるので思い思いくつろいだ。

場所は移り、城下町の病院ホスペリル。そこでは今日も忙しく看護師たちが働いている。

その中を一人の初老の男が通る。彼こそホスペリルの責任者兼デイオール最高の医者、スエイゼルである。数々の難病を治し、さらには王候補の人間の出産にも手を貸す有名な男である。

スエイゼルは午前の仕事を終え、休憩室にいた。すぐに出られるように格好は整っている。

そこに一人の男が入ってくる。言わずと知れたシュパルツだ。

シュパルツ「お久しぶりです、Dr. スエイゼル。今日は話があります。」

妙に畏まって話すシュパルツ。

スエイゼル「うむ、なんだね？」

シュパルツ「例の奴らがここに向かっています。」

突然顔色が変わるスエイゼル。

スエイゼル「ま、まさか噂の新しいラルゴ使いか？ボルスはどうなった？」

シュパルツ「ラルゴ使いに倒されました。なので、あなたもお気を付けください。」

その言葉に頷くスエイゼル。

スエイゼル「分かった。奴らを捕まえ、お前の頭に引き渡せばいいのだろう？ 何人だ？」

頷き、5人ですと返すシュパルツ。

スエイゼル「うむ。まあ、あの時手を貸した時から覚悟は決めてるさ。楽しみにしているのだな。」

そう言って部屋を出るスエイゼル。午後の検診がもうすぐ始まる。

シュパルツ「まあ、ラルゴ使いだけなら大丈夫でしょう。予定外なことがなければね。」

そういうとシュパルツはその場から消えた。

それから3時間後、泰人達は城下町に到着した。

泰人「まずはいつも通り、宿取るか。」

とりあえず宿の部屋を取り、荷物を下ろす。

そして、宿前に集まる。

泰人「んじゃ、病院に行くか。」

「???」「ちよっと待ってください。」

後ろから知らない男に声をかけられる。泰人達は知らないみたいだが
テイライズ「フィドウか？ 久しぶりだな。」

テイライズは知っていた。

フィドウ「はい。テイライズ様がここにいるとは思いませんでした。」

テイライズ「まあ、いろいろあってな。みんな、紹介しよう。この町の情報家のフィドウだ。」

宜しくと言ってお辞儀をするフィドウ。

泰人「じゃあ今度こそ病院に行こうか。」
するとフィドウが

フィドウ「だったら僕も一緒に行きます。いろいろ興味もありますし。」

断る理由も無かったので了解する泰人達。

沙汰「だったら、俺はこの街見て回るよ。ここはかなり文化が発達

しててミニパソを強化できるかもしれないからな。夜に宿前で会おうぜ。」

サミー「じゃあ私も沙汰に付き添うことにするよ。ティルス様とテイライズ様を宜しくね。」

そう言っただけの街の中に消える沙汰とサミー。

泰人「よし、じゃあ行くか。」

今度こそ出発する泰人達だった。

沙汰とサミーは街で一番大きい機械工場に来ていた。

サミー「ここがディオールでもかなり有名な工場だよ」

沙汰「おお、そうか。なんかすげえな。」

見たことのないパーツに興味津津の沙汰。そこに従業員が話しかけてくる。

従業員「ん、見学者かい？何を見に来たのかな。」

沙汰「実はこのパソコンなんですけど、今以上に強化できないかなと思っっているんです。」

そう言っただけのミニパソを従業員に見せる。

従業員「ほう。これは凄いな。いったいどんな能力があるんだい？興味があるようで聞いている従業員。」

沙汰「能力に目覚めてからは、自由にメールを送受信ができるようになった。後はちょっとした召喚術ですかね。まあ、すぐに消えるんですけど。」

そう言うのと高速でキーを打つ沙汰。すると目の前に召喚印が浮かび、カバの子供が出てくる。ちゃんと動いている。

従業員「これはすごいな。そうだ、もうちょっと奥も見学して行くか？何かアイデアが浮かぶかもしれないし。」

それに嬉しそうに頷く沙汰。

従業員「妖精の君も来ていいよ。」

そう言つて奥に行つてしまふ従業員。それについて行く沙汰とサミ―だった。

場所は変わり病院内。診察が一通り終わったスエイゼルは休憩していた。すると

看護婦「先生。先生に会いたいという人たちが来たのですがいかなさいますか？」

その言葉にスエイゼルは

スエイゼル「分かった。今行くから面談室に通しておいてくれ。」
そう言つて部屋を出るスエイゼル。

スエイゼル「ふふ、来たか。まあ、軽く相手をしてあげよう。」
そう呟くスエイゼルだった。

病院を訪ねた泰人達は面談室に通された。

看護婦「こちらでお待ちください。」

そう言つて部屋を出る看護婦。

泰人「んで、ここで何が分かるんだ？」

泰人がティライズに聞く。

ティライズ「私たちはこの病院で生まれたんだ。だからここに何か手掛かりがあると思つてね。」

なるほどと頷く泰人。そこにスエイゼルが入ってくる。

スエイゼル「お待たせしました。どのような用件ですか？」

ティライズがしゃべると王子がいるとばれてしまうので代わりに
フィドゥ「実はティライズ王子の出産の話を聞かせてもらいたいと
参りました。」

フィドゥが答える。

スエイゼル「そうでしたか。では今から書類を持って来るので待つていてください。」

そう言って部屋を出るスエイゼル。それを見送ると

泰人「なんだ、簡単に聞けそうだな。」

ティライズ「そうみたいだね。」

だが、瞬間部屋に紫色の煙が充満する。

莉麻「え？何なの？」

ティライズ「しまった。煙を吸っては……」

遅かった。全員煙を吸って倒れてしまう。そこにスエイゼルが入ってくる。

スエイゼル「こんなものか。では始めるか。」

懷から水晶を取り出し、何やら呪文のようなものを呟く。

すると泰人達がその場から消えてしまう。水晶の中には5人の姿が見える。

スエイゼル「さて、明日にはシュパルツ君が来るからこれを渡せば終わりだな。」

そう言うときスエイゼルは面談室を後にする。

果たして泰人達の運命は！

続く

第八章・後編（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。

今回は後編です。いつもより少し長くなりました。
それではどうぞ。

第八章・後編

あれから少し時間がたった。水晶内では泰人達が目を覚まし話し合っていた。何度か脱出しようと試みたが失敗したからだ。

フィドゥ「どうやらこの水晶からの脱出は無理なようですね。」

莉麻「そんな。ずっとこのままなんて嫌だよ。」

涙目になる莉麻。

泰人「大丈夫。今は沙汰とサミーを信じて待とう。」

ティルス「そうですね。きっと来てくれますよ。」

泰人とティルスの言葉に、うんと頷く莉麻だった。

それからまた時間が経ち、夜になった。従業員との話等が終わり宿前に向かう沙汰達。

沙汰「いやあ。こっちの世界の技術は向こうとは少し違うけど、そのおかげで成果はあったな。」

サミー「でも、遅くなっちゃったから早く行かないと。」

そう言い急ぐ沙汰達。しかし、待ち合わせ場所には誰もいなかった。宿の主人も知らないみたいだ。

沙汰「なんだ？おれたちに黙って飯でも食いに行ってるのかな？」

サミー「それはさすがにないよ……。でも時間もけっこう過ぎてるし、探してみよう。」

搜索を始める沙汰達だったが、何も情報が手に入らない。

サミー「駄目ね。見たっていう人もいないし。」

沙汰「だったら、まだ行っていない病院に行ってみようぜ。」

サミーが頷き病院に向かった。

かなり遅い時間なので、病院もすでに消灯していたが、沙汰は裏口

の従業員専用の入り口に来ていた。すると、ちょうど一人の看護婦が通りかかる。

看護婦「あら、子供がこんな時間にどうしたのかしら？」

沙汰は昼間に泰人達がこの病院を訪れて、それから行方不明になっていることを説明する。

看護婦「あら、それって若い男性が4人の子供と一緒にスエイゼル先生を訪ねてたけどそれね。」

頷く沙汰。

看護婦「そういえば、帰るところは見えていないわね。どうしたのかしら？」

サミーにいやな予感が走る。

サミー「あの、中に入れさせてもらいませんか？スエイゼルっていう人と話がしたいんです。」

いきなり妖精が出てきてびっくりした看護婦だったが、すぐに落ち着き

看護婦「いいわよ、私も気になるしね。ついてきてちょうだい。」

看護婦に連れられ、中に入る沙汰とサミーだった。

病院内は薄暗く、ちょっとした電球がいくつか光っているだけである。

一行は休憩室に行ってみたが、中には誰もいなかった。

看護婦「あれ？今日はここで休んでいるはずなのに。」

サミー「他にいそうなところはないんですか？」

サミーは看護婦に聞いてみる。

看護婦「そういえば、地下の書庫で書類をまとめているかもしれないわ。」

沙汰「んじゃ、行ってみようぜ。」

沙汰が言うと一行は地下に向かった。

その頃、スエイゼルは案の定書類をまとめていた。

スエイゼル「ラルゴ使いとその仲間はみんなこの水晶の中だ。・・・ちよつと実験がしたくなったな。」

懐から水晶を取り出しそう言うと、書庫の奥にある実験室に入ってしまった。

ちようどその時、沙汰達は地下に着いてスエイゼルが奥の実験室に入るのが見えた。

看護婦「あの部屋は何かしら？書庫に入ったのも初めてだから分からないわね。」

沙汰「嫌な予感がするな。看護婦さんはここで待っていてくれないか？」

沙汰が言う。

看護婦「そうなの？じゃあ待っているから、話してきてね。」

看護婦をその場で待たせ、そつと実験室に入る沙汰とサミー。

すると、その中は沙汰も見ることがない高度な機械がたくさん備え付けられていた。

沙汰「すげえな。」

思わず呟く沙汰。

スエイゼルは水晶を機械にセットし調べていた。

スエイゼル「・・・！？この数値はまさか。いったい誰だ？」

何か分からないが驚いているスエイゼル。

するとサミーが

サミー「沙汰！あの水晶からテイルス様たちの反応を感じるわ。」

どうやら感じとったようだ。

沙汰「何？・・・分かった、サミーは隠れてな。じゃあ行くぜ！」

勢いよく部屋に飛び込む沙汰。

スエイゼル「な・・・、誰だ？」

びっくりして一瞬頭が真っ白になるスエイゼル。

沙汰「別に誰でもいい。そのガラス球を渡してもらうぜ。」

そのまま水晶を奪いに行く沙汰。

スエイゼル「ぬう、させるか！」

スエイゼルは地面に手につき、何やら呟く。すると巨大な棺桶が生えてきて沙汰の行く手を阻む。

沙汰「何！？ちい・・・。」

ぶつかる寸前でとどまる沙汰。衝突は避けられた。

沙汰「危なかった。もう少しでぶつかる所だったぜ。」

しかし、状況は悪くなる。棺桶が開かれ、中から巨大なマミーが姿を現した。

スエイゼル「ふふ、いきなりで驚いた。仲間がまだいるとは。だが、こいつには勝てまい。」

状況が有利になったので、スエイゼルは徐々に冷静になる。

沙汰「へへ、ようやく俺にも出番が来たようだな。行くぜ！」

沙汰は距離をとり、ミニパソを取り出すと高速でキーを打つ。だがそうしている間にも巨大マミーがあけた距離を詰める。

スエイゼルは一瞬頭痛がした。しかし、それを全く気にすることもなく

スエイゼル「・・・何をするか知らんが、その前に踏みつぶされるがいい。」

目の前に巨大マミーが来る。そしてマミーの足が上げられ

沙汰「出来た！」

寸前で印が完成する。一瞬出る強力な光にのけぞる巨大マミー。

スエイゼル「な、何だ？」

スエイゼルも驚く。

光が消え・・・、金色のカバが姿を現す。

沙汰「こいつは、聖なる力を持つカバ、ヒポポスだ。」

ヒポポスは巨大マミーと向かい合うように現れる。

スエイゼル「・・・ふ、その程度の召喚獣では、私の巨大マミーには勝てるはずもない。やってしまえ。」

スエイゼルの命令通り動く巨大マミー。ヒポポスに襲いかかる。

沙汰「へん、見かけだけで判断しちゃいけないぜ。ヒポポス、あれ

使え！」

沙汰が言うと、ヒポポスは口から水のような液体を巨大マミーにかける。

スエイゼル「そんなもの効かぬわ。」

確かに水で濡れた位ではマミーは倒せない。しかし

沙汰「それはどうかな？よく見てみな。」

沙汰の言葉にマミーを見るスエイゼル。何にも変わってないように見えたが、次の瞬間

スエイゼル「・・・！！？」

スエイゼルは絶句した。なんと瞬間的に巨大マミーが消滅したからだ。

沙汰「どうだ、これがヒポポスの能力。自分の粘液を吹きかけることで、その物体にかかっている術式やらなんやらを消滅させるのさ。召喚獣には何かしら術式が施されている。それを消しちまえばいいってわけさ。」

自慢げに話す沙汰。スエイゼルはがっくりと肩を落とす。

スエイゼル「・・・このカバに対抗する手段は私にはない。・・・

・私の負けだ。」

自分の敗北を認めるスエイゼル。

沙汰「そいつは良かった。んじゃ、泰人達を解放してくれ。」

ほっと一息つく沙汰。

スエイゼル「私には無理だ。難しい術式だからな。だがそのカバなら何とか出来るだろう。」

ヒポポスを指さしスエイゼルは呟く。

沙汰「そうか、ありがとよ。」

沙汰はミニパソのキーを打ちながら答える。そしてヒポポスの粘液を水晶に吹きかけ、水晶は消滅し泰人達は元に戻った。

泰人「・・・沙汰。お前ならやってくれるって信じてたぜ。」

莉麻「沙汰さん、ありがとう。」

思い思いの感謝を伝える泰人たち。沙汰も嬉しそうだった。

そこにサミーが入ってくる。

サミー「やったみたいね。看護婦さんには私から言って帰らしてお
くから、心配しないで。」

再び部屋を出るサミー。

泰人「さて」

泰人はスエイゼルに向き合う。スエイゼルは覚悟を決めているよう
に見える。

泰人「洗いざらい話してもらおうか。」

スエイゼル「そ、それは・・・・。」

覚悟を決めているものの話しずらそうなスエイゼル。そこに沙汰が
沙汰「もういいじゃん。話したくないみたいだし、別にこの人の口
から聞かなくなたっていいだろ。他の手段は考えてあるから、ここは
見逃そうぜ。」

一同は納得していなかったが、沙汰が無理やり納得させた。

スエイゼル「・・・・・・ありがとう。」

スエイゼルは少しほっとしたみたいだ。

沙汰「だけど、もうこんなことをすんなよ。じゃあ、またな！」

そう言って部屋を去る沙汰。後ろをついていく泰人たち。

スエイゼル「彼らならもしかしたら・・・・。」

スエイゼルはその後ろ姿を見送った。

病院から出た泰人たちはサミーと合流し、宿に戻った。時間はもう
夜中なので、沙汰の話は次の日に聞くことにしてすぐに眠りについ
た。

こうして二日目もなんとか幕を閉じた。

第八章・後編（後書き）

次なのですが、実は少し忙しくなるため投稿が遅れると思います。
しかし必ず投稿するので待っていてもらえると嬉しいです。
それではまたお会いしましょう。

第九章（前書き）

お待たせしました。実はまだ用事が終わりません。更新ペースが遅くなりますが、最後まで投稿しますので待っていていただければ嬉しいです。

それでは、どうぞ！

第九章

泰人達が寝静まった頃、病院の屋上にシュパルツとスエイゼルがいた。

スエイゼル「昨日色々あってな、失敗した。だから私は抜けさせてもらう。」

スエイゼルは話す。

シュパルツ「そうですか。・・・いいですよ。あなたには十分頑張っていたきましたから。それでは。」

不気味な笑みを残して闇夜に消えるシュパルツ。

スエイゼル「・・・やけに素直だな。何かあるのか？」

考えるスエイゼルだったが、夜も遅いので考えをやめて帰ることにした。

次の日、泰人達は沙汰の話を聞くべく集まっていた。

ティライズ「では、話してもらおうか。」

沙汰は頷き語り始める。

沙汰「昨日、医者との交戦中に新しい機能を使っただ。メールの受信を応用して作った、相手の考えていることをこのパソコンで読み取り文字にするってやつをな。それで色々分かった。」

沙汰の話をみんな真剣に聞いている。

沙汰「12年前、ホスペリルで王族の子供が生まれることになり大騒ぎになったらしい。その時からホスペリルで働いていたスエイゼルはある日、一人の少年に出会った。少年はある儀式の途中だったらしい。スエイゼルは子供の遊びみたいだし、ちょっと付き合おうと考えて手伝っただけだけどそれが失敗だったんだ。」

一気にしゃべって疲れたのか、沙汰は一呼吸置く。

沙汰「その儀式が何だったのかはすぐに明らかになった。その儀式が終わった直後にティライズが生まれたんだ。」

ティライズの表情が変わる。

ティライズ「・・・ま、まさか!？」

沙汰「そう、あんたに時空移動能力がないのはそのせいかもしれない。スエイゼルは考えているみたいだ。」

驚く一同。

サミー「じゃあ、ティルス様がなんで時空移動の能力を持ってるの？」

質問するサミー。

沙汰「これは予測なんだが、ティライズに受け継がれるはずだった能力がああ儀式のせいで同じ病院でティライズの次に生まれたティルスに受け継がれたと考えるべきだろう。」

なるほどと頷く一同。

泰人「っていうかティルスも同じ病院で同じ日に生まれてたのか。」

ティルス「いえ、同じ日ではないんですけどティライズ君の次に生まれたのは本当です。」

答えるティルス。

沙汰「だが、一つ疑問が残る。ティルスは王族の血筋を持っていると神殿の主は言っていたらしいからな。」

ティライズ「それは解決済みだ。」

ティライズが割り込む。

ティライズ「ティルスの父君は元王族の者。子には心配かけまいと内緒にしてきたらしい。」

ティルス「・・・そうだったんですか。」

ようやく理解した一同。

フィドゥ「これでだいたい分かりましたね。では僕はその少年について情報を集めてきます。皆さん、また会いましょう。」

そう言って部屋を出て行ったフィドゥ。

泰人「じゃあ次はどこに行く？」

ティライズ「一度城に行き王と会いたい。いいか？」

その言葉に頷く一同。

ティライズ「では決まりだ。城はこの城下町の東にある。行こう。」
そう言い、宿を出て出発する一同だった。

城はとても近かった。まあ城下町にいるのだから近いのは当然だが。城はかなりの大きさだった。ディオールで一番大きな城らしい。

見張り「ティ、ティライズ様！お久しぶりです。」

見張りの一人がティライズに敬礼する。

ティライズ「王にお会いしたい。急な用事だ。」

見張り「分かりました。少々お待ちください。」

そう言って城に入る見張り。

莉麻「すごいな。ほんとに王子様なんだね。」

ティライズ「まあな。」

軽く会話する二人。そこに見張りが戻ってきた。

見張り「今すぐお会いしたいそうです。護衛の方々もどうぞ。」

見張りに連れられて中に入る泰人達。すぐに謁見の間に通された。

謁見の間は、本当にゲームでもありそうな部屋そのものだった。

王「ティライズか。さっそく話してくれ。」

ティライズ「分かりました。」

ティライズはこれまであったことをすべて王に話した。

王「・・・なるほどな。そんなことが。」

納得したみたいだ。

王「ティライズよ。お前には悪いが時空移動能力の持ち主が次の王になることになっている。すまないな。」

謝る王。

ティライズ「そんなことはありません。私はティルスこそ適任だと思っていましたから。」

答えるティライズ。

王「そうか。そしてティルスよ。そなたには引き続き試練を受けて

もらう。良いか？」

ティルス「はい、頑張ります。」

王は泰人達と向き合う。

王「泰人、沙汰、莉麻といったな。ここまでよく頑張ってくれた。つらいこともあるだろうがティルスとティライズのことを宜しく頼むぞ。」

三人「はい。」

元氣よく返事をする三人。

王「では次に二つ目の神殿があるウィンディームに向かうといい。そこには私の知り合いもいてな、力になってくれるだろう。さあ、行くがいい。」

一同「はい。」

そう言っ行って行こうとする一同だったが、王は何かを感じ取る。

王「・・・サミーよ、話があるからここに残ってくれ。」

サミー「え？・・・はい、分かりました。みんなは先に行ってて。」
サミーを残し立ち去ろうとする泰人達だったが・・・沙汰がその場から動かない。

沙汰は王の後ろをじっと見ている。何やらとんでもなくでかい足がそこにはあった。見上げてもお腹あたりまでしか見えない。

沙汰「銅像かな？・・・でも生きてるっぽいな。」

色々と考えをめぐらせる沙汰だったが、ようやく立ち上がりその場を後にした。

謁見室には王とサミーが残った。

王「さて」

王は杖を取り出しサミーに向ける。ピカツと光るとまた戻る。するとサミーの様子が変わる。

王「まさか、生きていたとはな。何故お前がティルスと一緒にいる？」

サミー「・・・。」

サミーは答えない。

王「・・・まあいい。お前が何を考えているか知らんが、彼らに危害を加えるならば容赦はしない。」

王が右手を上げると後ろに立っている巨大な足が少しずつ動き始める。

サミー「・・・そいつは苦手だな。まあ、今の所は何もするつもりはないから安心しな。」

するとサミーがまた光る。

サミー「・・・あれ？私どうして。」

どうやら覚えていないらしい。

王「・・・ああ、用事は済んだ。行っていぞ。」

サミー「あ、はい。分かりました。」

そう言って部屋を出るサミー。

王「・・・奴は、彼らを襲っている集団よりも厄介だな。奴が動く前にウィンディームのあの男の所に行ってもらわねば。」

そう王は呟いた。

城から出た泰人達はサミーを待っていた。すると少し経ってサミーが出てくる。

莉麻「どんな話だった？」

サミー「・・・特に何も。」

・・・瞬間、泰人は今まで感じたことのない雰囲気を感じた。サミーから感じたが、すぐに消えたので気のせいだと思うことにした。

ティライズ「ウィンディームに行くにはまた列車に乗ることになる。では行こうか。」

列車乗り場に向かう一同。そして、ウィンディームに向けて出発した。

その頃シュパルツはアジトに戻っていた。

シュパルツは大きな部屋に入る。そこには四人の人物が椅子に座っている。全員白いマントを被っているので誰だか分からない。

シュパルツ「例のラルゴ使いにより、ボルスが捕まりました。更に、スェイゼルがラルゴ使いの仲間に倒されて改心しました。我々のことを喋る危険があるため、彼らを始末してきますか？」

白マント達に問う。

白1「別にいい。奴らは我々の本当の姿を知らない。」

白2「・・・ボルス達が負けて良かった。あいつらを消すのは僕だからね。」

白3「・・・眠い。」

白4「・・・。。。」

一人以外とは話が噛み合わなかったが、いつものことなので気にしないシュパルツ。

白2「次は僕が行くよ。シュパルツ、案内してよ。」

シュパルツ「はい、分かりました。」

二人はアジトから出ていく。

何かが始りそうだった。

白4「・・・泰人。」

第十章（前書き）

こんにちは。時間が掛かっているのに短くて本当にすみません。長くできるよう努力します。それではどうぞ。

第十章

列車が出発して約2時間後、泰人たちは無事にウインディームに着した。

泰人「えっと、この町に王の知り合いがいるんだったな。ティライズ、分かるか？」

泰人がティライズに質問する。

ティライズ「・・・ああ、話していなかったな。いい機会だし歩きながらも聞いてほしい話がある。」

ティライズは語り始める。

ティライズ「今から約60年前、私の祖父が王だった時とても信頼できる4人の親衛隊がいたんだ。彼らを皆は、朱雀、青龍、玄武、白虎と呼んでいた。」

泰人「玄武ってまさか・・・！？」

泰人が口をはさむ。

ティライズ「ああ、おそらく泰人と莉麻の祖父だろう。それから彼らは仕事を終え、それぞればらばらに暮らしていたらしい。そのとき玄武は君たちの世界に行ったと考えれば辻褄が合う。」

真剣に話を聞く泰人達。

ティライズ「彼らはこの世界で生きている限り、かなり長生きするらしく今も普通に生きている。そしてこの町に住んでいるのがそのうちの一人、白虎だ。」

駅を出て町の中央辺りに来た。人通りも多い。

ティライズ「ここを抜けたところに・・・」

瞬間、泰人達の見える景色が変わる。町中にいたはずなのになぜか町外れの野原にいる。

ティルス「・・・一体なにが！？」

驚く一同。・・・その目の前にいきなり二人の人物が現れる。一人はシュパルツ、もう一人は白いマントを被っている。

シュパルツ「・・・こんな目立つことはあまり好まないんですが。」

白2「僕はこそこそする方が嫌なんだよ。」

何やら言い争いをしている。

泰人「・・・じゃあ行こうか。」

町に戻ろうとする泰人達。

白2「ちょ、ちょっと待ってよ。無視すんなよ。」

慌てて引き止める白2。しょうがなく泰人達は白2に向き合う。

泰人「しょうがないな。お前らの目的は知らないけど逃げれそうもないし戦うよ。」

そう言っでラルゴを構える泰人。

白2「そうこなくっちゃね。」

マントを脱ぐ白2。見た感じは少し小柄の青年だ。

白2「僕はヴァリユアだ。シュパルツ、手を出すなよ。」

シュパルツ「言われなくても退散しますよ。」

そう言っで消えるシュパルツ。

沙汰「まったく、いきなり戦闘かよ。」

莉麻「あんまり戦闘とかしたくないのにな。」

泰人の後ろで準備をする沙汰と莉麻。ティルス達は戦う技術を持っ
ていないので、見ることにできない。

ヴァリユア「さてと、僕はボルスみたいなヘマはしないよ。」

そういうとヴァリユアはどんどん液体化していく。

ティライズ「く、分が悪いな。」

ティライズには分かるようだ。

泰人「ラルゴ・ウィップ。行くぜ！」

泰人はウィップを出し、液体化ヴァリユアを叩きつける。しかし衝
撃は吸収されて効果はない。

ヴァリユア「ふふ、こんなものかい。だったらこっちから・・・」

戦闘態勢をとろうとするヴァリユアだったが

????「待ちたまえ。生きている液体なんてなんか危険すぎるなあ。

君、そこから離れて。」

一人の男が現れる。見た目は銀髪の体つきのいい青年だ。
ティライズ「……あの人はまさか!？」

驚くティライズ。

シュパルツ「……ここで現れましたか。」

上空から見ていたシュパルツも少し驚いている。

ヴァリユア「なんだお前は。僕に倒されたいのか？」

挑発的な態度をとるヴァリユア。

「???」「いやいや、液体になんて興味ないよ。泰人君、下がってて。」

「

泰人「え?あ、はい。」

いきなりで驚いたが素直に従う泰人。

ヴァリユア「ふざけやがって。消してやる。」

銀髪の青年に襲いかかるヴァリユア。

「???」「うん、地下深くに廃棄すれば問題ないね。」

軽い口調で言うとならば先で軽く地面を叩く。

瞬間、彼の周りの土が動き出しヴァリユアを飲み込む。

ヴァリユア「ぐあ、なんだ?」

驚くヴァリユア。

「???」「じゃあ、廃棄場へGO!」

また地面を叩く。ヴァリユアを飲み込んだ土は地中深くに潜っていた。

そしてヴァリユアは完全に廃棄された。

その光景を見ていた泰人達は

一同「………凄い。」

とても驚いていた。

シュパルツ「……これはかなりまずいですね。」

シュパルツは素晴らしい姿を消した。

「???」「大丈夫かい?」

にここに笑いながら近づいてくる青年。

泰人「ありがとうございます。でもなんで俺の名前を知ってるんですか？」

質問する泰人。

「???」ん、王から連絡があったんだ。君たちがここに来るってね。」

王という言葉にまたまた驚く一同。

ティライズ「やっぱり貴方が白虎ですか。」

確信を持つティライズ。

「???」うん、宜しく。とりあえず僕の家に来てよ。」

軽いノリでそういうと家に向かう白虎。

一同「・・・本当にこの人が伝説の男なのかな？」

見事に意見の一致した泰人達だった。

白虎の家は町の端にあった。かなり大きいので全員入ることができた。

白虎「王から事情は全部聞いてるよ。最近暇だし、君たちについていけばたくさん危険物の処理ができそうだしついていくよ。」

白虎がついてくることになった。

白虎「そこでこの神殿なんだけど、町の地下にあるんだ。町の中央に入口があるから行ってきて。僕は待ってるから。」

この時全員白虎を自由人だと認識した。

泰人「・・・それでは行ってきます。」

家を出る泰人達。

白虎「お土産宜しく！」

泰人達は町の中央に向かった。

家の中には白虎が座っている。

白虎「・・・入ってきてよ。」

玄関に向かって言う。すると家の中にサミーが入ってくる。

白虎「・・・王から話は聞いたよ。あの時ちゃんと封印したんだけどな。」

さつきとはガラリと変わり真剣な白虎。サミーが光る。

サミー「・・・親衛隊には世話になったな。特に貴様と玄武にはな。」

不気味に笑うサミー。

白虎「・・・君がまたなんか起こす気なら今度は消してやる。」
あくまで真剣な白虎。

サミー「物騒なこと言うなよ。・・・まあ、俺は借りは返す主義だからな。楽しみにしてな。」

そう言うともた光るサミー。

サミー「・・・あれ？またここにいるよ。」

混乱するサミー。

白虎「サミーちゃん。早く行かないと置いていかれるよ。」
いつもの口調の白虎。

サミー「あ、はい。失礼します。」

そう言い家を出るサミー。

白虎「・・・さてと、準備を始めようかな。」

立ち上がると白虎は家の奥に消えていった。

第十章（後書き）

7／23 多少文章を修正しました。すみません。

第十一章（前書き）

こんばんは。今回は少し時間も空いたので早めに投稿します。それではどうぞ。

第十一章

泰人達は町の中央に来ていた。遅れてサミーも合流する。

サミー「すみません。なんか知らないうちに戻ってしまつて。」

ティルス「気にしてないよ。さあ、下りてみましょう。」

入口は下りの階段になっている。泰人達は階段を下りはじめた。

しばらく下りていくと広い場所に出る。目の前には大きな扉があり、前にエンシエルアで見たものと似ている。

ティルス「では、扉の前に立ちましょう。」

扉の前に立つ泰人達。すると扉から声がする。

扉「試練を受けにきたか。では、候補一人と護衛一人入るがいい。」

泰人「今回は二人で行くのか。誰が行く？」

話し合おうとする泰人達。

扉「その必要はない。こちらで適任者をすでに決定している。」

扉は続ける。

扉「この試練には、その娘と行ってもらおう。」

莉麻「え、私ですか？」

驚く莉麻と一同。

泰人「ぐ、本当は行かせたくないが決まってるならしょうがない。

二人とも気をつけろよ。」

泰人は渋々承諾する。

ティルス「では、行きましょう。莉麻さん。」

莉麻「うん！」

扉が開き二人はその中に入って行った。

扉の中は前と同じく薄暗く一本道だった。

莉麻「なんか、昔の建造物みたいだね。」

莉麻が話すと

ティルス「そうなんですか。」

と返すティルス。

そうこうしているうちに奥に辿り着く。

今回は鷹のような銅像が立っている。

鷹「来たな。早速試練を始めよう。」

銅像が光り部屋全体を包む。

二人「え!？」

気付いた時にはもう二人はそこにいなかった。

とあるカプセルの中、ティルスは目を覚ます。周りはよく見えないためどこにいるかは分からない。

鷹「今回はお前の覚悟と護衛の実力について試させてもらう。」

ティルスの頭の中に声が響いてくる。

ティルス「あの、という・・・」

ティルスは質問しようと思ったが・・・やめた。

なぜならカプセル内に画面のようなものがあり、莉麻が映っていたからだ。どうやらティルスのいる所とは別の場所にいるらしい。

その莉麻はというと、目の前にはマラソンコースのような道があり、そのスタート地点に飛ばされていた。

莉麻「・・・えっと、この道を走れってことなのかな？」

莉麻が考えていると、

鷹「この道は1キロほどの短い道だ。ゴールまで行けたら合格。途中で放棄したら不合格だ。」

鷹の分かりやすい解説が莉麻の頭の中に響く。

莉麻「それだけ? なら簡単だよ。」

余裕な表情をする莉麻。

鷹「・・・それではスタートだ。」

開始の合図が出される。莉麻はそれに従い出発する。普段運動をあまりしていないのでゆっくりペースで走る。

莉麻「・・・ふうふう、大丈夫かな。」

いい感じに進んでいた。

しかし、突然4、5本の針のようなものが横から飛んでくる。

莉麻「・・・!？」

莉麻は気づくのが遅く右手にすべて刺さってしまう。

莉麻「痛っ・・・!？」

突然のことですついに痛いと言ってしまったが莉麻にダメージはない。
しかし

ティルス「ぐあ・・・!？」

ティルスが右手に痛みを感じたのだ。

ティルス「・・・こ、これは一体？」

痛みに耐えながら質問するティルス。

莉麻「え？何がどうなってんの？」

混乱する莉麻。

鷹「今回の試練は、王として他人の痛みも分らないといけないという事で護衛が受けたダメージはすべて王候補の方に行くようになってる。」

鷹の説明が入る。

莉麻「・・・え、・・・嘘？」

驚く莉麻。

ティルス「・・・ぐっ、なるほど。そういうことですか。」

対してティルスは飲み込めたようだ。

莉麻「そんな、ティルス君に痛い目あわせるなんて・・・。どうすればいいの？」

その場に立ち尽くす莉麻。今ティルスとは連絡が取れないし、見えな
いところで人が傷つくのはとても嫌なようだ。

ティルス「・・・莉麻さん!! 僕の話はいいから早く進んでくだ
さい。」

痛みに耐えながらそういうティルスだが当然莉麻には届かない。

そして、・・・莉麻は完全に足を止めてしまった。

場所は扉の外に移る。

サミー「・・・!？」

何かを感じ取ったサミー。

泰人「ん、どうした？」

泰人が気にかける。

サミー「・・・行かなくっちゃ。」

そう言うときサミーはピンク色の光を放ち・・・消えた。

一同「消、消えた？」

泰人達は急に消えたサミーに驚いていた。

莉麻はその場から動けなくなっていた。

莉麻「私はどうしたら・・・。」

その時、目の前がピンクに光りサミーが現れた。

莉麻「え？なんでサミーちゃんが？」

驚く莉麻。

サミー「話は後。状況はなんとなく分かるよ。ティルス様を助けるためにこれから私の言うことをよく聞いてね。」

莉麻は突然のことで混乱していたが一応頷く。

サミー「よし、私を掌の上に乗つけて！」

莉麻は言われた通り、サミーを掌の上に乗つける。

サミー「いくよ、えい！」

サミーが強烈な光を発する。

莉麻「え？あ・・・。」

またびっくりする莉麻だったが、気付いた時にはもう光に包まれた。

鷹「・・・な、なんだ？」

ティルス「なんですか？」

銅像とティルスも驚いている。

少し時間が経ち光が収まる。そして、そこには妖精の羽が生えた莉麻が立っていた。

莉麻「うーん、何が起こったの？」

それに気がつかない莉麻。

サミー「今あなたと私は融合してるの。背中に羽が生えているですよ。」

莉麻の頭にサミーの声が響く。莉麻には理解できなかったがとりあえず背中を触り羽を確認する。

莉麻「……。」

言葉も出ない。

サミー「いい？これだったら行けるわ。行きましょう！」

勝手に進めるサミー。

莉麻「……とりあえず分かった。分からないことは教えてね。」

そう言うのと羽を広げる莉麻。なぜか羽の使い方が分かる。

サミー「私の記憶も共有しているの。だから教えなくても大丈夫だよ！」

莉麻「うん。一緒に行こう、サミーちゃん。」

莉麻が飛び、ゴールに向かう。

しかし、襲いかかる大量の針。避けることは難しそうだ。

莉麻「これは、ティルス君に痛みがいつてるんだっけ。なら……。」

目の前に印を描く。そして

莉麻「……ペイン・アウト。」

唱える。しかし、針はすべて莉麻に刺さる。

ティルス「ぐ……。」

ティルスは痛みを待つ。……しかしそれは訪れない。

鷹「……ほう、これは驚いたな。」

予定外の能力に驚く銅像。

莉麻「本当にこれで痛みがないか心配だけど今はゴールに向かおう。」

羽もうまく使えるようでさらにスピードアップする莉麻。

そして、ゴールも見えてきた。

鷹「……では最後にどれほどの力を持っているか見せてもらおう

か。」

銅像はそう言うとか呟きだす。

瞬間、莉麻の頭上に巨大な大岩が落ちてくる。

鷹「これで生じる痛みは、お前たちの能力では無効にできないぞ。どうする？」

鷹は莉麻たちに聞こえるように言う。

莉麻「だったら壊すしかないね。いくよ、サミーちゃん」

サミー「うん！」

莉麻は頭上に印を描く。そして

莉麻「光印・レイスピア！」

唱える。すると莉麻が作った印から無数の光の槍が飛び出し大岩に次々に突き刺さる。

何十本もの槍をうけ、大岩は碎ける。

莉麻「やったね！」

サミー「うん！」

そして、莉麻はゴールに着いた。

ゴールに着き、融合を解くサミー。そして銅像に元いた場所に戻してもらった。ティルスも無事なようだ。

ティルス「いや、驚きました。莉麻さんもサミーもありがとうございます。」

お礼を言うティルス。莉麻もサミーも嬉しそうだ。

鷹「ふむ、かなりの出来だった。試練は合格だ。もう行っていいぞ。」

銅像が言うように扉が静かに開いていく。莉麻達は銅像に一礼すると扉から出て行った。

扉の外では泰人達が消えたサミーについて話していた。

沙汰「つか、突然消えるなんてありえねえよ。」

泰人「でも自分から消えたみたいだし待ってみようぜ。」

ティライズ「私も泰人の意見に賛成だ。」

そうこう話しているうちに莉麻達が戻ってくる。もちろんサミーも一緒だ。

ティルス「合格してきました。莉麻さんとサミーのおかげです。」

二人「いやあ、そんなことないよ。」

そう言いながらも嬉しそうな二人。

泰人「・・・サミーって一体何者何だろう？」

泰人はその疑問について考えていた。

試練も終わったので白虎の所で結果を報告する。

白虎「まあそれをお土産としておくよ。じゃあ早速明日には危険物処理に出かけよう。」

白虎はとても楽しそうだ。

泰人「実は明日は一度元の世界に戻ろうと思うんです。」

泰人がそう言う和白虎は固まる。

白虎「・・・家に帰るならば仕方がない。」

渋々了承する。

白虎「とりあえず部屋だけはたくさんあるし、ここで休んでつてよ。」

一同「ありがとうございます。」

泰人達は白虎の家に泊まることになった。

そして夜も更けみんな寝静まった頃、泰人は布団に横になりながらも起きていた。

泰人「王に会ってからサミーは少しおかしくなったな。まるで・・・いや、俺の勘違いだ。もう寝よう。」

そう言い泰人も眠った。

同じ時間、白マントの人物も夜空を見上げていた。

白4「・・・私は今どこに向かおうとしているのかな、泰人。」
一人呟いていた。

次の日、泰人、莉麻、沙汰は戻るため白虎の家の外にいた、
ティライズ「ゆっくり休んでくるがいい。」

サミー「ティルス様を宜しくね。」

白虎「お土産忘れるなよ。」

それぞれ言葉をかけ、泰人達はそれに頷く。

泰人「じゃあ頼むぜ、ティルス！」

ティルス「分かりました。いきますよ！」

ティルスは例の呪文を唱える。

そして、光が溢れ泰人達は姿を消した。

白虎「・・・後は任せてくれ。」

第十二章（前書き）

こんにちは。まず初めに前回の補足説明をします。

前回の試練では候補一人、護衛一人しか受けないことになっているのにサミーが入ってきて銅像は何も言いませんでした。サミーは人ではなく妖精なので、一人とは数えないと私が勝手に思っています。なので、銅像は何も言いませんでした。これについておかしいと思っている方もいると思いますが、そういうことで納得していただきたいと思います。

それで今回の話ですが、極端に短いです。しかし、見ていただければ私としても嬉しいです。

それではどうぞ！

第十二章

今回も無事に帰って来た泰人達。沙汰は自分の家に帰り、泰人、莉麻、ティルスも家の中に入る。すると、母親が出迎えてくれた。

母「おかえり。疲れたでしょう。夕飯出来てるから食べましょう。」

二人「はい！」

母は台所に戻って行った。泰人と莉麻は部屋に荷物を置き夕食の手伝いをすることにした。

夕食中、莉麻はディオールであったことを母に話していた。

莉麻「それで、私もう駄目かと思ったら妖精のサミーちゃんが来て、私その子と合体したの！」

母「・・・へえ、凄いわね。」

普通ではありえない話に驚く母だったが、ちゃんと娘の話を聞いている。

ティルス「（普通では信じられないようなことでもしつかりと聞いてくれる。それが莉麻さん達のお母さんなのですね。）」

そう思っているティルスだったが

ティルス「ティルス！」

としか言えなかった。

夕食後、泰人とティルスは泰人の部屋に戻っていた。莉麻は夕食の片づけを手伝いながらまだ母と話をしている。

泰人「昔からそうだった。何かあると母さんに真っ先に言うんだ。

それが母さんにとって嬉しいことなんだよな。」

そう言いベットに横になる泰人。3日ぶりの自分のベットなのになんだかもっと長いなかったように感じる。

泰人「残る神殿は後三つ。それが終われば普通の生活に戻れるんだな。」

ティルス「ティルス！」

そうですねとでも言いたげにティルスが鳴く。

泰人「・・・ちよつと聞いてもらいたい話があるんだがいいか？」

ティルスに言う泰人。

ティルス「ティルス！」

いいですよと言ってるように聞こえる。

泰人「・・・昔は俺も非現実的なことが大好きで、色々変なことをしていたんだ。あまりにもよく分からない行動ばかりするから、そのせいで友達も出来なかったし先生にも嫌われていた。だけど中学二年になって俺が起こした騒動に面白いて言ってくれた奴がいた。それが沙汰だった。」

ティルスには中学というものが分からなかったが真剣に話を聞いている。

泰人「それからあいつと一緒に馬鹿をやってきた。だけど、・・・あの子に会って俺のすべてが変わったんだ。」

泰人は思い出すように語り始める。

（泰人の回想）

一年前の初夏のある日、学校が終わって帰るときにちよつと気分を変えて帰り道を思っ土手の辺りを歩いていたんだ。風も気持ちいいし景色も良かったからね。何よりもあの日にあそこを歩けばいつもと変わった日常がある、そんな気がしていたんだ。

土手を半分くらい歩いたところで、川岸で一人川を眺めている少女を見つけた。

俺は、こんなことはよくあることだと思ってその子から目を逸らそうとした。

だけど、ちょうどその子はこっちを振り返った。そして、俺たちは目が合った。

泰人「・・・・・・・・・・。」

少女「・・・・・・・・・・。」

俺たちは無言のままに見つめあっていた。俺はそんな状況に耐えられず土手を下りてその子に近づいた。

川岸で、更に夕焼けの空の下男女が見つめあう。そんなドラマのような状況だったが、全く知らない女の子とこういうことになるマジで緊張する。知ってる子でも緊張すると思うけど。

少女「・・・・・・・・・・ですか？」

ぼそりと少女が呟く。

泰人「・・・・・・・・何かな？」

緊張してたからそれしか言えなかった。

するとその少女は俺の顔に自分の顔を近づけ

少女「貴方は私のことが見えるのですか？」

そう言った。確かにそう言った。

俺は訳が分からなかった。だっていきなりそう言われたら誰でも驚くだろう？

泰人「・・・・・・・・うん、まあ。」

だから俺はそう答えることしかできなかった。

少女「・・・・・・・・そうですか、いきなりすみません。」

少女は少し距離をとると

少女「私と友達になってください。」

と言った。初めてだった。沙汰や家族以外の人とこんなに話すのは。

泰人「・・・・・・・・いいよ。」

俺は言った。女友達がほしかったのもあるが、その子には少し不思議な感じがすると思ったからだ。

少女「・・・・・・・・良かった。」

少女はホッとしたみたいだ。

泰人「まずは自己紹介かな。俺は茅野泰人、君は？」

そうこの時だ。

少女「えっと、私は……。」
この瞬間に俺のすべては変わったんだ。

少女「……宇木風梓由。」

そう、その少女の名前を聞いた時に。

第十二章（後書き）

泰人の昔話は次にも続きます。また文章が短くなるかもしれません。
なので早めに投稿できるよう努力します。
それでは、また次回に会いましょう。

第十三章（前書き）

こんにちは。何とかできました。今回は前回の続きです。それではどうぞ！

第十三章

少女「・・・私は宇木風梓由です。」

俺はびっくりした。凄く珍しい名前だったからな。当然だ！

泰人「それじゃあ、携帯のアドレスを交換しとこうか。」

梓由「・・・あ、はい。」

とりあえず携帯のアドレス交換を終えその場で別れた。見た感じ俺と同じくらいの年齢で、背は150位だと思う。私服っぽかったけど一度家に帰ったのだろう。そう思った。

次の日、俺は学校で沙汰に昨日あったことをすべて話した。すると沙汰「ほほう、お前にも春が来たか。・・・今は初夏だけど。」

とりあえず無視する。

泰人「そんで今日もあそこ行くんだけど、あの子友達いないみたいだしお前も一緒に行かない？」

なんかあの子も俺一人じゃ退屈しそうだし沙汰を誘ってみる。

沙汰「ん、いいけど。今日もいるとは限らないんじゃない。」

泰人「大丈夫。メルアド交換して今日も会おうって送ったから。」

そう、昨日帰ってから一通りの情報交換はした。だけど、家の場所はどうしても教えてもらえなかったんだ。

沙汰「分かった。放課後に行くか。」

沙汰と話をつけて授業を受けた。

そして放課後、俺たちは昨日の土手下の川岸に行ってみた。

沙汰「ここは普段通らないな。駅前の方ばかり行ってらっしゃるし。」

沙汰と他愛のない話をしながら歩く。そして昨日梓由と会った場所に着く。

泰人「いた！」

見つけた。昨日と同じ、川岸で一人川を眺めている。

泰人「おう！」

俺は土手を下り梓由に話しかける。後ろから沙汰もついてくる。

梓由「あ、泰人さん。こんにちは。」

梓由はこちらを振り向き、にっこりとほほ笑む。

泰人「今日は昨日言ってた俺の友達を紹介するよ。」

沙汰を俺の前に出し話しかけると合図する。

沙汰「え、えっと・・・谷田沙汰だ。宜しく！」

すると梓由は驚く。なぜか彼女は他人に気づかれないという体質らしい。

梓由「・・・貴方も私が見えるのですね。嬉しいです。」

凄く嬉しそうだったからこっちまで嬉しくなった。

俺たちはそのあと俺と沙汰の馬鹿話で彼女を笑わせた。なんか女の子が近くにいるなんて莉麻以外なかったからとても新鮮だった。

それからしばらく話していた。

梓由「ふふふ。・・・では、そろそろ帰りましょうか。」

話に夢中で気付かなかったが、すっかり空も暗くなっていた。

沙汰「そうだな。帰るか！」

泰人「そうだな。じゃあまたな、梓由。」

彼女の笑顔に見送られ俺たちは家に帰った。

それからというものの、俺はほぼ毎日梓由の所に通い続けた。沙汰も時々ついてきてくれて俺たちはどんどん仲良くなっていった。

その日は雨だった。俺は別に雨でもあの子に会いに行行って話をしていたが、その日は雨の中だと風邪をひくんではないかと思った。俺はいつもの所に行く。

梓由「あ、泰人！今日も来てくれたね。」

傘を持った梓由がいた。あれからというものかなり仲良くなったので、話し方もフレンドリーになっていた。

泰人「ああ。それで、雨降ってるし今日は俺の家に来ないか？」
気を利かせたつもりだった。別に深い意味があるわけではない。断じてない。

梓由「・・・・・・。」

梓由はなぜか顔を赤くして考えていた。なぜなのか、その時は気付いてあげられなかった。

梓由「・・・・・・うん。」

小さく頷いた。そして、俺たちは俺の家に向かった。

泰人「そういや、俺の家来るの初めてだな。」

馬鹿だった。そんなときは顔が赤いから風邪っぽいのかと全く見当違いな考えをしていたからだ。

梓由「・・・・うん。」

相変わらずテンションが下がっている梓由。

他に会話はせず、家に着いた。

泰人「ただいま。友達連れて来たぜ！」

家の中に入ると、母さんが出てくる。

母「あら、泰人が女の子連れてくるなんて珍しいわね。ゆっくりしてってね。」

そう言っ母さんは台所に戻る。

泰人「じゃあ、俺の部屋に来てよ。」

梓由「・・・・うん。」

相変わらず、うんとしか言わない梓由を部屋に連れていく。

部屋に入ると莉麻がいた。このころは悪戯好きのどうしようもない妹だったな。

莉麻「あ、お兄ちゃん。今日もうがなから来てあげ・・・・・・。」

莉麻は固まっていた。俺の後ろにいる梓由を見たからだ。

莉麻「……ふふ、そういうことなのね。私、部屋に戻るから二人でゆっくりしてってね!」

なにやらニヤニヤ笑いながら莉麻は部屋を出て行った。

泰人「まったく、うるさい妹だ。もっと俺を敬ってほしいよ。」

今では別の形で叶ってしまったが。

梓由「……ふふ、楽しそうな妹さんじゃない。」

ようやく梓由が喋った。なんとなく、梓由はこういう家族つものに懂れているんじゃないかなと思った。

泰人「まあ、けっこう楽しいな。」

正直に言う。

梓由「そうよね。……じゃあ何する?」

とてもわくわくした目で俺を見る。

泰人「よし、俺のとおっておきのコレクションを見せてあげるよ。」

そう言って棚に飾ってあるメジャーを指さす。

泰人「俺は、かなりのメジャーマニアでね。色んなところに行っては買ってくるんだ。そのうちこんなになってね。」

部屋の隅にある袋を取り出して、梓由に見せる。

泰人「まあ、軽く50個はあるかな。」

一つづつ説明していく。梓由が、楽しそうに聞いてくれているのが何よりも嬉しかった。

梓由「あのね、この中で一番大切なメジャーって何?」

そう、俺はその言葉を待っていたのだ。

泰人「とおっておきは、こいつさ!」

俺は腰のメジャーを外す。そう、ラルゴだ。

泰人「じいちゃんからもらった俺の宝物さ。まだじいちゃん生きてるけどな。」

そうこの時はまだ生きていたんだ。

梓由「そっか。」

そう言って黙る。なんか俺も話しづらくなってしまったからとりあえず俺も黙っとく。

梓由「・・・・・・・・・・」

泰人「・・・・・・・・・・」

こういう空気は嫌いだな。そう思っていたら

梓由「・・・前から泰人に話したかったことがあるの。」

急に真面目になった梓由。

泰人「・・・おお、なんだ？」

とりあえず聞き返す。

梓由「・・・泰人は、私のことどう思ってる？」

「・・・・・・・・言われた時はビビった。だが、この時に今までの行動が一つにつながった。」

泰人「・・・いい子だと思うよ。明るくってちゃんと俺の話も聞いてくれるしね。」

本音を言った。

梓由「・・・そうじゃないの。・・・私の言いたいのは・・・・・・・・」

この続きにくる言葉は分かっていた。だから待った。

梓由「・・・泰人は私のこと好きなの？」

泰人「・・・え!？」

分かっただけ、いざ言われると答えようがないな。

梓由「私は、家族以外にはだれにも気付いてもらえない、孤独な子だった。さみしさを紛らわせるためにあそこですつと川を眺めていた。そんなときに泰人が来てくれた。」

俺はとりあえず話に耳を傾ける。

梓由「嬉しかったし、楽しかった。沙汰君もいい人だった。でも何より貴方がいたことが一番うれしかった。だから私は泰人が・・・・・・」

泰人「ちょっと待って！」

これ以上聞いてたらおかしくなりそうだったから止める。

泰人「1日考えさせて。明日あの場所で答えを言う。絶対にいい返

事をする。」

そう言った。

梓由「・・・分かった。明日、楽しみにしてるね。」

そう言って梓由は帰って行った。

決まっていた。答えは決まっていたんだ。なのに先送りしてしまった。

実質梓由と会えるのはその日が最後だと知らずに。

第十三章（後書き）

泰人の昔話はまだ続きます。多分次で終わると思います。
それでは、また次にお会いしましょう。

第十四章（前書き）

こんばんは。泰人の昔話が終わります。今回ですが、少し分かりにくいかもしれません。もっと文章をうまく書ければといつも以上に思いました。

それではどうぞ！

第十四章

次の日、俺は学校が終わってすぐにいつもの土手に向かった。しかし、そこには梓由の姿はなかった。

まあ、その日に限ったことじゃないし俺は待つことにした。しかし、いくら待っても梓由は来なかった。

8時過ぎてさすがに帰らなくてはと思いその日は帰った。

何回もメールや電話をした。でも、電話には出ないし返事も来なかった。

泰人「……………」

何にも考えられなかった俺はその日寝ることにした。

俺は夢を見た。

そこは病院の病室だった。

そこに一人の少女が寝ていた。

顔は見えなかったがなんとなく分かる。

そこに黒い物体？のようなものが現れる。

その物体は少女の周りを飛び回っている。

その物体からはなんか嫌な気配を感じた。

しばらくその物体が飛び回っていると、少女から白い物体？のようなものが現れる。

黒い物体はその白い物体を取り込み、その場から消えた。

泰人「……………はっ！」

俺はそこで起きた。何のことか分からなかったが、今でもはっきり

覚えてる。

俺はそれが何かのヒントになると思い、沙汰に電話した。朝の3時だったが気が動転していついやってしまったという感じだ。

沙汰「・・・おい、俺は今、新しいプログラムが完成して寝るところだ。要件を手短に言え。」

なんだかんだ言って話を聞いてくれるところがあいつのいいところだ。

泰人「今すぐじゃなくてもいい。宇木風梓由の入院してる病院を探してくれ。」

いきなりこんなことを言ったら、普通は聞き返すだろう。

沙汰「・・・分かった。学校に行ったら結果を教える。」

真剣に答え、電話を切った。やっぱりあいつは頼りになると思ったよ。

だからといってあいつに任せっぱなしも良くないから、俺もなんかしようと思ったが結局電話をすることしかできなかった。

泰人「こんな夜中はまずいと思うけど、一応かけてみよう。」

そう一人呟いて、電話をかけてみた。すると

???「・・・・・・・・。」

誰か出た。

泰人「梓由か? こんな早くにすまない。実は・・・」

俺が話そうとしたら

???「・・・・・・・・今の君では梓由は救えない。」

そう言っただけで電話が切れた。その声は梓由のものだったが、まったく別人のように聞こえた。

それから一度もかからなかった。

朝になり学校に行った。そして、沙汰と話をした。

沙汰「梓由が入院している病院はなかったけど、市内の病院にある開かずの病室があるみたいなんだ。行ってみるか?」

俺はもちろん行くことにした。

放課後、俺たちはその市内の病院の二階の奥にあるその病室に行った。そこには……

（現在）

泰人「……………思い出せない。」

そう、その後の記憶が泰人にはなかった。

泰人「何でだ？何でそこだけ思い出せないんだ！？」

気が動転する泰人。彼は一体何を見たのだろうか？

泰人「その後、俺は非現実的なものが好きではなくなった。そして、莉麻が俺にべったりになったのもそれからすぐだ。」

色々と考えをまとめてみる。しかし、思い出すことはなかった。

ティルス「（こっちの時間でいう一年前か。関係ないと思うけど、その時にサミーに会ったんだよね。）」

ティルスはティルスで考えていた。

次の日、泰人は昨日のことを沙汰に話した。

沙汰「……………すまん。俺もお前と同じことしか覚えてないよ。」

そう答えた。

泰人「じゃあ、今日にでも行ってみよう。」

その泰人の言葉に沙汰は頷いた。

放課後、泰人と沙汰はその病院に行ってみた。

そこは半年前に新しい病院の方に医師たちが移動し、ただの廃墟になっていた。

そして、泰人達は二階の奥にある病室を開いた。

チュンチュンという雀の鳴き声とともに泰人は目を覚ます。

泰人「・・・・朝か。」

グツと伸びて、着替えを始める。

泰人「昨日はディオールから帰ってすぐに寝たんだったな。・・・三日後にまた戻んなきゃいけないけど、今は学校だな。」

そう言って準備を終えて学校に向かう泰人。

泰人「でも、何か大事なことを忘れているような？」
考える泰人だが何も思い出せなかった。

泰人がは学校に行くところを離れた所から一人の少女が見ていた。
???「・・・・今の君でも梓由は救えない。まだラルゴを覚醒させていない。」

そう少女は呟く。すると、少女の前に莉麻がやってくる。

莉麻「ん？君、お兄ちゃんに用？」

莉麻はその少女に話しかける。

???「・・・・ううん。なんでもないの。それじゃあね、梓由ちゃん。」

そう言ってその場から去っていく少女。

莉麻「・・・・梓由。」

呟く莉麻。いつもの元気な莉麻とは違う雰囲気漂っている。

莉麻「・・・・学校に行かなくちゃ。」

そう言っつていつもの中学とは逆の方向に歩きだす莉麻だった。

第十五章（前書き）

遅くなりました。実はとある事情でしばらく更新することができなくなると思っています。ですが、7月中には次が投稿できるように頑張ります。

それではどうぞ！

第十五章

それから少し時間が経つ。

泰人はいつものように学校に来て授業を受けていた。

泰人「（なんか授業受けてると日常に帰って来たと実感するな。まだ半分も終わってないけど。）」

授業に集中するふりをしながら、泰人はそんなことを考えていた。授業が終わって昼休み、泰人はいつも通り沙汰と会話をしていた。

沙汰「・・・そんで、ようやくバイクが家に届いたんだよ。実物はやっぱりいいね。」

泰人「お前は一応免許持つてるからな。俺も取りたいものだ。」
そんな感じに昼休みも終わる。

午後の授業はとりあえず真面目なふりをして他のことを考えていた。泰人「・・・やっぱり俺は何かを忘れている。昨日何か話したような気がするが・・・」

結局思い出せないでいた。

放課後、沙汰がいないので泰人は久しぶりに一人で帰ることにした。泰人「いつもとは違う道を通ってみるか。」

泰人はいつもの道とは違う川沿いの土手のほうに出る。

泰人「いやあ、夕焼けが綺麗だな。」

空を見上げてしみじみと呟く泰人。平和な感じがする。

しかし、突然、空が曇り始めた。さっきまでの夕焼けが嘘のように雲に隠れてしまった。

泰人「・・・何か嫌な予感がする。」

走る泰人。昔から彼は勘がいいので、こういうのはよく当たる。

泰人「なんだ？ 分かんないけど、急がなくなっちゃいけないような気がする。」

それほど時間も経たないうちに、家に着く。

泰人「・・・ただいま!!」

息を切らせて家に入る。

母「・・・なんとなく気付いたみたいね。」

母が真面目な表情で出迎える。

泰人「・・・やっぱりなんかあったみたいだな。」

どうやら泰人の勘は当たったようだった。

母「莉麻が、・・・あの子がいなくなったの。」

突然のことで驚く泰人。

泰人「何?いつから?」

母「朝から学校に行ってないみたい。心配掛けたくなかったから、泰人には伝えなかったけど。」

明らかに泰人の母は気分が悪そうだった。

泰人「・・・ちい。」

カバンを置き、家を出て行こうとする。

母「待ちなさい!どこに行くの?」

呼び止める母。

母「あの人と警察には連絡したわ。無理に関わらないで。」

あの人というのは、泰人の父のことだ。

泰人「・・・それでも俺は」

母「それに泰人。あなたには先約がいるわ。」

そう言って一枚の手紙を渡される。

母「さっき、お父さんのお友達がいらっしゃって泰人君にこれを渡して欲しいって。」

泰人「じいちゃんの友達って・・・まさか!?」

手紙の中を見る。そこには一言

この手紙を見たら、すぐに異世界の王子と二人でワシの家に来い。

と書いてあった。

母「さっき読ませてもらったわ。それで莉麻がいなくなった話をしたら、お父さんのお友達さんもこのことを知ってたみたいだったの。」

多分莉麻がいなくなったのも、異世界が関係しているんじゃないかしら？」

泰人「・・・可能性は少しあるけど、信じたくはない。」

現実と非現実を同じにしたくないと考えている泰人はそう言った。

母「・・・・・・・・この手紙の方を優先しなさい。これは、あなたにしかできないことだから。」

泰人は考える。莉麻の事を優先したいが、すぐという言葉がどうも気になる。

泰人「・・・・・・・・分かった。ティルス連れて行ってくるよ。」

そう言い、一度部屋に行く。

少し時間が経ち、泰人が玄関に来る。ティルスも一緒だ。

母「場所は分かる？」

泰人「前に一度会って、住所を教えてもらったからね。」

そう言っただけにももらった紙を母に見せる。

母「そう。莉麻の事で何かあったらすぐに連絡するわ。・・・行つてらっしゃい。」

泰人「ああ、手掛かり手に入れて帰ってくるよ。じゃあ、行つてきます。」

ティルス「ティルス！」

そう言い、泰人とティルスは家を出て老人の家に向かった。

母「・・・・・・・・無事に帰ってきて。あなたまでいなくならないで。」
母は心配しながら泰人達を見送った。

場所は全く分からないが、どこかの建物の中。一人の少女が椅子に座って目を閉じている。

少女「ようやくあの門番も動いたか。これで、ラルゴも覚醒するといいのだけれど。」

そう呟いた。

少女「それに莉麻も来てくれたしね。ねえ、梓由？」

少女の隣には……莉麻がいた。少女と同じように椅子に座っている。

莉麻「……はい、姉さん。」

無表情で答える莉麻。

少女「うふふ。梓由のおかげでラルゴもようやく半覚醒できそうよ。ありがとうね。」

少女は笑っている。

莉麻「ありがとうございます。奴も今は動けないようですし、泰人がラルゴを完全覚醒できれば」

少女「私たちもようやく元に戻るってわけね。……あの子とも話をしなくっちゃね。」

そう言っただけ目を閉じ、静かになる少女。

莉麻「（莉麻がいなくなったことであの男も動いた。後はあなた次第よ、泰人。）」

莉麻はそう考えていた。

その頃、沙汰の家では

沙汰「やっぱりこのバイクはかっこいいぜ。ひとつ走りてこようかな。」

一人蚊帳の外の沙汰が新車に見とれていた。

第十六章（前書き）

こんにちは。また少し時間ができたので投稿します。それではどうぞ！

第十六章

泰人とティルスは手紙を受け、老人の家へと向かっている。

泰人「意外に遠いな。自転車であればよかった。」

ティルス「ティルス！（まあ、急いで出てきたわけですから仕方ありませんね。）」

3キロ離れた場所まで走っていた。

20分後、

泰人「・・・よ、ようやく着いた・・・。」

ティルス「・・・ティルス。（さすがに疲れますね。）」

早速中に入るため呼び鈴を押そうとする・・・と、ドアが急に開き老人が現れる。

老人「来たか。入るといい。」

泰人とティルスは老人の家に入った。

老人の家はどことなく古風な感じがする家で、ほとんどの部屋の床はが畳だ。

老人「ここだ。」

そのうち一つの部屋に入る。机があるだけのシンプルな部屋だ。

老人「とりあえず座りなさい。」

言われた通り、泰人とティルスは座る。

老人「・・・さて、ここに呼んだのは君達に話しておかなくてはいけないことがあってな。」

泰人「・・・莉麻のことですか？」

泰人は聞き返す。

老人「うむ。どうやら事態はかなり厄介なことになっておるようだ。心して聞いてくれ。」

一息つく老人。

老人「まずは君の祖父、玄武が戦ってきた敵についてだ。ディオールには世界を安定させるために光の精霊、ミリアが存在している。そのおかげで今までは特に変わらない生活をしていった。」

しかし、50年ほど前に一人の男が災害を起こした。男の名はヴィントルといい、その災害のせいで世界のリズムが崩れそうになっていた。それを食い止めようと、ミリアは四人の騎士と共にその男に戦いを挑んだ。」

泰人「・・・それって!？」

泰人が反応する。

老人「そう。玄武、白虎、朱雀、青龍からなる親衛隊のことだ。」
老人が頷く。

老人「ミリアと親衛隊はヴィントルの災害からディオールを救うことに成功はしたが、ヴィントルにミリアが攫われてしまった。奴の本当の目的はディオールで最も力を持っていた光の精霊であるミリアの力の強奪にあった。奴の野望に気付いた親衛隊は別行動でヴィントルの搜索を開始した。そして、玄武がメディスクローズの神殿という所で儀式をしているのを見つけた。しかしヴィントルはすでにミリアを取り込み、闇の精霊へと姿を変えていた。白虎と合流した玄武は奴と戦ったが、あまりに強力すぎる力の前に追い詰められてしまう。だが、彼らは諦めなかった。ヴィントルをミリアとの分離は出来なかったが、ミリアの中に完全封印することに成功した。しかし、そのせいで、ミリアは衰弱していった。己の中に反発する力を抱えておるし、ディオールのために力を使っておるから当然だろう。そこで玄武はこの世界にミリアを連れてくることで、休養をとらせることにした。玄武はミリアを連れてこちらの世界に来てそのままこっちで暮らすことになった。ミリアも最近ようやく力を取り戻したが、1年ほど前に行方不明になってしまった。それからの事はワシにも分からない。」

一気に話して疲れたのか少し話を止める老人。

泰人「・・・それで、その話と莉麻はどんな関係があるんですか？」
静かな雰囲気でいち早く声を出したのは、泰人だった。

老人「・・・それは・・・」

突如玄関からガチャツと音がする。瞬間老人の表情が変わる。

老人「もう来たのか。・・・手の早い奴だ。君達、話は後だ。この部屋の奥の奥の部屋に行け。急げ。」

いきなりの事で何が何やら分からない泰人とティルスだったが、言うとおりに奥の部屋を目指すことにした。

泰人達が部屋を出て行ってすぐに一人の男が部屋に入ってきた。見た感じサラリーマン風の男性だ。

男「よう、門番！早速だが、茅野泰人をこっちに渡してもらおうか。」

ものすごく軽いノリである。

老人「まったくお前は訳が分からんな。だが、あの少年は渡さん。相手になってやるぞ、ヴィントル！」

老人は構えをとる。

男「俺はヴィントルじゃないが・・・まあいい。相手になってもらうぜ！」

男は老人に襲いかかった。二人の戦闘が始まった。

泰人とティルスが奥の部屋に行くと、いつもと違った空気を感じてディオールの神殿に似たような扉を見つけた。

泰人「な、なんでこれがあるんだ？」

ティルス「ティルス！？」

驚く二人。その時門から

門「試験を受けにきた者達よ。入るがいい。」

という声が聞こえて扉が開く。

泰人「訳分かんないけど、入んなくちゃ駄目っぽいな。」
ティルス「ティルス！」

二人は扉の中に入って行った。

その頃沙汰は、

沙汰「このバイク、いい感じだぜえー！ー！！」
バイクで町を走っていた。

いい感じで走っていたが

沙汰「ん？変な感じがすんな。」

ある家の前で止まる。家の中では乱闘しているような音が聞こえる。

沙汰「うーん。面白そうだし、見に行くか。」

沙汰は近くのコンビニにバイクを停めて、その家の中に侵入した。

第十七章（前書き）

こんな遅くにすみません。一応、一段落ついたので投稿します。八月に入ったら更新ペースが上げられればいいとは思っています。それではどうぞ！

第十七章

時間は戻り、泰人達が戻ってすぐのこと。白虎とサミー、ティライズはとりあえず白虎の家でゆっくりしていた。

白虎「暇だね。」

サミー「暇ですね。」

ティライズ「暇だな。」

とにかく暇みtaiである。

ティライズ「白虎。暇なのでその辺を散歩してきます。」

サミー「あ、私も行きます。」

あまりにも暇なので、ティライズとサミーは散歩に行くことにした。

白虎「うん、僕はここににいるから。お土産宜しく。」

ティライズ・サミー「……。」

微妙な感じのままティライズとサミーは外に出て行った。

白虎「うーん、準備はもうしちやったしな。……こっそりついていこう。」

そう言って白虎は部屋を出て行った。

ティライズとサミーはまた町外れの野原に来ていた。晴れてるし、あまり風も強くない、いい天気だ。

ティライズ「休息なんて久しぶりだな。」

サミー「とりあえず座りましょう。」

野原に腰掛けるティライズとサミー。近くに湖もあるので景色はなかなかいい。

ティライズ「……ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

突然話しかけるティライズ。

サミー「いいですよ。私が答えられる範囲内ならお答えします。」

答えるサミー。

ティライズ「……莉麻との合体について詳しく聞きたい。」

サミー「……………」

急に無表情になるサミー。

ティライズ「私の知っている限りでは、妖精と人間の融合には契約が必要なはず。しかし、お前達は契約をしていない。つまり……」

サミー「何か共有しているものがあるといいたいんですね？」

急に喋るサミー。相変わらず無表情だ。

サミー「……そのことについては答えられません。まだ時ではないので。」

ティライズ「まあ、無理に答えなくてもいいがな。」

あっさりと引き下がるティライズ。

ティライズ「だが次の質問には答えてもらう。……お前は誰だ？」

サミー「……………」

黙るサミー。

ティライズ「答える気がないのか？私は……………」

ティライズの話の途中で急に光るサミー。そして

サミー「……どうやら俺はお前を甘く見ていたようだ。こんなに鋭い奴だったとは。」

サミーの雰囲気と喋り方が変わる。

サミー「まあ、このことは黙っているな。まだその時じゃないんでな。」

ティライズ「……………分かった。」

そう言わないといけない気がしたティライズは頷いた。

サミー「いい子だ。じゃあ俺は行かなきゃいけない所があっから行かせてもらうよ。」

そう言うときサミーは飛び去ってしまった。

ティライズ「……………」

ティライズはしばらくその場で考えていた。

サミーはとある家に来ていた。山奥にひっそりと建つ家だ。昔、ここには一人の男が住んでいたが今はいない。

サミー「・・・ふう。いくら1年経ったといっても羽とか色々と慣れないな。」

サミーは家の中に入ると、人形用の椅子に腰掛けて一息つく。

サミー「だけど、もうすぐだな。・・・久しぶりに奴に連絡しようか。」

サミーは目を閉じ、念じる。

サミー「・・・久しぶりだな、古寺歩^{いじふ}。」

???「お、久しぶり・・・女の子？」

サミーの頭の中に男の声が響く。

サミー「・・・俺だよ。俺俺詐欺じゃないけど俺だ。」

???「その言い方はヴァインか。どうした？」

分かってくれたようなので、サミーはとりあえずあったことをすべて話す。

古寺歩「ほう、それは面白いじゃないか。もっとやれ!!」

サミー「・・・相変わらずだな。そう思っているなら協力してくれよ。」

サミーはあきれながらそう言う。

古寺歩「いいよ。お前の頼みなら断るわけがない。楽しそうだしね!!」

とても楽しそうに話す古寺歩。

サミー「じゃあ、茅野泰人が持つてるラルゴの力が目覚める前に破壊してくれ。」

古寺歩「あいよ、明日にでも行くよ。これから仕事だし、切らせてもらうよ。」

話を終え、サミーは再び目を開ける。

サミー「さて、俺はシュパルツとかいう男のボスでも探そうか。」
サミーは1時間ほど休憩し、外に出た。

しかし、外には白虎が待ち構えていた。

白虎「君、今他の世界の人間と会話していたようだね。」

あくまで冷静に話す白虎。

サミー「ああ。俺はこの世界の友達少ないんだ。」

笑みを浮かべるサミー。

サミー「じゃあ俺はこれで。人の家を荒らすなよ。」

そう言ってサミーは飛び去った。

白虎「僕はそんなの守る可能性は47%だよ。全くね。」

47%にも関わらず、白虎は迷わずサミーの家？に入って行った。

家の中は普通に綺麗だった。どうやらまめに掃除をしているみたいだ。

白虎「家探し白虎君!!」

ノリノリで家の中を物色する白虎。小さな筆筒があったので中を開けてみる。すると中には妖精用の服やら下着やらが綺麗にたたまれている。

白虎「彼はロリコンだったのか。種類も多いようだね。」

とても楽しそうな白虎。調子に乗って机の引き出しの中を見る。しかし、次の瞬間

白虎「……………」

急に真面目な表情になる白虎。中を見て驚いているようだ。

白虎「…………どうやら遊んでいる暇はないようだね。そろそろ彼を追おうか。」

そう言って家を後にする白虎。

彼が開けた引き出しの中には、鈍く光っている水晶が入っていた。

第十八章・前編（前書き）

大変遅くなりました。色々な事情で投稿できませんでした。多少は書き溜めてあるので2、3日は連続で投稿できそうです。それではどうぞ！

第十八章・前編

時間は戻り、泰人とティルスは門の中に入り道なりに進んでいた。いつの間にかティルスも元に戻っている。

ティルス「これで試練も3度目ですが、道は変わらないんですね。」

泰人「まあ、造りやすかったんだろ。」

あまり変わり映えのしない会話をしながら進む二人。

しばらく道なりに進んでいると、今回は亀の形の銅像が立っていた。

亀「今回は二つの試練を行う。まずは場所移動だ。」

そう言うのと銅像が光だし、周りが見えなくなった。

泰人「・・・ん、ここは？」

しばらくして目を覚ました泰人は辺りを見回す。どうやら湖近くの畔にいるようだった。ちゃんと隣にはティルスもいたが

泰人「・・・！！？」

泰人は気付いた。自分達が別々のカプセルに閉じ込められていることに。

泰人「なんだ、これは！？」

驚く泰人。

少ししてティルスも目を覚ます。泰人同様かなり戸惑っている。すると

亀「では、試練を開始しよう。」

亀の銅像の声が聞こえたと思ったら、カプセル内に水が入って来た。

泰人「・・・意味不明。」

泰人は真顔でそう言った。

亀「今回は簡単だ。お前達二人の内、片方のカプセルだけ水を止め

てやる。決めるのはもちろん、王候補者だ。」

ティルス「・・・え、それって。」

言葉が詰まるティルス。

亀「どちらが生き残るかここで決めろということだ。」

場所はまた移る。老人とサラリーマン風の男は互いに拳を交えていた。

老人「・・・いくぞ。」

老人は間合いをとり、何やら呟いている。

男「ほう、本気で来るかい。」

男は余裕そうだ。一気に間合いを詰める。

老人「・・・遅い！」

瞬間、老人と男を結界のようなものが包んだ。そして、老人は自分の目の前に陣を作る。

男「なるほど。この結界内では自由に力の発動が可能って訳か。」

男は足を止め、間合いをとろうと下がる。

老人「ふん。今頃下がっても遅いわ。行け！」

陣から大量の黒い球体が現れる。そしてその大量の球体から、男に向けて光線が放たれる。

男「・・・まあ、俺も力を使うか。」

そう言うと、懷から何かを取り出した。

それは、・・・黒いラルゴだった。

男「・・・ブラック・ウォール！」

男は、黒いラルゴを前に出しそう言う。

すると、黒い結界が男を包む。その結界はすべての光線を吸収する。

老人「馬鹿な！？何故お前がブラック・ラルゴを持っている？」

老人はかなり驚いている。

男「まあ、そんなことはどうでもいいよ。そこを通してもらおうか。」

「男は結界を解除し、黒いラルゴを構える。」

男「・・・降臨せよ、ブラック・スネ・・・」

途中で言葉を止める男。

老人「・・・どうした、来ないのか？」

老人は言う。

男「・・・今日のところはここまでか。退かせてもらうぜ。・・・
ブラック・ウィップ。」

男は黒い鞭を出現させて、結界を破壊。そのまま部屋を出て行った。

老人「一体どうなっているのか？」

老人が考えていると

沙汰「・・・あの、何かあったんですか？」

部屋に沙汰が入って来た。

また場所を戻す。

ティルス「どちらかなんて選べるわけじゃないじゃないですか。」

ティルスが声を荒げる。

泰人「落ち着け。きっと何か方法があるはずだ。考えようぜ。」

ティルス「・・・そうですね。すみません。」

泰人の言葉に少し落ち着いたティルスは考える。今水は膝位までの深さになっている。

ティルス「（そういえば僕、元の姿に戻ってる。ここは力の発動ができるみたいだね。だったら・・・）泰人さん、ウィップを出してくれませんか？」

何か考えたティルスは泰人にそう言う。

泰人「分かった。・・・ラルゴ・ウィップ！」

ラルゴを構えて唱える泰人。・・・しかし何も起こらない。
亀「言い忘れたが、従者の方は力の発動ができないようになってい

るから注意するように。」

だったらもっと早く言えよと思った二人だった。

ティルス「（従者だけってことは僕は使えるってことか。でも僕が使えるのは時空移動だけだし……。そう言えば、時空移動能力は色々と応用が出来るって聞いたことがあったね。だったら……。・やるしかない。」

何か考えたティルス。表情が変わる。

ティルス「決めました。泰人さんの方を止めてください。」

泰人「……。」。」

泰人は無言だが、ティルスが何か考えて行動していると分かっているようだ。

亀「……。了解した。」

泰人の方の水が止まり、どんどん減っていく。ティルスの方はもう胸の辺りまできている。

ティルス「……。ティルス・ティルス・コッティルス。」

何やら呪文のようなものを呟いている。そして

ティルス「……。空間転移！」

突然光るティルス。そして次の瞬間、ティルスはカプセルの外にいた。

ティルス「やった……。」。」

安心したのかその場に倒れこむティルス。泰人の方のカプセルは割れたので、急いでティルスに駆け寄る。どうやら無事のようなだ。

亀「従者に頼らずとも、自分の力で困難に立ち向かうのが今回の試練の一つ。……。合格だ。」

どうやら成功したみたいだ。喜ぶ泰人。

亀「では、もう一つの試練を始めよう。」

そう言うと、湖から巨大な鯉が現れた。

泰人「……。」。」

あまりの唐突な出来事に驚く泰人。

亀「今度は従者の試練だ。主を守りつつ、この鯉を倒してみせよ。」

いきなり言われたが

泰人「・・・ティルスが頑張ったんだ。俺だってやってやるぜ！」
そう言うラルゴを構えて

泰人「・・・ラルゴ・ウィップ！」

ウィップを出し、鯉に立ち向かって行った。

第十八章・後編（前書き）

では後編です。今回は次回との関係でかなり短いです。色々加えようか迷ったので遅くなりました。それではどうぞ！

第十八章・後編

泰人「……いっけー！ー！！」

泰人はウィップで鯉を叩きつけようとするが

鯉「……ギョル。」

鯉はギリギリのところかわす。そして体勢を整えると、口から水球を複数放ってきた。

泰人「……よつと。」

泰人も次々に避けるが、

泰人「……ぐつ。」

右足に一発受けてしまう。かなり痛そうだ。

鯉「ギョル！」

鯉は湖から飛び出てきて、泰人に体当たりする。

泰人「……ぐがあ。」

まともに巨大鯉の攻撃を受け、吹っ飛ばされる泰人。そのまま湖の中に落ちてしまった。

鯉「ギョルン！」

後を追うように、鯉も湖に入ってしまった。

……俺はどうなったんだろう。つーか最近やられてばかりだな。湖に沈みながら泰人はそう考えていた。

このまま沈んだら絶対死んじゃうよ。……ていうか鯉でかい。あれおかしい。絶対おかしいよ。

等々弱気なことまで考えていた。

……その時、泰人の脳裏にある光景が浮かぶ。

12年前、祖父とラルゴ・ウォールの話をしてすぐのことだった。泰人「でも守るだけなら特殊じゃないよね。なんかあるの？」

ちび泰人が質問する。

祖父「まあな。ウォールはラルゴを大きくするだけではなく、使い方次第では結界を張ることも可能なんじゃよ。」

泰人「へえ。うおーるってすごいんだね。」

感心するちび泰人。

祖父「うむ。何事も使い方次第というわけじゃよ」
頷く祖父。

祖父「そんじゃあ、隠し玉について教えてあげようかな。」

泰人「なんかすごそうだね。」

祖父「めっちゃ凄いぞ。」

食いつきのいいちび泰人に祖父も嬉しそうだ。

祖父「二つあるんじゃが、まずは一つだ。もう一つはお前が大きくなった時にでも教えてやろう。」

そう言うで一息入れる。

祖父「出し方は簡単だ。ラルゴを自分の前に構えて唱えるだけじゃ……（スネイラー）とな。」

ここで記憶は途切れている。

泰人「……試してみるか。」

そろそろ息も苦しくなってきたので、ラルゴを構えて唱えてみる。泰人「いでよ、スネイラー!!」

まあ、水の中なので唱えたというよりは、念じたという感じだ。

すると、ラルゴが急に巨大化した。

鯉「ギョル!？」

突然のことで急に止まる鯉。

泰人「・・・・・・・・ぐがあ（もう・・・息が続かない。）」

しかし出したはいいものの、息苦しくなりそのまま気絶する泰人。だが泰人が気絶してすぐに変化が起こった。

ラルゴが大きくなるにつれて、水がどんどんラルゴに吸収されていく。

1分も経たないうちに完全に湖の水を吸収し、ラルゴは4 m近くの大きさになっていた。

鯉「・・・・・・・・。」

巨大鯉はただその場を跳ねることしかできない。

ラルゴは泰人を背中に乗せて、自分の目の前に巨大な青い砲弾を出現させる。

ラルゴ「・・・・・・・・。」

そしてそれが巨大鯉目指して発射された。勿論巨大鯉は避けることもできず、そのまま命中して消滅した。

その後すぐに、ラルゴは元の大きさに戻った。

鯉を倒したが、ティルスも泰人も気絶してしまっていた。その様子を見ていた亀の銅像は

亀「本人は気付いていないようだが、無事に合格だな。仕方ないから入口まで送ってやろう。」

そう言うと、泰人とティルスは光に包まれてその場から消えた。

第十九章（前書き）

こんばんは。とりあえず、書き溜めた分はこれで最後です。9月からの更新状況は分かりませんが、遅くても1週間に1回は投稿したいと思います。

それではどうぞ！

第十九章

試練を終え、気絶したまま扉の前まで送られた泰人とティルス。

泰人「・・・・ん、どうなった？」

先に泰人が起きて周りを見渡す。なんで扉の前に戻ってきているのか理解出来なかったが、とりあえず変な生物に戻っているティルスを起こすことにする。

泰人「ティルス。起きろ！」

ティルス「・・・・ティ、ティルス！」

すぐに起きた。そしてなんでここに帰って来たか考えてみるも、一つしか思い浮かばない。

泰人「一応合格ってことでいいんだよな。」

ティルス「ティルス！」

そうですねと言わんばかりにティルスが答える。

泰人「とりあえずあの人がいる部屋に帰ろう。」

そう言って老人がいる部屋に戻った泰人とティルスだがその光景を見て驚いた。

沙汰「なるほど！そういうことだったんですね。」

老人「うむ。君は物分かりがよくて助かるな。」

沙汰がいる。沙汰が老人と何か話をしている。

沙汰「お、戻って来たか。お前がいないと重要な話ができないみたいだから早くこっち来いよ。」

老人「その様子だと合格できたみたいだな。良かった良かった。」

泰人は一瞬すべてがどうでもよくなってしまったが、すぐ冷静に戻る。

泰人「では、聞かせてもらいましょうか。莉麻のこととあなたの事を。」

老人「いいだろう。座りなさい。」

泰人とティルスはすでに座っている沙汰の横に腰掛ける。

老人「ではまずワシのことからだな。もう分かつてはいると思うが、試練の扉を守る者というわけだ。こっちの世界にこれがある理由は、
……まあ色々とな。深くは聞かんでくれ。」

一気に声のトーンが下がる老人に泰人達は頷くしかなかった。

老人「そしてさっきの話と莉麻君の関係だ。詳しくは分からないが、ミリアが関係しているのは間違いない。とすると、今は危険な目にはあっていないだろう。そのうち戻ってくるさ。」

泰人「そう……ですか。ならいいんですけど。」

それでも莉麻が心配な泰人。

ピピピピピピピ、ピピピピピピピ。

突然泰人の電話が鳴る。なんと莉麻からのようだ。

泰人「おい、どこにいるんだ？大丈夫なのか？」

勢いよく電話に出る泰人。

莉麻「……大丈夫、元気だから。事件とかに巻き込まれたわけじゃないし。」

ちゃんと莉麻の声なので安心する泰人。

泰人「なんか嫌なことでもあったのか？相談に乗るぞ。」

莉麻「……聞いて欲しいことがあるの。」

なんとなくいつもと違う莉麻みたいに感じた泰人だが黙って話を聞く。

莉麻「これからディオールに戻って決着をつけてくるわ。だからその前に一言言っておきたくて。」

泰人「は？戻るってどうやって？」

泰人の言葉を見無視して莉麻が続ける。

莉麻「……どんなに変わっても私はあなたを信じてる。」

泰人「……」

この時泰人は懐かしい感覚になった。前にもあったようなそんな。

莉麻「……それじゃあね。」

泰人「おい、待て。待ってくれよ！」

電話は切れてしまった。

莉麻は電話を切った。これ以上話すとあの子が出そうな気がしたから。

少女「挨拶は済ませた様ね。ラルゴの半覚醒も終わったみたいだし、彼女とも連絡がとれたわ。さあ、行きましょう。」

莉麻「はい、姉さん。」

そう言う少女は何やら儀式みたいなものを始めた。

泰人「もしもし、もしもし。…………くそ。」

結局何も聞けぬまま電話は切れてしまった。

老人「…………うむ？この感覚は、…………しまった！」

老人は何かを感じたようだったが、すでに遅かった。

少女「行きましょう。」

莉麻「はい。」

二人は光に包まれて、…………姿を消した。

…………そして、世界の時間は止まってしまった。

場所は変わってディオール。

サミーはどこかに向かつて飛んでいたが

サミー「ん？この感じは…………。ふふ、ついに奴が来たか。」

嬉しそうに笑っていた。

更に場所が変わる。

白4「……ついに来てくれるのね。やっと始められる。……待ってて、泰人。」

何やら独り言を言う一人の少女がいた。

場所は元の世界に戻る。

ティルス「……うーん、一体何があったんですか？」

どうやら気絶していたみたいなティルスはとりあえず老人に話しかけようとするが

老人「……」

全く動かない。勿論泰人や沙汰も同様に動かない。

ティルス「これは一体……。僕も元の姿に戻ってるし。」

ティルスは外に出てみる。思った通り、何もかもが止まっていた。

ティルス「まさか……。誰かがディオールに行ったんじゃない。」

慌てて老人の部屋に戻る。

ティルス「泰人さん、起きてくださいよ泰人さん。」

泰人は動かない。

ティルス「莉麻さんを助けるんでしょう？ねえ、泰人さん、泰人さーん！！」

悲痛な叫びが部屋に響いた。

第二十章（前書き）

こんばんは、というよりおはようございます。日が変わってしまいました。こんな遅くにすみません。

とりあえず、この話が一区切りついたら新しい話を書こうと思っています。何を書くかはだいたい決まっていますが、その時になったらまた報告します。

それではどうぞ！

第二十章

世界の時が止まった。

ティルス「・・・どうすればいいんだろう。」

止まった世界に一人残されたティルスは途方に暮れていた。今彼以外のすべてが止まっていた。

ティルス「僕が動けるのは向こうの世界の住人だからだ。もしこの辺に向こうの住人がいれば、動いているかもしれない。少し探してみよう。」

そう考えたティルスは、老人の家を出て近くを見て回ることにした。

ティルスが家を出てすぐの事、・・・なんと老人が動き始めた。

老人「・・・さて、ティルス君が帰ってくるまでに準備を進めておかななくてはな。」

そう呟くと、老人は奥の部屋に入って行った。

ティルスはとりあえず近くの公園まできてみたが、やはり誰も動いている様子はなかった。

ティルス「うーん、この辺にはいないね。もうちょっと遠くまで行ってみよう。」

とりあえず、適当にその辺を歩いてみたが結局何も変わりはないかった。

気がつくところある土手まできていた。ティルスはとりあえずその辺に座り、川を眺めていた。

ティルス「僕は一体どうすればいいんだろう。」

また途方に暮れるティルス。考えもまとまらないようだ。

ティルス「一応打開策は考えた。止まった人はこの世界によって縛られている。つまり、向こうの世界に連れていけば動くことができる。

る。だけど、この止まった世界では僕的能力を使うためのエネルギーが集められない。結局意味がないんだ。」
手段が思いつかずに落ち込むティルス。もう何をしても意味がないと考え始めようとしていた。

その時ティルスは近くで異様な能力を感知した。
ティルス「・・・行ってみよう。」

能力を感知した場所に行ってみることにした。

しばらく歩くと、目的の場所である病院に辿り着いた。

ティルス「そういえば前に泰人さんが病院の話をしていたような気がするけど・・・うまく思い出せないな。」

そう言って、ティルスは病院の中に入った。

ティルス「暗くてよく見えないな。でも力は二階の奥の部屋から発せられているようだね。行ってみよう。」

ティルスは二階に上がり、奥の扉を開けた。

そこは、何にも置いていない殺風景な部屋だった。少なくともティルスにはそう見えた。

ティルス「時間が止まっていてこの部屋の真の姿は見れないようだね。でもこの異様な力は何かあるに違いない。時間が動き出したらまた来てみよう。」

そう思ったティルスは、とりあえずその場を後にした。

病院を出ると、そこには一人のサラリーマン風の男が立っていた。

ティルス「う、動いている？あなたは一体!？」

ティルスはいきなり動いている人を見て驚いている。

男「力がある人間は時間が止まってても動くことができるのさ。俺みたいにな。」

男は何やら笑って話しかけてくる。そんな男を見て、ティルスは警戒しつつ後ずさる。

男「別に君には何もしないさ。泰人もパワーアップしたようだしね。心配しなくていいよ。」

ティルス「だったらあなたは何しにここに来たんですか。」
当たり前疑問をぶつけるティルス。

男「君達にはディオールに戻ってもらわなくちゃいけないんだ。つーわけで、早く老人の家に戻んな。んじゃ!」

ティルス「な、なんでそのことを?・・・ちょ、ちょっと待って!」

しかし男はものすごいスピードで走り去ってしまった。

ティルス「うーん。とりあえず戻ってみよう。」

そう思ったティルスはもと来た道に戻っていった。

場所は変わりディオール。

家探し白虎君はサミーを追うのをやめて、何やら不思議な感じがした浜辺に来ていた。

白虎「この辺だったような・・・ん、あれは?」

人影を見つけた白虎は岩陰に隠れる。

そこには二人の少女が歩いていた。一人は莉麻、そしてもう一人は・・・。

白虎「へえ、よく分かんないけど凄いことになってるね。」

しばらく見ていると、彼女ら二人に近づく白いマントの人が見えた。

少女「久しぶりね。元気にしてた?」

白4「・・・・まあまあ。」

声を聞く限りマントの人は女のようなだ。

その後も彼女らは色々会話を交わしたが体調の事や最近のあった話ばかりだった。白虎はその辺に興味がなかったので聞き流した。

少女「では移動しましょう。梓由、ミュア。」

莉麻「はい、姉さん。」

ミュア「・・・・こつち。」

ミュアという少女に連れられて彼女らはその場を去った。

白虎「おっと、追わなきゃね。」

彼女達を追うことにした白虎だったが・・・

???「・・・待て。」

一人の男の声が聞こえ、白虎の前に現れた。白いマントをした男のようだ。

白1「お前を行かせるわけにはいかない。この場を去れ。」

白虎「・・・君か。コスプレなんかして、何企んでんの？」

どうやら白虎には誰か分かっているようだ。

白1「言えない。だが、彼女らは大切な客人だ。邪魔するなら俺自らお前を消すぞ。」

何やら青白い光を放つ剣を取り出したマントの男。

白虎「・・・君と争ってもどうせ僕が負けるんだし止めとくよ。しようがないな、素直に奴を追いますよ。」

白虎は渋々その場を去った。

白1「・・・奴の狙いは俺だからこの場からいなくなっても良かったものを。」

マントの男は海を見ながらそう呟いた。

場所に戻る。

ティルスは老人の家に戻ってきていた。そして、

老人「もう準備は出来てるよ。こっちおいで。」

老人が動いていることに驚いたが、さっきの男の言葉を思い出し素直についていくことにする。

連れてこられた場所は何やら大きな部屋だった。部屋の真ん中には陣があり、泰人と沙汰が横たわっている。

老人「この陣の中ならば、移動に必要なエネルギーはすぐに回復するぞ。」

ティルスは言われた通り陣の中に入る。するとみるみる力が回復するのが分かる。

ティルス「これだったらすぐにも行けます。」

老人「ならば行って来い。二人は忘れずにつれて行けよ。」
ティルス「はい。」

ティルスはいつものように呪文を唱える。そして三人はその場から消えた。

老人「頼んだぞ！ 莉麻君を、・・・ミリアを救ってくれ。」
老人はそう言ってその部屋を後にした。

第二十一章（前書き）

こんにちは。ここのところ時間があまり作れません。更新も1週間に1回位になると思います。しかし、時間が作ればもう少し早く更新したいと思います。
それではどうぞ！

第二十一章

そうして、ティルス達はディオールに戻って来た。

ティルスが目覚ますと、知っている場所にいた。ウィンディームの町外れの丘の上だった。

ティルス「・・・どうやら無事に戻って来れましたね。」

立ちあがって辺りを見渡す。よく見たが、近くに沙汰が倒れていただけで泰人はいなかった。

ティルス「あれ？とりあえず沙汰さんを起こさないと。」

近くに倒れている沙汰に呼び掛ける。少し経って、目を覚ます沙汰。

沙汰「・・・おはよう。つか、ここ何処？」

けっこう混乱しているようだ。とりあえずティルスは、あの後あったことをすべて沙汰に話した。

沙汰「分かった。では泰人を探しに行こう！」

すんなり分かってもらえたようだ。

ティルス「ではまず、白虎さんの家に行ってみましょう。このことを話しておいた方がいいですからね。」

沙汰「おう、行こう！」

二人は白虎の家へと向かった。

ティルス「只今戻りました。」

沙汰「以下同文。」

白虎の家に着き、ドアを開けそう言う二人。中からティライズが現れる。

ティライズ「おかえり。私以外いなくなったがとりあえず話がしたいから中に入ってくれ。」

とりあえず中に入りその辺に座る。

ティルスが向こうであったことをすべてティライズに話す。

ティライズ「そうか、莉麻が何かの事件っぽいものに巻き込まれて

いるのか。そして、泰人は別の所に飛ばされた。厄介なことになったな。」

頷きながら言うティライズ。

ティルス「だからこれからの行動プランを練り直したいんだ。」

沙汰「なんかすぐに全部終わる作戦だったらいいな」

意見を述べる二人。

ティライズ「よし、白虎の帰りを待ちながら話し合いという。目的は泰人と莉麻の搜索と、本来の目的である神殿周りだ。それでどうするかだが……」

こうして3人の話し合いが始まった。

場所は変わって、とある街道。白虎は走っていた。

白虎「あいつが行きそうな所は……」

考えている。……ひたすらに考えている。

白虎「……戻ろう。」

どうやら気付いたみたいでもと来た道に戻って行った。

それを見ていた一人の白いマントの男。浜辺の男とは違うみたいだ。

白3「……なんか俺の仕事代わりにやってくれるっぽいな。じゃあ任せて俺は本来の仕事しに行こうかな。」

男はそう呟いて白虎と反対方向の道をだるそうに歩いて行った。

白3「ふぁ……。……おかしいな、昨日20時間寝たのにまだ寝みいや。」

……。……どうやら寝すぎで逆に疲れているようだった。

場所は戻り、白虎の家。どうやら3人の意見もまとまったようだ。

ティライズ「よし、確認しよう。まず白虎については、けっこう時間が経ったのに帰ってくる気配がない。まあ、何か面白いものを見つけたんだと思う。なのでもう忘れてあげよう。」

頷く二人。白虎はあまり人受けしないらしい。

ティライズ「そして、本来の目的と茅野兄妹の搜索は並行して行う

こととする。ちょうどいいことに、少し前に町中でフィドウを見つけた。多分この町にまだいると思う。彼にも手伝ってもらおう。そして私達は目的通り次の神殿のある町に向かいつつ彼らを探す。まあ、こんな感じだがいいな？」

頷く二人。

ティライズ「よし、それではフィドウを探しに町に出よう。」

3人は白虎の家を出て町の中心へと向かった。

そして場所をまた移す。

ティルス達がいるところからずっと離れた場所、ディオールの端にある一つの小さな町、レクナム。ここでは近くに海があり、漁業が盛んである。

今日もたくさん漁師が魚を捕まえるために海に出ていた。

その中で一人で船を出し魚釣りをしている若い男がいた。男の名はスィング。レクナムの人間で、今日はなんかそんな気分らしく、他の人に黙って自分の船を出し海釣りをしていた。

スィング「うん、なかなかいい感じに釣れとるな。いや、俺っちの勘も冴えてるぜ。」

けっこう釣れているみたいで気分が乗ってきているスィング。

・・・しかし突然辺りが真っ白に光った。

スィング「うお！？なんだ？」

びっくりして倒れるスィング。

・・・だんだん光が収まってきて周りを見渡せるようになったのでスィングはその原因が何か見渡してみた。・・・しかし何も見つからなかった。

スィング「・・・俺っちの見間違いか。いや、そんなことは・・・。」

考えていると足に何かがぶつかる。

スィング「あれ、こんなところに何が・・・。」

スィングは驚いた。そこには一人の青年が倒れていた。年は16，

7位で見たこともない恰好をしていた。

スィング「・・・な、なんかよく分かんねえけど、とりあえず村に運ぶか。」

スィングは釣りを止めて、村に戻って行った。

村に着き急いでその青年を病院に連れて行った。どうやらその青年は気を失っているだけらしくすぐに目を覚ますようだ。

スィング「良かった。まあ目覚ますまで見といてやるか。」

青年は病院のベッドに寝かされスィングは付き添っていた。

しばらく経ってその青年は目を覚ました。

青年「・・・ここ何処？」

混乱しているようだ。

スィング「おう、起きたか。いきなり光ったと思ったらあんたが倒れてるもんだからびっくりしたよ。」

スィングは青年に話しかける。

青年「・・・あれ？ティルスや沙汰がない。」

青年が話す。

スィング「ん？お前以外には誰もいなかったぞ。」

青年「・・・マジか！？こんなの初めてだぞ。つーかここディオールだよな。多分莉麻もこっちに來ているはずだ。探さないで。ありがとう、そんじゃ！」

そう言って青年は走り去っていった。

スィング「・・・何なんだ？」

良く分からないスィングだった。

泰人「畜生、なんでこんなところに？早く探さないで。」

青年は泰人だった。泰人は病院を出て辺りを見回す。勿論ここがどこだか分かるはずもない。

泰人「・・・ぐ、まずは町から出る。行くぜ！」

当てもなく泰人は走りまわった。そして出口はすぐに見つかった。

泰人「・・・今行くからな。」

泰人はそのまま出口を抜けて走っていった。

その後ろからスイングがついてくる。

スイング「おい、待てよ。この辺知らないだろ。俺っちが教えてやるって・・・って、待てよおっ」。――

スイングは泰人を追いかけて町を出て行った。

第二十二章（前書き）

こんばんは。すみません、遅くなりました。書いていた物が一度消えたり色々ありました。次から気をつけます。とりあえず次は9月中に一回投稿する予定です。10月入ると責任者やら何やらで末にしか投稿できないと思います。10月は2回投稿と考えています。長々とすみません。それではどうぞ！

第二十二章

泰人「…………マジかよ。」

泰人は困っていた。町を出てまっすぐ走っていたら、行き止まりに着いたからである。

泰人「うーん。ここは町の出口じゃないのか？」

泰人が考えていると後ろからスイングがやってきた。

スイング「……はあはあ、あんた速いよ。追いつくのも大変だ。」

スイングは普段からあまり運動をしないので走るのが苦手である。

泰人「ああ、助けてくれた人か。ちょっと聞きたいんだが……」

スイング「待った！まずは名乗ろう。俺たちはスイング。船は持っているけどまだ見習いの漁師だ。」

泰人「そうか。俺は泰人。宜しく！」

二人は握手を交わした。

スイング「とりあえずこっちは町の出口じゃないから町に戻ろう。」

泰人「そうか。分かった。」

二人はもと来た道に戻った。

そして町に戻ってきた。

スイング「とりあえず俺たちの家に来い。色々話が聞きたいからさ。」

泰人「……まあいいけど。」

とりあえずスイングの家に移動して妹を探していると話しをした。

スイング「なるほど。それじゃあ急ぐのも分かるな。んでどこに行きたいんだ？」

泰人「とりあえずウィンディームに行きたいんだが、最短ルートはどんな感じだ？」

スイング「……………」

急に黙るスイング。

泰人「どうした？ちゃんとウィンディームって場所はあるはずだ
ど。」

スィング「・・・知ってるさ。その前に俺っちの話聞いてくれ。」

泰人「???」

戸惑いながらも頷く泰人。

スィング「実はこの島はお前の知ってる所とは違う島なんだ。お前
の言っているウィンディームがある島はこのディオールの中心の島。
その中心の島と離れた所にいくつか小島がある。ここもその一つだ。
」

地面を指さすスィング。

泰人「・・・じゃ、じゃあその中心の島までは最短でどれくら
いか掛かるんだ？」

驚いたがすぐに冷静に戻り聞き返す泰人。

スィング「うーん。中心の島まで行くとすると船を使って7日は掛
かるな。」

泰人「・・・え!？」

あまりの事で驚きを隠せない泰人。そう期限ぎりぎりまで使ってよ
うやく戻ることができるというわけなのだ。

泰人「・・・嘘だろ。もっと、すぐにでも行く方法はないのか？」

スィング「・・・残念ながらそれは無理だな。すまん、力になれ
なくて。」

泰人「・・・。」

その言葉を聞いて泰人の頭の中は真っ白になった。

スィング「・・・おわびといっちゃんんだが、好きなだけうちに泊
まっていってくれ。」

泰人「・・・。」

スィング「・・・じゃあ俺っちは船を片づけてくるから考えをまと
めておいてくれ。」

そう言ってスィングは家から出て行った。

一人になった泰人はボーっとしていた。しかしすぐに打開策を考え始めた。

泰人「・・・考えろ。何か手はないのか、必ず探してやる。」

とりあえずポケットに手をつまむ。すると指先に何かが当たる感触がする。

泰人「ん!？」

泰人はそれをポケットから出してみる。

それは・・・小さな箱だった。

泰人「そーいやまだ開いてなかったな。・・・もう一回やってみるか。」

泰人は箱を開けてみた。

すると、カチャッと音がすると箱は開いた。

泰人「・・・開いたよ。中身はっと・・・。」

箱の中には、手紙とさらに小さな箱が入っていた。

泰人「・・・また箱か!! もういいよ。」

ばやきながら手紙を読んでみる。そこにはこう書かれていた。

これを読んでるってことは、ラルゴの力が半分以上取り戻したってことだな。

じゃあご褒美といこう。一つだけ願いを叶えよう。ただし叶えられる範囲内ならの話だな。

大きいほうの箱の中身を全部出して願い事をその箱に言う。良かったらOK、駄目ならNGとふたに文字が浮かぶ。NGの場合は何度もやり直せるぞ。

因みに小さい箱は今度本当に必要になったら開く。

いいか、絶対にタイミングを間違えるなよ。

では頑張れ!

こう書かれていた。

泰人「なるほど、タイミングって言葉が気になるがまずは願いの方

が先だ。」

泰人は箱の中身を出して空っぽにした。そして
泰人「……莉麻の元に行かせてくれ!!」

場所に移る。

沙汰、ティルス、ティライズは町をうろついていたフィドゥを見つけた。

フィドゥ「あ、お久しぶりです!どうしました?」

ティルス「実は……」

ティルスは茅野兄妹を探していることを伝えた。

フィドゥ「そうですか。ならば僕が情報を集めておきましょう。その時は連絡しに行きますよ。それで次はどこに行くんですか?」

ティライズ「ここからだが一番近いのはメノス火山のふもとにあるフレムリーだな。そこに伝説の親衛隊の一人、朱雀がいるらしいからな。」

フィドゥ「分かりました。……それで話は変わりますが……」
急に小声になるフィドゥ。

フィドゥ「例の少年について分かったことがいくつかあります。」
その言葉に驚く三人。

ティライズ「……ついに分かったか。」

フィドゥ「はい。どうやら不思議な術を使う男が最近この辺りに出没しているようです。その術式記録をあの病院長さんに見てもらったところ、間違いないそうです。」

その言葉に一番反応したのは沙汰だった。

沙汰「その記録を見せてほしいんだけど。」

フィドゥ「いいですけど、ここではちよっと。どこか落ち着ける場所に行きませんか。」

ティルス「では白虎さんの家に行きましょう。」

四人は白虎の家に向かった。

また場所を移す。

サミーはとある男を探し飛び回っていた。

サミー「なかなか奴の気配が掴めないな。・・・なんか飛び回って汗かいたな。家に戻ってシャワーでも浴びるか。」

サミーはもと来た道に戻っていった。

その頃家探し白虎君は浜辺に戻ってきた。相変わらず白マントの男が突っ立っている。

白虎「浜辺に戻って来たけど、やっぱり彼以外いないな。気配は彼のすらないけど。・・・こういうときは振り出しに戻るんだ！」
そう言ってヴィントルの家に向かった。

白1「相変わらずテンションが高い奴だ。」

白マントの男はそう呟いた。

第二十三章（前書き）

こんばんは。なんとかり月中に投稿出来ました。それではどうぞ！

第二十三章

泰人「……莉麻の元に行かせてくれ!!」

「……しかし、何も起こらない。箱のふたにはNGの文字が浮かんでいる。」

泰人「……やっぱり駄目か。何ならいいんだろう?」

その後も莉麻を助きたい関連の事を言ってみたが、全部NGの文字が浮かび駄目だった。

泰人「結局駄目なのかよ。だったらどうすればいいんだよ!?!」

結局全部NGで、泰人も精神的に疲れていた。

スイング「さて、落ち着いたか?」

スイングが戻ってきた。しかし、行く前より疲れている泰人を見て少し困った感じで

スイング「……えっと、何かあれば言ってくれよ。この島の事だったら何でも答えるからさ。」

その言葉を聞いて泰人が顔を上げる。

泰人「……この島に不思議な場所ってあるかな?」

いつまでも落ち込んでいると迷惑をかけると思った泰人は、気分転換の場所探しのために聞いてみた。

スイング「まあ、あるにはあるけど、今ちょっと行けないと思う。」

泰人「え?それはどうして?」

スイング「昔はこの島にはたくさんの妖精が住む島だったんだけど、1年ほど前に一匹の妖精がこの島を出るときに妖精の村を封印したみたいなんだ。その場所はさっき行った行き止まりの所さ。」

それに泰人は反応する。

泰人「(そういえばこっちに来てから妖精ってサミーしか見てないな。もしかしたら……)あの、そこにもう一度行ってみるよ。気になるし。」

スイング「そっか。じゃあ俺っちもついていくよ。俺っちも久しぶ

りに妖精が見たいんだ。」

というわけで二人はもう一度あの行き止まりの所に行ってみた。

場所は変わって白虎の家。4人はリビングにいた。

フィドゥ「これがその記録です。」

沙汰「おお、これか。どれどれ・・・。」

沙汰はその記録に目を通す。どうやら興味を持ったようだ。

沙汰「これは興味深いな。よし、これを応用すれば新しい機能が追加できるかもしれないな。じゃあちよつと待っていてくれ。」

沙汰はミニパソを取り出すとミニパソに色々と打ち込み始めた。

ティライズ「えっと、どれくらいかかるんだ？」

沙汰「あまり掛からないよ。12、3時間くらいかな？」

3人「いや、長いから!!」

同時に突っ込む。

ティルス「どうしよう？そろそろ出かけないと列車に間に合わないと思うよ。次の列車は明後日だよ？」

その言葉に考えるティライズ。そこに

沙汰「ああ、いいよ。これの解析が終わったらすぐに行くから先に行っててよ。」

沙汰が言う。

ティライズ「確かに急ぐ旅だからな。沙汰には悪いが先に行こう。」

ティルス「ティライズ君が言うなら僕も行くよ。沙汰さんすみません。フィドゥさん、後お願いします。」

フィドゥ「はい、任せてください!」

軽く会話してティルスとティライズは出かけて行った。

沙汰「うんうん、これは面白いな。うまくいけば・・・。」

沙汰はノリノリだ。

フィドゥ「うーん、沙汰さんが解析しているこの時間にちよつと情報集めに行きましょう。」

そう言ってフィドゥも出かけて行った。

泰人とスィングはまた町外れに来ていた。何やら不思議な感じがする。

泰人「よし、試してみるか。・・・ラルゴ・ウィップ!」

泰人はメジャーを取り出してウィップにする。

スィング「おお、凄い能力を持ってるな。」

泰人「まあ、これはほんの一部だよ。じゃあ行くぜ!」

泰人はウィップを振るい、行き止まりを叩きつける。

・・・しかし、少し光っただけで他には何も起きなかった。

スィング「うーん、力不足のようだな。」

泰人「だったらこれだ、・・・スネイラー!!」

泰人はウィップからスネイラーに切り替える。ラルゴはどんどん巨大化し、4 m位になる。

スィング「こ、これは凄すぎるな。お前って一体何者なんだ?」

泰人「俺は一般人さ! うん。」

ここは力強く言う泰人。

泰人「いくぜ! ラルゴ・ブラスタあー!!!!」

・・・しかし何も起こらない。

ラルゴ「・・・!!」

ラルゴは何か伝えたいようだ。

泰人「・・・そういえば、前湖の中で出したな。もしかして水分が足りないのか?」

頷くラルゴ。

泰人「・・・やべ。どうしよう?」

スィング「だったら俺っちに任せな。」

スィングはラルゴに手をかざす。すると

ラルゴ「・・・!!」

ラルゴは元気になった。

泰人「お? 何やったの?」

スィング「俺っちの能力は生き物の水分を調節することができるん

だ。まああんまり使わないんだけどな。」

泰人「なるほど。とりあえずサンキュー！行くぜ。泣きの一回、ラルゴ・ブラスタぁー！ー！！」

ラルゴの前に巨大な水泡が出来上がっていく。

泰人「・・・シュートだ！！」

発射される。・・・その水泡は行き止まりを貫いた。そしてそこから急に光が溢れる。

泰人「・・・うわ！」

スイング「・・・お？」

二人はその光で前が見えなかったが、少し経つと収まった。行き止まりはなくなり通れるようになった。

泰人「・・・いや、今のラルゴ・ブラスターはとんでもない威力だったな。」

スイング「いや、これでも60%位しかあげてない。まだ威力は上がるってことだな。」

泰人「・・・どうやら、君とは相性がいいみたいだな。・・・とりあえず先に進もう。」

ラルゴを元に戻し、泰人達は先に進んでいった。

サミー「ん？結果が破られたか。まあ、もう遅いがな。・・・まずはシャワーっと。」

家に着いたサミーは着替えを用意して、シャワーを浴びに浴室に向かった。

第二十三章（後書き）

というわけで、次回は10月24日以降になると思います。それまで待っていただければ嬉しいですよ。
それではまた次回会いましょう！

第二十四章（前書き）

こんばんは。お待たせしました。とりあえず、少しおかしな方向になったかもしれませんが気にしないでもらえればうれしいです。
それではどうぞ！

第二十四章

泰人「・・・ここは!？」

どンドン進んでいくと、何やら不思議な感覚になる所に着いた。そこだけ開いた空き地になっている。

スィング「ここだな。・・・よし、ちょっと目を閉じてくれ。」

泰人「・・・あ、ああ。」

泰人とスィングはお互い目を閉じた。

・・・。

泰人「・・・何も起きないけど。」

スィング「いや、これでいい。目を開けてくれ。」

泰人はそっと目を開ける。すると

泰人「ほう、こういうことか。」

目の前には村が広がっていた。

スィング「ここが妖精の村さ。あの場所が分岐点で、ここに来れるように術がかけられているんだ。そして、ここでは人間と同じ大きさで暮らしているのさ。」

泰人はなるほどと頷き村を見える。どうやら変わったところはな
いみたいだ。しかし

スィング「おかしい。誰もいない。」

その通りだった。外には誰もいなかったのだ。

泰人「うーん。確かに今は昼時だな。ここに来れなかったのと同関係
しているのか？」

二人で考えていると一人の女性が家から出てきた。

スィング「フィルディアさん! お久しぶりです。」

どうやらスィングはその女性を知っているみたいで、挨拶をする。

フィルディア「・・・スィングさん。」

女性の方も反応を見せる。少し顔色が悪いようだ。

泰人「この人は？」

スイング「この人は昔俺っちが一番お世話になった妖精さ。フィルディアさん、今妖精が村に全くないようなんですけど。」

フィルディア「・・・はい、私以外の村の者たちはみんな封印されてしまったのです。あの子の・・・いえ、あの男のせいで。」

どうやらかなりの事情を抱えているようだった。

スイング「あの子って・・・サミーちゃんですか？」

泰人「・・・やっぱりサミーはこの出身だったのか。」

フィルディア「・・・！？あの子を知っているのですか？」

泰人の言葉にフィルディアは素早く反応する。

泰人「ええ、一緒に旅をしてきましたからね。」

フィルディア「そうですか。」

スイング「? ? ? ? ? どういうことだ？」

スイングはよく分かっているようだ。

フィルディア「今の子は・・・。」

泰人「というよりもあなたはサミーのお母さんなんですか？」

フィルディア「え、ええ。あの子は私が育てた子です。」

フィルディアは少し悲しそうな表情をする。

フィルディア「・・・そうですね。だったら尚更あの子の話をあなた達にしなくてはいけません。聞いてくれますか？」

その言葉に頷く二人。

フィルディア「それではお話ししましょう。」

フィルディアは思い出すように昔の事を語りだした。

場所を移す。サミーはシャワーを浴びていた。

サミー「・・・♪」

とても気持ちよさそうだ。

そんな彼女の家に一人の男が忍び込んでいた。

家探し白虎君だ。

白虎「僕は思った。・・・ここまですると何も言えない。」

さすがに空気を読んだ白虎は例の水晶を見つけた。

白虎「おそらく今なら破壊出来る。」

右手を水晶に向け・・・。

サミー「やはり来たか。白虎。」

シャワーを中断したサミーが現れた。もちろん何も身につけていない。

白虎「・・・さすがに何か着てくれないかい。待っててあげるから。」

サミー「・・・まあいいだろう。」

そういうとサミーは服を取りに戻った。

白虎「ロリコンって何なんだろう？」

白虎はよく分からないことを考え始めた。

場所と時間は変わり、夕方。ティルスとティライズはフレムリーに到着した大きな火山があり、温泉で有名な町だ。

ティルス「確か街の外れに神殿があるはず。行ってみよう。」

ティライズ「そうだな。」

二人は神殿に移動した。・・・しかし

二人「・・・。。。」

二人は茫然とした。神殿が破壊されてしまっていたのだ。

ティルス「えっと・・・。」

ティライズ「(サミー? が動いているのか。厄介だな。)」

そこに町の人が現れる。

男「ここは先日の嵐で崩壊しました。明後日から修理を始めます。」

そう言う町の人々は去っていった。

ティルス「・・・えっと。」

ティライズ「・・・。。。」

二人は何も言えなかった。

ティライズ「と、とりあえず朱雀の所へ行ってみよう。」

ティルス「う、うん。」

二人は動揺しつつも朱雀の家へ向かっ……。

??? 「面倒ですが来てあげましたよ。」

赤い服を着た男性が後ろに立っていた。

二人はびっくりして思わず後ずさりする。

ティライズ「あ、貴方が朱雀ですか？」

朱雀「私を知っているなら面倒ではないですね。面倒ですが私の家へお連れしますよ。」

二人「お願いします。」

二人は朱雀の家へと連れて行ってもらった。そして今までのことをすべて話した。

朱雀「分かりました。君達が来るのは前もって知っていたので。では面倒だと思いますがこれをつけてください。」

朱雀はティルスの指に指輪をはめた。赤い宝石が綺麗な指輪だ。

朱雀「時がきたらその指輪は消滅します。そうしたら試験はパスできます。面倒ですがそれまで旅を続けていてください。以上です。」
そう言うのと部屋の奥に行ってしまった。

ティルス「……難しいね。」

ティライズ「まあ、とりあえず明後日まで列車も止まるからしばらくはここに泊まろうか。」

ティルスは頷いた。そして二人はその場を去った。

また場所を移す。

沙汰「ふむふむ、これがこうなってっど……。どうやら応用方法が色々あるようだがいくつもすると時間が足りないな。どれでいくか？」

沙汰はミニパソを前に考えている。

沙汰「そういや、前に見た漫画で面白いのがあったな。それと同じことはと……どうやら出来るようだな。よし、一気にやってみようぜ。」

相変わらずテンションの高い沙汰はまた徹夜をするみたいだ。

第二十四章（後書き）

フィルディアの昔話は次回にします。次は今月中にあげたいです。
それではまた次回にお会いしましょう！

第二十五章（前書き）

こんばんは。なんとか投稿出来ました。今回は・・・少し暗いですね。色々と考えたのですが、これに決定しました。それではどうぞ！

第二十五章

あれは、1年位前になります。

この村には人間も出入り自由で、かなりいい関係を築いていました。そんなある日のことです。

スイング「こっちだよ。」

サミー「あーん、待ってよお。」

スイングさんとあの子はとても仲が良くその日も遊んでいましたね。まあ、あの頃は平和でしたね。はい、それはもう。

そして、夕方になり

スイング「じゃあ、俺っちは帰るよ。」

サミー「えー！？あたちまだ遊びたいよ。」

スイング「そう言わない。また明日来るから。な！」

サミー「・・・うん。約束だよ。」

まるで兄妹のような光景。私もこの時は普通に明日を迎えられるものとばかり思っていました。

しかし、その日の夜。悲劇は起こったのです。

フィルディア「サミー。ご飯出来たわよ。」

その日の夜、いつもどおりに夕飯を作り、サミーを呼びました。でも返事をしません。

フィルディア「もう、あの子多分あそこに行ったのね。」

あの子が時々秘密基地みたいなどころに行くことがありました。夕飯の時間に行ったのは、多分私に構って欲しかったのでしょう。

フィルディア「もう。少しお仕置きしなくちゃね。」

私はあの子の秘密基地に向かいました。

村の外れにある小さな小屋。そこがあの子の秘密基地でした。その日私がそこに着いた時、嫌な予感がしました。小屋全体が、黒い光

で覆われていたからです。

フィルディア「・・・何かしら？」

私は小屋のドアを少しだけ開けて中を覗いてみました。

そこで金色に光っているサミーと鈍い光を放っている水晶が会話をしていました。

サミー「ねえ、水晶さん。なんであたちぴかぴかしてるの？」

水晶「まあ、世の中色々あんのさ。現に俺水晶だけど話してるじゃん。」

サミー「・・・なるほど。そうだね。」

なんか・・・何とも言えない会話でした。

水晶「それはそうと、嬢ちゃん。俺に興味あるなら触ってみるかい？」

サミー「うーん。そうだね。すべてしてそう。」

さすがに私もそれが何を意味するか瞬時に理解しました。そあいて考える前に部屋の中に入っていました。

フィルディア「駄目よ、サミー。それに触っちゃ駄目。」

サミー「え、・・・ママ？」

寸前の所であの子は手を止めました。

水晶「チッ・・・。」

サミー「ママー！ー！！」

サミーは私の所に駆け寄ってきました。

サミー「凄いんだよ。なんかピカーって光ったと思ったら、あたちぴかぴかと一緒になって水晶さんがお話するの。」

フィルディア「・・・そのお話はちゃんと後で聞いてあげるから少し下がっててね。」

サミー「うん！」

サミーは私の後ろに隠れました。

水晶「ほう。その妖精の母親か。俺の邪魔をするのかい？」

フィルディア「当たり前です。子を守るのが親の使命ですから。」

私はその水晶にそう言いました。

水晶「その嬢ちゃんの輝きは俺の欲しいものでね。邪魔をするなら、あんたを消滅させるだけだ。」

そう水晶が言うと鈍い光を放ちます。その光をまともに受けた私はとても息苦しくなりました。

フィルディア「……どうした？もう何も言えないか？んじゃ……。」

水晶「……どうした？もう何も言えないか？んじゃ……。」

サミー「……止めて！！」

やられそうな時に、サミーが私の前に立ちます。

フィルディア「……駄目、逃げて。」

サミー「ママ苦しそうだよ。可哀想だよ。」

サミーが泣いていました。……私のために。

水晶「ていうか嬢ちゃんが俺を触ってくれるなら止めるよ、うん。」

サミー「うん。あたちいいよ。だから止めてね。」

水晶「勿論さ♪」

サミーが水晶を触ろうとします。すでに私は止めることさえできない状態でした。

そして、サミーが水晶を触った瞬間、強力な光で私は見ることができませんでした。

フィルディア「……一体、どうなったの？」

いつの間にか苦しくなくなっており、周りを見渡しましたが誰もいませんでした。どうやら少し気を失っていたようでした。

「……うわぁー！！！！！！」

外から悲鳴が聞こえたので外に出ました。そこには……
「……？」

封印の魔法陣を展開している……サミーの姿がありました。

サミー「とりあえず、お前以外の精霊はすべてこの大地に封印したよ。思った通り、この嬢ちゃんは素質があるようだ。」

フィルディア「・・・サミー？何を言って・・・・・・・・。」
サミー「ん？言った通りの意味だが何か？」

もうあれはサミーではありませんでした。見た目だけ同じですが全くの別物です。

フィルディア「・・・貴方はあの水晶ですか？」

サミー「・・・ああ。そう言うことになるね。」

サミーは不気味に笑いながら答えます。

フィルディア「だったら、娘を・・・・・・・・。」

サミー「つーか、もう目障りだ。お前はこの村ごと封印してやるよ。」

サミーはさっきよりも巨大な結界を展開し呪文を唱えます。

フィルディア「待つ・・・」

サミー「じゃあな！」

サミーのその言葉とともに私は眠りにつきました。

フィルディア「これが私の覚えているすべてです。」

フィルディアは話し終えると一息つく。

スイング「・・・俺っちの知らない所でそんなことが。」

泰人「・・・・・・・・それって本当か？」

泰人が真剣な顔つきで質問する。

フィルディア「・・・はい、本当です。」

泰人「・・・なるほどな。莉麻がおかしくなった理由がようやく分かったよ。」

泰人は何か納得したようだった。

泰人「フィルディアさん。聞きたいことがあるんですが、今すぐにサミーの所に行く方法がありますか？」

スイング「俺っちからもお願いします。俺っちもサミーちゃんを助けたいんです。」

二人で頭を下げる。

フィルディア「・・・私もそうしたいのは山々なのですが、残念ながら・・・。」

ふいにフィルディアは泰人のラルゴとポケットを見る。

フィルディア「・・・いえ、一つだけ方法があります。ついてきてくれますか？」

二人「・・・分かりました。」

三人は村の中央にある少し大きめの家の中に入っていった。

場所が変わる。

いつの間にか白虎は外にいた。そこに

サミー「・・・待たせたな。」

着替えを済ませたサミーが戻ってきた。

白虎「何でもいいけど、早く水晶破壊したいんだ。いいよね？」

サミー「・・・お前は何を言っている？それを俺が許すわけないだろう。」

いきなりでサミーも少しびっくりした。

白虎「だったら力づくにでも。」

白虎は地面に落ちている大きめの石を拾う。

サミー「いいぜ。だったらこっちは最終兵器の投入だ。」

白虎「・・・最終兵器？」

サミーは右腕を頭上に上げ、指をパチンと鳴らした。

サミー「さあ、始めようか。今度こそ貴様の最後だ！」

第二十五章（後書き）

この話もそろそろ終わりが近いです。今年中には終わらせられるように頑張ります。11月は投稿出来ると思いますが、詳しい日程は決まっています。しかし必ず投稿します。待っていていただければ嬉しいです。

それではみなさんまた次回お会いしましょう。

第二十六章（前書き）

こんばんは。遅くなりました。今回は戦闘を入れてみました。少し自信ないですけど見ていただけると嬉しいです。
それではどうぞ！

第二十六章

サミー「最終兵器の投入だ。」

白虎「・・・最終兵器？」

サミーは右腕を頭上に上げ、指をパチンと鳴らした。

サミー「さあ、始めようか。今度こそ貴様の最後だ！」

白虎「・・・いやいや、それは僕のセリフなんだけど。」

莉麻達はとある遺跡に来ていた。それほど古くはないような所だった。

彼女達は中へと入り、祭壇のような所についた。

少女「ここね。（早くしないと莉麻の中の闇が動きそうね。）」

ミュア「・・・すぐにでも始める？」

ミュアが少女に聞いてみる。少女は莉麻を見て

少女「・・・そうしたいけど、どうやら邪魔が入りそう。」

ミュア「???」

ミュアはよく理解していないようだったが、

莉麻「・・・了解致しました。今から移動を。」

莉麻の様子がおかしい。いや、更におかしくなっている。

少女「ミュア！あの子から離れて！」

ミュア「・・・うん。」

二人は距離を取ろうとするが

莉麻「・・・逃がさない。」

少女「・・・ぐっ。」

少女が腕を掴まれる。

莉麻「・・・転移開始！」

莉麻が逆の腕を上げると光が溢れ、二人は・・・消えた。

ミュア「・・・どうしよう。」

ミユアはその場に立っていることしかできなかった。

サミー「さて、少し掛かるか？」

白虎「君が何をしようとしてるか分かんないけど、その前にそれを壊してその子を解放してあげようかな？もう君とは会いたくないんだ。ていうか早く僕の前からいなくなつてよ。」

白虎はさっき拾った石を握りつぶす。そして再びその手を開く。

白虎「・・・砕けよ！」

サミー「・・・ちい。」

サミーは素早く防御壁を展開する。しかし、その防御壁はすぐに消滅する。

白虎「全く、手こずらせないでよ。もう一回。」

サミー「・・・相変わらず威力はありえんくらい高いな。」

防御壁が構築され消滅する。その繰り返しで4、5回ほど続いた。

サミー「・・・はあはあ。」

さすがにサミーも強力な防御壁を何度も出していると疲れてくる。

白虎「これくらいで疲れているようじゃなあ。さて、そろそろ終わりにしようか！」

白虎が再び石を握りつぶす。そして・・・開く。

白虎「・・・消滅せよ！」

ものすごい気がサミーの持っている水晶に向かってくる。

サミー「・・・くっ（間に合わんか！？）」

???「・・・防御壁発動！」

寸前でサミーの前に誰かが転移してきて、防御壁を張る。

そして白虎の気と共に消滅する。

白虎「・・・今のけっこう本気だったんだけどな。」

サミー「どうやら間に合ったようだな。」

そう、防御壁を張ったのは莉麻だった。左手はしっかり少女の腕を握っている。

少女「私としたことが。力を使われるなんて……んぐっ！」

莉麻「……」

莉麻はそのまま少女とキスをする。

白虎「……」

サミー「ふむ、これでいい。」

白虎が下を向き何も言えない状態に対し、サミーは嬉しそうだ。

少し経つと少女が消えかかる。

少女「んぐつつっ!!」

莉麻「……」

そして少女は完全に消えた。……いや、莉麻によって吸収された。

莉麻「……吸収を完了しました。」

白虎「……あ。今の少女ってミリアの力の一つか?……やばい。

気付くのが遅かった。ていうか、もう一人の子は莉麻ちゃんか!」

どうやらあの少女はミリアの力の一つだったらしい。白虎は少女同士の接吻に気を取られすぎて気付くのが遅れてしまった。莉麻にも今気付いたようだ。

サミー「今頃気づいても遅いわ。さあ莉麻よ、今こそ一つとなる時だ。」

莉麻「はい。」

サミーが強烈な黒い光を発する。

白虎「今度はさせないよ!」

白虎は石を拾い、念じそれを黒い光に向けて投げる。

しかし、その石は消滅する。

サミー「ふ、その程度ではこの光は消すことはできないさ。」

白虎「……そいつはどうか?」

黒いに光によって消滅した石から強力な気が溢れ、黒い光を消してしまった。

サミー「……な、なんだと!」

白虎「さっきの石は消されたときに無効化の気が出るように細工しておいたのさ。」

どうやらさっきの石には何か細工がされていたようでサミーは気付
けなか・・・

サミー「・・・ふふふ、分かっていたさ！」

った訳ではなかった。・・・消滅したはずの黒い光がサミーと莉麻
を包むように、再び出現する。

白虎「・・・何で？」

サミー「まあ、これは決められた運命とでも思って諦めな。（念の
ため二回分の融合の術式を用意しておいて良かったぜ。）」

黒い光が莉麻とサミーを包む。

白虎「・・・やばい。本当に。」

珍しく白虎が慌てている。

そして光が止む。そこには黒い妖精の翼が生えた莉麻が立っていた。
莉麻「・・・ふ、これはほぼ全盛期に近いな。少し足りないが、ま
あいいだろう。」

白虎「・・・だけど、水晶さえ破壊できれば・・・ってあれ？」

白虎は莉麻や辺りを見るが水晶がどこにもない。

莉麻「その辺りは完璧さ。この少女の心臓と同化させたからな。」

莉麻が自分の左胸を指して話す。

白虎「・・・ははは。」

もう笑うしかなかった。

白虎「・・・サミーちゃんと莉麻ちゃんが融合したってことは、莉
麻ちゃんにもミィアの力があったのか。サミーちゃんの方は君がい
たからなんとなく分かったけどね。」

莉麻「そういうことだ。・・・さてと。」

莉麻は翼を使い上空に浮く。そして、右腕を白虎に向ける。

莉麻「・・・そろそろ終わりだ。」

白虎「・・・分かってるよ、やばいことは。でも僕は、・・・僕は
君を倒すまで死ねないんだよ！」

白虎は地面を思い切り踏みつける。

すると、地面が割れる。その亀裂から土でできた虎が現れる。

莉麻「どうやら貴様もようやく本気というわけか。だが、どうする
というのだ？」

白虎「まずは君を戦闘不能までにする。その後はもう一度封印させる。」

亀裂からどんどん虎が出てくる。10体ほど出てきた所で亀裂が閉じられる。

白虎「(さて僕もそろそろ限界だ。これで駄目ならもう……。)いくよ。放て、虎口砲10連打あ!!」

10体もの虎が口から強力な白い光線を放つ。

莉麻「できるものならやってみろ。いくぞ!闇印・ダークスピア!」
莉麻の右腕で展開されている術式から大量の黒い槍が放たれる。

二人「いけえ!!!」

そして両者の攻撃が激突する。

だが、白虎が押されている。

白虎「・・・ぐっ。」

莉麻「ふふふ、どうした?俺を倒すんじゃないのか?やってみろよ。」

挑発する莉麻。

白虎「だったらお望み通りにしてやるよお!!!・・・合体せよ。」
光線を放ちながら10体の虎が合体して大きな虎になる。

莉麻「何!？」

白虎「これが僕の本気だあ!いけ、超虎口大砲おー!!!」

巨大な虎から大きくて太い光線が発射される。さっきの10体分よりも遥かに強力そうだ。

莉麻「・・・ちい。」

今度は白虎が優勢になる。いくつもの槍が消滅していく。

白虎「いけー!!!」(・・・勝った。)」

白虎が勝ちを確信した。・・・だが、

莉麻「なるほど。前よりも更に強くなったか。・・・だが俺もここで負けてられないな。悪いが本気を出させてもらおう。」

莉麻は左手で別の、巨大な術式を完成させる。

莉麻「今度こそこれで終わりにするぞ。黒弾印・デイオスファイア！」
莉麻の左腕に巨大な闇の塊が出現する。

白虎「・・・あ、あれは!？」

そう、この技は前に戦ったときにも使われた。その時はギリギリで避けて助かったが今は召喚術の乱用で白い虎は動くことができない。
白虎「こいつはどんなものでも消すほどの威力がある。・・・ということは!？」

莉麻「さよなら、ジュライト。」

デイオスファイアが放たれる。そして超虎口大砲も、巨大な虎も消滅し
白虎「・・・ここまでか。」

白虎も・・・消滅した。

莉麻「・・・ふう、手こずらせやがって。かなり力を使ったじゃないか。」

辺りは何もかもが消滅し、サミーが使っていた家だけが残った。
莉麻「まあ、白虎が消えたから奴も動くだろう。力の回復のために
っと。」

莉麻は辺りに結界を張る。

莉麻「さて、これでゆっくり休めるな。」

そして、家の中に入ってしまった。

場所は変わり浜辺。

白マントの男が立っていた。

白1「・・・白虎がやられた!？くっ、失敗した。このままでは奴の手によってすべてが・・・。早く、早く強くなれ。・・・泰人。」
そう呟くとその場を立ち去った。

第二十六章（後書き）

次は出来るだけ早く投稿できるように頑張ります。
では、また次回お会いしましょう。

終章・前編（前書き）

こんばんは。ついに終章に入りました。前、後編の予定なので次が最後になると思います。それではどうぞ！

終章・前編

泰人達は家の中に入った。

中は特にこれといった家具もなく、ただ広いだけの空間だった。

フィルディア「では、お名前を教えてくださいませんか？」

フィルディアは泰人に向けて話しかける。

泰人「俺は泰人っています。」

フィルディア「分かりました、では改めて。私はサミーの母でフィルディアといいます。宜しくね、泰人さん。」

泰人「こちらこそ！」

軽く挨拶を交わす二人。

フィルディア「それでは今から方法をお教えしますので、よく聞いてください。」

その言葉に頷く二人。

フィルディア「まずは、あの子の所に行く為に転移の術が必要です。私はその術を知ってはいますし、使い方も覚えています。しかし、私には力がなく使うことができません。」

俯くフィルディア。悲しそうだ。

フィルディア「それでその方法ですが……。泰人さん、貴方の腰につけているものはラルゴですよね？」

フィルディアは泰人の腰につけているメジャーを見て言う。

泰人「・・・は、はい。ラルゴを知っているんですか？」

フィルディア「もちろんですよ。それを前に使っていた玄武さんのことも知っていますよ。」

泰人「ほ、ホントですか？」

泰人は驚いた。

フィルディア「私はかなり前からここに住んでいますからね。親衛隊の方々に来ていただいたこともけっこうありますよ。」

泰人「それは知らなかったです。」

当然である。

フィルディア「そのラルゴの力を使えば転移の術もできるでしょう。しかし、それを教えるには最低でも1ヶ月はかかります。それでは時間が足りません。後は・・・。」

スィング「ちょ、ちよつと待ってください。まさかとは思いますが・・・。」

スィングは何かに気付いたようだ。

フィルディア「そうです。私とラルゴが融合すればいいということです。」

泰人「え!?!・・・いや、それは・・・。」

さすがに泰人もかなり驚いている。

フィルディア「確かに融合したらもう元には戻れません。でも、私はサミーを・・・娘をどうしても助けたいんです。お願いします、やらせてくれませんか?」

涙目になりながら頼み込むフィルディア。

泰人「・・・でも、やっぱりそれは・・・。」

スィング「・・・やってもらおう、泰人。」

泰人「・・・え!?!?」

スィングの方を向く泰人。今日で何度目だろう。驚きすぎだが・・・また驚いた。

スィング「・・・俺っちだって本当はそんなことさせたくない。・・・でも、他に方法がない。サミーちゃんが大変なことになっている

ならば、俺っちも何とかしてあげたい。その後元に戻る方法がなくても新しく作ればいいじゃないか。・・・俺っちはフィルディアさんの意見に賛成だ。」

フィルディア「・・・スィングさん。ありがとう。」

その言葉にスィングは少し照れている。

泰人「・・・分かりました。でも、どうやって合体するんですか?」
「どうやら泰人も納得したようだ。」

フィルディア「えっと、ポケットに入ってる物を出してくれませんか」

か？」

泰人「・・・あ、はい。」

泰人は例の箱を取り出して、フィルディアに渡す。

フィルディア「・・・さてと。お願いしますね、門番さん。」

箱に向けて話しかけるフィルディア。すると、箱にOKの文字が浮かぶ。

泰人「（なるほど。俺以外の心からの願いのみ叶えるってことか。）

」

箱が光る。

フィルディア「ラルゴを渡してください。」

泰人「分かりました。」

フィルディアにラルゴを手渡す。

すると、フィルディアとラルゴを光が包む。

少しして光が止む。そこにはラルゴだけがあった。

ラルゴ「どうやら成功したようですね。」

ラルゴが喋った。

泰人「そうですね。さてと、早速・・・。」

泰人はラルゴを拾う。

ラルゴ「ちょっと待ってください。すぐに行きたいんですけど、なじむまで少し掛かります。明日の朝早くに行くことにしましょう。こんな時だからこそ休息も大事です。」

スイング「そうですね。とりあえず俺っちの家に行きましょう。」

泰人「・・・分かった。」

泰人が頷き彼らは妖精の村を後にした。

ラルゴ「（みんな、すべて終わらせて元に戻してあげるからね。）」

ラルゴは・・・いや、フィルディアはそう決心した。

夜も更けていく。

泰人はスィングの家で部屋を借り、ラルゴと一緒に話をしていた。ラルゴ「今日は色々あって疲れたでしょう。明日も早いですしゆっくり休んでください。」

泰人「そうですね。でもちょっと質問なんですけど、フィールディアさんとラルゴが融合して何か変わったことってありますか？」

泰人はラルゴに質問する。

ラルゴ「そうですね・・・、元々のラルゴの力に加えて私の能力も使えるようになったというところでしょうか。例えば転移もそうですが・・・まあ、それはいずれ見せることにしましょう。まずは、シャワーでも浴びてゆっくり休んでください。」

泰人「そうですね。そうさせてもらいます。」

そう言って泰人は部屋を出た。

ラルゴ「・・・さすがにまだ言いにくいですね。」

ラルゴはそう呟いた。

その後シャワーを浴び、泰人とスィング、ラルゴは眠りについた。

場所は変わり、王都。

王は夜中だというのに玉座に座っていた。

王「ふむ。どうやら明日、すべての決着がつきそうだ。」

どうやら眠れないようだ。

・・・ガチャッと音がして部屋に誰か入ってくる。

??? 「お久しぶりですね、元気でしたか？」

??? 「・・・眠い。」

それは、シュパルツと白いマントの男だった。どうやらリーダーではないようだ。

王「ほう、こんな時間に来客か。何か用かな？」

王は特に動揺することなく平然としている。

シュパルツ「・・・まあ気付いているだろうと思いますが、奴が本格的に動き始めたようですね。どうするつもりですか？」

シュパルツは眠そうな男の前に出て、王に質問する。

王「どうやら白虎がやられたようだからな。彼にお願いしたいんだ
がいいかな？ 貴様らの主のはずだろう？」

白虎がやられたことが分かっているのに、王は平然としている。

白3「・・・ただでやるわけにはいかねえな。」

今まで黙っていた男が話しだした。

王「ほう、だったらどうすればいいのかね？」

白3「そうだな。・・・とりあえず、自己紹介してやるよ。」

男はマントを脱いだ。そこには・・・一人の少年がいた。

王「・・・その姿、どうやらお前があ的事件の犯人か。」

少年「・・・まあ、そうだな。んじゃ、とりあえず・・・」

少年は腕を高速で動かし陣を描いていく。どうやら攻撃の術のよう
だ。

シュパルツ「・・・いいですよ。」

シュパルツは黙って見ている。

少年「俺はこの時のためにお前らと組んでいたんだ。文句はないな
？」

シュパルツ「・・・いいですよ。貴方が受けた苦しみを知っていま
すからね。」

シュパルツは静かに笑う。

王「・・・そうか、あれを起こしたのは奴のためか。」

どうやら王は何かに気付いたようだ。

少年「・・・あの人は俺の憧れだった。・・・お前だけは絶対に許
さない。」

そして術を展開する。強力な炎が生まれ、王に襲いかかる。

王「・・・確かにあれは私の失敗だった。・・・しかし。」

王は手に持っている杖を上空に向ける。すると、後ろにあった巨人
が動き出す。

王「私は奴と約束した。だから死ぬことはできんな。」

巨人の大きな手が王を炎から守る。

少年「・・・そうか、分かった。仕方ない、あの変態野郎を再び封

印するまで手を貸してやる。結果的に俺は変態野郎の手助けをしたようなものだからな。」

シュパルツ「まあ、確かに彼がティルス君と出会ったのは予定外でしたからね。私にも非があります。闇の精霊を再び封印するまで手を貸してあげますよ。」

どうやら和解したようだ。巨人はまたもとの位置に戻っていく。

王「すまないな。全てが終わったなら好きにするがいい。」

少年「・・・じゃあ伝えてやる。邪魔したな。」

そう言うと、少年とシュパルツは姿を消した。

王「・・・あの事件は他にも意味があったというのか？」

再び王は考え始めた。

夜も遅くなったが、莉麻はまだ寝ていなかった。

莉麻「ふむ、あの妖精よりはいくらかいいか。服も代わりがないな。明日買いに行こうか。」

何やら楽しそうだ。回復もかなり順調のようで、部屋の中を歩き回っていた。

沙汰はまだプログラムをいじっていた。

沙汰「・・・うーん、ここがうまくいかないんだよな。」

どうやらうまくいっていないようだ。

フィドゥ「あ、沙汰さん。もう次の日になりましたよ。」

どうやら作業をしているうちに日にちが変わってしまったようだ。

沙汰「・・・俺だって意地がある。これを完成させればきつと・・・」

珍しく本気の沙汰。

フィドゥ「なら、いい人がいますよ。・・・入ってきてください。」
フィドゥが言うと、扉が開けられる。

そこにいたのは少し前に会った医者、・・・スエイゼルだった。

沙汰「おお、久しぶりだな！」

スエイゼル「そうだな。どうやら手こずっているようだな。手伝ってあげよう。」

沙汰「ありがたいな、んじや早速・・・。」

沙汰はスエイゼルと共に再び作業に取りかかる。

フィドゥ「無理言って来てもらったんですから、絶対完成させてくださいね。」

そう言ってフィドゥはその部屋を後にした。

こうして日が変わる。そしてこの日が運命の日となることはまだ誰も思わなかった。

・・・とある変態を除いて。

莉麻「・・・俺の家に女物はないなあ。どうしよう？男物って手もあるな。」

こうして決着の時がせまっていた。

終章・前編（後書き）

ついにあと少しとなりました。ここまで見ていただいてありがとうございます。ございます。最後まで見てくだされば嬉しいです。次は今月中に投稿します。後書きのようなものも同時に投稿したいと思います。それでは、後編でお会いしましょう。

終章・後編（前書き）

お待たせしました。最終回です。今回は最終回ということで、かなり長めになっています。それではどうぞ！

終章・後編

そして次の日、まだ日が昇ってほどなくして

沙汰「・・・よし、完成したぜ。」

ついに沙汰の発明が完成した。予定よりも早く出来たみたいだ。

スエイゼル「ふむ、ほとんど一人でやったな。手伝うことも余りなかった。」

沙汰「いんや。あそこを教えてもらっただけで十分さ。ありがとう！」

沙汰は改めてスエイゼルに礼を言う。

スエイゼル「まあ、君には色々と教えられたしな。これくらいどうということもない。では、私はこれで失礼するよ。頑張ったまえ。」

沙汰「ああ、また会おうな先生！」

スエイゼルはそのまま白虎の家を出ていった。

フィドゥ「あ、おはようございます。今スエイゼルさんが出ていったようですけど、どうですか？」

フィドゥが家の中に入ってきた。その後フィドゥは、邪魔になるかと一人で近くの旅館に泊まっていたのだ。

沙汰「ばっちり完成したぜ。さて、フレムリーに向かおうかな。」

沙汰は家の外に出る。

フィドゥ「あ、待って下さいよ。」

フィドゥも後からついていく。

外はもう明るくなっていたが人がほとんどいない。

まあ、街の外れにあるのもあるが、一番の理由は朝早いからだろう。因みに時間としては朝の4時である。

沙汰「さてと、試してみるかな。」

沙汰はミニパソのキーを高速で打つ。相変わらずの早さで何やら印を作っていく。

フィドゥ「それが完成させたプログラムですか？」

沙汰「・・・いや、これは同時に考えておいた新しい式の印さ。」

沙汰はキーを打ちながらもフィドゥと普通に会話をする。そして

沙汰「よし、こい！」

その言葉が合図のように一瞬強力な光がミニパソから出る。

フィドゥ「・・・うわあ。」

フィドゥもいきなりだったので驚いている。

そして、光が消え・・・金色の巨大な鳥が姿を現す。

沙汰「俺のヒポポスの印を少し弄って作った、聖なる光を持った鳥、カイチョーだ。」

3mはあるだろうカイチョーは、特に興奮せず沙汰をじっと見ている。

フィドゥ「なるほど、これに乗ってフレムリーに行くんですね。」

沙汰「まあ、そうだな。だけど、いきなり出してすぐに乗せてけっ
て言っても難しいからな。式を安定させる意味でもこの空気に慣れ
させようと思ってる。だから・・・」

沙汰はカイチョーに向き合う。

沙汰「とりあえず5時間くらい自由行動。んで、時間になったらこ
こに戻ってくることに。いいな？」

沙汰がそう言っていると、カイチョーは

カイチョー「承知した。では失礼する。」

そう言ってその場から飛び去って行った。

沙汰「んじゃ、俺はしばらく寝ることにする。」

そう言って白虎の家に入った。

残されたフィドゥは

フィドゥ「・・・話せる式の召喚獣をついでに作るなんて・・・
すごい技術力ですね。」

そう呟いた。

それから数時間後、泰人達は目を覚ました。スィングの家で朝食を頂き、また妖精の村まで来ていた。

ラルゴ「はい、ではいきますよ。・・・まずは私を利き手に持ち、目を閉じて自分の周りに膜を発生させるような感じで、発動！蝸牛結界と唱えてください。あ、ちゃんと目的地を想像するのも忘れなideてくださいね。」

泰人「よし、じゃあやりましょうか。」

泰人は腰につけていたラルゴを外し、目を閉じて言われたように想像する。

すると、泰人とラルゴ、スィングを包むように薄い膜状のものが出現する。

泰人「・・・っていうか君も一緒に来るの？」

今更気付いた泰人は目を閉じながらスィングに話しかける。

スィング「・・・まあ、俺っちも少しは手助けになると思うんだ。だから連れてってくれよ。」

決意を込めた感じでスィングが言う。

泰人「分かった。じゃ、いくぞ！・・・発動、蝸牛結界！」

そう言うのと、薄い膜が泰人達を包んだまま土の中に溶けていった。

沙汰「・・・よし、これくらい寝ときゃ大丈夫だろう。」

泰人達が転移してすぐに沙汰が起きた。

フィドゥ「あ、沙汰さん。カイチョーさんはもう帰ってきてますよ。」

フィドゥは朝食の準備をしていた。

沙汰「よし、んじゃあ食ってから行くか。」

そう言ってフィドゥが準備した朝食を食べ、準備を整える。

沙汰「んでは、出発するぜい！」

フィドウ「あ、じゃあ僕も連れてって下さいよ。」

二人で家を出ると

二人「・・・・・・は？」

思わず変な声を出してしまった。

カイチョーが静かに家の前で待っていたのはいいとして

泰人「おお、こいつはでかいな。」

スイング「うん。俺っちもこんな大きい鳥初めて見たよ。」

泰人達がハイテンションでカイチョーを見ていた。どうやら少し前に着いたようだった。

沙汰「やあ、泰人と連れの人。俺が伝説の発明家である谷田沙汰である。・・・・とまあ、冗談は置いて、元気そうだなによりだぜ。」

沙汰はおかしなテンションだが嬉しそうだ。

泰人「おお、沙汰か。お前も元気なようで何より。」

二人は再開を喜んだ。まあ、1日しか経っていないから懐かしいとかは全くない・・・・と思う。

泰人は今まであったことをすべて話した。

沙汰「なるほど。宜しく、水の芸術家！」

スイング「・・・・ああ、宜しく。」

スイングは呼ばれたことのないあだ名をつけられたので、少し戸惑っているようだ。

泰人「それで沙汰、莉麻の居場所探そうと思ってるんだけど、どうしよう？」

沙汰「・・・・そんなこともあるのかと、秘密兵器をいくつか作っておいたのだよ。」

沙汰はポケットから銀色に光るビー玉を取り出す。

沙汰「今回作った4つ発明の一つだ。そして、これは昨日手に入れたとあるデータを応用して作ったのさ。このビー玉には持って会いたい人を念じるだけでそれがどこにいるのかバッチリ分かるすぐれ

もの。いや、こいつは他の2つよりある意味大変だったね。心とか気持ちを動力にするのが難しくてな。ある人に手伝ってもらったんだ。」

沙汰はそのビー玉についてどんどん語る。こうなると沙汰はなかなか止まらない。そして話題は全く官営のない所に・・・。

沙汰「今のところ俺の発明は金の三大発明と銀の三大発明があるのだ。金は召喚獣、銀はアイテムと分けている。まあ、銀の方は時間がなかったからテストをしていない。金の方の二つは前に作ってあったんだ。カバのヒポポスともう一体は・・・。」

泰人「・・・いや、もう分かったからさ、そのビー玉早く貸してくれ。」

耐えかねた泰人は会話の途中だが沙汰にビー玉を渡すように言う。

沙汰「全く、話を最後まで聞きなさい。・・・ほら。」

沙汰はビー玉を泰人に手渡す。

泰人「よし。・・・。」

泰人はビー玉を持って目を閉じ、莉麻の事を考える。すると

泰人「・・・!？」

突然びっくりしたように目を開ける。

沙汰「どうした、何が見えたんだ？」

泰人「・・・火山がある町が見えた。莉麻はそこにいるようだ。」

沙汰・フィドゥ「・・・何!？」

その言葉に驚く二人。今向かおうとしていた所と同じだったからだ。

沙汰「あのさ、ティルス達がそこにもう行っているんだよ。俺も行くかと思ってカイチョーを召喚したんだ。」

沙汰はカイチョーを見ながら話す。

泰人「後、・・・近くかな? 莉麻の近くにサミーもいるようだ。でも、なんかおかしいんだよな。変な気分になるような。」

ラルゴ「・・・そうなるとやっぱり。」

ラルゴの言葉に頷く泰人。

泰人「多分莉麻が攫われたのかもしれないってことですね。分かります。」

あくまで冷静な泰人。昨日あれだけウダウダ言っていたから、少しは落ち着いたのだろう。

ラルゴ「・・・それだけならいいのですが。」

ラルゴは誰にも聞こえないように呟いた。

沙汰「よし、話はだいたい理解した。フレムリーにすぐにでも行こう。頼むぜ、カイチョー!!」

カイチョー「・・・承知した。」

カイチョーの背中に乗る泰人、沙汰、スィング。

フィドゥ「・・・あの、僕はどうすれば。」

沙汰「ごめんよ。このカイチョーは3人乗りなんだ。まあ、また今度乗せてあげるよ。よし、フレムリーまで頼むぜ!」

フィドゥの嘆きを軽くスルーしてカイチョーにお願いする沙汰。

カイチョー「よし、落ちないように?まっているように。」

そう言うときカイチョーはその大きな羽で大空に飛び上がった。

・・・残されたフィドゥは

フィドゥ「仕方ないですね。次の列車は明日ですし、気長に待ちますか。」

そう言って町に行こうとしたら、目の前に白いマントの男が現れる。雰囲気からしてリーダーのようだ。

白1「どうやら遅かったようだな。・・・後を追いかけるか。あれを渡さなくてはいかんしな。」

そう呟くと猛スピードで走り去って行った。

フィドゥ「今のは・・・。ふーむ、白虎さんと似たような感じがしましたけど、親衛隊の人ではないようですね。・・・誰なんでしょうか?」

フィドゥはあの男が何者か、かなり絞り込めたようだ。そのまま町へと向かった。

莉麻「よし、フレムリーに到着！こうなったからには逆にあの男には会わない方がいいな。うん。」

泰人達が着く前に先に莉麻が到着していた。服装は昨日のと同じく制服だが、多少の違いはあるようだ。

莉麻「・・・それにしても、この服生み出すために色々苦労したな
ていうか、俺のメモリーにはこの服装はなかったからな。着てたや
つを少し変えただけだが、気にしない。」

前向きである。

莉麻「さて、時は満ちたし早速ティルスでも探そうか。」

どうやら目的はテイルスのようなだ。莉麻は普通に町の中に入った。

莉麻「えーっと、この辺かな？」

莉麻はティルスが泊まった宿の前まで来た。

莉麻「んじゃ、入るかな。」

莉麻が扉を開けると

ティルス「今日はティライズ君は別の用事で朱雀さんの所に行つて
るし、僕は……え!？」

ティルスと鉢合わせした。

莉麻「お、いたいた。やっと見つけたよ。」

ティルス「えーつと……。どういふこと？」

ティルスはいきなりの事でついていけない。

莉麻「まあ説明するのも長くなるし、人気のないところまで移動しようか。」

莉麻は左手を上^へに上^へげ

莉麻「……轉移開始！」

と呟く。

ティルス「……あの、僕は一体何に……。」

・・・ティルスがすべて話しきる前に二人はその場から消えてしま

った。

場所は移る。

ティライズは一人、朱雀の家を訪ねていた。

ティライズ「何度もすみません。実はお話したいことがありますて。」

朱雀「ふむ、なんとなく予想はつきますね。」

朱雀はお茶を入れてきてそう言う。ティライズは軽くお礼を言いティライズ「多分その通りだと思いますが・・・」

朱雀「サミーという妖精のことですか。」

その言葉に頷くティライズ。

朱雀「私も白虎から聞きました。どうやらあれは闇の精霊に関係しているようです。」

ティライズ「・・・・・・。」

ティライズは特に動揺もせず黙って聞いている。

朱雀「彼の目的は、ミリアの能力の強奪と・・・・・・。」
一息入れて

朱雀「・・・・この世界以外の世界への干渉ですね。」

ティライズ「・・・・ということはティルスに近づいたのは・・・・」
うむと頷く朱雀。

朱雀「おそらく彼の能力も強奪するためでしょう。しかし、そのための力を蓄えるべくその妖精に身を隠していたと考えるのが妥当ですね。」

ティライズ「・・・・それじゃあ、今も・・・・。」

朱雀「そうですね。どうやら白虎もやられてしまったようですし、一人にしておくのは危険でしょう。」

その言葉に思わず立ちあがるティライズ。その拍子に湯呑のお茶をこぼしてしまう。

ティライズ「・・・それは、本当ですか？」

朱雀「はい。ですが彼は・・・そういえばティルスがいないようですがどうしたのですか？」

ティライズ「・・・すみません。失礼します。」

そう言ってティライズは足早に朱雀の家を後にする。

朱雀「なるほど。面倒なことになりそうですね。」

そう言ってティライズがこぼしたお茶の後片づけを始めた。

ティライズ「（・・・まずい。無事でいてくれ。）」

そう思いつつティライズは宿に戻る。

ティライズ「ティルス!!」

ティライズは思いつきり部屋のドアを開けたが、当然誰もいない。

ティライズ「・・・くっ!!」

そしてそのまま部屋を出て宿を出ようとした時、受付の人に話しかけられる。

受付「そういえば、お連れの人は何やら不思議な雰囲気をする少女とどこかに転移して行ったようですね。」

ティライズ「・・・そ、そうですね。ありがとうございます。」

ティライズはそのまま外に出る。

ティライズ「・・・不思議な雰囲気か。そういえばティルスから莉麻がこっちに來ているかもって話を聞いたな。・・・いや、でもそんなはずは・・・。」

そこでティライズは思い出す。莉麻が一度サミーと合体したと聞いた時の事を。

ティライズ「・・・くっ。」

ティライズはもう何も考えられずその場に立っていた。

沙汰「いやっほーーーーー!!」

泰人達はカイチョーに乗って上空を移動していた。

泰人「・・・いやね、俺って高所恐怖症なんだ。」

スイング「・・・奇遇だな。俺っちもだ。海の男は船酔いには強いがな。」

どうやらかなり上空にいるらしく、沙汰以外はダウンしていた。

沙汰「ふおーーーーーう。カイチョー、もう着く?」

カイチョー「目的地付近に到着。着陸開始!」

カイチョーはそのまま着陸を開始した。

沙汰「いやあ、最高だった!」

泰人「・・・・・・・・・・。」

スイング「・・・・・・・・・・。」

着陸も終えて一行はフレムリーに到着した。そして町の中に入る。

沙汰「ほう、温泉の町のような。さて、ティルス達を探すか。」

泰人達は町中を探そうとしたが

泰人「・・・いた。」

ふと近くの宿に立っている少年を見るとティライズだった。しかし様子がおかしい。

沙汰「おお、ティライズ! こっちは泰人と無事に合流出来たぜ。・

・そういう、ティルスは?」

ティライズ「・・・・・・・・あ。」

ティルスという言葉に反応する。

ティライズ「・・・攫われた。」

一同「・・・・・・・・!」

いきなりの事でびっくりする。

泰人「話を聞かせてくれ!」

ティライズ「・・・分かった。」

ティライズは隠していたことから全てを話した。

ティライズ「・・・というわけだ。」

泰人「・・・なるほど。まあ、隠していたのは別にいいんだが莉麻の事は・・・。」

ティライズ「・・・あくまで私の考えにすぎないが間違えはないだろう。」

泰人「・・・そうか。」

泰人は更に暗くなる。それはそうだろう。妹が敵の手におちたのだから。

ラルゴ「こうしてはいられません。早く彼らに追い付きましょう。」

泰人「・・・分かった。ここで落ち込んでも仕方がないしな。」

再びビー玉を沙汰に借り、泰人はそれを持って目を閉じる。そして、少し経って目を開ける。

泰人「どうやらあっちにいるようだ。」

指す先にはこの町の一番の見どころである火山がある。

沙汰「・・・行くか。」

泰人達は火山に向かおうとした。だが、・・・目の前に白いマントを着た男が立ちふさがる。

白1「・・・。」

そして泰人に青い龍のアクセサリーを渡す。

泰人「・・・えーっと、まず、あなたは誰ですか？後これは一体・・・？」

当然の質問をする。

白1「・・・俺はすべてを変えるべく動き始めた者。とりあえずそれは持っておけ。これからのお前にとって必要になる。後、・・・すまなかった。」

そう言って男はその場を立ち去った。

泰人「何だったんだ？・・・いや、こんなことをしている時間はない。行こう！」

泰人はすぐに切り替えて、一行は再び火山に向かった。

白1「やはり俺では間に合わなかった。・・・後をお願いします、師匠。」

男はそう呟いて姿を消した。

場所は変わり火山のふもと。ティルスと莉麻はそこに転移してきた。ティルス「えっと・・・どうしたの？いきなりいなくなったりしてさ。」

ティルスはあくまで普通の莉麻だと思っている。

莉麻「まあ、そういう年頃ってことで。」

ティルス「・・・そういうもんかな。」

納得はしていなかったが

莉麻「・・・。」

莉麻が急にティルスの右手を掴む。

ティルス「え！？いや、あの・・・。」

かなり動揺していたようだった。その隙に莉麻が右手で何か術式を描き

莉麻「さてと、始めようか。」

そして術式を展開する。

ティルス「・・・な！？」

寸前で気付いたティルスは逃げようとするが、莉麻に手を掴まれていて逃げられない。

莉麻「いくぞ、奪印・シーフ・ザ・スキル！！」

瞬間、術式から腕のようなものが現れティルスの体を通り抜ける。

ティルス「あ、・・・うわあっ！！」

ティルスは苦しそうな表情と声を上げる。

そして召喚された腕には七色に光る光の塊が握られている。

莉麻「よし、さあ来い！」

腕は消え、その光は莉麻の体に吸い込まれるように入った。
ティルス「……これは、一体……」

そう言うティルスは気を失い、その場に倒れた。

泰人「……見つけた、莉麻！！」

そこに泰人達が到着する。

莉麻「ほう、やっと到着か。まあ、ちょうどよかったがな。さてと……」

莉麻は目を閉じ精神を集中する。すると、黒い羽根が背中から生えてきた。そして、空を飛ぶ。

泰人「……みんな、ティルスを頼む。俺が一人で行く。」

そう言うて行こうとするが

沙汰「……待ちなよ。……まず、ビー玉返してくれ。」

泰人「え？……ああ、うん。」

借りていたビー玉を沙汰に手渡す。その時に

沙汰「まあ、止めはしない。こうなったらやってこい。……死ぬんじゃないぞ。」

と耳元で囁く。

泰人「ああ、任せとけ。」

そう言うて泰人は莉麻のもとへと向かう。

沙汰「よし、ティライズはティルスを連れて宿まで戻ってくれ。」

ティライズ「分かった。」

その言葉に頷き、ティルスを背負って山を下りて行った。

沙汰はずっと黙ってるスィングと向き合い

沙汰「水の芸術家は俺と一緒に泰人を見守ろう。……な。」

そう声をかける。

スィング「……ああ。俺っちもちゃんと見ておかないとな。」

そして二人は泰人を見守ることにした。

莉麻「ほう、一人で来るか。てっきり全員で来るかと思ったが。」

泰人「……こればかりは俺の手で決着をつける。……ラルゴ！」

腰についているラルゴを手取る。

泰人「…………（だが、迂闊に攻撃はできない。どうすればいい。）」

そう、このまま攻撃してしまうと莉麻やサミーまで傷つけてしまう。
ラルゴ「…………（いい考えがあります。）」
ラルゴが泰人の心に話しかける。

ラルゴ「…………（ラルゴ・ブラスターに特殊な能力を追加すればいいんです。まず、ラルゴ・ブラスターが身体に与えるダメージを最低ランクにして、残りを分解に使えばいいんです。そうすれば当たったとき、莉麻さんとサミー、あの水晶はすべて別々に分離します。）」

泰人「…………（分かった。やってみよう。）」

泰人はラルゴを掲げて

泰人「…………現れよ、スネイラー！」
と叫ぶ。

すると、いつものようにラルゴは巨大化してスネイラーに変化する。

莉麻「来たか。まずは、この周りに結界でも張るか。」

手早く、泰人と自分を包むように結界を展開する。

莉麻「さて、これで心おきなくあれが使えるな。」

莉麻は何やら大きめの術式を展開する。

泰人「…………。」

泰人も精神を集中しラルゴ・ブラスターの能力の変更を行っていく。
水ではなく自分自身の力を威力にできるように。

莉麻「ではいくぞ。闇大印・ネオダークスピア！」

大きな術式からは巨大な黒い槍が出現する。こないだのよりも力の

差は歴然だ。

泰人「・・・・・・・・いくぞ、ラルゴ・ブラスタぁー！！！」

泰人もラルゴ・ブラスターを放つ。今までよりも遥かに強力だ。しかし、

莉麻「甘いわぁー！！」

巨大な槍の一振りで時空が切れ、裂け目ができる。その裂け目にラルゴ・ブラスターは吸い込まれて、・・・・・・・・消えてしまった。それほどにも力の差はありすぎた。

泰人「なっ・・・・・・・・!？」

一瞬のことで驚くが、その一瞬で莉麻は次の術式を完成させていた。

莉麻「・・・・・・・・さよなら、お兄ちゃん。黒弾印・ディオスファイア！」

そしてあの闇が出現し

泰人「・・・・・・・・莉麻ぁ。」

ラルゴ「・・・・・・・・ごめんなさい、サミィ。」

泰人とラルゴは・・・・消滅した。

そして結界が消える。

二人「一体どうなったんだ？」

沙汰とスィングは結界が消えるのを見た。そして出てきたのは・・・・

黒い羽根の生えた莉麻だった。

莉麻「ふむ、やりすぎたな。白虎の時の半分にしたが、それでもこんなにあっけないとは。」

莉麻は何やらぶつぶつ言っている。

沙汰「・・・・・・・・そうか、そう言うことか。ああ、そうか。そうですか！！！」

自棄になってミニパソを取り出す。

沙汰「……………俺はやっぱり肝心なところで役に立てない、大馬鹿野郎だ。」

そう嘆き、高速でキーを打つ。

莉麻「さて、そろそろ旅立つか。」

莉麻は時空転移の術式を組み立て始めたが

沙汰「逃がすか!!」

沙汰の方が早く完成する。

沙汰「……………ヒポポス、頼む!」

光の中からヒポポスが出現するが…………再び光と共に消える。

沙汰「……………何!?!」

沙汰は莉麻の方を見る。莉麻は両手で別々の術式を作っていた。一つは時空転移。そしてもう一つは

スイング「召喚の妨害、……………害印・サモンバックだ。」

どうやらけっこう勉強したようで術式には詳しくあったようだ。

沙汰「……………」

もう何も言えなかった。そして時空転移が完成し

莉麻「楽しかったよ、じゃあね、沙汰さん。」

そう言って莉麻は姿を消した。

スイング「ぐっ……………」

スイングはかなりきいていたが

沙汰「……………」

沙汰はもう何も言えなくなっていた。

そしてもう一人、少女ミュアは

ミュア「え?……………泰人が消えた!?!」

神殿内で茫然としていた。

そして元の世界はまだ止まったままだった。

後6日で世界が動き出してしまふ。はたしてどうなるのか？

・・・っと、一人のサラリーマン風の男は動いていた。黒いラルゴを持って何やら話をしている。

男「そっか、うまくいったか。・・・んで今どこの？」

莉麻「どうやら俺のいた世界とお前のいた世界、それ以外にも世界がある。今はそのうち一つにいるよ。」

どうやら話し相手は莉麻のようだった。

男「んじゃ、これで契約は終わりだな。ここからは自由行動をさせてもらおう。」

莉麻「勿論だ。今更何ができるかは知らんが、せいぜい足掻くとい
い。・・・古寺歩、いや元の名前は茅野だったな。機会があったら
また会おう。」

そう言って通話は切れる。

男はふうつと一息つき、

男「まったく、世話の掛かる奴らだ。厄介事に足を突っ込んで、ミイ
ラ取りがミイラになるとはな。」

はんと鼻で笑う。しかし急に真剣な表情になり

男「・・・これじゃあ、何のために家を捨てたか分からね
えじゃねえか。」

そういう男の目には涙が僅かに見えた。

男「・・・おっと、そんなことしてる場合じゃなかったな。まずは
泰人からだな。頼むぜ、ラルゴ！」

黒いラルゴから変な音がする。収まったかと思うと、目の前に時空
の裂け目が出現する。

男「・・・さて、行くか!!！」

男はその中に入って行った。

さて、これからどうなるか。それはまだ誰にも分からない。
ただ分かっているのは、・・・結局時間は止まらないということだ。

第一部・完

終章・後編（後書き）

後書きに続きます。

後書き

というわけで（Mystic world）は一度終了とさせていただきます。

最初はもっと長く続けようとも思いましたが、自分の文章力をもう少しあげてからにしようと思いました。

なので、続編は考えております。このまま終わってはよく分からない所も多いでしょうしね。

今回が私の初めての小説での作品でしたが、いかがだったでしょうか。自分で読み返すたびにもっとうまく書ければとは思っています
が・・・なかなかうまくいきません。

8月にかんりの期間あけてしまいましたが、内容をもう一度考え直す時間がほしいと思い、何も言わずにあけてしまいました。申し訳ありません。

ですがどんな形であれ、一区切りつけたのは嬉しく思います。これも見てくれている皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

それで次ですが、続編は来年以降となると思います。それまでになんとか文章力を上げていきたいです。

その間ですが、恐らく別の話を書く予定です。内容は一応決まっています
ますが本当に書くかどうかは分かりません。書ければいいなと
・・。

その内容ですが、この前部屋の掃除をしていた時に見つけた14, 5年前かな。そのくらいの時に書いた四コマを小説にしようかなと。確か星のカービィから名前を取って、花のコピーだったと思います。でも、書くかどうかは分かりません。年末になるので色々忙しいですし、時間もないためそのまま来年になって続編ということもあります。

一応あるかなっというくらいに考えてもらえたら嬉しいですよ。

それではここまで読んでいただき本当にありがとうございます。
次はいつになるか分かりませんが、必ず戻ってきますので待っていていただければ嬉しいです。

それではまた次の機会にお会いしましょう。

ロンロンの弟子でした。

第二部スタート

こんばんは、ロンロンの弟子です。それでは再び小説を再開していききたいと思います。

これからまずは45話までもう一つと全く同じものを投稿するため話の変更点はありません。

それ以降はオリジナルで書いていきます。このような形をとってしまい申し訳ありません。

番外編は投稿は後でまとめてします。

予告の方はすみませんがなしでいきます。

今後皆さんが読みやすいようにできる限りの努力をしながら頑張ります。

では簡単ではありますが挨拶とかえさせていただきます。

それでは本編をご覧ください！

1. 偽りの始まり (前書き)

それでは始めていきます。どうぞ！

1. 偽りの始まり

ここは謎の空間。泰人は気がつくところにいる。

「ここは一体どこなんだ？・・・何があったんだっけ？」

周りは何も見えず、何も感じられない。そこにいてそこにいないような感覚に泰人は戸惑っていたが

「・・・どうやらここは闇の空間。私たちはここに閉じ込められてしまったようです。」

泰人の腰につけていたメジャー、ラルゴがそう話す。メジャーには妖精のフィルディアの魂が宿っている。

「そう・・・でしたね。俺は・・・誰も救えなかった。」

泰人はくやしそうにそう呟いた。妹たちを救えなかったのがかなり響いているようだ。

「元気を出して下さい。まだ終わったわけではありませんよ。とにかく出口を探しましょう。」

それを聞き、泰人は正気に戻る。そう、悲しいのは自分だけではない。娘を失ってフィルディアも悲しいのだ。それなのに泰人のことを励まそうとしている。これではいけない。

「そうですね。とにかく前に進みましょう。」

気分を改めて、まだ見えない闇の中を泰人は歩き始めた。

とにかく前に前にひたすら進み続けた。しかしどんなに進んでも、時間がかかっても結局周りは何も変わらない。見渡す限り闇が続くだけだった。

「・・・だったらこれでいく。スネイラー！」

泰人はメジャーを掲げた。するとメジャーが消えて、目の前に巨大な蝸牛が出現した。

「いっけー、ラルゴ・ブラスターー!!」

そう叫ぶと、巨大な水の塊が発射された・・・が

「・・・何!？」

それはすぐに消えた。いや、目の前の何者かが消したのだ。そう、前に誰がいる。

「さて、いくか。」

そう声が聞こえたと思うと、周りが急に明るくなる。

・・・その誰かを見た瞬間、

「・・・・・・・・ぐっ。」

ぱたつと音がして泰人は倒れてしまった。

「・・・・・・・・え!？」

いきなりの事でフィルディアもつい声をあげた。

誰かが近づいてくる。サラリーマン風の男だ。顔はよく見えない。

「いきなりですみません。こいつは今意識を失っていますが、後に目を覚ますので安心してください。」

男は優しくフィルディア、つまりラルゴに話しかける。

「あなたは一体・・・誰なのですか？」

「それには答えられません。大事な点のみを説明します。」

男は一息つき

「あなたには闇の精霊の手助けをしていただきます。」

そう告げた。

この世は大きく分けて3つで構成される。

裏表のある世界。

それとは別の魔法の世界。

しかし魔法の世界は不安定。

光と闇、真の正義とは何なのか。

裏表の世界は正義は光と決めつける。

魔法世界もそれは同じ。

しかし真実とは常に闇の中。

そう闇の中。

場所は変わり、別世界。

泰人達がいた世界ともディオールとも違う第3の世界。

その世界は泰人達の世界とよく似ているが違う。そう、まるでコイ
ンの裏の世界だ。

そんな世界の町中を莉麻・・・いや、闇の精霊は歩いていた。

「ふむ、ここはあの世界とよく似ているな。もう少し散策してみよう。」

莉麻はそう呟き、路地裏の方を中心に歩いていた。すると

「・・・なんか大きな屋敷のようだな。」

その言葉通りの大きなお屋敷の前に着いた。大きな庭や池、綺麗な花も植えてあり、いかにも豪邸のような作りである。

「・・・だが、ここは違うようだ。では次に・・・。」

莉麻がその場を立ち去ろうとした時、

「・・・ちよつといいですか？」

屋敷の門の前に一人の女の子が立っていた。背が高く髪が肩くらいまで伸びた大人っぽい少女でどこかの学校の制服を着ている。

（な、何！？俺が気付かなかっただと・・・。）

「急にごめんなさい。でも私の家の前にいるから何かなって思っ
て・・・。」

どうやらこの屋敷に住んでいるようだ。ということはお嬢様だろう。

（うーむ、この娘が何かの能力を持っているのか。まあそれは置いておくにしろ、これは居場所を作るチャンスだな。）

「・・・実は、私何も覚えていないんです。気が付いたら町中ここまで歩いて来たんです。」

莉麻はこの少女を利用するために芝居をすることにした。

「・・・なるほど、それは大変でしたね。なら私の家にあがってください。力になれると思います。」

その言葉に莉麻は頷き、二人はお屋敷の中に入っていった。

お屋敷の中はとても広かった。2階と屋根裏部屋があり、部屋数が客室だけでも20部屋以上ある。

とりあえずその客室のうち一つを借り、莉麻と少女は話をしていた。

「まずは自己紹介をしますね。私は水本雪美みずもとゆきみです。お父さんが社長をしてましてその娘です。高校1年生の15歳です。」

かなり丁寧に挨拶をした。

「私は、莉麻。14歳。それ以外は覚えていません。」

とりあえず必要最低限の事のみ覚えているふりをした。

「そうですか。とりあえず記憶が戻るまではここにいてもいいです

よ。父はほとんど帰ってきませんし母とメイドが3人、後姉がいま
すが今は別の場所で暮らしています。特に問題ないです。」

（つーか、女だらけだな。まあ、あの場所を探すまでは厄介になる
か。）

「何から何までありがとうございます。」

お世話になることにしたらしい。

「それでは夕食もそろそろなので私は一度自室に戻ります。メイド
が部屋まで知らせに来ると思うのでそれまでは自由にしていてくだ
さい。着替えはこれを使ってくださいね。では。」

着替え一式を渡して、雪美は部屋を後にした。

「ふむ、まずは着替えようか。」

着替え始めた。どうやらサイズはピッタリのようなだ。

「よくこの体に合うサイズの服があったな。・・・これくらいの豪
邸なら当然・・・なのか。」

着替え終わって持ってきた荷物を確認する。

「ていうかカバンの中にエプロンのみか。そーいや服や下着は家の
中に置いてきたな。・・・やつちまったぜ。」

かわいく言ってみる。・・・興奮してきた。

「・・・まあ、この屋敷内を調べてみよう。」

気を取り直し、目を閉じて屋敷内の気配を感じ取る。

・・・。。。。。。。

「どうやら特になんもないようだ。じゃあゆっくりするか。」

とりあえず莉麻はメイドが来るまでゆっくりしていた。

その後夕食を取り、部屋に戻ってきた。

「久しぶりにいい物食ったな。さて少し休んで風呂に行くか。」

トントン

部屋を叩く音がして雪美が入ってきた。

「ねえ、莉麻ちゃん。良かったら一緒にお風呂入らない？ なんだか妹ができたみたいで嬉しくって。」

誘いがきた。

「喜んで。」

早かった。

という訳で二人は別館の温泉に移動した。

続く

1. 偽りの始まり (後書き)

どうでしたか？ また次回見ていただければ嬉しいです。

2. 決意の旅立ち

場所は移りフレムリー。

沙汰とスィングは少し落ち着いたようだ。

「とりあえずティルスが心配だ。俺は宿に行くが水の芸術家はどようする？」

「俺っちも行くよ。ここまで来たら付き合うよ。」

二人は宿に向かった。

宿に着くとティルスとティライズが椅子に座って休んでいた。

「来たか、ティルスはもう大丈夫のようだ。」

「ご心配おかけしました。・・・何かあったようですね。説明をお願いします。」

沙汰はさっきあったことをすべて説明した。

「・・・僕がお二人を危険に巻き込んだ。なんということを・・・。」

「・・・俺に考えがある。」

沙汰が言うと3人は彼を見る。

「敵がティルスの転移能力をコピーしたなら、ティルスも同じことが……。」

「面倒なことにそれは無理ですね。」

部屋の扉が開き、朱雀が入ってくる。

「あんたは……。」

「初めての者もいますか。朱雀です。では本人から説明してもらいましょう。」

朱雀は入ってきてすぐにそう言うのと全員ティルスを見る。

「……はい、僕は今能力を失っています。どうやらコピーではなく奪われたようです。」

朱雀を除いた全員が驚く。

「その通り。では自分のすべきことも分かりますか？」

「恐らく試練をすべて超えた先にあるのでは？」

ティルスが即答する。

「そこまで分かっているのなら面倒ではないですね。それでは！」

そう言うのと部屋から出ていった。

「つまりあの二人を助けるためにも残りの試練を超える必要がある訳か。」

ティライズがそう言うのとティルスが頷く。

「でもなんでそうだと思ったんだ？そんな確証はないのに。」

沙汰が言う。

「僕にも分かりません。でもなぜかそんな気がしたんです。」

「そうか、まあいいさ。じゃあ次の所行く前に確認するか。」

沙汰はそう言って全員を見る。

「ティルスには俺と水の芸術家がついていく。ティライズは一度ウインディームに戻ってフィドゥと合流して伝えてほしことがある。」

沙汰はティライズに耳打ちする。

「分かった。どっちにしろ一度ゴルデルに戻るつもりだったからな。」

「よし、じゃあ今日は一泊して次の日にも行こうか。」

という訳でその日は全員宿に泊まった。

場所は移り神殿内。

「・・・みんな助ける。」

ミユアはそう言って神殿を出ていった。

次の日、4人は宿屋を出た。

「では私は列車でウィンディームに戻る。後は頼んだぞ。」

ティライズはそう言って列車乗り場へと向かって行った。

「僕達も行きましょう。行き先はまずはここから少し行ったところにある青い森です。草木がすべて青いことからそう呼ばれています。」

「よし、じゃあカイチョーを呼ぶぜ。」

沙汰がパソコンを取り出すと

「・・・待つて。」

いつの間にか目の前にミュアがいた。

「・・・どちらさん？」

沙汰は驚く。いきなり目の前に現れたのだ。そりゃ驚きます。

「・・・私、ミュア。助けたいの。」

「いや、いきなり言われても・・・。」

そこにティルスが入る。

「目的が同じだから協力しようということですか？」

それにミュアは頷く。

「・・・なんだか分からないが訳ありのようだし俺はいいぜ。」

「沙汰君が言うなら俺っちも。」

特に怪しがることもなく二人が承諾する。

「・・・ありがと。」

ミュアが頭を礼を言う。

「では行きましょう。沙汰さん、お願いします。」

「残念だがカイチョーは3人乗りなんだ。歩いていくしかないな。」

全員が落胆するがすぐに気を取り直す。

「じゃあ行きましょうか。」

3人頷くとフレムリーを出て次の場所へと向かって行った。

「理由も聞かずに同行許可とは。面倒なことにならないといいいですね。」

4人が行くのを町の死角から見ていた朱雀はそう言った。

続く

2. 決意の旅立ち（後書き）

どうでしたか？ また次回見ていただけると嬉しいです。

3. 目覚めた少女達

場所は別世界に移る。

莉麻と雪美は別館の着衣室まで来た。

「では脱ぎましょうか。」

「はい！」

二人は着ている服をすべて脱ぐ。

「（温泉なんて何十年ぶりだろうか。しかも女性と入浴とはな。）」

うふふふふふと莉麻は笑っている。

「楽しそうでしたわ。では入りましょう。」

「はい！」

二人は温泉に入った。

「いいお湯ね。」

「はい〜〜〜！」

二人は仲良く隣で入っている。勿論タオルで隠していないぞ、うん。

「（・・・そろそろ観察を始めようか。）」

莉麻はそう思い雪美をじっくりと見る。

「（なかなかの美人だな。胸も大きいし、明らかにこの身体よりも発育がいいな。・・・だが、普通の少女に見えるぞ。何か能力があるはずだが・・・。）」

更にしっかり見る。しかし何も発見できなかった。

「どうしましたか？私、何か変ですか？」

どうやら視線に気付いた雪美が反応する。じろじろじろ見れば当然気付くだろう。

「え？・・・いや、綺麗だなあっと思って。」

とりあえず適当に感想を述べてみる。

「そう？なんか恥ずかしいけどありがと。」

上手く誤魔化した。

「じゃあ身体洗いましょうか。」

二人は一度お湯から出て身体を洗いはじめた。

「（うむ、見て分からないなら実際に触ってみるか。）」

そう考えた莉麻はそつと雪美の肌を触ってみた。

すると

「なっ!？」

急に気分が悪くなり……

ばたんと倒れてしまった。

「……え、大丈夫？ 莉麻ちゃん!!」

悪い夢を見ていた。

いや、これは現実だ。

そして私という存在のせいで

兄は大切なものを失った。

私のせいで。

分かっていた。

自分がいなくなれば

兄は救われると。

でもできなかった。

私は

私は

ずっとお兄ちゃんのそばにいたいから。

「はっ!？」

莉麻が目を覚ました。どうやら気絶していたようだ。

「ここは？」

周りを見る。莉麻が雪美から借りた部屋だ。

「私、どうしてこんな所に？確か家にいたはずなのに・・・。」

どうやら元に戻ったようだ。そしてある事実に気づく。

莉麻の左肩にはサミーがいて気持ちよさそうに眠っている。右手には紫色の水晶が握られている。

「今どういう状況なの？」

するとトントんとドアを叩く音がして

「莉麻ちゃん入るわね。」

雪美が入ってきた。

「大丈夫？いきなり倒れたから心配したのよ。」

「えっと、・・・大丈夫です。」

雪美のことももちろん知らない。とりあえず適当に合わせることにした。

「そう？ならいいけど、ただでさえ記憶が曖昧なのだから無理しないでね。それでは、おやすみなさい。」

「あ、はい。おやすみなさい。」

雪美は挨拶をして部屋を後にした。

「さて、まずは状況確認のためにサミーちゃんを起こそっか。」

とりあえずサミーを起こすことにした。

「サミーちゃん、起きて。」

「うみゆ、朝？」

起きた。そして莉麻の方を向く。

「あ、知らない人間のお姉さんだ。それになんだか分からないけどおもしろーい！！」

部屋の中を意味もなくぐるぐると飛び始めた。

「・・・私の知っているサミーちゃんと違うよ。」

「当たり前だ。あの時は俺がいたからな。」

「え？」

水晶から声がした。驚いたがとりあえずテーブルの上に置く。

「あなたは誰なの？」

「それも含めて今説明する。」

水晶は話し始めた。とりあえず深い所は教えず聞こえがいいように。

「俺はお前とそこの嬢ちゃんから光を取り除いた。その為には一度肉体を借りた。用があつて今ここにいる。まあ、やり方は強引だったかも知れんが反省はしていない。」

何とも無責任な話だ。

「そっか。・・・ありがとう。」

莉麻はお礼を言う。

「意味不明だ。文句の一つでも言うはずだろう。」

「うん、勝手な行動されたのは嫌だけど、命を助けてくれたみたいだからもういいよ。」

莉麻はにっこりと笑う。

「それで、あの女性は誰なの？ここはどこ？」

「分かった。話す。」

ここに来た時の事をすべて話した。

「なるほど。じゃああなたの用事がすむまで記憶喪失のふりをしてここにいればいいのね。確かに事情を話すよりはいいと思うよ。」

「ああ。それでだがあの雪美とかいう女、あれは正体不明だ。能力者なのは間違いないがそんな雰囲気は一切しなかった。更に俺達を分離させるとはな・・・ん？」

水晶が周りを見渡す。この部屋には莉麻、水晶、のんきに飛んでいるサミーしかない。それにこの部屋から光の力が感じられない。

「・・・しまった!？」

「ど、どうしたの？」

いきなり大きな声をあげたので莉麻は驚いた。

「もう一人いたんだ、俺が飲み込んだ最も危険な存在が。サミー、合体だ。俺に触れろ。」

「はーい!」

なんともしまらない声をだしてサミーが水晶に触る。

するとサミーが水晶を吸収し、一つになった。

「俺は行く。お前はここでおとなしくしている。」

そう言ってサミーは壁をすり抜けて部屋を出ていった。

「色々大変ね。」

他人事ではない。

場所は温泉に移る。

一人の少女が全裸で光っていた。

「ようやく解放されたわ。それに力もほとんど戻った。もう莉麻は用済みね。」

そこに一人のメイドさんがやってきた。どうやら掃除をしに来たようだ。

「誰ですか！？ここは水本家所有の温泉ですよ。」

「・・・メイドさんね。ちょうどいいわ。こういう所にあった恰好の方がいいもの。」

そういうと少女は更に光を増した。

「な、何な・・・。。。」

言葉の途中でメイドさんは光に包まれた。

「よし着いた。」

サミーは別館に着き早速温泉に入った。

しかしそこには掃除をしている一人のメイドさんしかいなかった。

「あの人からは気配が・・・ないか。逃げられたか。ぐっ。」

そう言ってサミーは温泉を後にした。

「うふふ、どうやら一時的に力を封印して正解みたいね。」

急にメイドさんが話し始める。

「この人はつと・・・美納下園実^{みのしたそのみ}22歳、彼氏なし。・・・なるほど。」

どうでもいい情報まで読んでいる。

「さて、これから楽しくなるわね。見てなさい。今度はあんたを驚かせてやるわ。うふふふふふふ。」

一人温泉でメイドさんの美納下は不気味に笑っていた。

続く

3. 目覚めた少女達 (後書き)

どうでしたか？ また次回見ていただけると嬉しいです。

4. 動く者達

沙汰達はフレムリーを出て草原をしばらく歩いていた。

「結構歩いたな。あとどれくらいで着くんだ？」

沙汰はティルスに聞いてみる。

「・・・そうですね。もう少しだと思うんですが・・・。」

「・・・・・・・・あれかな？」

ミユアが指さした先は緑の木々が生えた森が見えた。

「いや、あれは違うよね。」

「まあ、青い森が青森県っていうおちじゃなければな。でも、あそこで合っているんじゃないか？行ってみるか。」

沙汰がそう言うと4人はその森に向かった。

着いた。やはり緑の木々が生い茂った普通の森に見える。

「さて、多分ここだと思っただが……。」

沙汰はミニパソを取り出すと何かを調べ始める。

……しばらくして、ミニパソを閉じる。

「水の芸術家、この辺の木々の水分を調節して多めにしてやってくれ。」

「……分かった。」

スィングはよく理解していないようだったが、とりあえず地面に手を当てて目を閉じる。

……すると、緑色だった木々が少しずつ青く変わっていく。

「おお、よく分かりましたね。」

「ん、さっき調べただけさ。大雨の日だけ青い森が出現するって話だったからもしかしてと思ってな。さてと……。」

沙汰は辺りを見回す。すると少し先にある木が一本謎の青い光を放

っている。

「あれだな。行くか。」

4人はその木を目指して歩いて行った。

「ふむ、ここにいましたか。」

そんな光景をシュパルツは上空から見ていた。

「ラルゴの少年と能力を失った彼はもう終わり、早速……。」

そこで一人の少女、ミユアが目にはいる。

「……なるほど、こういうことなら最後の試練が終わるまで見届けてあげましょうか。」

シュパルツはそう言うと、しばらくその森を見ていた。

「それにここに来たということは彼もまだ諦めていないようですかね。」

「ティルス、ちょっと聞いていいか？」

歩いている途中、沙汰が声をかける。

「はい、何ですか？」

「とりあえず、試練は3つ終えて一つはなんか変な兄さんにつけられた指輪だったか、で継続中だ。つまり行くところは後一つだ。そんでさっき調べたんだが、その場所はここじゃなくて違う所にあるらしい。どうしてここに来たんだ？」

そう言われてティルスはあっと思いだすような表情をして

「すみません、言い忘れていました。実はこの指輪について調べに来たんです。」

ティルスは自分につけられた赤い宝石のついた指輪を指さして言う。

「この森のどこかにとある民族の住んでいる村があるんです。そしてその村には何でも知っている物知りな学者さんがいるみたいなので少しお話を聞きに行こうと思ひまして。」

沙汰とスィングはなるほどと頷く。ミュアは聞いているのかどうなのか分からないがぼーっとしていた。

「あ、着きましたね。」

ティルスのセリフに3人は光っている木が視界に入った。その木は一か所ぽっかりと穴が開いてあった。どうやらこの光のせいで開いたものらしい。

「さて、ここから入っていくみたいだな。じゃあ俺から行かせてもらうよ。」

沙汰はそう言って穴に飛び込んだ。

「・・・ん。」

次にミユアが

「では行かせてもらいますね。」

ティルスが

「最後は俺っちか。」

こうして全員穴に入ってしまった。すると青い森は一気に元の緑色の森へと戻っていった。

「・・・あの、それってどういう意味ですか？」

場所は不思議な空間へ。フィルディアは男にそう返す。

「詳しいことは話せないんですが、これには深い訳があるんです。貴方の娘を、世界を救うためには貴女の力が必要なんですよ。」

男はそう言って、泰人に手をかざす。

すると泰人から緑色の光る球が出てくる。

「よし、お次はっと・・・。」

それを手に取り、男はラルゴに手をかざす。・・・と今度は金色の光の球が出てくる。

「・・・初めてだから上手くいくかね。」

そして、泰人の肉体に金色の光の球を入れる。
・・・すると

「・・・・・・・・きた!!」

辺りにまばゆい光が溢れる。ぱぁーっという感じで。
一瞬間が光に押されるが、それはすぐに消える。

「・・・・・・・・えっと、何が起きたのですか？」

そこには一人の人間が立っていた。しかし、それは泰人ではなく、一人の金髪な大人の女性だった。見た目はフィルディアそっくりである。服は着ています、はい。

「どうやら上手くいったようですね。泰人の肉体に貴方の魂を入れたのです。それに合わせて姿も変化させておきました。服も着せて

おきましたよ。」

そう言って男は笑う。何気に緑色の球を懐に入れる。

「・・・聞きたいことは色々ありますが、とりあえず1つ聞きます。私は何をすればいいんですか、こんなことをして。」

「君にはある町に行ってもらおう。そこには君の娘は勿論泰人の妹もいる。そのサポートをしてもらいたい。」

突然雰囲気が変わり、厳しい命令口調になる男。どうやらこっちの方が威厳が持てると考えたようだ。

「え・・・、そ、それで娘達が助かるなら。」

突然のことでフィルディアも驚いたがサミーと莉麻を助けたい思いでそう言う。

「では、扉を開ける。何かあれば闇の精霊に聞いてくれ。・・・一応これを渡しておく。」

男は落ちていたラルゴを拾ってフィルディアに渡す。

「能力はウィップしか使えないが、護身用にはなるだろう。」

そう言うと言の闇の空間の一部に手をかざす。すると穴が開く。

「・・・よく理解できませんが、私には貴方が悪い方とは思えません。なので、貴方を信じてみます。」

そう言って穴を通っていった。

「さて、邪魔ものがいなくなったな。これで泰人の修行ができる。」

男はそう言って緑の球と段ボールを取り出す。・・・段ボールをどこから出したかは深く突っ込まないでほしい。

「あれを倒せるくらいになってもらわんとな。頼むぞ。」

そう言って緑の球を段ボールに入れた。

そしてその段ボールは鈍く光りはじめた。

続く

4. 動く者達 (後書き)

どうでしたか？ また次回見ていただけると嬉しいです。

5. 学園へ・前編

場所は再び莉麻達の所へと移る。

あれからすぐに莉麻の部屋にサミーが戻ってきた。

「おかえり、どうだった？」

「駄目だ、見つからん。この屋敷内にいるとは思うんだが。」

そう言うと、サミーと水晶に分離する。

「わーい。」

サミーはまた元気よく部屋の中を飛び回り始めた。

「どうやらそう簡単には見つかってくれないようだ。・・・仕方がない、お前にも手伝ってもらおうか。これをやる。」

そう言うと水晶の前にころんと音がして、服につけるピンク色のボタンのようなものが出てきた。

「これは何？服につけるの？」

ボタンを手にとって莉麻は言う。

「まあ、身につけていれば何でもいいさ。とにかく役割を分担する。お前はあの雪美とかいう女を見ているだけでいい。何かあったらこのボタンで連絡をくれ。」

「う、うん。それはいいけど、貴方はどうするの？」

莉麻は戸惑いながら聞き返す。

「俺はサミーと共に奴の捕獲とある場所の調査だ。まあ、おまえが嫌なら別に……。」

「ううん、私やるよ。よく分かんないけど、なんか黒水晶さん、悪っぽいけど本当の悪って感じしないもの。信じるわ。」

水晶の話に割り込んで、明るく莉麻が答える。

「ふん、バカが。……まあ、礼は言ってやらなくもないが。」

水晶は照れくさそうに言う。

「うーん、眠くなってきちゃった。サミー寝る。お姉ちゃん一緒に寝よ。」

しばらく飛び回っていたサミーは眠くなったようで、莉麻に甘えてくる。

「そうね、今日はこれくらいにして本格的に動くのは明日にしよう。」

「ああ、じゃあ寝ろ。ゆっくり休んでおけ。」

莉麻はそれに頷き、サミーと一緒に眠りについた。

「さて、俺も休んどくか。何があるか分からんから、すぐに起きれ

るようにしようか。」

水晶もスリープモードに入った。

夜も更ける。メイド達の仕事も終わり、それぞれの部屋に戻る。どうやら泊まり込みで仕事をしているらしい。

「お疲れ様！」

「園実、明日も頑張りましょう。」

美納下園実も部屋に戻った。

部屋の中は必要最低限のものしかなく殺風景だ。

「ふーん、やっぱり仕事上こんな感じなのね。あたりまえだけど。」

美納下は部屋を一通り見てから服を脱ぐ。

「まあ、力も8割戻ったし闇の奴よりも上になった。安心できるわね。」

シャワーを浴びにバスルームに入る。

「なんか次元転移魔法のおまけつきだし、すぐに戻れるならこの世界をもらってからでもいいわね。」

物騒なことを言いながら身体を洗う。

「・・・へえ、面白いことが分かったわ。この子色んな事知ってるわね。」

何か考えながら身体を洗い流す。

「動くなら・・・明日ね。メイドさんも惜しいけど、ここにいるといつ奴に気付かれるか分からないし。」

バスルームから出て身体を拭き、着替え始める。

「今日の所は下手に動いた方が危険ね。もう寝ましようか。」

着替え終わって、すぐに寝る支度をする。

「さて、私をどれくらい楽しませてくれるかしら？」

そう呟いて美納下は眠りについた。

次の日の朝6時30分、莉麻達ははまだ寝ていた。

そこにコンコンとドアをノックする音が聞こえる。

「莉麻ちゃん、起きてるかしら？」

雪美がきたようだ。その声に莉麻は目を覚ます。

「・・・えっと、どうぞ！」

寝覚めはいいようだ。すぐに思い出したように返事をする。
がちゅとドアが開き、雪美が入ってくる。

「おはよう、調子はどう？」

雪美はすでに制服に着替えているようだ。

「はい、おかげさまで。まだ色々と思いだせませんが。」

とりあえずこう言っておけば大丈夫だろうと莉麻は考え言った。

「そう、なら話は早いわね。これを見てくれる？」

雪美は制服を取り出した。莉麻の着ていたもののデザインとは異なるセーラー服だ。

「実は記憶に戻るまで学校に通わせようと思うの。学校の方は私と同じ学校ね。」

雪美の学校は小、中、高とエスカレーター式の学校である。

「え、でも迷惑じゃ・・・。」

「もう学校には許可とってあるの。記憶が戻るまで・・・ね？」

こう言われると嘘だったとはとても言いにくい。

「あ、ありがとう雪美さん。」

こう言うしかなかった。

「いいのよ。さあ、着替えて。先に行って待ってるから。」

そう言い雪美は部屋を出ていった。

「・・・じゃあ着替えましょう。」

莉麻は着替え始めた。

「・・・・・・うにゅーん。」

着替え終えた所で、サミーが起きたようだ。

「あわん、・・・・・・おはよ。」

ということだ

「さて、俺はそろそろ行くとするか。サミー、行くぞ。」

「行く行く行く行く行く行くよ。」

そう言って水晶触って融合！

「さて、あの女は任せた。何かあったら連絡しろよ。」

サミーは窓から出ていった。

「じゃあ私も行こうかな。ボタンをポケットに入れてっと・・・。」

莉麻はドアから出ていった。

その後朝食を済ませた莉麻と雪美は、屋敷を出て学園に向かった。

「・・・えっと、ここかな？」

着いた所はとんでもない大きさの学園だった。学園というより一つの街みたいだ。

「うん、凄く広いから迷わないように私から離れないでね。」

二人は手をつなぎながら学園内を歩いていく。

そして中等部前まで来ると雪美は地図を渡してくる。

「これがここの地図ね。・・・そろそろ先生がむかえにくるはずな

のだけれど。」

すると昇降口から一人の女性がやってくる。金髪で眼が青いことからどうやら外人のようだ。

「遅れてごめんなさい。では行きましょうか。」

「お願いします。」

その場で雪美と別れ、中等部の校舎に入ってしまった。

教師と共に校舎内を歩く。

「そういえば、莉麻さんは記憶喪失のようね。」

「あ、はい。名前と年齢位しか覚えていなくて。」

いつものことながらそう話す。

「そう。………ならいいわ。」

教師は少し悲しそうにそう言う。

「じゃあ、授業が終わったら少し付き合ってくれるかな。」

「え？……まあ、いいですよ。」

いきなりの事で驚くが何か知っているような教師の態度に少し興味

を持ち、話に乗って見ることにした。

そうこうしている間にも教室に着いた。

「はい、皆さん席についてください。転校生を紹介します。」

そして、莉麻が教室に入る。

「こんにちは、莉麻です。少しの間ですがよろしく！」

とりあえずありきたりな挨拶をする。

「はい、みなさん仲良くしてあげてくださいね。それでは莉麻さん、空いている席についてください。」

後ろの方が空いていたのでそこに座る。

「そういえばまだ、私の紹介をしていませんでしたね。私は新しくこの学園に来た英語教師の・・・」

そこで彼女は自己紹介する。そうこれが

「・・・フィルディアです。」

彼女と彼女の初めての出会いだった。

続く

5. 学園へ・前編（後書き）

どうでしたか？ また次回見ていただければ嬉しいです。

6. 学園へ・後編

時間を戻して、朝の学園内のあるマンションの一室。
一人の女性がベットで眠っていた。

「・・・うーん、・・・・・・・・ここは？」

その女性、フィルディアが目を覚まして辺りを見回す。
どうやらあの穴はここに繋がっていたらしく、着いてから今初めて
部屋を見たようだ。

「えっと、一体どうなって・・・・・・・・。」

ベットから下りて机の上を見ると、一枚の書置きがあり、こう記してあった。

ここはとある学園の中で今日から貴女は英語教師です。ここの敷地内にある学校の職員室に行くと、自動的にここの仕組みが分かるように貴女におまじないをかけておいたから安心していただきたい。
それでは！

「・・・・・・・・まあ、信じたからには行くしかないかしらね。」

ふと裏を見るとこう続いていた。

なお闇の精霊との接触はできるだけ早くにお願いします。

「・・・・・・・・言われなくてもそうするつもりでしたわ。」

そう呟くと部屋を一通り見てみる。

部屋には必要最低限の物は揃っているようだ。箆笥を開けると服も下着もある。

「あの人は一体何を……………」

深く考えないことにしてとりあえず軽く朝食取り、着替えと身支度をし出かけることにした。

その際に何か変わっている所はないか鏡を見た。

「……妖精の時より少し若返ったみたいだわ。」

楽しそうでなによりです。

外に出ると目の前に大きな建物がある。どうやらこれが行き先のようだ。

「大きいわ。そういうえばこういう学校というものは聞いたことはありません、行ったことがないわね。」

ディオールは妖精は自分の親に全てを教えてもらうようになっている為、学校という場所がないようだ。

「とりあえず行ってみましょう。」

部屋は2階なので、階段を下りる。目的地は目の前なのでそんなに時間もかからない。

「先生、おはようございます!」

行く途中で生徒達に挨拶をされる。

「はい、おはようございます。元気が良くていいですね!」

笑顔で挨拶を返す。泰人達以外の人間に会うのは久しぶりのためけっこう嬉しいようだ。

「(でも、ここにいる人達にかしら違和感を感じるわ。それにここはディオールとは異なる世界みたい。泰人さん達の住んでいる世界とも違う気がしますし・・・。)」

そうこう考えている間に職員室に着いた。

「おはようございます。」

そう言って部屋の中に入った瞬間、フィルディアの頭の中に自分の知らない情報がながれてきた。どうやらそれがここで必要な知識みたいだ。

「おはようございます。今日からお願いしますね。」

一人の少し老いた男性が話しかけてくる。見た感じ副校長か校長辺りだろうと思われる。

「（この人は……副校長先生みたいですネ。）はい、お願いします。早速ですが、私の担当を教えてくださいだきたいと思うのですが。」

「はい。実は英語の担当ともうひとつ、中等部のあるクラスの副担任をお願いしたいのです。」

え？といきなりの事で固まるフィルディア。

「今そのクラスの担任の教師の人が休んでおりまして、新人ですが優秀である貴女にお願いしたいのです。」

どうやらそのクラスの副担任は学校を辞めていたようで、担任がない今代わりを探していたようだった。

「あ、はい。私でよければ喜んで引き受けます。」

困っている人は放っておけないらしく、快く引き受けるようだ。

「それはありがたい。では早速ですが転校生が来るので昇降口まで迎えに行っていたきたいのです。」

これをとその生徒の書類を渡される。

「えっと、生徒の名前は………莉麻ちゃん。記憶喪失？」

間違えなく聞いたことがある名前、泰人の妹だと思った。

こうして莉麻の事を昇降口まで迎えに行っただった。

そして今に至る。

その後フィルディアの授業が始まった。

情報があるため普通に授業をすることができた。

莉麻も教室の雰囲気すぐに馴染むことができた。

「どうやら無事のような。まあ心配はしていなかったがな。」

窓の外でサミーが浮いていた。どうやら心配してきたようだ。

「さて、ここどこかにあの場所があるらしいんだが・・・。」

いや、なにやら探し物らしい。

「うーむ、どこに・・・・・・・・ん？」

フィルディアが目に入る。少し驚いた表情になるサミーだがすぐに無表情に戻る。

「あの男、まさかこうくるとはな。ラルゴ使いの修行の厄介払いといったところか。」

すべてを理解しているようだ。

「まあ、邪魔しに来たわけではないなら問題ない。さて、だいたい場所も分かったし奴を探しに行くか。」

眼を閉じ気配を感じ取る。

「うむ、感じないな。さっき屋敷のまわりや隅々を探していなかったから、すでに外に出たか。ならまずこの世界を理解する必要があるな。」

サミーは学園を後にして、町を見て回ることにした。どうやらサミーは探しているのが人間内にいるとは気付いてないようだった。

そのころ美納下は

「夕方まではここでメイドを楽しみましょうかな。」

普通にメイドの仕事を楽しんでいた。

続く

6. 学園へ・後編 (後書き)

どうでしたか？また次回見ていただけると嬉しいです。

7. 変身の指輪

沙汰達が穴に飛び込んですぐのこと。

「・・・・・・・・んん？」

沙汰は洞窟のような所にいた。

どうやらここに転移してきたようだ。

全員ちゃんと揃っている。

「どうやらここが目的地のようですね。」

ティルスが前を向いて言う。

それにつられ残りのメンバーも同じ所を見る。

「・・・・・・・・おお!!」

そこはまるで村のようだった。家や小屋、ちょっとした施設があるので間違いないだろう。

「では行ってみますか。」

一同は村の中に入り学者を探すことにした。

しばらく村をまわり、ある程度情報が集まった。どうやらここにその学者がいるのは本当らしかった。

・・・だが。

「どうやらあそこにいるらしいよ。」

スィングが指さした先には、かなり古い小屋があった。

「俺っちの聞いた話によるとかなりの変わり者らしくて、よそ者とは話をしないらしい。」

「・・・・・・・・・・なんかゲームとかでよくある展開だな。」

げんなりとして沙汰が言う。

「だけど例外があるそうっす。なんでもよそ者でもかわいい幼女ならしいとか・・・・・・・・。」

「最低だ。」

「それはちよつと・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

みんな引いてしまった。

「さて、どうするか。」

学者からどうすれば話を聞けるか考える一同。

「やはり、ちゃんと話をするのが一番だと思います。僕が行ってきます。」

そう言ってティルスが小屋に向かった。

こんこん

「すみません、どなたかいらっしゃいませんか？」

小屋の戸を叩いて声をかけてみる。・・・すると

「・・・だれかな？」

一人の女性が出てきた。見た感じまだ若そうだ。

「あの、こちらに物知りの学者さんがいると話聞いてきたのですが。」

ティルスがそう言うのと女性は少し困ったような顔になる。

「うーん、多分聞いてもらえないと思うけど。まあ、入ってください。」

とりあえず小屋に入れてもらいとある部屋の前まで案内される。

「先生お客様です。外部から来た少年が先生のお話を聞きたいと。」

扉越しにそう言う

「男には興味ない。」

と吐き捨てるように一言。

「えーっと、僕ティルスと言いまして試練のことで話を聞きに来たのですが。」

なんとか話を聞いてもらおうと試みるが

「君のことは知ってるけど、男に興味ないしパス。」

と言われてしまった。

「・・・駄目でした。」

結局成果はなく、手ぶらで帰ってきた。

「ふむ、だったらミュアちゃんに行ってもらうか。」

沙汰はそう言ってミュアを見る。

「・・・・・・・・・・会話はちょっと。」

どうやら話をするのは苦手のようだ。

「……………だったら、こいつを使うしかないなあ。いやあ、本当は使いたくないんだけどなあ。」

やたら嬉しそうに沙汰は何かを取り出した。指輪のようだ。

「こいつが俺のつくった銀の発明の一つ、変身リングだ。本当は読心術の能力をインストールしようと思ったんだけど、あれかなり重いし身につけるタイプにすると頭に負担がかかりすぎるからなあ。残念だったよ。」

沙汰は本当に悔しそうに話す。

「という訳で代わりに入れたのが変身能力ってわけさ。ビー玉ほどじゃないが、物質変換システムは面倒だったよ。まあ、まだ使っていないしどうとも言えないけどな。」

「……………まあ、それはいいとしてどんなのに変身できるんだい？」

話が長くなりそうだったので途中で割り込んだスイング。

「今は見た目、姿、形くらいかな。能力強化や能力コピーなんてものできるけど、もう少し時間がないと無理だな。」

そう言ってその指輪をはめてみる。

「これを指にはめて、なりたい姿を想像するだけで……………」

するとポンッと音がして

「じゃじゃーん。」

そこには6、7歳の少年がいた。どこことなく沙汰に似ている。

「これは小学生のころの俺の姿だ。まあ、年齢性別問わずなんでも変身できるんだけどな。見たことある姿、または自分で考えた姿ならな。」

そう言って指輪を外すと、ポンッと音がして元に戻る。

「(すごいなあ。これを使えば、僕もあの人に話を聞いてもらえる姿になれるかな?)」

ふと考えたティルスは自分が少女になった姿を考えていると

「さてと、こいつを君にっと。」

沙汰はティルスの指輪をしている逆の腕の指にはめた。

「……………え?」

ポンッと音がして、そこには

一人の少女が立っていた。

「・・・・・・・・・・なんで僕がこんな姿に。」

ティルスは嘆いていた。それはそうだろう、いきなりのことだから。

「いやあ、ごめんごめん。だが、かわいいぜ！！！」

そう言ってティルスをよく見てみる。

服装そのものは着ていた男の子物の服だが、見た目はティルスを女の子にした感じみたい。元々かわいい少年だったので、違和感はない。

「うーん、なんか違和感がありますよー。」

そう言って胸を触ってみる。あまり大きくないが膨らみがあるようだ。

次に下の方は、・・・・・・・・・・当然ない。

「これは恥ずかしいですよ。戻ります。」

ティルスはそう言って指輪を外そうとするが

「・・・・・・・・・・は、外れませんよ。これ。」

外れなかった。指にぴったりとくっついて外れないようだ。

「マジか？さすがに性別変えるのは無理があったかな。後で調べてみるからしばらくはその姿だな。」

沙汰は少し残念そうだったが、すぐに笑う。

「結果オーライ！！その姿なら変態学者から話を聞けるんじゃないか？」

「うー、そうなんですけど・・・・・・・・・・僕が帰ってくるまでに原因探しておいてくださいね。」

ティルスが少し悲しそうな表情をして、再び小屋に向かおうとすると

「・・・・・・・・・・待って！」

突然ミュアに止められる。

「・・・・・・・・その格好、駄目。・・・女の子の服、着ないと。」

そう言ってティルスを連れて近くの洋服屋に入る。

「・・・お待たせ！」

少しして、表情がちょっと明るくなったミユアが出てきた。
その後ろにはティルスがいた。

全体的に黄色っぽい色をした服で、スカートをはいている。

「ううう、なんで僕がこんな目に・・・。」

「まあ、嘆いても仕方ないさ。帰ってくるまでに原因調べておくから、そっちは頼むぜ。」

沙汰は嘆くティルスに慰めなのか分からない言葉をかける。

「・・・・・・・・じゃあ、今度こそ行ってきます。」

少しテンションが低くなったティルスは小屋に向かって行った。

「そーいや、俺っち気になったんだけど、もしかして下着も・・・。」

「・・・・・・・・ぱっちり。」

スイングの言葉に少し嬉しそうに答えるミユアだった。

続く

7. 変身の指輪 (後書き)

どうでしたか？次回も見ていただければ嬉しいです。

8. そのとき君は

サミーは町にやってきた。

「ふむ、この世界はディオールとは異なる町並みだ。見たことのない形の建物がある。というかこんな大きな建物にする意味ってあるのか？」

並んでいるビルをみてそう呟くサミー。ディオールにはビルはほとんどないので珍しいのだろう。

「それにしても、特に変わった所はないように見えるが……」

サミーは一瞬建物がぶれて見えるのを見逃さなかった。すると一気に急上昇を始める。

かなり上空まで来てみたが、

「……圧力が感じられない。……どういことだ。」

ふと下を見ると町並みが目に入る。

「……なるほど。そういうことだったのか。」

どうやら何か分かったようだ。
そのまま降下する。

「ディオールと莉麻達以外の別の世界があると噂に聞いてやってきたが、こういうことだったか。これは奴を野放しにすると危険だな。」

キンコンカンと鐘が鳴り、放課後になる。
莉麻は授業を無事に終えて帰る所だった。

「莉麻ちゃん、一緒に帰らない？」

クラスメイトの女子が話しかけてくる。どうやらもう仲良くなったようだ。

「あ、ごめんね。実はフィルディア先生に呼ばれているの。だから先帰ってて。町案内はまた今度お願いするよ。」

「そっか、じゃあまた明日。ばいばい！」

そう言って女子生徒は教室を後にした。

「さて、職員室にでも行こうかな？」

誰もいなくなった教室を出ていこうとすると、

「莉麻さんいるかな？」

ちょうどフィルディアが教室に来たのである。

「あ、良かったです。私今から先生の所に行こうと思っていました。」

「そうだったの。じゃあ良かったわね、ついてきてくれるかしら？」

それに莉麻は頷き、二人は教室を後にした。

二人が来たのは、普段は使われていない空き教室だった。
二人は中に入り向かい合う。

「いくつか聞きたいことがありますますがまず初めに、……貴女は茅野泰人さんの妹さんでいいんですよね？」

いつもの口調に戻りフィルディアが問う。

「なっ……何故それを？」

「その反応を見ると間違いはなさそうですね。さてと、次は貴女が質問していいですよ。」

「え、えっと……」

口ごもる莉麻。聞きたいことはたくさんあるのだが、突然のことで混乱しているようだ。

「……じゃ、じゃあお兄ちゃんは、お兄ちゃんは元気ですか？黒水晶さんに聞こうにも知っているか分からないしどうすればいいか迷ってて。」

「……すみません。彼が今どうなっているのかは分かりないのですが、生きていることは確かです。」

今自分が泰人の肉体を借りていることを言わずそう答えた。変な心配はさせたくないのだろう。

「……そうですか、それだけでも十分です。」

莉麻は少しほっとする。

「ごめんなさい。ですが私が知っていることならだいたい話します。」

フィルディアは話し始めた。泰人と出会ったことや共にいたこと、変な男に会ってこの世界に送られたこと、そして……

「……え？」

「厳密に言うところ、貴女の言う黒水晶のしたことでしょう。何故私たちが生きているかは分かりませんが。」

闇の精霊により謎の空間に送られたことも話した。
莉麻はとても驚いている。

「・・・・・・・・私、それ聞いてない。」

ポケットからピンクのボタンを取り出す莉麻。

「・・・・・・・・ちよつといいかな？」

それに呟くと

「ん、何かあったのか？」

そこからサミーの声が聞こえる。

それにフィルディアが反応するが会話中らしいので止めた。

「お兄ちゃんを変な空間に拉致したって本当なの？」

「・・・・・・・・ちよつと待ってろ。」

そう言って通信が切れる。

「今のって・・・・・・・・。」

「はい、黒い水晶さんです。今はサミーちゃんと合体しているみたいです。」

「・・・・・・・・そうなのね。」

少ししてサミーが到着する。そこにいきなり莉麻が質問する。

「ねえ、教えてよ。なんでそんなことしたの？」

「・・・・・・・・・・邪魔だったからだ。奴がいたんでは俺の目的は果たせないと判断した。」

真顔でそう答えるサミーだが、眼は少し寂しそうだった。

「・・・・・・・・・・。」

フィルディアはそれに気づいたのだろう。何かを考えているようだ。

「信じられない。そこまでひどい人だったなんて、信じられないよ
!!!!!!」

そう言って莉麻は部屋を飛び出してしまった。

「いいんですか、恐らくいま言ったことは本心ではないのでは？」

サミーの気持ちを知っているのかそう言葉をかける。

「うるさい。それよりいいのか？俺様は今貴様の娘を乗っ取っているんだぞ。」

「……………それについても詳しく聞かせていただきます。今日の所は私の所に来てください。後、莉麻さんは。」

「あいつは今別の所に泊めてもらっているから心配はいらない。……………仕方がない。奴がこう判断したなら少し付き合ってやらんこともない。」

そういつて顔をそむけるサミー。

「ではついてきて下さい。人の目につかないようにしてくださいね。」

こうして二人？は教室を後にした。

「なんで、なんで本当の事を言ってくれなかったの？」

なんどもそう呟いて莉麻は校舎を出た。泰人のこととなると後先考えずに行動してしまう。

「もう、どうすればいいんだろ……………」

とぼとぼと歩いていると

「莉麻ちゃん？」

前に誰かいた。・・・・雪美だった。

「どうしたの？泣いてるみたいだけど・・・・。」

「雪美さーーーーーん!!」

話の途中で莉麻は雪美に抱きついた。耐えられなかったのだろう。

「・・・・もう泣かなくていいのよ。さあ、一緒に帰りましょ。」

「・・・・・・はい。」

こうして二人は帰路についた。

莉麻が離れようとしないので、二人で手をつないで帰った。

場所は変わり、とある公園。そこに一人の少女がベンチに座っていた。

ここの公園はとても小さく近くに別の大きな公園があるのでその子一人である。

見た感じだと小学5、6年くらいだろう。

「…………あたし、どうしていつもこうなんだろ。」

少女は佐野星音^{さのせいね}、雪美が通う学園の学長の娘で学校ではよく男子にいじめられている子である。今日もふとしたことで男子にいじめられたのだ。

「あたしは何もしていないのに。どうしていつも…………。」

「…………あら、こんなところでどうしたの？」

そこに一人の女性が通りかかった。メイド服を着て、手には買い物したであろう荷物を持っていた。

「えっと、…………別になんでもないです。」

そう言ってベンチを立とうとすると

「まあまあ、話をするだけでも楽になるでしょ。お姉さんに話してみてよ。」

と言ってとなりに座ってきた。

「・・・それで、あたし突然男子からいじめられるようになったちゃって。」

なんだかんだ言って結局話すことにした星音。メイドさんはうんうんと頷いて聞いてくれている。

「そっか、だったら自分を変えればいいんじゃないかな？」

「そ、そんなの無理ですよ。あたし、そんな、勇気ないし。」

途切れ途切れになって話す星音。それを見て

「だったら私が貴女を変えてあげるわ。」

不気味に笑いかけ

「・・・・・・・・え？」

メイドさん・・・・・・・・いや、美納下は手を開き、星音の方を向けた。

「さて、始めましょうか。」

続く

8. そのとき君は（後書き）

どうでしたか？ また次回見ていただけると嬉しいです。

9. 初のお泊まり

場所を移す。

「うーん、これで本当に……いいのかな？」

ティルスは再び学者の小屋を訪れていた。無論変身したままである。

こんこん

「あの、すみません。いいですか？」

再び小屋の戸を叩いて声をかけてみる。……すると

「……あら、今日は珍しく尋ねる人多いわね。誰かな？」

再び同じ女性が出てくる。ここに他の人は勤めていないのだろうか
と思いつつ

「あの、先ほど来たものなんですけど。」

真実を言う。すると女性は少し困ったように

「……うーんと、さっき来た子は男の子でしたね。もしかして、
女装かな？」

そう言ってティルスの胸を触ってきた。

「・・・ひゃん。な、何を!？」

「これは小さいけど・・・本物ね。となると。」

女性は少し考え一つの結論を出す。

「変身系の術ね。かなり完成度が高い所から見て、実力がある術師にでも頼んだの？」

「え、まあそんな感じですよ。」

いきなりのもので驚いたティルスだが、少し落ち着きそう返す。

「それほど話が聞きたいってことですか。じゃあまた連れて行ってあげます。」

という訳で再び部屋の前に来た。

「先生お客様です。今度は女の子が尋ねてきました。」

「ふむ、通してあげなさい。」

さっきとは違って変わって簡単にOKを出す男。まったく現金な奴である。

「失礼します。」

ティルスが学者の部屋に入った。そこには書類が散らかった部屋に一人、初老の男が椅子に座っていた。

「ふむ、こちらに座りなさい。」

かろうじて使われているであろう椅子を出して言う初老の男。

「あ、はい。ありがとうございます。」

ティルスはそう返して素直に座る。

「では、君の考えていることを当てよう。恐らく私が無茶なことを言うから困っている。そして元に戻れなくて困ってはいるが、情報を集めるために仕方なくここに来たと聞いたところかな。」

「……え？そ、それって……。」

ずばり言い当てられて混乱するティルス。まだ自己紹介もしていないのに何もかも分かっているようだ。

「とりあえずせっかく変身してまで来たんだ。本当は追い返す所だが、かわいいし許すこととしようか。」

と言ってティルスをじろじろと見る男。その目は獣のようだ。

「えっと、そんなにじろじろ見られると恥ずかしいんですが。それになんで僕の正体にも気付いているようなんですか？」

「まあ、私は何でも知っているからな。特別サービスで3つほど何でも答えてやろうぞ。」

男はじろじろ見るのをやめ、ティルスを見て答える。

「えっと、そういえばまだ貴方のお名前を聞いていなかったのです
が。」

「私はエルドイと言う。ここではよく先生と呼ばれているがな。・
・さて、あと二つはどうする？」

「・・・え？今のもカウントされるんですか？」

ティルスは驚いてそう聞き返す。

「当然。さて、あとはどうするんだ？」

「えっと、あの、その、・・・この指輪について教えてもらいたいの
ですが。」

一瞬言葉に詰まったがなんとか目的通り朱雀からもらった指輪のこと
について聞くことができた。

「ふむ、ちょっと見せてくれんかね。」

ティルスは指輪のついている手を出し、指輪を見せる。

「これは、・・・なるほどな。君はなかなかきついことをしているようだね。というよりもあの男が全面的に悪いなこれは。」

急に表情が険しくなり一人で納得しているエルドイ。

「えっと、つまりどういうことなんですか？」

「この指輪を外す方法は、”真実を知る時、再び赤き鳥が姿を現し最後の試練がとり行われるであろう。”という訳だ。つまりこの指輪は後回しにして当初最後の目的地だったパレスに向かうがいい。」

意味深なことを言うエルドイ。それを、ティルスは頷きながら聞いている。どうやら理解しているようだ。

「はい、では最後の質問です。・・・茅野泰人さんと莉麻さんの安否を教えてください。」

「やはりそれがきたか。二人同時となるとかなり大雑把にしか教えられんがいいか？」

それに頷くティルス。本当は3つの内2つで2人の安否を確認するはずだったのだが、計画が狂ってしまったためこうするしかなかった。

「あの二人はどちらも今のところ元気だ。だがそれも時間の問題だな。二人とも後少して選択を迫られ危険な目にあうだろう。」

「そうですか、だったら急がないといけませんね。」

聞く前と別人のようにやる気のある表情になったティルス。

「後一つヒントで教えておいてやる。今3日目だから気をつけろ。以上だ。」

「・・・そうでしたね。分かりました。ありがとうございます。」

正直言うともまだ聞きたいことは山ほどあったが、約束は約束なので素直に引き下がる。

「まあ、また来い。気が向いたら他のことも教えてやろう。」

その言葉にティルスは礼を言って部屋を出て、小屋を後にした。

「聞いてきましたよ。とりあえず話しますね。」

そう言ってさっき聞いたことを3人に話した。

「そうか。あいつらは今のところ無事か。それは・・・・・・良かった。」

嬉しそうに沙汰はそう言った。

「でも危険が迫っているなら早く助けにいかないとまずいっすね。でもどうやって……。」

「大丈夫です。試練をすべて終えればきっと何とかあります。」

自信満々に答えるティルス。その言葉に3人は頷く。

「さて、今日はそろそろ遅くなりますしここで宿にでも泊まりましょう。」

そう決まり、4人は宿へと向かった。

宿に着き、部屋分けをしている時だった。

「それでは、男性2名様と女性2名様を別々の部屋にご案内します。」

「ちょっと沙汰さん、何か忘れていませんか!？」

沙汰は女子部屋から突然やってきたティルスにそう言われた。

「ああ、そうだったね。そのことなんだけど……。」

少し言いにくそうにして

「ごめん、何故か直らなかった。ということでしたらくそのままという……。」

「ちょっと待って下さいよ!! どうするんですか、ミュアさんも一緒なんですよ。」

「……私は、……構わない。」

ミュアは少し嬉しそうにそう呟いた。

「そ、それはまずいですよ。僕、男の子なんですよ。恥ずかしくありませんか?」

「……今は、……かわいい女の子。……問題ない。」

そう言ってグッと親指を立てるミュア。

「という訳だ。すまんがしばらく宜しく!」

「そ、そんな……。」

ティルスは絶望した。そう、今この瞬間に。

「……じゃあ、戻ろ?」

そう言って、ミュアはティルスの手を引き部屋を出ていった。

「風呂行くなり、後で感想を・・・。」

「行きません!!!」

沙汰の分かれ様のふざけた言葉について怒鳴ってしまったティルスだった。

だが、彼女（彼）は今の時点では気付かなかった。ここには温泉しかないことに。

さてどうなるのか？

続く

9. 初のお泊まり (後書き)

どうでしたか？また次回見ていただけると嬉しいです。

10. 孤独

あたしはいつも一人だった

友達もない

先生も気にしてくれない

親にも無視される

誰も気にしない

そんな子だった

そんなある日

一人の男子があたしにちょっかいをかけてきた

最初はあるまり気にしていなかったけど

どんどんエスカレートして人数も増えていく

あたしは何もしてないのにと言うと

いるだけで邪魔なんだと返された

友達もない

先生も気にしない

いじめっ子以外には無視される

親にもそんなこと言えない

言っても意味がない

もう駄目なんだ

何か

誰か

何でもいいから

あたしを助けて

「・・・う、うーん。あれ、あたしどうしたんだろう？」

星音は目を覚ます。どうやら気絶していたようだ。周りを見ても特に変わっていないが、美納下も近くに倒れている所に気付く。

「あの、しっかりしてください！」

「う、うーん・・・、ここは？」

声をかけると美納下は起きて周りを見ている。

「えっと、さっきまであたしの話を聞いてくれましたよね？」

「そうだったかしら？私、温泉のお掃除をしていて・・・。」

不思議そうな表情で首をひねる美納下。どうやら何も覚えていないようだ。

「・・・えっと、この買い物袋を持っていましたよ。」

ベンチに置いてあった、先ほど美納下が持っていた買い物袋を本人に渡す。

「あ、ありがとう。じゃあこれで、またね。」

余り納得していない様子だったが、買い物袋を受け取ると美納下はその場を後にした。

「・・・・・・・・あたしも帰ろ。」

そう呟いて星音も公園を後にした。

「・・・・・・・・ただいま。」

星音は家に帰ってくる。しかし家には光は灯ってなく返事もない。リビングに行き電気をつけるとテーブルの上に手紙が置いてある。それを見ると母親からで夕飯について書いてある。両親共働きで平日は夜遅くまでいない。それに兄弟もいない。

「今日も・・・・・・・・か。」

書いてある通りに準備して、それを食べる毎日。星音はそんな日々が嫌いだった。

「・・・・・・・・ごちそうさまでした。」

それを食べ終えて部屋に戻る。

「・・・・・・・・ふう。」

着替える。

宿題をする。

お風呂に入る。

歯磨きをする。

明日の準備をする。

読書する。

寝る。

このようにいつも進めている。

「・・・・・・・・おやすみなさい。」

誰に言うまでもなくそう呟いて、星音は床に着いた。

時間は戻り、場所・水本家

二人は戻ってきた。美納下も戻ってきており、掃除をしていた。

その後食事を終え、二人で温泉に入っていた。

「それで、何かあったか聞いてもいいかな？」

「・・・はい、分かりました。」

莉麻は頷き、深いことは話さず、大まかな所のみを話すことにした。

「一つだけ思い出したんです。私にはお兄ちゃんがいて、そのお兄ちゃんを私が傷つけてしまった。そのことから家出してここに辿り着いた時には、何もかも忘れていたんです。」

自分でやったことではないのに、自分でやったことのように語る莉麻。いや、自分の意志ではないにしろ自分の意思で泰人を追い詰めたのだから無理もないだろう。

「・・・そっか、大変だったね。」

「雪美さ……あう。」

莉麻は雪美に抱かれる。大きめな胸に顔をうずめるような体勢になる。

「大丈夫よ。お兄さんはきっと気にしていないわ、ちゃんと謝ればきっと許してくれるわよ。」

「……うん。」

そのまま優しく諭される。莉麻はその言葉を受けてつい素に戻ってしまい、身体を雪美に預ける。

「それにすべて思い出すまでここにいていいのよ。私が貴女のお姉さんになってあげるから。」

「……うん、ありがとう。お姉ちゃん！」

雪美は莉麻をギュッと抱いた。

その後莉麻はだいぶ落ち着いて、雪美の話を聞いていた。

「私の姉さんも家出しているの。というより、病院に入院している時抜け出してそのまま帰ってきていなくてね。でも今帰ってきてても責めないわ。だって大切な姉だもの、貴女のお兄さんもきっと気にしていないわ。」

「そう・・・ですね、ありがとうございます。だいぶ楽になりました。」

それに雪美は莉麻のおでこをツンとつついて

「もう敬語はいいでしょ、だってもう私たち姉妹じゃない。」

「・・・うん、お姉ちゃん。」

こうして温泉で親睦を深めた二人だった。

場所・学園内マンション

フィルディアとサミーは部屋に戻ってきた。

「よし。」

サミーと黒い水晶は分離する。水晶はテーブルの上に乗る。

「あ、大きいママだ。わーい。」

サミーはフィルディアに突っ込む。

「……………サミー、良かった無事で！」

そのサミーをふわりと手で受け止める。

「ママ！もう痛くないんだね、良かった♪」

「……………サミー。」

無邪気にフィルディアを心配するサミーを見て、元に戻ったのだと分かり涙目になるフィルディア。

「大丈夫？まだ痛いのか？」

「…………ううん、これは嬉しい涙よ。」

そう言って優しく抱きしめる。

「さて、感動の再会はそれくらいにしな。聞きたいことがあるなら言える範囲なら教えてやる。」

はぶられた水晶は可哀想、ということで二人に話しかける。

「そうですね、サミー遊んでね。」

「わーーーーーい！！」

喜んで部屋の中を飛び始めた。

「それでは、貴方の目的を教えてください。」

「ふん、それを聞いてどうするつもりだ。お前には止められんぞ。」

少し声色を低くして水晶が話す。

「そうですね。ですが、貴方が本当に何をしているのか知らない限り私は協力できません。」

「……別にお前の力を借りるまでもないが……まあいいだろう、教えてやる。耳を貸せ！」

フィルディアは水晶に耳を近づけて、話を聞いた。

星音は夢を見ていた。

目の前には一人の少女がいた。
見たことがない少女

その少女は言う

力が欲しいかと

もういじめられないような

凄い力が欲しいかと

その為には貴女が

私を受け入れる必要があると

星音は答える

それでもいい

なんでもいい

どんなことでもすると

だから

あたしを強くして

続く

10. 孤独（後書き）

どうでしたか？

とりあえず今日はここまでにします。明日は11から22までを投稿予定です。

それではみなさんまた次回お会いしましょう！！

11. ロマンを求めて・前編 (前書き)

こんにちは、ロンロンの弟子です。
さて今日も張り切って行きましょう。
どうぞ!!

11. ロマンを求めて・前編

場所は変わり、宿の一室

「あの、僕は今日いいですからミュアさん一人で行って来てくださ
い。」

「・・・・・・・・駄目。・・・女の子・・・キレイにする。」

二人は部屋に戻ってきて浴場は温泉のみである事実を知り話し合いを

「・・・・・・・・行くよ。」

「うわーん。」

するまでもなくティルスは連れていかれてしまった。

「うーむ、原理はこれで合っているはずなんだがな。」

違う部屋で沙汰はパソコンを使い何やら作業をしていた。

「何やってるんだい？」

スイングは何もすることがなくボーっとしていたため沙汰の行動が気になっていた。

「ああ、ティルスにつけた指輪が何故外れないのか考えていた所だ。何が悪いのか見当がつかなくてな。」

「なるほど。」

そう言って作業に戻った沙汰。どうやら原因が分からないようだ。

急に部屋に誰か入ってくる。

「仕方がない、教えてあげようか。」

「誰だ！？」

二人は一斉に侵入者の方を向く。

そこには一人の初老の男、エルドイが立っていた。

「私は物知りの男とでも呼んでくれ。それはそうと指輪の原因知りたくないか？」

「……………なるほど、そりゃ知りたいさ。」

とりあえず只者ではないことを察した沙汰は頷く。

「ならばギブアンドテイクといこう。私は温泉の女子風呂が覗きたい。それを手伝ってくれたら教えてやろう。」

「……………あ。」

二人同時に声を上げる。どうやら男の正体に気付いたようだ。

「さてどうする、沙汰よ。君は一人の発明家として知りたいのではないか。私も男と話すのはとんでもなく嫌なのだが、今日はなんと月に1度の子供温泉無料の日だな。いつも覗いていたんだがこの前見つかってしまったって、ガードがきつくてどうしようかと思っていたのだ。このチャンスを逃す手はないのだよ。」

エルドイは目を血走らせて興奮しながら話す。見るからに危険すぎる。

「…………えーっと、本当に教えてくれるんだな。」

「当たり前だ、このためなら何でもするぞ。」

その言葉に沙汰はにやりとする。

「教えてほしいことが他に2つある。まず沙汰と莉麻の状態と場所を詳しく教えてほしいのと」

沙汰は一呼吸おき

「この世界、ディオールの真実だ。」

この部分を強調して言う。

「・・・そこに気付いたか。だがそれだけは駄目だ。」

「いんや、すべて教えてもらわないことには俺も動かないぜ。」

二人は睨みあう。そして

「し、仕方あるまい。この際だ、教えてやろう。だが、まず指輪、安否を話し、その後女湯を覗く。そして真実を話すの順番でどうだ？」

「いいだろう。話してくれ。」

「え、協力するの？」

頷く沙汰を見て驚くスィング。

「今は情報が欲しい。仕方ないな。」

「では話そう。」

エルドイは語り始める。

「何故外れないのか、これは彼女のつけた朱雀の指輪と反発しているのだな。朱雀の指輪が外れれば外すことが可能になるだろうな。」

「ほう、あの指輪何かあると思ったが・・・。」

うんうんと頷いて聞いている沙汰。彼女のところに気づいていないようだ。

「あの二人だが別々にいるみたいだ。泰人は今修行中だな。今のところ問題ないようだが果たして乗り越えられるかな。」

「大丈夫さ。あいつなら何とかするよ。」

「そうっすね。」

二人とも泰人を信頼しているようだ。

「そして莉麻だが、彼女は危険が迫っているな。正直もうすぐ決断が迫られるだろうな。」

「うーん、これは急がないとまずいな。」

少し慌ててるようだ。

「さて、覗きたいから何か貸してくれ。」

「仕方ないな。」

ミニパソに何かのキーを打ちこむ。

「ほれ、静かにして聞け。」

スピーカーを接続すると、音が流れる。

「・・・・・・・・着替えて、・・・・服を脱ぐ。」

「いや、自分で脱げますから。」

聞こえてきたのはティルスとミユアの会話である。

「・・・・・・・・行こ。」

「うーん、どうしてこうなったのかな。」

どうやら脱衣所にいたらしい。今から温泉に入るようだ。

「あの指輪には特殊加工してあってな、音声をとばしてこっちにも聞こえるように……」

「ふざけるなああああああ。」

うるさく叫ぶエルドイ。

「うるせえよ、なんだよ。」

「私は見たいんだよ。見たいんだよ。」

大事なことなので2回言いました。

「仕方ないだろ、それでも犯罪なんだよ。」

「まあ、これでもというか十分犯罪っすね。」

犯罪です。

「くそう、ならこれを使うからな。」

男は手に持った腕輪を沙汰達に見せる。

「おま……、それって……」

沙汰はポケットに手を入れる。

「……おいおい、洒落にならんぞ。返せ！」

「これは君の発明品の一つ”融合の腕輪”だな。これをつけた者は自由に他の物を融合できる。この腕輪で融合したものを分離することもできるようだな。」

アイテムの事を知っているように説明するエルドイ。

「それ使って何するんすか？」

「少女と融合して見た目のみをその子にすれば見放題だ!!」

「そんなことのために作ったんじゃないやねえよ！」

エルドイに飛びかかるが、

「ふん、その程度。」

軽くかわされる。身のこなしが明らかに素人ではない。

「私をなめるなよ、今までこんなこともあろうかと日々鍛えていたのだ。」

「・・・爺さんのくせに生意気だ。」

そしてエルドイは部屋から脱出する。

「逃がすかよ、水の芸術家これを。」

「おおっと。」

ビー玉を投げて渡す。

「あの爺さんをそいつで探してくれ。俺にはミニパソがあるから。」

「了解!」

二人も部屋を飛び出した。

「ふむ、ここまで来れば。」

宿のとある一室の前にエルドイは来ていた。

空き部屋のようにだ。

「さてここからどうするか。私が入口まで行くと強制的に男風呂に入れられてしまうし。男と融合するのは嫌だしな。」

「きゃっきゃ。」

するとエルドイの目の前を女の子3人が通過する。ティルスよりも年下のようである。

そのうち一人が女子トイレに入る。

「チャンスだな。」

エルドイは気配と存在感を消して女子トイレに入る。

「???」

少女二人は何か通った様な気がしたようだが気付けなかった。

少し経って女の子が出てくる。

「じゃ、行こー!」

「・・・う、うん。」

何やらテンションが高くなった少女を見て2人はちょっと戸惑ったが、温泉に入れるのが凄くうれしいのだと思い3人で温泉に向かった。

「・・・・・・寒気!」

「・・・どうかしたんですか?」

二人は温泉に入っていたが、ミユアは何かを感じたようだった。

続く

11. ロマンを求めて・前編 (後書き)

どうでしたか。

また次回見てもらえれば嬉しいです。

12. ロマンを求めて・後編

3人の少女達は、温泉入口まで来た。そこには警備員らしき女性が入っていく客を見ていた。荷物のチェックもしているようだ。

「さあ、次は君たちか。まあ大丈夫だとは思うが一応確認させてもらうよ。」

そう言って3人の荷物をチェックされる。勿論怪しいものなど何もなかった。

「よし、通っていいよ。」

許可をもらった3人は温泉の脱衣所に向かった。その時さっきトイレに入った少女がにやりと笑ったが誰も気づかなかった。

「……気のせい？」

ミユアはさっき感じた寒気は気のせいだと思ったことにした。彼女は今、ティルスと共に温泉で入浴中だ。

ティルスも最初は女湯に入るのをすごく嫌がっていたが、温泉に入るとそれもあまり感じなくなり今はゆっくりとつかっている。

「いや、温泉はいいですね。気持ちが安らぐというか、今日一日の

疲れがとれていく感じがしますね。」

「……………同感。」

そうボーっとしていると、3人の少女が入ってくる。別にそれくらい普通なのだが、そのうち一人が何やらキョロキョロとまわりを見ている。

「ん、どしたの？」

「あ、いや誰か知り合いがいるかと思って。あはは。」

その後軽く体を流し3人も湯につかる。その瞬間、さっきの少女の右腕に腕輪がしてあるのをミユアは見逃さなかった。

「(……………あの子、……………ちょっと変?)」

雰囲気の違いには気付いたが特に気にする必要もないと考え、ゆっくりすることにした。

「くそ、あの爺さんどこに行きやがったんだ。」

沙汰はとにかく宿内を駆け回っていた。エルドイを完全に見失い、かなり焦っているようだ。どうやら自分の作ったもので他人に迷惑をかけるのがすごく嫌みたいだ。まあ、当然だが。なんたって犯罪ですから！

「一体どこに・・・・・・・・・・そういえば、あれが使えるな！」
すると沙汰は突然何か思いついたようにミニパソを操作する。するとこの宿屋の地図が映し出されそこに赤い点が一つポツンと点灯している。

「これだ！よし、行ってみるか。」

その場所に沙汰はけっこう早足で向かった。

「・・・・・・・・・・ってマジか!？」

何度目を見開いても変わらない。そこは何をかくそう女子トイレだった。

「あの爺さんめ、どうやら今使おうとしているな!！」

頭に血が上っていたため、何も考えず沙汰は中に入った。幸運なことに中には誰もいなかったが、床に小さめの発信機が落ちていた。

「・・・・・・・・・・ははははは、もう許さねえぞ。」

引きつった笑みを浮かべ出ようとする、・・・・・・・・・・女性の見回り従業員に見つかった。

「何をしているんですか!？」

「え？あ、いやその、友人の落とし物を探しに・・・。」

何とか誤魔化そうとするが、その従業員は慌てて聞こえていないようだ。

「ととと、とにかくこちらに来てください!!」

「え、あ、ちょっと待って・・・。」

そのまま腕を引っ張られて事務室に連れていかれた沙汰だった。

「うーん、これ借りても俺っちあの人に思い入れほとんどないからなあ。」

スィングは沙汰とは逆方向を探していた。どうやらビー玉がうまく機能していない、というか使えないみたいだ。

「さて、どうしようか・・・ん？」

何やら悲しい感じの声が聞こえる。スィングはその声の聞こえるほうに歩いてみると、一人の少女が泣いていた。見た感じ5，6歳といたところか。

「やあ、何かあったのかい？」

「……………ひっく、お母さんとはぐれちゃったの。」

どうやら迷子のようだ。泣き終わるのを待って詳しく話を聞くと、今日少女は母親と一緒にここに温泉に入りに来たらしいがはしゃいで駆け回っていたら母親とはぐれてしまったようだ。

「そっか、ならば俺っちも君のお母さんを探してあげるっすよ。」

「……本当？お兄ちゃん、ありがとう。」

そう言って手を握ってくる。その手は小さく少し冷たかった。本当にさみしかったのだろう。心なしか握る手の力も強い。

「よし、じゃあ行こうか。」

「うん。」

二人は少女の母親を探すべくはぐれた場所へと向かった。

「畜生、ひどい目にあった。」

事務室に連れて行かれた沙汰は、女性従業員何人かに囲まれてこつ酷く怒られた。なんとか納得してもらえたものの、もうしないように釘を刺された。このように厳しくなったのもエルドイが頻繁に覗きをしているからみたいだ。

「あの爺、絶対に許さないぜ。一度ぶっ飛ばす必要がありそうだな。」

そう呟いて歩いていると、スイングが少女と一緒に歩いている所が目に入る。ぱっと見て兄妹が歩いているように見えた。沙汰はとりあえず声をかける。

「どうした、何かあったのか？」

「え、ああ。どうやらこの子がお母さんとはぐれてしまったようなんっすよね。」

そう言ってその子の頭を撫でる。するととてもうれしそうにふにやふにやする。

「それなら、俺が渡したビー玉使えばいいんじゃないか？」

それを聞いてあ、そうかと頷いたスイングは懷からビー玉を出し少女に軽く説明をして手渡す。

少女はそれを手にむむむと念じる。・・・すると

「美弥^{みや}!!」

それに釣られてきたのか、一人の女性がこっちに向かってきた。

「お母さん!!」

二人は抱き合う。どうやら本当に母親らしい。感動的な再会シーン

に沙汰達も嬉しそうだ。

そうしてしばらく経ち、少女の母親はお礼を言う。

「本当にありがとうございます、何とお礼を言ったらいいのか。」

「いやいや、俺っちは何もしてないっすよ。」

本当に何もしていないというもののやはり嬉しそうだ。そこに少女がビー玉を返してくれる。それと

「あ、これあげる。昨日洞窟に行った時拾ったの。」

そう言ってスィングに白く光る石を手渡す。それを受け取るとスィングはにっこり笑い、頭を軽く撫でてあげる。これまた嬉しそうだ。

「じゃあお兄ちゃん達、ばいばい！」

そう言って手を振り少女達は温泉に向かって行った。

「さて、目的と外れちゃったが、あの爺さんをどうするかだが……」

「あれから結構経ったからもう覗きしてんじゃないっすか？」

確かになと頷く沙汰。その顔はとても悔しそうだ。もう駄目なのかと思った沙汰だったが

「……そうだ、ティルスやミユアちゃんに協力してもらえばいい

んじゃないっすか。例えばさっきの音機能を使っただけか。」

「うーむ、本当は知られたくなかったんだがな。仕方ないか。」

そう言ってキーを打ちこんでいく沙汰。すぐに通話可能になる。

「ティルス！聞こえてるなら返事してくれ。」

ティルスのつけている変身の指輪から沙汰の声が聞こえる。ティルスは突然のこととびくりして立ち上がってしまった。周りの視線を一人占めにしてしまい、とても恥ずかしくなった。

「ちょっと、沙汰さんやめてください。ここ女湯ですよ。」

「なるほど、どうやらかなり慣れているようだな。いや、良かった良かった。」

沙汰が笑っている。それが聞こえたのか周りからまた見られる。ティルスはどんどん顔が赤くなっていった。

「まあそれは置いといて、近くに腕輪をした奴がいるかどうか見てくれないか？」

「・・・いる。」

ミューアにも会話が聞こえていたようだ。ティルスもミューアの見えてい

る方向に目を向ける。すると例の少女が湯につかりながらまわりをキョロキョロ見ている。心なしか嬉しそうに。

「そいつは変態科学者と融合している。俺の発明品を盗んで覗き……よりたちが悪いことをしようとしているんだ。」

「……え!？」

ティルスとミュアがはもった。そしてミュアは確信する。さっきの寒気はこのことだったのだと。

「そこで俺にいい考えがある。今から水の芸術家の能力を使い、この指輪から大量の蒸気を発生させるからそいつを脱衣所まで連れて来てくれ。警備の人に話して女湯の脱衣所の人を避難させておくら、そこで俺が奴の融合を解いてぶっ飛ばす。こんな感じだ。」

「分かりました。一大事ですからね、任せてください。」

ティルス達は軽く打ち合わせをして行動に移した。

静かに蒸気が噴出する。すると温泉内が白い霧のような感じで見えにくくなる。どうやら入っている人達は少しだけ気にしているようだが大事にはなっていない。

「……行くよ。」

しかしミュアには見えているようだ。かなりの早さで少女に近づき

拘束の術を使う。

「!？」

いきなりのことで少女も驚いて声を出そうとする瞬間、口をふさぎそのまま温泉を出た。

「よし、腕輪を触って解除と念じてくれ。」

すでにスタンバイしていた沙汰にタオルを渡しながら言われ、ミアは解除と念じる。
するとぶにゅっとして少女とエルドイに分離する。

「……………宜しく。」

ミアは自分と少女にタオルを巻いて少女を背負って一度脱衣所を出た。

「……………なるほどな。私を追い詰めるとは、やるじゃないか。」

エルドイは不気味に笑っている。まだ自分が有利と思っているらしい。

「何か考えがあるんでも関係ないぜ。2発で終わらせる。このエロ爺!!」

沙汰はいつものごとく高速でキーを打つ。するとまわりに小さいが大量の陣が展開される。

「現れろ、ミニ・カイチヨーズ!!」

すると小さいカイチヨーがその陣から出てくる。ぱっと見100匹くらいいる。

「行くぜ、カイチヨーズの体当たりを喰らえ。」

すると大量のカイチヨーズがエルドイに体当たりを始める。しかしエルドイは涼しい顔で全てをさばく。どうやら余裕そうだ。

「・・・はあはあ。」

だが数をこなすごとに徐々に疲れてくる。エルドイは何とかすべての攻撃を受け切り沙汰の方を向こうとすると

いない

「・・・しまった!!」

慌てて後ろを向くが時すでに遅し、沙汰はすでに陣を完成させていた。

「喰らえ、キャプテンカイチヨーだ。」

そこからものすごい速さでミニカイチョーが発射され、エルドイの腹をとらえる。そしてそのままの勢いで後ろのロッカーに突っ込み決着はついた。

その後、エルドイは警察に捕まった。流石に覗き以上の事をしたので言い逃れは・・・

「全く、お前は少しは手加減をするということをだな。」

できなかったが、周りの人たちと例の少女が許してあげて宿立入禁止で済んだ。今宿の外で沙汰に説教をしているようだが、聞き流しているみたいだ。

「さて、本題だ。この世界、ディオールについての真実を教えてもらおうか。」

その言葉を聞き、エルドイは説教をやめて真剣な表情になる。

「いいだろう、この世界の真実は」

そしてこの真実により

「闇のみぞ知る。」

沙汰達は何を考えるのだろうか。

続く

12. ロマンを求めて・後編（後書き）

どうでしたか。

また次回見てもらえれば嬉しいです。

13. 変化

場所は変わり、佐野家。

夜も明け日が昇る初夏のある日、星音は目を覚ます。

辺りをキヨロキヨロ見渡すと突然ニヤツと笑う。

支度を整えリビングへと向かうと朝食が置いてあり両親の姿はもうない。

星音は朝食を済ませ身支度を整え自宅を後にした。

「さあ、今日も頑張りましょう。」

フィルディアは今日も元気に生徒に挨拶しつつ出勤してきた。昨日と違い何か吹っ切れたように見える。

「まあ、俺は奴を探すことが先決なんだがな。奴が動くならそろそろ動くか。」

融合サミーも姿を消して隣を飛んでいた。どうやらフェイルディアは融合を許可したらしい。

「それも重要ですが、まず莉麻さんと話しあう方を優先しましょう。誤解したままではいけませんよ。」

「誤解ではない、そのままの意味だ。あいつが怒っても仕方のないことだな。」

サミーは少し寂しそうに答える。少しは気にしているようで、彼も少しずつ変わってきているようだ。

「・・・とりあえず放課後にお話ししましょう。それまで私のそばを離れないでくださいね。」

「だから俺は奴を・・・。」

フィルディアの言葉にサミーは・・・

「・・・！！？」

だったが、何かを感じたのか後ろを見る。そこには一人の少女、星音が立っていた。

「先生、おはようございます。」

「・・・ええ、おはようございます。」

星音はそう挨拶して立ち去った。

「・・・遅かった、ヤバいことになったな。」

「これは一緒に行動した方がいいですね。」

そのまま二人も職員室へと向かった。

がらがら

「おはよう。」

星音は教室へとやってきた。しかし誰も挨拶は返さず数人の少年達が彼女を囲む。

「今日も来たか。」

「本当お前はいつまで通い続けるんだよ。あ、学園長の娘だからし
ようがなくか。」

はははと笑う少年達。それ以外の生徒はそのやり取りを無視してそ
れぞれのことをしている。まるでそれがいつもの事のように。

「・・・うふふ。」

星音は突然笑い出す。

「おい、何がおかしいんだよ。」

少年の一人が星音の肩を掴もうとすると

・・・急に強い力が働き少年は吹っ飛ばされて教室の壁に叩きつけ

られる。

「……え？」

他の少年達は何が起こったのか分からず、ぽかーんとしている。他の生徒も叩きつけられた音に驚き反応している。

「……そうよ、悪夢はおしまい。いい夢に変えてあげる。」

それからしばらくして教師が入ってきてホームルームが始まる。

「そういえば今日はみんな静かだな。やっと自覚が出てきたかな。」

いつも賑やかだったそのクラスは今日は一変して静かだった。いつもうるさい少年達も必要最低限のことしか話さなくなった。少年だけでなく全員が、まるで感情をなくしたように。いや、ただひとりを除いて。

「うふふふ。」

星音はその後もずっと笑っていた。その笑みは見る者を恐怖させるような不気味な笑みだった。

キンコンカンと鐘が鳴り、放課後となる。莉麻は今日も普通に登校し授業を受けていた。

「莉麻ちゃん、一緒に帰ろう！」

昨日と同じ少女が莉麻を誘ってきた。

「ごめんね、今日もフィルディア先生に呼ばれているんだ。」

そう、朝のうちにフィルディアに放課後昨日と同じ教室に来てくれと言われていたのだ。そっか、じゃあ先帰るねと少女は言いそのまま下校した。莉麻はそれを見送って昨日の教室へと移動した。

教室に着くとすでにフィルディアがいた。サミーも一緒だ。

「呼び出してごめんなさいね。貴女にお話がありました。」

「いえ、私こそ昨日はいきなり帰ってしまってすみません。」

莉麻は頭を下げる。流石に反省したようだ。

「いえ、いいんですよ。ではお願いしますね。」

フィルディアが一步下がるとサミーが出てくる。

「・・・まあ、なんだ。ラルゴ使いの事で黙っていたことは謝罪する。だが・・・。」

「ううん、何か理由があったことぐらい分かってる。私こそ話を聞かなくてごめん。」

莉麻は2度目となる謝罪の言葉を口にし頭を下げる。

「・・・まあ、そのことはいい。ヤバいことになったからお前に伝えておこうと思ってな。」

「ヤバいこと？」

サミーの真剣な言葉に莉麻は耳を傾ける。

「今日俺の探してた奴が見つかった。だが手遅れでな、ちょっとまずいかもしれん。」

「・・・そんな！？一体どういうこと？」

「詳しく話してやる。ある事情で水晶になった俺は女の霊の搜索の為サミーを使い探していた。偶然にもティルスと会って奴の手伝いをしながらな。そしてその霊を見つけた俺は力不足だったためお前の肉体を借りて捕まえることに成功した。だが何が起こるか分からないと思った俺はもしもの時のためにラルゴ使いを知り合いに預け修行させることにしたんだ。そして俺は封印するためその方法を知っている人物に会いにこの世界に来た。その後は知っての通り逃げ

られて・・・その霊がある少女と契約をしてしまったらしいということだ。」

と一気に話すサミー。少し息切れしている。

「そっか、なんとなく分かった。お兄ちゃんが無事ならいいよ。でもその女の子は危ないんじゃない？」

「宿主に危害はない。だが周りにはすでに被害が出ている。今日一日学園内を調べてきたが、初等部という所の一クラスがやられていた。明日にでも手をうち奴を捕まえることにする。」

「えっと、じゃあ・・・。」

私にもできることはと言おうとしたが

「お前には雪美という女を見ていて欲しい。もしかすると俺の探していた人物かもしれないからな。できるだけ情報を引き出してほしい。」

「そっか、いいよ。何かあったら私が雪美さんを守るから！」

えっへんと胸を張り答える莉麻。

「ふむ、そうしてくれ。一応話は以上だ。じゃあ気をつけて帰れよ。」

「はい！」

大きく莉麻は返事をしてその場を後にした。

「いいんですか、この世界の秘密を話さなくても。」

「いいんだ。余計なことを気にさせるとあの女の情報を集めるのに支障が出そうだからな。」

そう言ってサミーは窓から夕暮の空を見上げた。

異空間

「うん、順調だな。このままいけば……。」

「僕の出番って訳か。」

暗闇の中、謎の男と……白虎が何かしら話していた。
目の前の箱闇の中ぽつんと光っていた。

続く

13. 変化（後書き）

どうでしたか。

また次回見てもらえれば嬉しいです。

14. 偽りの歴史1

場所は変わる。

沙汰達はエルドイからそう言われた。

「闇だと。例の寄生野郎のことか。」

「まあ、悪く言えばそうだな。だがこうなったのには深い理由がある。」

エルドイは一息つく。沙汰達も黙って話を聞いている。

「奴は元々一人の人間だった。だがある事件によって水晶の中に封印されてしまった。」

「まさか、その事件って……。」

ティルスが反応する。どうやら心当たりがあるようだ。

「ふむ、ヴィントルの災害のことだ。」

ティルスは驚く。ヴィントルの災害はこの世界の住民ほとんどが知っているほど有名な事件だ。まさかここでその話が出るとは思わなかったみたいだ。

「ちょっと待って下さい。闇の精霊は光の精霊の中に封印されているはずじゃないんですか。それが何故水晶なんですか。それに……、もう何があるんだが……。」

ティルスは混乱している。スィングも頭を抱えている。だが沙汰とミュアは普通に聞いている。

「なるほどな、俺は分かったぞ。・・・一部嘘だな、都合のいいような歴史を教えているんだ!!」

「いや、流石に歴史を偽るなんて・・・。」

いきなりの沙汰の発言をティルスが笑って流そうとすると

「・・・やはり只者ではなかったようだな、その通りだ。」

「えええええ!?!」

当たった。

「さて、今回はここまでだ。どのように偽っているかはまたの機会にしよう。もう夜も遅い。」

と言いながらもこの場所は洞窟みたいな場所だ。時間感覚はここに住んでいるものしか分からないだろう。

「分かりました。今日はありがとうございました。」

「これに懲りたらもう覗きなんてするんじゃないぞ。」

懲りるわけがない、恐らくまたするだろう。ティルス達がそう思っている。エルドイは振り返る。

「最後に一つ、最後の試練があるパレス、別名メデイスクローズの

神殿の近くに見える遺跡に行ってみるといい。そこで全てが分かるはずだ。」

「!？」

ミアがその言葉に反応する。しかしその反応を誰も見ていなかった。

「では失礼する。全く男と会うのはこれっきりにしたいものだ。」

今度こそ立ち去った。最後に変なことを言っていたが気にする必要はない。

「さて、今日はとりあえずこの辺にして後は寝ましょう。」

ティルスがそう言い4人は宿へと戻っていった。

夜中、女子部屋ではティルスがぐっすりと寝ている隣でミアはまだ寝ていなかった。

「・・・眠れない。」

いや、眠れないようだ。ミュアは窓辺にある椅子へと座る。そしてボーっと外の景色を眺めている。

「……………また遺跡に行くのね。」

ふとそう呟いた。遺跡、前に莉麻、謎の少女と共に訪れた場所。そこには何もないようで何かがある、そんな雰囲気があったことをミュアは覚えていた。

そして自分の事を考える。ミュアは記憶が曖昧だが何故か泰人の事は覚えている、というより知っている。不思議なものだ。そう思った。

「……………。」

これ以上考えても無駄だと思ったミュアはもう寝ることにした。泰人と元気な姿で合うために。そして……………。

「……………何がしたいの……………かな。」

男部屋

「あの爺さんのせいで一時はどうなることかと思ったが、まあ無事に取り返したしいとするか。さて、改良改良。」

沙汰はまたパソコンを弄っていた。

「この石一体何なのかな。」

スィングは少女美弥から貰った石を眺めていた。

次の日、沙汰達は宿を出てこの場所を後にした。
そして青い森の中、この森を出ようと歩いていた。

「次の目的地は、プロフェン村です。そこは親衛隊の一人、青龍の故郷でもありメディスクローズの神殿に最も近い場所です。」

「なるほど、んでそこはどこにあるんだ？」

その質問にティルスが顔を暗くする。

「実は……。」

と、ティルスが話す前に森を出た。すると目の前には

「……え？」

「こういうことです。」

反り立つ壁があった。垂直にそして上まで15mはある。

「ここを登れってことっすか!？」

「登る以外は浮遊の魔法を使うくらいしか……。ここはさっきの所と同様来る人を試しているようなんです。」

まさに挑戦者を笑うかのように立っている壁。それを見て沙汰はふと笑う。

「だったら、カイチョーを使うしかないな。これでひとつ飛びだ。」

「でもカイチョーは3人乗りなんじゃ……。」

カイチョーは3人乗りです。

「大丈夫、昨日の融合の指輪を使って合体させればいいのさ。」

そう言って指輪を取り出す沙汰は何か自慢げに見える。

「でも誰を何と？」

「ふふふ、考えてあるぜ。」

そう言って沙汰はまた何かを取り出す。どうやら少年の姿をしたぬいぐるみのようだ。昨日泊まった宿の売店で買ったらしい。

「これで水の芸術家と融合させて人形ベースにすれば重さはオツケーだ。今度は失敗しないから大丈夫、安心してくれ。」

「……………まあ、仕方ないっすね。」

渋々ながら指輪をつけたスィングは沙汰からぬいぐるみを受け取る。すると、ピカッと光り人形だけが残った。

「大丈夫か？」

「問題ない。」

という訳でスィングをしまい、沙汰はカイチョーを呼び出す。

「さて、一気に行くぜ！」

そう言って一気に上昇していった。

「ふむ、ここまで来ましたか。私達の故郷に。」

シュパルツが出てくる。その後ろには白マント1も一緒にいる。

「俺は奴らを追うことにする。そろそろ出番だからな。お前は例の戦いを見てくるといい。」

「かしこまりました。」

そう言ってシュパルツはパツと消えた。

「・・・・・・・・奴らが登るまで待つか。」

白マント1はしばらくその場で待機していた。

続く

14. 偽りの歴史1 (後書き)

どうでしたか？

また次回見てもらえたら嬉しいですよ！

15. 計画

フィルディア達は仕事を終えてマンションへと戻ってきた。するとサミーが水晶と分離する。

「わーい、なんか最近すんごく楽しいよー。」

サミーは楽しそうに部屋の中を飛び始めた。

「さて、どうしようかしら。貴方の仮説が正しいとしてその子がこの世界の鍵だとしたら……。」

「危険だな。今日奴が俺達の前に現れたのは余裕の表れだろう。確かにここまでは俺のミスで奴を有利にしてしまったが、例の人物を見つけることができれば僅かだが可能性はある。」

水晶はテレビに今まで探索した結果を写す。これを見て検証しているようだ。

「もしこの世界があの子によって作られた世界、つまり夢であるならばここはあの子の思うままに作り変えることができますね。」

「俺の考えではここはあの少女の悪夢なのだろう。そしてその少女はここが現実だと思い込んでいる。それがなぜなのか、今思いついたことを話す。」

水晶は更にテレビの映像を別のものに切り替える。そこに映っていたのは

「・・・莉麻ちゃん？」

「莉麻達がディオールにいたということは、もう一つの世界の時間が止まっていることが分かる。もし時間を止められたときですべていた人がいるとしたらどうなるか・・・。」

その言葉にフィルディアはハッとする。何かに気付いたようだ。

「まあ、その考えで合っているだろう。寝ていて夢を見ているならば、そこから出られなくなりこの世界を現実だと思っていくのだろう。」

「・・・それって、もう一つの世界からディオールに渡る際に生じる副作用と考えられますね。それが関係ない人達にも影響を与えているということですか。」

「・・・だから俺は反対したんだ。」

水晶はそう小声でつぶやいた。フィルディアには聞こえていないようだった。

「では、これらをまとめてこれからの行動方針ですが、少女とあの方を分離させて説得し元の世界に戻ってもらうですかね。」

「言うことを聞かなければ封印する。だが分離と封印は俺たちでは難しい。その力をもつ例の人物、恐らく水本雪美だと思われるがあの女に協力してもらえないかな。その為に向こうに莉麻を残し慣れさせ話を聞いてもらおうと、こんな感じだろう。」

水晶はそう言いテレビへ映像を写すのをやめた。

「まだ時間はあるだろう。すぐに行動に移さないということは、まだ準備ができていないということだ。だがもって後2、3日だろうな。後は莉麻頼みとはかなり不安になる、失敗したかもしれない。」

「大丈夫ですよ、信じましょう。」

フィルディアが気持ちを込めてそう言うと、仕方あるまいと水晶が返した。

水本家

夕食を終えた二人は少し時間を置き、再び温泉に入っていた。莉麻が一方的に話題を出しているようだ。

「それでまだ二日しか経ってないけど、友達もけっこうできたんだよ。」

「そう、それは良かったわね。」

そう言って莉麻の頭を優しく撫でると、莉麻は嬉しそうにえへへと呟く。

「それでね……お姉ちゃん？」

雪美はボーっと上を見ていた。どうやら何か考え事をしているようだ。

「どうしたの、何かあった？」

「え、……何でもないわよ。」

そう言ってほほ笑む雪美だが莉麻には分かった、何か自分に隠していることがあると。

「そっか、ならいいけど……。」

そして莉麻は雪美に抱きつく。

「え？」

「今日一緒に寝よ、少し寂しくなっちゃって。」

莉麻は甘えた声を出す。雪美にお世話になっている為何かしてあげたいと思ったのだろう。

「……いいわよ、一緒に寝ましょうか。」

「うん！」

その後も雪美はボーっとしていた。莉麻はそんな雪美を見て少し心配になるのだった。

「大丈夫、私がお姉ちゃんを守るからね。」

時間は戻り、佐野家

星音はいつものように帰ってきていつものように着替え、食事を済ませてリビングでボーっとしていた。

いやしているように見えるだけだ。心の中で星音と少女は会話していた。

「良かったわね、これでもう苛められることもないのよ。」

「……………違う、こんなのを望んでいたわけじゃないよ……………」

どうやら星音は少女のやり方が気に入らなかったようだ。やりすぎだと思ったのだろう。

「でも、約束は果たしたのよ。だから……………」

「いや!!」

頑なに拒否。

「……………まあ、今日の所はいいわ。そのうち納得してもらおうから。じゃあお風呂でも入ろうかしら。」

「……………。」

結局星音は心を許そうとしなかった。身体の方は少女が動かしている為少女はこの場は一回諦めてお風呂に入ることにした。

下着を取り出そうと部屋に戻り筆筒を開ける。

「・・・それにしても小学生にしてはきわどいの多いわね。」

「そ、それは・・・。」

お年頃なのかもしれませんねえ。

続く

15. 計画（後書き）

どうでしたか？

また次も見てもらえれば嬉しいです。

16. 因縁の対決・前編

時間は温泉での出来事が終わったところまで戻る。

フィドウとティライズが白虎の家で合流し今後について話し合っていた。

「私は明日一度城下町に戻ろうと思う。今回あったことを王に報告するために。」

「そうですね、それがいいです。」

その後も二人は今後について話をしていた。

夜、

ピコーン

と音がした。

「な、なんですか。」

フィドウはその音に驚く。どうやら室内のパソコンからなっているようだ。

早速チェックしてみるとどうやら沙汰からメールが届いているようだ。

どうやらエルドイの話について書いてあるみたいである。それと・・。

「早速読んでみましょう。」

それを読んでいると、どんどん顔が青くなっていく。

「ん、沙汰からか。私にも見せてくれ。」

「え、いやこれは・・・。」

テイライズが横から画面を覗く。するとそこには一緒に添付されていた画像が写っていた。

そうかわい少女姿のティルスが・・・。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・あはは、いやあかわいいですね。」

・・・シーン

「・・・あ、あの本題にいきましたようか」

メールの内容を開く。そこにはエルドイの語っていたことが書いてあった。

「ちょっと待て、歴史の一部が嘘だど！？どういうことだ。」

「確か今知られてる歴史を書いたのって……。」

そう今のディオールの歴史を伝えたのは、青龍、朱雀、白虎である。
ということは……。

「……これはいち早く伝えなくてはいけないな。」

ティライズはそう言って部屋を出ようとする。
それにフィドゥもついていく。

「貴方様一人では行かせられませんからね。役に立つか分かりませんが僕もついていきますよ。」

「………感謝する。」

そうティライズは呟いた。

二人はそのまま丘の上までやってきた。

「さて、どうやって行きますか？」

「大丈夫だ。こんなこともあるかともう手は打ってある。」

……すると、エンジン音が聞こえてくる。それがどんどん近づいてくる。

どうやら王族の車のようだ。

「この時間は列車もないからな。さっきこの近くの奴を呼んでおい
た。」

「流石ですね。」

車から一人の初老の男が出てくる。

「テイライズ様、フィドゥ様、お乗りください。急いで城へ参りま
しょう。」

「宜しく頼む。」

「お願いします。」

二人は男の車に乗り、城下町に向かって出発した。

車に乗ってる間テイライズは夢を見ていた。

そうあのとき見てしまったティルスの少女化の夢だ。

そう、妄想100%の・・・。

「ティライズくん、おはよう。」

少女ティルスは今日も可愛かった。

私、ティライズは今朝もティルスと会っていた。私たちは同じ年だ。同じ学びやで過ごしてきた。

彼女はとても可愛く人気があった。だが

「大丈夫、あたしはティライズ君が大好きだから。」

そう言ってくれたのだ。私は王族の子だけあって周りには何人か付き人がいた。それが嫌だった。もっと気軽に付き合える友人が欲しかったのだ。

そんなある日一人の少女が私に声をかけてきた。

「貴方いつもさみしそうだね。どうしたの？」

「別に、私はいつもこうさ。王族だからな。」

そう、そっけなく言った。私に付きまとう人間はどうせ、王族関係者と関わりを持ちたいやつだけだと思っていたからだ。だが

「王族とか平民とか関係ないよ。あたしはティライズ君、貴方とお話したいんだ。」

初めて聞いた。今まで私自身と話をしたいなんて言われたことがなかったのだ。

正直とても嬉しかった。
そして私はティルスと会話をしたのだった。

「・・・ティライズ君？」

おっと話を戻そう。今は学びやへ登校する所だったな。
さて今日もティルスと共に行こうじゃないか。

「ああ、今いくよ。」

私は幸せだった。

キキーーーーー
と急ブレーキがかかる。

「な、何だどうした。」

ティライズはそれに驚き目を覚ました。どうやら車の前に人が立っているようだった。白いマントを被っていた。

「ふむ、どうでしょうか。」

初老の男はかなりできるようだ。目の前の男がやばいことを肌で感じ取った。

「仕方ないな、私が行こう。」

ティライズは不機嫌だった。いい夢を見ていたからかもしれない。車から出て男の前に立つ。

「全く朝早すぎだ、眠くて仕方ない。」

「だったらそこをどいて寝ていろ。」

だが男はどこうとせずマントを脱いだ。そこには一人の少年が立っていた。

「今あんたにを王に会わせるのは駄目なんだよ。悪いけどお前も眠っていきくんね？」

「そうか、だったら貴様を倒してでも通させてもらうことにする。」

そう言ってティライズが構える。

すると少年は術を展開する。陣が出現しそこから炎が生まれティライズに襲いかかる。

「うーむ、あまり戦うのは好きじゃないんだがな。」

そう言ってティライズは右腕を上げる。

するとピカッと光る。すると少し短めの剣を握っていた。

「・・・そら!!」

それを振る。するとたちどころに炎が消える。

「やはりあんたもかなりやるようだな。ああ眠い。」

「人に知られたくないからあまり戦いたくないんだがな。・・・さてと、いくか。」

そう言ってティライズは剣を構えた。

朝日が昇る中二人の男が戦闘を開始しようとしていた。

続く

16. 因縁の対決・前編（後書き）

どうでしたか。

次回また見てもらえたら幸いです！

17. 因縁の対決・後編

ティライズが生まれる前の話。

「全くしくじったぜ。こんな失敗をするとは。」

城下町の外で一人の男は瀕死の重傷だった。今すぐに死んでもおかしくない、それほど大きな傷を負っていた。

「駄目だよ。いなくならないで、兄さん。」

そんな男を兄と慕っていた少年がいた。その少年は目に溜めた涙を溢れさせて男に呼び掛ける。

「・・・泣くな、マイブラザー。お前はどんな時でもよく寝る健康な男だったな。」

男は最後の力を振り絞り少年に笑いかける。そして

「・・・いいか、これから何が起こるか分からない。お前が俺の仇をとる気でいるなら・・・」。

そう言い目を閉じた。

「……兄さん？ねえ、目を開けてよ、兄さー！ー！ー！ーん！！」

少年の悲痛な叫びが辺りに響いた。

現在

空にシュパルツがいた。

シュパルツは上空で二人の対決が始まる所を見ていたが

「・・・さてと、報告しに行きましょうか。」

どこかに消えた。

「早く終わらせて寝たいからね、こっちから行かせてもらおうよ。」

そう言うと、少年は高速で術式を組み上げていく。そして、完成した陣から巨大な岩が生み出されティライズに向かって発射される。

「私にその程度の術が通じると思っているのか。」

そう言って軽々とその岩を切り裂き、巨大な岩が一瞬でバラバラになる。

「だよね。じゃあこれで終わってくれないか。」

そう言って、再び高速で術式を組み上げていく。そして、展開。そこから炎で創られた蛇が召喚される。火の蛇は、地を這ってティライズに近づいていく。かなりのスピードだ。

「なかなかだな。・・・だが！」

ティライズは手に持った剣を小さくする術を唱え、ナイフサイズにする。そして、一瞬で蛇との距離を詰める。

「!？」

一瞬のことで蛇も驚いたようだ。それをティライズは逃さず蛇を切り裂いた！少年は、蛇に再生能力をつけたのでそれほど気にしていなかったが、

シュワーーー！

火の蛇は消滅した。

「・・・・・・お前の剣っぽい物、魔術を無効化するタイプだな。とんでもないレアアイテムじゃないか。流石は王族というわけか。」

「そんなことはいい。もう分かっているだろう、貴様じゃ私には勝てん。」

思いつきって言ったように聞こえるが、あながち間違えでもなかった。

相性としてはティライズの方が有利なのは明確だ。

「そんなのやってみなけりゃ・・・・・・・・・・!？」

これまた一瞬だった。少年の目の前までティライズが来ていたのだ。流石の少年も今から術式はつくれない。

「ていや!!」

いつの間にか元のサイズになっていた剣でそのまま少年を右肩から右下に向かいズバツと切り裂いた。

「ぐっ!!」

痛みを耐えティライズとの間をとる。どうやら外傷はないようだが、凄く痛そうだ。

「私の剣は傷は残らない。だが、かなりの痛みがきているはずだ。」

「ちい、・・・これはかなり効いたぜ。」

相当ダメージがあるようだった。傷はないとはいえ切り裂かれた時とほぼ同じ痛みがきている。普通なら立ってはいられないのだが、少年はきつそうにしながらも立っている。

「私の方が強いのは明らかだ。これ以上は止めておいた方がいい、そこで寝ている。」

「・・・・・・・・・・。」

その通りだった。今のままでは明らかにティライズの方が上だ。

王族であるからそれほどでもない少年は考えていたようで、色々な意味でダメージは大きい。

もう戦えるほどの力も残って

「・・・駄目だ、王族にだけは負けるわけにはいかないんだ!!」

少年は咆哮した。

そして自分の肉体に術式を描いていく。

「俺の兄さんを殺した王を許すわけにはいかない!!」

術式を描き終わると少年の身体が輝く。

そして徐々に肉体に変化が訪れる。

身体全体が毛深くなり、爪が鋭く、まさに二本足で立つ狼だった。

「なるほど、獣族か。そういえば昔、獣族の少年を連れた男が王の暗殺をしてきて撃退したって話を聞いたな。」

「それは違う!! 兄さんは王の秘密を暴こうとして返り討ちにあった。どうして真実はいつも隠蔽されてしまうんだよ。」

そこでティライズは気付いた。沙汰から送られてきたメール、真実は闇のみぞ知る。

「だから俺はお前を王族にするためにある術式を使った。空間移動

が使えない者が王になる、それは国の一大事だからな。そしてその隙を狙い王を暗殺する予定だったが、・・・それは俺一人ではできなかった。だがある男が俺と組んでくれてな、ここまで上手くやってこれたんだ。だから・・・、ここで負けるわけにはいいかない。」

そして動き出す。ティライズが身構えるより早く狼少年はティライズに間合いを詰めた。

「・・・・・・・・ぬう。」

振りおろされた爪を弾こうと剣を出す。だが

パキーン

剣が折れる。

「・・・・・・・・し、しまった。」

遅かった。剣で弾ききれず右腕を切り裂かれる。今度は豪快に地が噴き出た。傷口はかなり深い。

「ぐあああー!!」

あまりの痛みに声が出てしまった。右腕からはぼたぼたと血が流れている。

「さて、今度はこっちが追い詰めたぞ。観念して近くの病院で寝てるんだな。」

「・・・嫌だ、私もここで引くわけにはいかないんだ。」

なんとか立ってみせるが、見るからに右腕が痛そうで動きそうになり。

「だったら、立てないくらいにしてやるよ!」

そう言ってまた間合いを詰められる。剣が折れており対応のしようもない。

ティライズは覚悟を決めた。

「駄目です!!」

突如フィドゥが飛び出しティライズに体当たりする。そして狼少年に背中を向ける。

「何!？」

そのままフィドゥは切り裂かれた。

「おい、大丈夫か!？」

ティライズは痛む右腕を抑えフィドゥに駆け寄る。

「・・・ティライズ・・・様。」

気絶した。初老の男が駆け寄ってきてすぐに応急処置を始める。

「邪魔が入ったな。自己犠牲とは、お前も好かれているな。」

「・・・残念だがもう貴様との戦いを終わりにする。次で決着をつける！」

ティライズは表情を変えた。どうやら本気を出すようだ。左腕で折れた剣を構える。

「そんな剣ではどうしようもないだろう、俺の勝ちだ!!」

また間合いを詰める。そして爪を振りおろす。ティライズは折れた剣で弾こうと対抗した。

「馬鹿か、それじゃあ意味が・・・」

ガキーン

爪が弾かれる。

「何!!?」

狼少年は驚き剣を見る。すると

・・・剣は確かに折れている。だが、剣から不思議な感じがした。

「・・・魔力補強か。」

そして狼少年は切られた。

狼少年は元の少年に戻った。どうやら気を失うと戻るようだ。

「……この男が私を王族にしたのか。それよりも、真実……と……は。」

ティライズも倒れてしまった。どうやら限界だったようだ。

そして倒れた3人を初老の男が応急処置を施し、車に乗せて病院へと走らせた。

その様子を上空でシュパルツが見ていた。

「王子が彼を倒すのは予定外でしたね。彼はもう要りません、そろそろ最終段階に入りましょうか。」

そう言って姿を消した。

城で王は玉座に座っていた。

「……そろそろ限界なのかもしれないな。」

そう呟いた。

続く

17. 因縁の対決・後編（後書き）

どうでしたか？

また次の話も見てもらえれば嬉しいです！

18. 始まりの合図

場所は変わり佐野家

星音はちょうどお風呂に入っていた。

「貴女は誰なの、何で私と一緒にいるの？」

「さあ？それよりやっぱり小学生ね、色々と未発達だわ。」

星音の話を軽く流して少女は星音の身体を確認する。勿論小学生な為まだまだである。そんな体型が好きな人にはいいのかもしれないが……。

「ちょっと！気にしてることを言わないで。」

「へえ、気にしているのね。別にこの年ならこんなものだと思うけれど……。」

少女は内心笑みをこぼす。何やらいいことを思いついたようだ。

「じゃあ大きくなった自分を想像してみてはどうかしら？面白いことが起きるかもよ。」

「え？う、うん。」

とりあえず少女の言うとおりで自分の大きくなった姿を想像してみる。
・・・すると

ポンっ

成長した。

「さてどうなったかしら？」

鏡の前に立ってみる。

するとだいたい高校生くらいの成長した星音の姿がそこにはあった。胸も大きくなり他の所も成長している。

「嘘！どうして・・・。」

「これが貴女の力よ。思い通りになる世界、貴女の望んだ世界。ここがそうなのよ。」

ここぞとばかりに言葉攻めをする少女。星音にはかなり効いているようだ。

「もしかして貴女はもう一人のあたしなの？」

「うふふ、どうかしらね。貴女がそう思うならそうなのかもね。」

はぐらかした。徐々に距離は狭まってきたように思える。

「いつでもいいわ、貴女が私を信用してくれたら私に全てを任せてちょうだい。きつとうまくやってみせるから。」

「・・・うん。」

甘い誘いに乗ってしまった星音。少しずつ信用してきた証である。

「さて、じゃあ元に戻りましょうか。」

「えーっと、・・・あたししばらくこのままがいいんだけど。」

「そう？ 貴女がいいならいいわよ。」

そうして星音はしばらくその姿を満喫していた。

水本家

莉麻と雪美はその後お風呂からあがり、夜が更けていった。
そして莉麻は雪美と一緒に寝に雪美の部屋を訪れた。

トントント

「お姉ちゃん、入っていいかな？」

「うん、いいよ。」

返事が来たのでそのままドアを開けて入る。

部屋の中はベッド、机、筆筒、本棚と必要最低限の物しか置かれていなかった。

「ベッドは一つしかないから一緒のベッドで寝ましようね。」

「うん！」

もう寝る準備はできている二人はそのままベッドの中へと潜り込んだ。

「・・・お姉ちゃん。」

「ん？」

ベッドに入って少し時間が経った頃、莉麻は雪美に声をかけた。

「何か私に隠してることあるでしょ。話してくれないかな。」

「・・・・・・・・・・。」

黙ってしまう雪美。どうやらかなり話にくいことらしい。

「大丈夫だよ。話したらきっと楽になる、私を信じて欲しいな。」

「・・・そうね、じゃあ話してみようかな。」

決意を決めたようだ。莉麻と向き合う。

「実は最近姉さんが帰ってくるような気がするの。」

「それって、家を出ているっていうお姉さん？」

「そうよ。夢に見るの、姉さんが私の所に帰ってくる夢を。でもその姉さんは私の知っている優しい姉さんとは違う、冷酷で残酷な・・・変わってしまった姉さんなの。もし本当にこうなったらと思うと怖い、あんなに大好きな姉さんなのに・・・・・。」

雪美の身体は震えていた。目は潤んで今にも泣きそうだった。それは見ても分かる大好きな人を心配する女の子の姿だった。

「・・・私あまり頭良くないけど大丈夫だと思うよ。」

「・・・・・でも」

「だってお兄ちゃんがきつと来てくれるから。」

「え？」

莉麻はニコツと笑う。その笑顔を見て雪美は何故か安心できるような気がした。

「私がピンチになったらいつも助けてくれたよ。だから私のお姉ちゃんのお姉さんもきつと助けてくれるよ。絶対!!!」

「・・・・・ふふ、貴女は本当にいい子ね。」

雪美も笑う。莉麻の頭をそつと撫でてあげる。

「じゃあ私も信じてみようかしら。貴女の信じてるお兄さんを。」

「うん!!」

こうして隠し事を話した雪美の表情は清々しかった。この後二人は仲良く抱き合って眠りに着いた。

それから数日、何事もなく時間が過ぎていった。

莉麻と雪美は更に絆を深め、星音と少女は徐々に打ち解けていった。水晶とフィルディアは何度か星音と少女を引き離す為に近づこうとするがことごとく邪魔をされ失敗。何かの時のための対抗策を考えることしかできなかった。

そしてある日ついに恐れていたことが起こってしまう。

「畜生!! なんだあの障壁は。どうしてあの子供に近づけないんだよ。」

「どうやら私たちが思っているよりも早くあの方がことを起こした

とみていいでしょう。あれから数日過ぎましたしもしかするともう・
・・・・」

職員室で仕事をしていたフィルディアはテレパシーを使いサミーと会話していた。

「もう莉麻と奴らに賭けるしかないのか。・・・この俺がこの様とは。」

「信じましょう、莉麻ちゃんと泰人さん達を・・・。」

場所は変わり星音の教室。
授業を受けていた星音がついに・・・。

「ねえ、ちよつといいかな？」

少女に心の中で会話する。

「ん、どうしたのかしら？」

「うん、そろそろ貴女の事を信じてみてもいいかなって思って。」

その言葉に少女は微笑する。ついにこの時が来たのだと。

「いいわ、じゃあ私の事を信じるって思い続けて。」

「うん。」

こうして契約は完了した。

学園、この世界の雰囲気が急に変わる。
何かが始まる、そんな気がする空気だ。
果たして何が始まるのであろうか。

続く

18. 始まりの合図（後書き）

どうでしたか？

とりあえず今はここまでにします。後は夜に投稿します。

それでは皆さんまた次回お会いしましょう！！

19. 最後の試練・前編（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。
それでは再開していきましよう！
どうぞ。

19. 最後の試練・前編

びゅーーーーん

カイチョーが一気に崖を登りきる。

「着いたぜ、ここがプロフェン村か。」

沙汰達はカイチョーから降りる。目の前にはいかにも古そうな村が広がっていた。

ポケットから人形を取り出す。するとすぐに変化が起こり、スイングと人形に別れた。

「いやいや、これ結構楽っすね。全然違和感もないし。」

「そうなんだよ君、その違和感を失くすところにかなり力を入れているんだぜ。」

とまあ軽く会話をした後とりあえず村に入ってみることにした。

まずは宿を確保した。男女2ずつで。

「今日中にでも試練をすべて終わらせたいです。少しでも早く戻りたいですよ。」

少女テイルスの弦きを軽くスルーし、情報を集めるべくまずは宿の

人に話を聞くことにした。
沙汰は受付に行った。

「ちょっと聞きたいことが……。」

「旅の人、ちょうど良かった。長老が貴方達を呼んでいる。長老の家はこの宿の近くだ。」

そう言われたため、4人はとりあえず長老とやらの家に行くことにした。

「ここか、……分かりやすいな。」

裏に大きな屋敷があった。この古い村には不釣り合いだった。そしてここが長老の家のようにだ。

「……これだけ警備がしっかりしてれば分かるにきまつてるっすね。」

「それでは行きましょう。」

屋敷の前の警備の男たちはすぐに旅の者と知ると屋敷の中に通してくれた。

屋敷の中はとても広かった。なんか豪華な絵やら壺やらが飾ってある。

「・・・・・・豪華。」

「ああ、こんな人を拒絶した場所にあるのにな。まあ、こんな所だからってのもあるかも知れんが。」

長老の部屋に通された。そこには白い髭を蓄えたいかにも偉そうな男が椅子に座っていた。

「下がってよいぞ。」

「はっ！」

男たちは部屋を出ていった。

「さて座ってください、客人など何年ぶりかのう。」

沙汰達は言われた通り座る。すると長老は話しだす。

「さてこんな辺鄙なところに来たのには何かあるのだろう。話してみなされ。」

「はい、実は・・・・・・。」

ティルスは試練の事を話した。

「なるほど、ついにこの時が来たのか。」

「何のことですか？」

すると長老は真剣な顔つきになる。

「ここはあの親衛隊の一人、青龍様の故郷じゃ。試練の神殿は親衛隊と所縁のある所に建てられた。いつかは来るとは思っておったよ。だが……。」

長老は4人の顔を見て言う。

「王子候補がおらんようじゃな。その娘はティルス様に似ておるようじゃが……。」

少女ティルスの方を見てそう言う。それに対して

「実は事情がありまして僕がティルスなんですよ。」

少女ティルスはそう答える。指輪のことも説明する。

「なるほど、それは災難でしたな。」

「分かってくれますか!!」

ティルスは嬉しそうだった。自分の理解者がいたのだ。沙汰達はほとんど気にしていないから理解者は嬉しいのだろう。

「となれば行きましょう。わしが案内しましょう。」

ということで長老についていくことにした。

上空

白マントの男が屋敷から出ていく沙汰達を見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「いかがですか？」

「・・・シュパルツか。」

男の後ろにはいつの間にかシュパルツがいた。男は特に気にしていないようだが。

「ご報告に来たのですがいいですか？」

「話せ。」

シュパルツはティライズと少年の対決について話した。そのティライズ達が王都の病院で入院していることも。

「確かに予想外だ。奴は白虎より少し劣るくらいの実力だ。ティライズがそれほど強いとはな。」

「はい。これからどうしますか？ティルスの抹殺は。」

「いや、それはもういい。闇の奴が動いた時からすでに違う手は考

えてある。」

.....

「なるほど。ではもう復活したのですね。」

「ふむ、やはりあれを玄武の孫に渡して正解だった。向こうの事が丸分かりだからな。フィルディアにも感謝しておこうか。」

「ということは逆に試練を合格してもらわないと困りますね。」

男は深く頷く。

「朱雀を倒せないと駄目だからな。まあ、駄目なようなら力を貸すしかないな。」

「分かりました。」

長老に連れられて4人はメディスクローズの神殿前まで来た。

「それでは良い結果を期待していますぞ。」

そう言って長老はもと来た道に戻って行った。
メデイスクローズの神殿はさっきの屋敷くらいの大きさがある神殿
だった。

「さて俺がティルスと共に行くぜ。お前らはここで待っていてくれ。
」

「では頑張ってくださいよ。」

2人は神殿の中に入っていった。

「・・・・・・・・頑張れ。」

中はただただ広かった。そして目の前に龍の石像があるのみで他には何もなかった。

「来たか・・・・・・・・ん？」

石像が喋ったが急に口ごもる。

「ふむ、今度の王子候補は女装趣味でもあるのか。まあ、別に悪い
とは言わんぞ。」

「うわーん。」

勘違いされてしまった。

「さて始めるとしようか。今回はある作られた空間に行ってもらおう。そこでレゾナールと呼ばれる石を手に入れて来てもらおう。手に入れた時合格としよう。それでは早速行ってもらおうか。」

「いつでもいいぜ。」

「大丈夫です。」

二人は答える。準備はできているようだ。

「・・・まあ、多少の事には動じないように気をつけろ。では行つてこい。」

そう言われて二人は違う空間に飛ばされた。

果たしてどのような試練なのか!?

続く

19. 最後の試練・前編（後書き）

どうでしたか？

また次回見てもらえたら嬉しいです。

20. 最後の試練・中編

一瞬の出来事だった。沙汰は見知らぬ場所に飛ばされていた。

「なんかテレビとかで見るような風景だな。」

まるで古の都である。レンガ造りの古い建物が町全体に建っている。そして気付いた。近くにティルスがないことに。

「とりあえず探してみるか。」

ティルスを探しながら沙汰は考えていた。今回の試練は最後なのだから難しいものになるだろう。

目的はレゾナールと呼ばれる石を見つけること。これに何か意味はあるのだろうかと思った。

「今までの試練を振りかえってみるか。最初以外はいずれも王と従者の力を見るような試練が多かった。4つ目は朱雀が関わっているらしいがちゃんと分かっていない。まあ、戦うことにはならないと思うが、一応考えの一つに入れておこう。そして今回か……。」

そう考えていると前の路地から一人の少女が飛び出してきた。見たことのある姿だ、というよりティルスだった。

「おう、大丈夫だったか？はぐれたから驚いたぜ。」

「……え？」

そう言われて沙汰は考えた。そして少女を見た。両手に指輪をして

いない。それに着ている服は純白のドレスだ。ミユアが選んだ服ではない。

「ちょっとこっちこい。」

「あのちよつと・・・。」

沙汰は出来るだけ人気がなさそうな所へ少女を連れ込んだ。

少女は特に抵抗しなかったがかなり戸惑っているようだった。

そして裏路地に少女を連れ込むことに成功する。

「さて、お前は何者だ？そっくりさんキャラクターはかなり重要だと思っただが。」

「えっと、・・・とりあえず自己紹介しますね。私はティルアーネです、この国の王女をしているんですよ。」

と返された。名前が似ているのはこの際どうでもいいとして・・・

「あのさ、王女さんがこんな所にいるわけないだろう。誰かに狙われて逃げて来たんだったら別だが。」

「それは・・・。」

するとティルアーネは沙汰に抱きついてくる。

いきなりの事で沙汰も少し動揺するかと思いきやそうではなかった。

「ふむ、ティルスか。王女と融合でもしたのか。まあ不思議でもないが。」

「な、何で分かるんですか？」

ティルアーネは驚く。どうやら本当のことらしい。自分から話すまえに当てられたのには流石に驚いたようだが。

「こんな町中で普通の王女に会う訳ないからな。そいつがキーならお前かと思ったんだがその口ぶりでは恐らくあってるようだが、つか俺相手に女言葉はいらねえよ。・・・まあそっちに目覚めたんなら別だけどな。」

「違いますよ!!」

ティルアーネは思いつきり否定する。

「さっきのは本物の王女です。今二人で一つの身体を共有している訳です。」

「知ってるよ。冗談に決まっているじゃないか。」

振り回されるティルアーネ。とても疲れたような表情をしている。

「さて、王女さんに質問だ。こんな所歩いてんだ。何かあったんだろう？」

「はい、実は・・・。」

いつの間にか出てきた本物のティルアーネの話はこうだった。彼女はこの国、クリスタの王女で今日はお忍びでこの町をまわっていたようだ。

その時とある一人の男に襲われてしまい、逃げている所でティルスと融合。そして今後の事を話している所に沙汰と出会った・・・という事だった。

「じゃあそいつを倒せばいいな。さて、報酬何かないか？例えばレゾナールと呼ばれている石とかさ。」

「あ、はい。この国に伝わる宝石、確かにレゾナールと呼ばれています。」

そう言って懷から宝石を取り出す。赤紫に光るそれは宝石を知らないやつが見ても丸分かりだった。

「じゃあ報酬を先にもらっと・・・」

スカッ

沙汰の手が空をきった。

「何!？」

王女が何かした訳ではない。第3者が現れて奪ったのだ。沙汰は振り返る。そこにいたのは・・・

「ふむ、勝手に過程を飛ばされるのは面倒ですね。」

赤い服を着た男、朱雀だった。

「な、何故貴方がこんな所に!？」

ティルアーネ、いやティルスが後ずさりする。それを見た沙汰は瞬

時に理解する。

「お前が朱雀か。全く嫌な予感の方が的中しちゃったか。」

「面倒な会話はいりません。私を倒してこの宝石を手に入れば、一気に二つの試練を合格したことになり全過程が終了する訳です。いや、なんて面倒じゃないんだ。嬉しいですよ。」

朱雀は無表情のままはっはっはと笑っているような声を出している。

それはとても不気味だった。

「・・・こいつは少し危険かもな。」

流石の沙汰も危険を感じ取ったようだ。ミニパソを取り出して戦闘態勢に入る。

そして慌てているテイルアーネを戦闘場所から少し離れた所に避難させる。

「貴方は玄武の孫ではないですね。正直どうでもいいようなのと戦闘するのは時間の無駄でとても面倒なのですが・・・。」

「大丈夫だ。白虎やここまで出てきた変な奴らのデータは解析済みだ。そう簡単にはやられんし勝つ自信だってあるぜ。」

大きく出た。だが沙汰はかなりの自信があった。

あれから暇な時間は研究に使ってきたのだ。それもすべてテイルスの試練を合格させるため・・・だけではないようだ。

「なるほど。では白虎位はありとみていきますか。ですが私は・・・

」

気がつくとも沙汰の後ろにいた。そして思いっきり背中を蹴られる。

「ぐあ。」

おもいっきり吹っ飛ばされる。

「彼より強いので気をつけてくださいね。」

そう言う朱雀の背中には赤く輝く翼が生えていた。

続く

20. 最後の試練・中編（後書き）

どうでしたか？

次も見てくれたら嬉しいです！

21. 最後の試練・後編（前書き）

さて今回の話ですが、後編1と2を合わせたため長くなっています。区切るところが少し微妙だった気がするので繋げてみました。それではどうぞ！

21. 最後の試練・後編

一体どうしてこんなことになったのでしょうか。

私はクリスタの王女、ティルアーネ。

今日はお忍びでこの町に来ましたのにティルス様と名乗る少年？と一つになったり変な男性に追われたりと私、何かしてしまったのでしょうか？

・・・そもそも私は本当にここにいるのでしょうか？

ティルアーネという女性は存在している人物なのでしょうか？

よく・・・分からなくなってきました。

そして、この光景も・・・。

「ぐあ！」

蹴っ飛ばされた沙汰は住宅の壁に激突する。

壁にはひび割れが起きてその衝撃を物語っている。

朱雀はその光景を満足そうに見ている。

「沙汰さん!!」

ティルアーネは駆け寄ろうとするが、沙汰は手でストップをかける。

「・・・お前はそこにいろ。こいつはかつこよく俺が倒してやるからよ。」

そう言って立ち上がる沙汰だが、元々身体を鍛えていないので少しのダメージでもかなり響く。しかも今回はかなりの実力を持つ男の蹴りをまともに受けたのだ。相当効いているのかかなりふらついている。

「蹴り一発でこれとは、面倒ではないですが少し拍子抜けですね。」

「つたく、俺はあいつみたいに打たれ強くないんだよ。・・・やるしかないみたいだな。」

痛みに耐えながらも沙汰は朱雀を見る。隙がありそうでない。どうやら戦って勝つ以外宝石を奪えそうもないようだった。そう判断しミニパソを開き驚異的なスピードで入力していく。

すると目の前に陣が出現、そこからカイチョーが召喚される。

カイチョーは沙汰を背中に乗せると上空へと上昇する。

「なるほど、なかなか賢そうな鳥ですね。それにしても私相手に空中戦とは、面倒ではないことばかりですね。」

朱雀はその赤い翼を広げ飛び立とうとする。

「ちょっと待ってください!!」

ティルアーネは飛び立とうとする朱雀にストップをかける。それに朱雀は素直に従いティルアーネの方を見る。

「どうして貴方がここにいるんですか？ 今僕は別の試練を受けているはずなんですが。」

そんなティルアーネの問いかけに対して、やれやれと朱雀は答える。

「このほうが面倒じゃないでしょう。それだけですよ。」

そんな一言だった。あまりにも内容がない答えだったためティルアーネも呆気にとられた。

すると朱雀は真面目な表情になる。

「一つ忠告しておきましょう。この空間で発生するダメージはこの空間を出た後にも継続されます。……さて、彼は無事に元の世界に帰れますかねえ。」

ティルアーネは一瞬恐怖する。朱雀から溢れる謎の気配に圧倒されたからだ。一体それがなんなのかは彼女には分からなかったが。

「では、私は行きますよ。せいぜい面倒にならないように祈ってください。」

そう笑って言うとき朱雀は上空へと羽ばたいていった。

その光景を見ていた王女のティルアーネは茫然としていた。

いきなり色々なことが起こったのだ、無理もない。

「あのティルス様、少々お聞きしてもいいですか？」

「・・・え？あ、はい。僕の答えられるような範囲でなら。」

心の中でティルスに質問した。内容は沙汰と朱雀、ティルス自身のことだった。

それに対してティルスはこう答えた。

「僕はとある世界の王様候補なんです。沙汰さんは僕を守ってくれる付き人の一人です。そしてその試練としてこの世界に来たんですが、どうやらあの人と戦わなくてはならないようです。あの方は朱雀さんといって僕の世界の昔の王の親衛隊の一人でした。とてもさぼり癖、怠け癖のあるやる気のない人でしたが実力は親衛隊でもトップクラス。しかも本気を出すと町一つが消えるほどらしいです。」

「でも、あの方とてもやる気に満ちていました。貴方の話のような人には見えませんでした。」

ティルスは考えた。自分が初めて会った時は確かにやる気がなかった。だが今は違う。

そこで考える。彼が本気を出さなくてはいけない理由。

「真実は闇の中・・・やはりあの事件が関係あるのかもしれないですね。」

「・・・え？」

そう呟いた。

カイチョーに乗って沙汰は上空に来了。ティルスや王女を戦いに巻き込みたくなかったからだ、一方で失敗したとも思っていた。

朱雀には羽が生えていて明らかに空を飛ぶ勢いの羽だった。ということは空中戦の方が得意だと考えられる。

しかし今更遅い。沙汰は奥の手をいくつか仕込むためミニパソと向き合う。

そこに朱雀が追い付いてくる。

「見ただけで分かりますよ。貴方のそれは凄いと。全く一般人とは思えないくらいにね。」

そう言いつつ戦闘態勢をとる。沙汰には良く分からないがかなり鍛えられた構えみたいくらいは理解できた。格闘術初心者では全く歯が立たないことも。

「まあ、俺はあんたと格闘術で勝負したい訳じゃないし。さて、行くぜ。」

沙汰が入力を終わると沙汰の前に無数の小さな陣が出現、そこから

ミニカイチョーが飛び出し朱雀に向かって行く。見た所数百匹はいるようだ。

「なるほど、これほどの数を召喚するとはなかなかやりますね。」

だが余裕そうに右腕を向ける。すると朱雀は炎の壁のようなものに包まれる。

ミニカイチョーズは急に止まれず次々にその壁に突っ込んで燃え散ってしまう。

「・・・ちっ、止まれ！」

沙汰がストップをかけるが後1匹しか残っていなかった。沙汰は距離をとるためか急降下を始める。

「逃がしません。」

壁を消して沙汰を追うように降下する。

「さあ、追いつきましたよ。」

すぐに追いつかれる。朱雀は火の玉を発射させる。

カイチョーはかわそうとするがギリギリで羽に掠り燃える。

「ギャッ。」

相当熱いのか痛そうな声を上げるカイチョー。

沙汰はしやうがなく家の屋根に跳び下りる。

「よし、戻・・・」

ドスッ

遅かった。すでに目の前に朱雀はいた。沙汰が気付いた時にはすでにカイチョーは一撃を入れられ消滅した。沙汰は咄嗟に思いつき後ろに跳ぶ。

「無駄ですよ。」

朱雀は掌を沙汰に向けるときっきの火の玉の倍の大きさのものが沙汰に向かって行く。

「・・・カイチョーは十分時間を稼いださ。」

瞬間、沙汰の目の前に陣が出現し、ヒポポスが召喚される。それと同時にヒポポスは火の玉目掛けて水を発射、・・・相殺する。

「なるほど、ならばこちらにも召喚といきましようかね、面倒ですが。」

そう言うとき朱雀は手を挙げる。すると上空を覆うように巨大な陣が出現する。

どうやら巨大な何かを召喚しようとしているようだが陣が巨大な分、召喚まで少し時間が掛かるようだ。

「何かヤバそうだな、出させてたまるか。」

ヒポポスが水を陣目掛けて発射する。
が、朱雀は火の玉を水目掛けて発射、相殺する。

「まあ、慌てないでください。面倒な分結構凄いですよ。」

それから何度か試したが結局陣は消せない。
そうしているうちにも陣はどんどん完成していく。

「……………仕方ない、こっちも奥の手を召喚するしかないか。」

沙汰はミニパソに何かを入力していく。それは何かいつもと違う感じがするようだ。

しかし、沙汰が完成させる前に巨大陣が完成しそこから何かが出てくる。

ズズズッ

それは巨大な鷹のような鳥だった。だが全身が赤く輝いており何より全長が30m近くあるほどの大きさだった。
そしてその鳥は何か不気味な力を感じる。強大な力のようだ。

「クエーーーーー!!」

雄たけびを上げる。すると町全体が震える。

ビキビキビキという音が聞こえるほどだ。

思わず沙汰は両耳を押さえてしゃがみこむ。

だが、ヒポポスはもろに受けてしまい悲痛な声をあげて消滅してしまった。

「・・・・・・・・こいつはやべえな。」

流石に沙汰もその力に気付いたようだ。
両足が震え恐怖すら感じる。

「さて、あなたの力を見せなさい。」

朱雀の声に合わせるように巨大な鷹は口から火を噴く。それはとてもない勢いで広まっていく。

「ちょ、待て。やばいって。」

沙汰は思いっきり助走をとり隣の屋根に跳び移る。
何とか着地に成功、元いた家の方を見ると・・・

何もなかった。

「ふむ、避けましたか。面倒ですが一撃で終わっては何とも呆氣ないですからね。」

朱雀は上空で沙汰を見降ろすようにしてそう言った。
状況は誰が見ても一方的だった。

だが沙汰は笑っていた。まだ何かあるように。

「仕方ねえ、奴を出すか。俺は責任持たないからな。」

そして、沙汰の陣が完成し展開される。

そこから出てきたものは……………。

「出てきやがれ、俺の切り札!!」

……………真っ黒な蜘蛛だった。

「…………ふっ、何ですかそれは。それで私のスラデイスに勝つつもりですか？」

どうやら鳥の名前はスラデイスというようだ。

だが沙汰は本気だった。その蜘蛛こそが沙汰の奥の手なのだ。

「当然だ、さて行って来い。ミニカイチョー！」

生き残っていた最後のミニカイチョー。いつの間にか沙汰が回収されていたようだ。

「その程度は焼き払ってあげますよ。」

だ。

「全く、学習しませ……ん？」

さっきまでの炎に弱かった姿はもうない。

朱雀は少し動揺し、沙汰の方を見る。沙汰は何やら勝ち誇った表情をしている。

[illegible]

そのまま口に吸い込まれるように入って行った。

それには朱雀も驚いた。一体何をするのか見当もつかなかったからだ。

そしてその隙を狙い沙汰はポケットから何かを取り出す。

それは導きのビー玉だった。

「さて、悪いがそいつは攻略させてもらう。頼むぜ、SPD!!」

その蜘蛛の名前はSPD、スパイダーの略称だった。

SPDは糸を一本吐き出す。その糸はピンとまっすぐ伸びてスラデイスに向かって行く。

その糸もスラディアスの炎を受け切る。耐熱加工はバッチリだ。

「ふふ、それで貫くつもりでしょうが面倒なことにスラディアスは不死の効果を持っています。ずっと共に生きてきた私の相棒ですからね。それくらい当然……」

「だろうな。だと思ってミニカイチョーを先に行かせたんだよ。」

朱雀の話しの途中に割り込む沙汰。導きのビー玉を見る。するとそれにはミニカイチョーの居場所が映っていた。その場所は……

「よし、貫け!!」

そこ目掛けて勢いよく糸が伸びていく。

そうそこは……

「し、しまった!」

スラディアスの急所だった。そこを糸が貫く!

「グギヤアアアア・・・。」

とんでもない声を上げるスラディアス。そしてそのまま・・・陣の中へと逃げ帰っていった。

「ま、まさかその為に・・・!？」

伸びた糸は急に方向転換をして朱雀に向かって行く。いきなりの事で朱雀も反応が遅れてしまった。

「くっ!」

何とか炎の壁を張るも耐熱効果を持った糸に突破を許す。その糸は硬化し朱雀目掛けて振り下ろされる。

ズバッ

「クッ・・・。」

寸前でかわすもちゃんとかわしきれず左腕が切り落とされた。

力なく沙汰とは反対の屋根に着地する。その姿はかなり痛々しかった。

「わ、悪いな。俺はこんな所で負けられないし・・・。」

沙汰も悪いと思っているらしく謝る。

だが、朱雀は

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふふふふふふふふ、あはははははははははははははははは。」

思いつきり笑っていた。

「な、な!？」

その笑いは恐怖だった。左腕をなくした朱雀は笑っていた。そう凄く楽しそうに。そして

「・・・ディアスト。」

ズンッ

「・・・え？」

沙汰は殴られた。それも思いっきり。そして沙汰の瞳に映ったのは・・・銀色の炎に包まれた朱雀の姿だった。

朱雀は自分の真の名前を言うことにより覚醒する。

それは白虎、玄武も同様である。青龍の覚醒だけは誰も見たことがないらしいが。

「グハア、・・・・・・・・ゲホッ。」

ふっ飛ばされはしなかったがさっきの倍以上の痛みが全身に走る。正直立ってられる痛みでも正気を保てる痛みでもない。それほどきつい。

「私の腕を落とすとは、・・・あの男を思い出しますねええ。」

見る者全てが恐怖するほどの笑みを浮かべそう言った。明らかに先ほどの雰囲気と違った。

さっきよりも力が高まり誰が見ても分かるほどまでになっている。しかし、沙汰は動けなかった。起きているほどがやっとなのだ。気を抜くと気絶しそうだった。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか。」

朱雀は構える。右腕に力を集中しているようだ。

そこにミニカイチョーが突っ込んでくる。

どうやら貫いた隙間から脱出したようだった。

それも彼の後ろへ。朱雀も気づいていないようだ。そして彼に接触したと思った瞬間

シュッ

ミニカイチョーは消えた。

「・・・な!？」

沙汰は驚いた。今回は壁を張っていない。なのになぜミニカイチョーは消えたのか。

そこで気付く。彼が纏っている銀色の炎、あれはさっきみたいな見せかけではなく本当に存在しているのだと。それが耐熱効果で防げないほどの熱さであるのだと。

「さて、この蜘蛛の黒さ。まさかとは思っていましたが今なら納得ですね。全く面倒なことをしてくれました。」

いつのまにかSPDは朱雀に掴まれていた。
ギリギリと力を加えていき

グシャッ

潰れた。

沙汰はこの隙にミニパソを弄っていた。

全身の痛みを抑え何かないと探していたが

気付くと今弄っていたはずのミニパソがなくなっていた。

「・・・!？」

沙汰は朱雀の方を見る。朱雀は沙汰のミニパソを持っていた。

「なるほど、確かにあの男の力を感じます。全く面倒なことを。だが、それも終わりですよ!!」

ガシャーン

ミニパソが叩きつけられ大破した。

「あ、・・・あああああああああああああ。」

沙汰は叫んだ。全身の痛みなどもうどうでもよかった。

彼の大事な宝が目の前で破壊されたのだ。もう何も考えられなかった

そしてすぐ目の前に朱雀がきた。すでに力の補給も終わっている。

「・・・・・・・・逝きなさい。」

バキッ

鈍い音を立てて沙汰は吹っ飛ばされそのまま下へと落ちる。

ベチャッ

そのまま動かなくなった。

「・・・・・・・・・・。」

そんな戦いをティアーネは遠くから見ていた。沙汰が距離をとってくれたおかげか彼女には被害はなかった。傷だらけの沙汰が2階の屋根から落ちていった。それを見てすぐに走り出していた。

「だ、大丈夫なんですか？」

「正直危ないと思います。だからこそ僕が行かなきゃいけない。」
だがドレスは走りにくかった。王女の許可を得て走りやすいように破る。
そして沙汰の所に辿り着く。

「・・・・・・・・・・え。」

ティルアーネは言葉を失った。
拳をもろに受けた腹の辺りから全身へと火傷の跡が見える。それも

かなりの重症だ。

勿論骨折もかなりの箇所しているように見える。息はしているが凄く苦しそうだ。

このままほっとくと死んでしまいそうだった。

「とても頑張りましたよ、彼は。」

朱雀が下りてきた。左腕は相変わらずないが銀色の炎を纏っており彼を直視するのも難しかった。

「正直解放しなければ負けていました。あの男の力を借りたとはいえ、この私をここまで追い詰めたのは素晴らしいの一言に尽きます。特にあの蜘蛛は凄い。私にもスラデイスにも肉体防御の術式が練りこまれていて並大抵の力では皮膚を割くことはできません。それをいとも簡単に貫く糸を出す蜘蛛ですからね。・・・故に彼をここで消すのはとても残念だ。」

「・・・・・・・・さ、沙汰さんを、沙汰さんを助けてください!!」

ティルアーネはもう話なんて聞いていなかった。目に涙を溢れさせて朱雀に向かって叫んでいた。

「僕は彼を失いたくないんです!!」

「・・・なるほど、では教えてあげましょう。私の試練の意味を。」

ティルアーネの叫びに表情一つ変えずに朱雀は言い放った。

「この試練では人を失う痛みを感じてもらうことです。この前の自己犠牲とは違い、王は誰かを犠牲にしても生き残らなくてはいい。その為の試練を私がやっているのです。」

「・・・そ、そんな。」

ティルアーネはまた言葉を失った。

この試練を受けた時から沙汰がいなくなることは決まっていたのか。では自分が彼を付き人を選んでしまったから彼は消えるのか。

そう自分に問いかけるも答えは出ない。

「誰しも失うのは悲しいもの。しかし、それを乗り越えた者こそ真の王にふさわしいのです。さてそろそろ終わりにしましょうか。」

朱雀は沙汰に手を向ける。沙汰は全く動かない。次に何かダメージを受けたらもう助からないだろう。

「ま、待ってください。何でもします。だから沙汰さんを助けてください。僕の大事な、大事な・・・友達なんです!!」

ピクッ

その時沙汰が少し動いたがそれには誰も気づかなかった。ティルアーネの言葉に朱雀は少し考えて言う。

「・・・まあ、そこまで言うなら助けないことはありません。面倒

な条件がありますがね。」

「・・・・・・・・条件？」

ティルアーネは聞き返した。藁にもすがる思いで本当になんでもする気だったのだ。

「今回の試練を不合格にし、王になるのを諦めるのであれば彼を助けてあげましょう。」

それはかなり厳しい条件だった。

今までしてきたことがすべて水の泡になってしまうのだ。

泰人が、莉麻が、ティライズが、その他大勢の協力でここまで来たのにそれを無駄にするということだった。

しかしティルアーネはほとんど考えなかった。

なぜなら沙汰という存在は彼女の中でもとても大事なものだったからだ。

確かに沙汰は少々自分勝手な所もあった。他に手があったかもしれないのに自分を女に変えたり女風呂に入れたり嫌な目にもあったきた。

だが、病院の時のように本当に困っている時は力を貸してくれる、良い人なのだと彼女は信じていたのだ。

だから失いたくなかった、自分のかけがえのない友人を。

「分かり・・・・・・・・」

「待て。」

沙汰の声が聞こえた気がした。咄嗟に沙汰の方を見る。だが彼はほとんど動いていない。

「変身の指輪を通じてお前の心に語りかけてるんだ。身体と魂は離れていても一つだからな。」

その口調は沙汰本人のものだった。ティルアーネは安心するが

「よく聞け、正直俺はもう駄目かもしれない。ミニパソを失って・
・どうすればいいのか分からなかった。」

それはいつものような自信に満ちた声ではなく力のない声だった。ティルアーネは今まで聞いたことのない沙汰の声に戸惑いつつも心を傾ける。

「だが、お前の友達って言葉を聞いてな。俺、友達泰人しかないしずっとできないと思ってたからな、嬉しかったよ。」

そこまで聞いてティルアーネは思った。彼は何かしようとしている。だが彼自身もう限界なんて超えてもう動くことすらできないはずなのにと。

まさか彼は・・・

「ありがとよ、・・・泰人と莉麻ちゃん達を頼むぜ。」

「沙汰さーーーーーん!!」

思わず叫んでしまった。朱雀は驚くがそれよりももっと驚くことが起きる。

「……………うおおおおおおお!!」

沙汰が立ちあがった。右腕にはいつの間にか変身の指輪と融合の腕輪がつけられている。

「……………まさか、立ち上がりますか。面倒な。」

朱雀は本当に面倒そうな表情をすると手を向け銀色の3mクラスの大きな火の玉を沙汰に向けて放つ。

沙汰は逃げずにその火の玉に融合の腕輪をつけた手を向ける。

「…………ドレイン。」

そうポツツと言うとその火の玉は音を上げて沙汰の腕輪に吸い込まれて吸収される。

それに驚いた朱雀は何故彼が動けるか考えた。そこで変身の指輪が目に入る。

「…………なるほど、その指輪で肉体を構築しなおし立てるまでにな

った。全く面倒なことをしますね。後から苦しみが来るというのに。」

融合の腕輪を使われている為下手に術を使うこともできない。

そう考えた朱雀は構える。右腕に再び力を集中させる。

それを見た沙汰も先ほど吸収した力を右腕に込める。

どうやらお互いに次で決めるようだ。

「さて、今度こそ終わりです!!」

朱雀が一気に距離を詰めて沙汰に向けて拳を振る。

だが沙汰もそれに反応する。力を吸収し指輪も使い反射神経を極限まで上げたからだ。

沙汰もそれに合わせるように拳を放つ。

ガンッ

お互いの拳がぶつかり力勝負になる。

だが明らかに朱雀が押していた。

朱雀はリードを広げるようにどんどん沙汰を押していく。それに合わせて沙汰もズリズリと下がっていく。

「…………ぐぐぐぐぐ。」

沙汰はもうすでに限界を超えていた。自分の肉体に限界突破のドーピングまでして、それでも朱雀には届かない。

だが彼は諦めなかった。横を見るとティルアーネはが手を合わせて自分の勝利を祈っている。その思いに絶対に答えなくてはいけなかった。

確かに格闘術の心得なんて全くない。でもそんなのは関係ない。気持ちで沙汰は朱雀に負けなかった。

「負けるかあああああ!!」

すると奇跡が起こった。

ミニパソから黒い光が出てくる。それがふよふよと宙に浮き沙汰の融合の腕輪の中に吸い込まれていった。

そして沙汰は急に力が湧いてきた。

今まで押されていた分朱雀を押し返す。

「・・・バ、バカな。こんなことでこの私が・・・負けるのですか。」

グシャーン

沙汰は思いっきり朱雀を押し返し住宅街へと叩きつけた。

朱雀は家の壁を何枚もつき破りやっと止まった時にはすでに意識はなかった。

「・・・か、勝った。」

ドサッ

気が抜けたのか沙汰はその場に倒れた。その表情はとても清々しい笑顔だった。

「やった？・・・勝ったのですか？」

ティルアーネは茫然としていた。だが朱雀は遠くで気絶している。沙汰が勝ったのだ！

「・・・これは？」

すると沙汰の近くに宝石が落ちていた。それはまさしくレゾナールで間違いなかった。

どうやら朱雀が吹っ飛ばされた時落としたようだった。

ティルアーネはそれを拾い上げる。すると

「試練は合格だ。元の世界に転送を開始する。」

と空から声がした。どうやらこれで試練も終わりのようだ。

「どうやらお別れの時が来ましたね、身体を貸してくれてありがとうございました。」

ティルスは礼を言う。これでお別れかと思うと名残惜しい気がする。

「ティルス様、私は本当に存在する人間なのですか？」

「え？」

ティルアーネは自分の疑問を口にする。この世界は本当に存在するのか、自分は一体何なのかそれをティルスに問う。
するとティルスは優しく答える。

「この世界も貴女もちゃんという。だって僕が覚えています。誰かが覚えていればそこは存在している、そうでしょう？」

「えっと、あの、はい。」

ティルアーネは照れくさそうに答える。どうやらこう言う言葉はかけられたことはないのかもしれない。

「絶対また来ます。その時は僕の本当の姿で会いに来ます!!」

「・・・はい、私待ってます。その時には私と・・・・・・・・・・。」

パッ

ティルアーネは気付くと元いた場所に戻っていた。

いなくなっていた人もいつの間にかいる。

「夢・・・だったのかしら？」

懷からレゾナールを取り出す。

あった。

やっぱり夢なのかと思ったが

「・・・ふふふ、また会えますよね。」

レゾナールには小さくティルスと彫られていた。

「・・・ここは？」

ティルスは目を覚ます。どうやら元の世界に戻ってきたようだ。

「やりました、僕達やりましたよ沙汰さ・・・ん？」

沙汰は倒れていた。近くには壊れたミニパソと融合の腕輪、変身の指輪が落ちていた。

怪我は治っていない。重症のままだ。

「・・・そ、そんな。」

カッーン

ティルスの指から2つの指輪が取れティルスは少年へと戻る。
だが本人は気付いていない。

「なんか光ったみたいっすけど大丈夫っすか？」

スィングとミユアが入ってくる。2人とも少年ティルスを見て驚く。
それで試練に合格したと気づいたのだ。

「やったっす・・・ね？」

スィングも気づいた。沙汰が倒れているのを。一目見ただけで命に
危険があるほどだと分かる。

「・・・僕のために沙汰さんが、沙汰さんが！！」

ミユアは沙汰を見てみる。かなりの重症で放っておくと助からない。
この世界で一番の病院といえば

「・・・ティルス、・・・王都に転移。」

そう呟く。しかしティルスは首を横に振る。

「僕の方ではそれは・・・」

「諦めんな!!」

そんなティルスの両肩をスイングが掴む。
スイングはいつもの冷静な感じではない。

「君だったら助けられるさ。試練を全部終えたんだ、力も戻っているはず、信じるっすよ。」

最後はいつも通り優しく話す。
ティルスは涙をふく。そして顔を上げる。その表情は成長した少年の顔だった。

「やってみます。・・・転移!!」

シュン

4人は姿を消した。

起きろ
起きろ
鳥頭

「全く面倒ですね。こっちのセリフですよ。」

朱雀は目を覚ます。どうやらメディスクローズの神殿の上空のようだ。

無意識に空を飛んでいたようだ。前には白いマントの男がいた。

「あんなガキに負けるとは。お前も腕が鈍ったか。」

「まあ、手を抜いたことは認めます。ですが彼はとても強かったですよ。白虎クラスはあるでしょう。」

その言葉に男は頷く。どうやらその点は認めているようだ。

「さて、逝くのか？」

「そうですね、ティルス君も心が強そうで良い王になります。私の出番はここまでですよ。面倒じゃなくていいです。」

そう言って朱雀は翼を広げると・・・身体が少しずつ消えていく。

「君自身はティルス君が王になろうとティライズ君が王になろうと関係ない。あの少年の茶番につきあっただけです。本当は玄武の孫が強くなればそれでいい、そう考えているなら手を引いてもいいんじゃないんですかね。玄武の孫じゃ君には勝てません。」

「俺に勝てないようではあの化け物は倒せない。それにあの方は助

けたい。・・・玄武との誓いだ。」

顔は見えないが男は少し悲しそうな顔をしているように思える。

「そうですね。私たちができなかったことを彼ら、泰人君たちならやってくれるそんな気がします。さてじゃあ逝きますね。玄武、白虎と共に祈ってますよ。」

そう言って朱雀は消えた。

「さて、どうしますか？」

瞬間シュパルツが現れる。どうやら野暮だと思い席を外していたようだ。

「ティルスが悪夢に出発するまで休憩だ。基地に戻ってる。」

「では行きましょうか。」

そう言って2人は姿を消した。

ここは謎の空間

「・・・沙汰？」

サラリーマン風の男が気付く。だが箱を見る。すると

パンツ

そこから白虎が出てくる。

白虎は少し疲れているようだが、すぐに話す。

「出来る限りのことはした。彼はもう僕より強いさ。もう行っちゃったよ。」

「分かった、ありがとう。じゃあ静かに眠ってくれ。」

それに頷いた白虎は消える。

「僕らの望んだ世界になるといいなあ。」

最後にそう呟いた。

「大丈夫、泰人たちならやってくれるさ。」

サラリーマン風の男はそう呟きその空間を後にした。

続く

21. 最後の試練・後編（後書き）

どうでしたか？

実はこの話は今のところ私の一番のお気に入りだったりします。戦いは書くの上手くはないですが結構好きなので。

さて、次回は明日です。サバイバルゲーム開始前までは投稿する予定です。

それでは皆さん、また次回お会いしましょう！

22. 戻ってきた男 (前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。
さて今日も頑張りましたよ！
それではどうぞ！

22. 戻ってきた男

ここは学園高等部のとある教室。

雪美は授業を受けながら考え事をしていた。

「（莉麻ちゃんのおかげで前向きに考えられるようになりました。姉さんがどんなに変わっていったってちゃんと話せば分かるはず。うん、大丈夫!）」

そんな時だった。

急に嫌な気分がして辺りを見回す。しかし特に変わったことはない。雪美は自分の勘違いだと思い授業に集中しようと黒板を見ると

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

教師にじっと見られている。雪美のことをじっと見つめている。今は現代文の時間で男性教師が教卓に立っている。その教師が雪美のことをずっと見ているのだ。

雪美は授業に集中していないことを気付かれたと思いおもむろに立ち上がる。

「す、すみません。別なことを考えていました。」

と謝罪する。

しかし男性教師は反応しない。それどころか周りの生徒達全員雪美の方を見ている。感情のかけらも感じないまるで人形のような目をしている。

「えーっと、一体何が・・・。」

すると嫌な気分がまた雪美襲う。少しめまいを感じたが事態は進んでいた。

教師、男子生徒、女子生徒例外なく雪美に向かって歩き始めた。

うあーといった言葉にならない声をもらしながら近づいてくる生徒達。明らかに様子がおかしい。

「・・・あ。」

雪美はようやく事態を把握した。そして扉の方から教室から出ようとする。

だが時すでに遅し。周りは生徒たちに囲まれている。

雪美はさっきの嫌な感じはこのことだと思いがだからといって事態が変わるわけではない。

「・・・嫌、来ないで!!」

大声で叫ぶが反応しない。

どんどん近付いてくる。

「た、助けて。誰か助けて!!」

恐怖で何も考えられなくなっていた。いや、別のことが脳裏をよぎった。

・・・自分はこのような状況の対処法を知っている。しかし、思い出せない。自分には何か使命があったような気がするのだが、霧がかかったように思い出すことができない。

思い出せたのは、・・・病室での姉の泣き顔。

「……いで!!」

何か大事なことを言われたような気がする。だがやはり思い出せない。

雪美も記憶が曖昧のようだった。

「……莉麻ちゃん。」

自分の事を頼ってくれた妹のような存在。

記憶喪失なのにもいつも明るくて兄が大好きな優しい子。

つい言葉に出てしまった。それほどに最近の日々は楽しかったのだろう。

お菓子を作った。

料理も作った。

裁縫もした。

色々な話をした。

それは……昔を思い出すほどに。

そして目をつぶる。もう覚悟した。そして神に祈った。自分がこんなことになっているなら莉麻も同様だろう。だから彼女を助けてほしい、そう祈ることしかできなかった。

ガラッ

「お姉ちゃん!!」

「え?」

扉が開いた。

そこにいたのは・・・莉麻だった。

とつさに目を開き扉の方を見る。

そこには息を切らした莉麻がいた。どうやら走ってきたようで額には汗がにじんでいる。

正直嬉しかった。彼女は無事で自分を心配してここまで急いでくれたのだから。

しかし、この状況。雪美は莉麻を逃がそうと叫ぶ。

「駄目、逃げて！」

「・・・大丈夫だよ。今、助けるから！」

その表情はとても優しかった。

いつもの莉麻の笑顔だ。

それはとても信用できる、雪美はそう思った。

「んじゃ、さっさとやるかな。」

「え？」

見知らぬ男が莉麻の横に並びそのまま教室に入ってくる。

背は結構高い。そして見た感じ真面目そうな印象を受ける。

雪美はそう感じていた。

男は腰についていたメジャーを外し構える。

「・・・・・・・・覚醒!!」

男がそう言うのとメジャーが白く光る。

その光はとても綺麗で思わず見とれてしまう。

「行きますよ。・・・ラルゴウィップ、タイプS。」

するとそのメジャーの測定部分が伸びる。そして左右に小刻みに動いている。まるで意志を持っているように。そしてウィップが動く。

「・・・薙ぎ払え。」

一瞬だった。

雪美の周りの生徒たちは吹っ飛ばされて壁に激突し気を失う。

男はそれを見て雪美の方に向かって歩く。後ろの莉麻もぴよこぴよこついてくる。

「大丈夫ですか？」

そう言って手を差し出す。

雪美は混乱してその手を見つめていた。

そこに莉麻が割り込む。

「言ったでしょ。お兄ちゃんが助けてくれるって！」

その言葉を受けて思い出す。

そう彼女の言った言葉、兄が必ず助けてくれると。

「・・・うふふ、そうだったね。」

雪美は笑った。

そして、差し出された手を掴みお礼を言う。

「ありがとうございます、茅野泰人さん。」

時間は戻り、中等部教室。

莉麻は授業を受けていたが、変な気分がした為何かあったと分かった。

すると教室内の生徒及び教師が雪美の時と同様おかしくなった。

「み、みんな、大丈夫？」

必死に呼びかけるが反応しない。

それどころか一人の女子学生が莉麻を押し倒した。

「きゃー！！」

ここに来てから一番最初に友達になった子だ。

だが今の彼女は明らかにおかしい。

いや、他の生徒も同様だ。どんどん莉麻に近づいてくる。

「や、やめて。駄目だよこんなこと。」

生徒が莉麻の荷物を確認している。何かを探しているようだ。

その間にも他の生徒は迫ってくるし、女子学生は莉麻の服を脱がし始めた。

莉麻はもう訳が分からずやられていたが

ガラッ

「大丈夫ですか!？」

フィルディアとサミーが入ってくる。

サミーはこの状況を確認すると術式を組み立てる。

「邪魔だ、貴様ら!!」

そして闇の球を放ち次々に生徒を消していく。

そして女子学生一人が残った。

莉麻は助かったと思ったがまだだった。女子学生は突然莉麻の首を絞めた。

「……が、ぐ。」

それほど力は強くないものの痛みは感じる。

そしてサミー達の方を睨みつける。

「……人質ってことか。」

どうやらそのようだった。

流石に人質をとられてしまったては手が出せない。

サミーは術式を解いた。

「……ど、どうすれば？」

フィルディアは慌てていて正常な判断ができそうもない。

莉麻は思った。

もう駄目なのかと。

兄に会う前に自分は死んでしまうのかと。

「……………会いたいよ、お兄ちゃん。」

最後の力を振り絞ってそう呟いた時だった。

「……………今行くぜ！」

「え!？」

そう聞こえた気がした。だがそんなことを気にする余裕はなかった。どんどん気が遠くなっていく。

だが、そんな時急にフィルディアが光出す。そして光に包まれた。

「やっと来たか、全くタイミングが良すぎだ。馬鹿が。」

サミーがそう言うのと光が収まる。するとそこにいたのは

「さて、やるか。」

茅野泰人だった。

「えーっと、一体何が……………」

腰につけたメジャー、ラルゴが喋った。どうやらフィルディアのようだが事態を把握していないらしいかった。

「話は後、行きますよ!」

「あ、はい。」

そう言うのと泰人はラルゴを構える。
そして唱える。

「我発動す、・・・スネイルシューター!!」

するとラルゴが変形、蝸牛型の銃へと変わる。
そしてすぐに撃つ。
すると小さな水の塊が発射される。

突然現れた泰人に女子学生もすぐに反応できず発射された水の塊を額で受けてしまう。

「ぐ、・・・あ。」

莉麻の首を絞めていた手の力が弱まる。
その隙に莉麻は脱出、泰人の方に向かう。

「ゆっくりお眠り。」

女子学生はそのまま倒れ気絶する。

莉麻は泰人に抱きつく。凄く嬉しそうだ。

「やっと会えたな、莉麻！」

「・・・お、お兄ちゃーん！！！」

そのまま泣きだした。

泰人は優しくその頭を撫でてあげる。

兄妹の再会だ。

「さて、とりあえず確認をしたい。ラルゴ使い、修行は完了したのか？」

サミーが泰人にそう言うのと泰人はサミーの方を向き答える。

「そうだな、終わったよ。後、少しは事情も分かっているつもりだぜ、ヴィントル！」

「・・・ふん、まあいい。とりあえず今の状況を軽く話しておく。」

そう言ってサミーは話し始める。

今の状況、そして何をするべきかを。

その間、泰人は箱を取り出し蓋を開けようとすると言った。そしてその中に入っていたのは・・・

ネジだった。

ドライバーを取り出し、ラルゴを見る。
ネジが一か所はまっていなかったのを確認できる。
取り出したネジをはめてみるとぴったり合う。
そのままドライバーで締めていく。

ギュッ

きつちりとネジを締める。

ラルゴにはあまり変化はないようだ。

「どうですか、フィルディアさん？」

「はい、何か力が漲るような気がします。このネジのおかげですね。」

とそうこう話しているうちにサミーの話は終わる。

「さて、雪美を助けに行くぞ。場所は分かるか？」

「あ、はい。泰人さん、私のバックから高等部見取り図を出して下さい。」

泰人はバックから紙を取り出して見る。すると教室の一カ所にマークが付けられている。

どうやらそこが雪美の教室のようだ。

「行くぞ!!」

サミーの掛け声と同時に泰人と莉麻も移動を開始した。

そして現在に至る。

泰人達は教室を脱出し学園のグラウンドまで来た。

「さて、ここからだ。奴が動き出した以上こちらでも動くしかないって訳だが。」

雪美にも一通り説明した。

最初はサミーの事を怖がっていたが、少し良くなったようだ。

「それで、捜しているのは私の事かしら？」

「!？」

一斉に声がした方を向く。

そこにいたのは、星音だったが見た目が変わっていた。

そう、その姿は・・・。

「・・・ねえ・・・さん？」

そう。雪美の姉であり

「・・・・・・・・まさか!？」

泰人の友人でもある

「うふふ、やっと会えたわね。」

宇木風梓由だった。

続く

22. 戻ってきた男 (後書き)

どうでしたか？

よろしければ次回も見てもらえたら嬉しいです。

23. 修行・前編

時間を遡る。

フィルディアが謎の空間を去った直後の話である。

「・・・うーん、ここは一体？」

泰人は目を覚ます。どうやら気絶していたようだ。直前の事を思い出そうとする。

「確か闇の精霊にやられて変な空間に飛ばされたんだっけ。そこでそこから脱出しようとスネイラーを召喚しようとして誰か来たんだけど・・・。」

だがそれ以上思い出せない。だが顔は見たような気がする。それが誰か知っている人だった気もする位でそこまでだった。

そして一通り思い出した所で辺りを見回してみる。

かなり広い体育館のような所だ。壁は茶色、出入り口など存在しない。2階もないし倉庫みたいなものもない、ただ広いだけの空間だった。謎の空間のように無限に広がっている訳ではないようだ。

そこで一つの仮説を立てる泰人。ここはさっきの所とは違い作られた場所であると。そして何かしら理由があって自分をこの空間に飛ばしたのだと。

それは何故か。自分を完全に消すためか、自分を助けるためか、もしくは・・・。

「ふむ、大体合っているな。まあそうでなくては。」

すると目の前に一人の老人が現れる。その姿は・・・

「爺・・・ちゃんか？」

そう。泰人の祖父、玄武だった。

だが玄武はずいぶん前に亡くなっているはず。泰人はいきなり現れた祖父に驚きを隠せなかった。

「生きて・・・いたのか？」

「いんや。」

あっさりと否定する玄武。拍子抜けした泰人はずっとこけそうになる。

「ここはワシが生きている時に作った世界じゃよ。いつかお前がデイオールに関わった時ここに送るようにヴィントルと彼にお願いしたのだ。」

「えーっと、詳しく教えてくれるか？よく分からないんだけど・・・」

「全く仕方ないのう。とりあえず必要な所だけ教えとくか、詳しくは後でヴィントルにでも聞くんじゃない。」

と言って一息つく玄武。どうやら話すようだ。

「この空間はお前の魂を修行させる、そしてワシは案内役じゃよ、本物の代わりにお前に修行をつけるためにな。次に黒い水晶に宿っ

ている闇の精霊、ヴィントルじゃが奴は見た感じ悪そうに見えるだけで根はそこまで悪い奴ではないから協力してくれるだろうな。実際奴のおかげでここまで来れたんじゃないから。」

それに頷く泰人。確かに闇の精霊に莉麻を奪われたが何か理由があるのだろう、そう思っていた。

こう簡単に信じたのも泰人が祖父が大好きだったこともあるだろう。いつも面白い話や遊んでくれたり、メジャーをくれたりしていたのでとても仲が良かったというのもある。

「そして今倒すべき相手、そいつを倒せるのはお前しかおらん。その為にもここで修行して力をつけるとそう言う訳じゃ。」

「はい、質問。そういえばヴィントルって確かまだ爺ちゃんが生きているところに災害を起こした奴じゃないの？ 門番の人が言ってたけど。」

「ふーむ、その話には続きがあるんじゃないが・・・門番か、・・・そういえば彼には門番の事詳しく話してなかった。早とちりしたかもしれないな。まあそれはいい。それよりもしっかりと聞きなさい。」

そう言ってまた一息つくと話し始める。

「ヴィントルの災害、表ではそう呼ばれているが実際は違う。本当は他に黒幕がいるんじゃないよ。ヴィントルが闇の精霊になった理由は一人の少女を救うためじゃった。・・・そう、光の儀式によって光の精霊ミニアになって暴走してしまった一人の少女のために。だがヴィントルはその事実を隠ぺいするためヴィントルの災害ということにしろと王に頼んだ。とまあこんな感じじゃな。だからお前が聞いた話もほとんど嘘なんじゃよ、真実を知っておるのはワシと青龍、

ヴィントル、王位なものじゃな。まあ、朱雀は薄々分かっていたようじゃがな。」

「ということはそのラスボスを倒せば全てが終わって昔のこともすべて解決、ハッピーエンドって訳か。」

それに頷く玄武。闇の精霊、ヴィントルは悪い奴ではなく他に黒幕がいる。それを倒せばいい。泰人はそう解釈した。彼という言葉も気になったがここでは教えてくれないような気がしたため止めることにした。

「まあそんな感じじゃな。詳しくはヴィントルにでも教えてもらうといい。さて早速始めようとするか。まずはこれを受け取るといい。」

そう言って何か投げてきたものをキャッチする。それはメジャーだった。ラルゴにとっても似ていたが。

「修行用ラルゴじゃよ。それを使って技を安定させてもらう。そういえばいくつの技が使えるようになったんじゃない？」

「えーっと、ラルゴウィップ、ラルゴウォール、スネイラーの3つかな。」

「なるほど、そういえばその3つしか教えていなかったか。ということは応用も一からということか。」

その言葉を受けて考える泰人ラルゴウォールの結界バージョンとファイルディアについて話そうと決断する。

「そういえば今は魂？だけなんだっけ。まあそれよりもラルゴウォールの結界みたいなやつができるんだけど、妖精のフィルディアさんの力を借りて。」

「妖精の力か。確かにそれなら力は弱いが結界が使えてもおかしくはないか。それはそれとして早速やるとしようか。教えることは4つ目の技、覚醒状態、ウィップとウォールの応用方法、覚醒スネイラーの制御、実践による特訓とこんな感じかのう。では早速始めようか。」

こうして修行は始まったのだった。果たしてうまくいくのか？

続く

23. 修行・前編（後書き）

どうでしたか？

次回も見えていただければ嬉しいです。

24. 修行・後編

玄武の修行が始まった。

まずは新技スネイルシューターの習得だが、ただ使うだけならばすぐにでもできる。という訳で覚えたうえで全ての技が使いこなせるように指導するのが目的だ。

「さて、シューターを出してみろ。向こうにある動く的に当てていくだけじゃが、集中力と命中率を上げる大事な特訓じゃな。」

泰人は頷き修行用ラルゴをシューターに変化させる。そして目的掛けて撃ち込むが・・・ピュンと避けられてしまう。どうやらの意志を持っているようだ。

「おいおい、そんなのありかよ。」

「実戦向けじゃよ。すぐにでも戦えるようにするには多少厳しくて、もこれを乗り越えられんことにはな、莉麻達を救うことはできんぞ。」

その通りである。今の泰人は戦闘知識もある程度はあるものの少し強い相手ならばすぐに負けてしまう。泰人自身それには気付いていた。だからここにいるということも。

玄武の言葉に黙って頷きの当てを再開した。

「格闘術を身につけるにはかなりの時間がかかる。お前は打たれ強くはあるが攻めはいまいじゃからな。武器に頼ってでも勝つしかないんじゃないよ。頭の回転の速さと動体視力はかなりいいからそれを生かすしかない。鞭の使い方に慣れていない、となるとウィップの

バージョンアップしかない。後はラルゴウォール、別名蝸牛結界の制御、そして今やっているシューターの命中率アップ、これで十分戦えるじゃろうな。・・・真スネイラーの制御まで教えられればいいんじゃないが、時間があるかどうか・・・。」

最後の方はボソツと呟くように言ったため聞こえていなかったが重要な所はしっかりと聞こえていたようだ。泰人は集中力を更に上げる的を狙っていった。

その後時間で言うと約2週間ほど経った。

その間に泰人はシューターをかなり自由に撃てるようになった。そして門番から渡された箱、その中身が覚醒に必要なアイテムであると教えられその使用方法、そして覚醒後のウィップ、ウォールの使い方まで詳しく教えてもらった。

「まあ、こんなもんかの。さて後はあれじゃな。」

泰人は倒れて寝ていた。タオルがかけられているが床に直接寝ている為寝にくいだろう。だがかなりハードな特訓だったためそんなことも気にしていない。

そして玄武が泰人を起こす。

それに応じて泰人は起きるがまだ疲れが残っているのか眠そうだった。

「・・・睡眠時間4時間の毎日修行って流石に疲れたって。休ませてくれよ。」

「それは何度も聞いた。ここが精神世界であつても休まねば疲れるのは当然じゃな。さて飯はこれじゃよ。」

そう言つてクッキーを一枚渡される。・・・どう見ても普通のクッキーだが、効果としてこれ一枚で一日分のエネルギー補給、満腹感が得られるという優れたものである。時間がない人にお勧めで王都の店で売っている。一つ日本円で約2000円である。

「・・・もうこれ嫌なんだけど。」

泰人はしばらくこれしか食べていない。流石に飽きてきていた。しかしここにはこれしかない。しょうがなく受け取ると口に入れる。味は豊富で色々ある。一応飽きないようらしい。今日はチョコ味のように甘いものが苦手な泰人も普通に食べられる。

「莉麻のお菓子が恋しくなってきた。全部終わったら腹いっぱいになるまで作ってもらうぞおおおおお!!」

テンションがおかしい泰人。しかし玄武はそんなこともお構いなしだ。

「さて今日が最終日じゃ。今日はあれを・・・。」

とそこで後ろから誰か近付いてくるような気配がした。玄武が振り返るとそこにいたのは・・・

「やあ、玄武。久しぶりだね!!」

白虎だった。相変わらず元気がいい。その顔を見た玄武は露骨に嫌

そんな表情をする。

「いや、別にあんたは呼んどらん。早く逝って本物に会って来い。」

「ちょ。それひどいんじゃない!？」

漫才を繰り広げる二人。泰人はそんな2人をどうでもいいようなものを見る目で見ていた。

「僕が泰人の相手をしようってことさ。戦いに行く前にはちょうどいいだろう。」

「いや、これから最後の特訓をする所じゃからな……。」

と玄武が言う前に白虎が泰人に高速で近づく。

泰人はそれにかろうじて反応して防御の体勢をとり、白虎の拳を受け止める。

だが受け止められたが威力までは止められず受け止めた手がジーンと痛む。

「いや、痛い。痛いから。いきなり何すんだよ。」

「当然、最後に手合わせしようと思ってね。せつかくここまで来たんだし。」

突然自分勝手なことを言い始め攻撃してくる白虎。泰人はそれを避けつつ間合いをとる。

「仕方ない脳筋じゃな。泰人、しょうがないからそいつをぶっ飛ばして黙らせてやれ。」

「えー、俺この人とは戦いたくないんだけど。変だし自分勝手だし、なんか頭のネジいくつか飛んでるしおかしいだろどう考えてもさ。」

「さあ、どうした？反撃してきなよ。」

白い虎の猛攻をギリギリで避けつつ文句を言う泰人。だが白虎はそんな言葉が全く耳に入っていない。

「ああもう！！仕方ないな、やるよ、やればいいんだろう。」

半ばキレ気味で泰人は距離をとるとラルゴを構える。どうやらすでに覚醒状態らしい。

「蝸牛結界、拘束！！」

シーン

特に何も起こった様子はない。白虎は思いつきり笑う。

「いやー、面白い冗談だね。なんも成長してないのかい。」

そう言って歩きだそうと足を動かそうとするが・・・動けない。というよりその場から動けなくなっていた。まるで自分の周りに見えない壁があるようだ。

「・・・成長しているようだ。これはかなり面倒な技だね。解除するには結構時間がかかるからその間に大きな攻撃技の準備でもされ

ちゃたまらないな。仕方ない、本気を出すかな。」

そう言って白虎は懷からイヤリングを取り出して右耳につける。
そして自らの名を呟く。

「・・・ジュライト。」

・・・瞬間パキーンと音がした。どうやら結界が破壊されたようだ。
白虎はそのまま泰人に狙いを定める。白虎の周りには白銀の砂が舞
っており、髪の毛が逆立っている。
そんな光景を見た後でも泰人は冷静だった。次の手段を用意するた
めかラルゴを構えて何やら呟いている。

「何をやっているか知らないけど一気に決めるよ。」

そう言って距離を一気に詰める。そして強化した拳で泰人を殴ろう
とするが・・・

「・・・蝸牛結界、転移！」

その拳は空を切った。白虎はかなり驚いたようだ。辺りをキョロキ
ョロ見回すが見つからない。

だが急に自分を狙っている視線を上を感じて見上げる。

そこにはスネイルシューターを白虎に向けている泰人の姿があった。
どうやら上空に移動したらしい。

白虎は避けようとするがすでに発射した後で間に合わなかった。

「ラルゴシュート!!」

そう言って発射された水の塊は白虎の右耳についているイヤリング

を破壊する。すると白虎の周りに舞っている白銀の砂が消える。その反動でよろける白虎、どうやら覚醒状態は肉体にかなりの負荷をかけるようだ。

泰人はそこを見逃さなかった。シューターを瞬時にウィップに切り替える。

「アウト&チェンジ、ラルゴウィップ・タイプS!」

自由自在に動くウィップが一本の槍のように鋭くなり、そのまま白虎の軸足となっていた右足を貫く。

「・・・ちっ。」

痛そうにしながら軸足を左にする。どうやら右足はかなりの重症のようでかなり血が出ている。立っているのもやつのようだ。

「勝負あったかの。」

「・・・。。。」

玄武がそう話す。誰が見ても勝敗は明らかだった。白虎は奥の手を失い機動力を奪われた。もう残っている手段は・・・

「やはり僕は親衛隊最弱だったのかもしれないな。」

ボソッと呟く。泰人はうまく着地し白虎の方を見る。

「玄武にも青龍にも朱雀にも黒の魔術師にも勝てなかった。イヤリ

ングの力を借りなければ覚醒もできない。ヴィントルの災害の時には結局何もできなくて、その後はあの悪魔にいいように利用されただけだった。そんな僕の存在価値ってなんなのかな・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

白虎は今までの不満を全て吐き出した。どうやら過去に何かあったようだ。玄武も何も言えずに黙っている。

「・・・だったら、俺を強くしてくれよ。」

「・・・え?」

「さっき言ってただろ。俺の修行のために来たってさ。あんたの最強の攻撃を俺に見せてくれ。絶対に無駄にはしない。」

真面目にそう言った。

白虎も最初は驚いていたが・・・急に大声で笑い出した。

「はははははははは、全くお前は変な奴だな。・・・分かった、こいつを受けきれれば合格だ。青龍や悪魔と戦うならこの技を打ち破ってみせろ!!!!」

そう言って地面に手をつける。しかしここは床だ。彼の力の源である土はこの下にあるのかも分からない。ここは作られた世界なのだから。だが作られた世界ならば・・・。

「この世界の一部を構築しなおし、大量の土を出現させればいいんだよ。」

すると床に穴が開きそこから土でできた虎が次々に飛び出してくる。全部出てきたときには10体になっていた。

「・・・あれをやる気か。」

玄武は分かっていた。白虎はの必殺技を。だがあえて口にはしなかった、この戦いが本当の意味で伝承になるならそれを邪魔はできないと。

泰人も構える。どうやらスネイラーを召喚するようだ。そして・・・

「合体せよ!!」

「現れろ、スネイラー!!」

同時に声が体育館内に響く。

そこには体長10mクラスはある虎と蝸牛が睨みあっていた。

どうやら互いに決め技を使うようだ。

辺りに緊張が走る。

そして同時に指示する。

「いっけー、ラルゴブラスター!!」

「決めろ、超虎口大砲おー!!」

ラルゴの角から巨大な水の塊が、虎からは大きくて太い光線が発射される。

そして互いにぶつかり合う。

ものすごい音を立ててぶつかる二つのエネルギーの塊。威力はほと

んど互角のようだ。

「いっけええええええええええええええええ。」

「うおおおおおおおおおおおおおお。」

互いに譲らなかった。そして玄武は思った。

これは勝敗は関係ない。もっと他の意味がある。そうさっき思ったような意味が……。

そして決着がついた。土でできた虎が徐々に崩れ始め威力が弱まっていた。どうやら水分が土でできた身体を濡らし続けて形が保てなくなってきたようだ。

「またか、この技がまた負けるのか。……だが今回の負けは悪くないかもな。」

そう呟くと同時に虎は消滅。

残った水の塊は白い虎を飲み込み破裂した。

それからしばらく経った。

白虎は回復していた。そして泰人に何かを手渡した。どうやら虎の形をしたアクセサリのようなものだ。

「こいつを君にあげよう。きっと役に立つはずさ。」

「・・・ありがとう。」

泰人が受け取ると白虎の身体が徐々に消えていく。どうやら別れの時が来たようだ。

「・・・君に託す。後は頼むよ。」

そう言って白い虎は消えていった。

「そろそろ時間じゃな。もうこの世界も限界が近い。お別れじゃ。」

「ありがとう、爺ちゃん。・・・凄く大変だったけど何か色々学べた気がするよ。」

作られた世界は不完全だった。役割を終えた今消滅を迎えるのみだ。最後に玄武と泰人が握手を交わす。そして

「最後に言うておく。時間がなかったから出来なかったが、スネイラーは使わない方がいい。お前のためだ。後、・・・ラルゴの声に耳を傾けるといいかもしれんな。」

それがさ最後の言葉だった。それが言い終わると同時に二人はその

世界から消えていた。
そして作られた世界は・・・消滅した。

「ワシの孫だ。きっと大丈夫じゃろう。全てを頼むぞ！」

泰人は消えゆく意識の中そんな声を聞いた。
その後泰人が聞いた声は莉麻の声だった。

続く

24. 修行・後編 (後書き)

どうでしたか？

また次も見えていただければ嬉しいです。

25. 出陣

場面はディオール。

ティルス達は気付いたら王都内の病院にいた。どうやら移動能力が復活しているようだ。しかも時空を超えるだけでなく普通に移動もできるようになってるみたいである。

ティルスはすぐにスエイゼルを呼んだ。スエイゼルは今手術が終わった所のように急いで駆け付けてくれた。そして傷だらけの沙汰を見るととても驚いた表情をした。

「・・・これはヤバいかもしれないな。すぐに手術をする必要がありそうだ。」

スエイゼルは看護婦にタンカーを持ってこさせると、沙汰を乗せて手術室へと入っていった。

ランプがつく。そこから長い時間ランプが消えることはなかった。

スイングを手術室前に待たせてその間に二人は行動を起こすことにした。周りの人から同じ病院にティライズとフィドウが入院している情報を耳にした。まあ、有名人なので話が広がるのが早いのだろう。

ティルスは受付の人に話を聞き、部屋番号を教えてもらい向かった。関係者のみ立ち入り可能だったがティルスは関係者なので問題なかった。

部屋に入ると初老の男性と出会った。執事のように相手はティルス

に気付くと状況を話し始めた。

ティライズとフィドゥを車に乗せて城へ向かう途中で謎の少年に襲われたこと。何とか倒すことができたがティライズ、フィドゥが重症を負って今手術を終わったことを話した。謎の少年も放っておけずに連れてきて別の部屋で入院していることも。

「今まで手術室前にて待機しておりましてまだ城へ報告しておりません。今落ち着いた所で向かおうとしていたのですが、ティルス様も来ていただけませんか？私だけでは全て説明できるかどうか不安です。」

「分かりました。僕達も王に報告することがありますので向かおうと思っていたんです。ではお願いします。」

そうと決まると3人は城へと向かうことにした。

外に出るとすでに太陽が沈みかけてきれいな夕焼けが見えた。車に乗り込むと城へ向かった。

執事が兵士に話をつけてすぐに王との面会の時間をもらった。すぐに謁見の間に通される。

「・・・ふむ、最初来た時と仲間が違うようだ。というよりたった二人か。さて、話を聞こうか。」

「分かりました。」

ティルスは話し始めた。

莉麻が闇の精霊に連れていかれたこと、泰人がやられたこと、エルドイから重要な情報を聞いたこと、試練をすべて終えたが沙汰が瀕死になったこと、謎の少年の襲来でティライズとフィドウが重傷を負ったこと等々包み隠さずすべて話した。

「そうか、ご苦労だった。これで王の力は継承されたことになる。・
・だがまだやり損ねたことがある。違うか？」

「・・・え？」

ティルスは驚いた。てっきりすぐにでも継承式の準備をさせられると思ったからだ。

「まだやりたいことが残っているのだろう。そんな表情をしている。だったら行って来い。すべて終えた時お前は王としての器として十分な存在となるだろう。・・・だが無理はするな。」

「・・・はい！！ありがとうございます。」

「ティライズ達はスエイゼルに任せておけば大丈夫だろう。さて、準備はちゃんとしておけ。もし欲しければ兵も武器も与えるが・・・。」

その言葉にティルスは首を振る。

「大丈夫です。僕達で行ってきます。」

「・・・たった3人は不安だが・・・、お前が言うならば大丈夫なのだろう。さあ、行くがいい。」

ティルス達は礼を言ってその場を立ち去った。

王は一人になるとすごく寂しそうな、悲しそうな表情をする。

「私はティライズ達になんて残酷な運命を背負わせてしまったのだろう……。」

「……そんなことはどうでもいい。貴様、何故ティルスを行かせたりした？すぐにでも王位継承をさせておけばこれ以上苦しむ必要もない。」

王の頭に直接声が響く。なんというか機械音のような嫌な声だ。

「青龍を倒せる可能性が少しでも上がるならこの方法を選ぶさ。私は王位継承のためではない、お前を倒す人材を育てる為に彼らに訓練を与えたのだ。それに親衛隊の者達もお前などに利用されるくらいなら命を投げ捨てる覚悟だ。朱雀や白虎のように……。」

「完全ではないとはいえ我が術を受けながら抗うとは流石は親衛隊といったところか。そして玄武と魔術師を逃したのはやはり失敗だったようだ。茅野泰人と谷田沙汰という厄介な敵を増やしてしまった。あの時ミーマが抵抗しなければ……。」

「過ぎたことは仕方ない。後は青龍とあの二人、不完全のミーマがお前の頼みの綱だろうがそう簡単には……。」

「・・・貴様、ちゃんと見ていなかったようだな。ティルスと一緒にいた娘、あれが最後のピースだ。今のミーアにあの娘を会わせれば、流石に覚醒ラルゴでも無理だな。」

王の表情が変わる。ティルス達を追おうと立ちあがろうとするが・・・身体が動かない。

「止めろ。今すぐ止めに行かなくては。」

「貴様はここでゆっくりと観戦していることしかできんだ。さて、準備でもしようか。」

その言葉を最後に王は深い眠りについた。

ティルス達が病院に着くころには夜になっていた。どうやら沙汰の手術も終わったようで、病室へと移されていた。ティルスとミュアはシングの話聞く。

「あの先生が言うにはとりあえず一命を取り留めたらしい。・・・が、意識が戻る可能性は限りなく低いらしい。」

「・・・え？」

驚愕な表情をする二人。どうやら相当大変状態らしい。

「だから誰か一人はつきっきりでいた方がいいと思う。だから・・・

。」

「だったら私がいるから大丈夫だ。」

その声に振り向くとティライズが起きていた。同室だったので声が聞こえていたようだ。

「どうやら沙汰が危険な状態らしいな。なら私がいるから君達は君たちにできることをしろ。」

「でも、僕のせいで沙汰さんがこんな状態に……………」

「だったら尚更だ。泰人達を連れて戻ってくる、これ以上に奴が喜ぶことがあるか？」

その言葉に頷くティルス。確かにその通りだった。もしかしたら泰人達を連れてくれば沙汰の意識が戻るかも、そう思うしかなかった。

「……分かった。僕達行ってくる。でも無理はしないでね、君も重傷なんだから。」

「ふん、当然だ。……お前も気をつけろよ。」

そう言ってティライズは眠りについた。疲れていたのにティルス達の為に無理していたのは誰が見ても明らかだった。

「じゃあ行こう。メディスクローズの神殿の隣にある遺跡へ!! 多分あそこに行けば泰人さん達の居場所も分かるはずです。」

二人も同意見だったようで頷く。そして移動しようと集中しだした所で……

カランカラン

何かが落ちた音が部屋中に響いた。

音がした方を見ると融合の腕輪、変身の指輪、導きのビー玉が転がっていた。

「そういえば意識を失ってでもあれだけは手放さなかったんすよね。今手放したってことは……。」

ティルスは頷くと3つのアイテムを拾う。すると沙汰が笑ったような気がした。寝ているのに……。

「沙汰さん、貴方の気持ちは無駄にはしません。きっと泰人さんを連れて戻ってきますからね！」

そう言ってティルス達はその場を後にした。

3人は気がつくやうと遺跡の前にいた。それほど古くない遺跡のようだ。中に入ると祭壇のようなものがあるのが確認できる。

「……ここは願いの跡地。何かを失い何かを得る、そんな所よ。」

珍しくミュアが結構話した。

二人はかなり驚いている。

「前にある人物とここに來たの。大事な人を取り戻すために、……あの子を生贄にしようとした。」

すごくさみしそうな表情をする。いつも無表情なのでこれまた珍しい。

「でも、少なくとも今の私は違う。何かを犠牲にして幸せを掴んだってそれは違うもの。私の幸せじゃない。それが大事な人の妹なら尚更……。」

そう言って懷から石を取り出す。それはとても綺麗なエメラルドだった。

「私は梓由を止めなくちゃいけない。あの子は多分泰人という。そんな気がするの。だからこの石で泰人の居場所を教えてもらう。みんな助けたいから!!」

そう言っただけでエメラルドを祭壇に置く。すると祭壇が輝き始めエメラルドが消えると同時にティルスに緑色の光が発射される。光に包まれティルスは理解した。泰人の居場所を。

「時空転移!!」

そう言うとティルス達は……

シュン

一瞬誰かがティルスの前に現れた気がしたが確認できずその人物達も含め転移を開始した。

ギギギ

「さて、・・・ようやく出番がきたようだ。」

城の中で巨大な銅像が動きだそうとしていた。

続く

25. 出陣 (後書き)

どうでしたか？

次回も見えていただければ嬉しいです！

26. 夢の世界

長かった

数十年間力が回復するまで

やっとここまで来たんだ

失敗は許されない

私は成功させる

妹を・・・生き返させるために

たとえどんな邪魔が入っても・・・ね

夢の世界

「・・・うふふ。」

泰人達の目の前で宇木風梓由は笑っていた。そう見た目は間違いない本人だった。

おとなしそうな感じ、まだ幼さが残る顔立ち。まさに本人だったのだ。大人っぽい雪美とは正反対である。

「ねえ・・・さん・・・。」

動揺していたのは泰人だけではなかった。隣にいた雪美も泰人以上

に驚いていたのだ。どうやら彼女は梓由の妹らしい。本当かどうかは泰人には分からなかったが。

「いらっしやい、雪美。私は貴女を迎えに来たの。私と一緒に帰りましょう。」

そう言って手を差し伸べる梓由。雪美はその手を掴もうとふらふらと梓由のもとへと歩き出す。

目の焦点が合っていない。明らかに普通じゃなかった。私と、ここで泰人が冷静になる。梓由の方を見て何かを思い出すようにする。そして思い出す。一年前の出来事を・・・。

「・・・お前は宇木風梓由なのか？」

その言葉に梓由は反応し泰人の方を見る。

「うーん、そうと言えばそうだけど違うと言えば違うのかもね。私は宇木風梓由であって宇木風梓由ではない。妹を、宇木風雪美を助けるために生まれた存在、光の精霊ミーア。それが私よ。」

「ミーアってまさか・・・。」

泰人は驚いた。ミーアは一年ほど前に行方不明になっている。そして宇木風梓由と会ったのも一年前、ということとは同一人物の可能性が高い。だが泰人には分かる、あの時会った梓由とは全くの別人であることに。そして門番から聞いた話。・・・今考えてもまとまらないと分かった泰人はとりあえず今すべきことを考える。

それは雪美とミーアを引き離れた方がいいかもしれないということ。今はミーアの思い通りの展開にさせてはいけない、そう考えた泰人は行動に移そうとしたが彼よりももっと早くに動いていた者がいた。

「行っちゃ駄目だよ、お姉ちゃん!!」

莉麻だった。腕を掴み必死に行かせまいとしている。

「私なんとなく分かるの。あの人は危険だよ。お願い、・・・行かないでよ。」

涙目になりながらも止める莉麻。すると雪美の足が止まる。
徐々に目に光が戻っていく。

「あ・・・。」

目に光が灯り正氣に戻る。

そして雪美は莉麻の方を見ると、莉麻はまだ必死に腕を掴んでいる。
そんな莉麻の頭を撫でてあげると、向こうも気づく。

「もう大丈夫、安心していいよ。」

「・・・うん。」

雪美は安心した莉麻の表情を見るとミリアの方へ向きなおす。もう
大丈夫のようだ。

「姉さん・・・いえ、光の精霊ミリア。私、思い出しました。私が
ここにいる理由を。・・・私はもうこの世にはいない存在、つまり
死んでいるんですよね。」

「・・・!!」

泰人と莉麻はその告白にとっても驚く。だが雪美は更に言葉を続ける。

「そして私は長い間夢の世界の守り役として色々な人の夢を守ってきた。悪夢を見ている人がいたら次の日にはいい夢を見られるようにしたり、困っている人たちの相談に乗ってあげたり・・・、ずっとそんな日々を過ごしてきたの。でも心残りだった。置いてきた姉さんのことが気がかりでしよがなかつた。だから忘れるために名字は別のを語って過ごしていたの。でもできなかった。私には姉さんが・・・もしかして思っていたけど、貴女がここに来たり由って。」

「そうよ、話してあげる。私がここに來たのは、
・貴女を、宇木風雪美を生き返らせるためよ。」

「・・・・・・・・ふん。」

そして彼女は語り始めた。自らの過去を・・・ヴィントルの災害の全貌を。

続く

26. 夢の世界（後書き）

どうでしたか？

次回も見てもらえたら幸いです。

27. 偽られた歴史2

あれは今から約50年ほど前の話よ。

とある病院に一人の患者が入院していた。

その子の名前は宇木風雪美。元々体調はあまり良くなかったからずっと入院を繰り返す生活をしていたわ。

そして姉の梓由はそんな病弱な妹の事が好きだった。例え身体が弱くても心は強いもの、それが口癖だったわね。とても仲良しな姉妹で病院中でも有名だったな。

ある日、一つの知らせが届いたの。

「姉さん、次の週になったら一度家の方に帰してもらえるみたいよ。」

「本当！？それはとってもいいニュースじゃない。」

いい知らせだったわ。体調も落ち着き、帰宅を許されたのよ。

しばらく入院してたから学校の方もほとんど行けていなかったあの子にとっては久しぶりに行ける学校がとても楽しみだったみたいで、よく梓由にも話をしてたっけ。

そして日々は問題なくこのまま過ぎていくのだと誰もが思ってた。

でもあの日、雪美の退院の日全てが始まったの。

その日梓由は悪夢にうなされて目を覚ました。

その夢は妹の身体から白い魂のようなものが抜け出てそれが黒い玉のような物体に飲み込まれて消える光景だったわ。

梓由は気がつくと家を飛び出していた。時刻は夜中の2時、人気の

ない所を彼女はただひたすらに病院の方へと走っていった。距離は少しあったし時間かかったけどね。

勿論病院は閉まっていた。見回りの人が歩いているのが見えたわね。見つかったら帰らされると思った梓由はだれにも見つからないように秘密の入り口を使った。

1階のとある病室は窓の鍵が壊れてて侵入が可能だったの。頻繁に見回りの人が来るけど・・・。

見回りの人をやり過ごした梓由はそこから入って妹の病室へと入った。

そこにはちゃんと妹がいたわ。梓由は安堵した。

・・・だけど

ピーーーーーー

変な音が聞こえる。妹の隣の機械からだった。そしてこの音は梓由も知っていた。

・・・心肺が停止した音だ。梓由は隠れてここに来たのにもかかわらず妹の方により大声を出した。

「雪美！雪美、死なないで！！」

梓由は必死に呼びかけた。だけどその音が止むことはなく、やがて来た人達に梓由は捕まってしまった。

次の日梓由は妹の病室にいた。

妹の顔には白いタオルのようなものが掛けられていた。

そんなんじゃない、妹の顔が見れないじゃない。そう思ったが急に悲しくなってきた。

どうやら妹の病状は本当に良くなりつつあったらしい。お医者さんの話でもこんなケースは初めて見たのだと言われた。そこで梓由は思い出した。妹の魂を飲み込んだあの黒い玉の存在を。そのせいで妹がいなくなってしまったのだと。

梓由は妹の死を受け止められずにいた。だからそんな発想をしてしまったのかもしれない。

「君は失ったものを取り戻したいのか？」

突然頭の中にそんな声が響いた。

「・・・え？」

突然聞こえた声にあの子は驚いていたわね。そりゃびっくりするでしょう。でも声の主は言葉を続けたわ。

「我は君の願いを叶えることができる。だがその代償を払ってもらうことにはなるが・・・。」

どうやら声の主は梓由と取引をするつもりだった。そう、あの子の精神状態をよく知っていたから。普通の人だったら聞き直すか、もしくは。

「・・・私、妹が戻ってくるなら何でもする。だからお願い、妹を

生き返らせて!!」

と願うのは当然よね。すると梓由を光が包む。

・・・そして光が晴れるとそこには当然梓由が立っていた。でもその梓由は

「・・・さあ、始めましょうか。」

この私、ミィアになっていたけどね。

その後声の主は妹の魂を奪ったのは、黒の魔法使いヴィントルであると説明し私をディオールへと送った。どうやら特殊な術を使ったようだけどそこまでは私にも分からないわ。

そして私はヴィントルを探した。でも彼は簡単には現れなかった。人前にはめったに現れず、時々親衛隊に力を貸しているという情報を得た私はまず一騒動起こすことにした。

町一つを消した所で奴らは来たわ。青龍、白虎、朱雀、そして玄武。彼らは私を止めるため全力で私に挑んできた。それはもう強かったわ、・・・力を得た私ほどじゃなかったけどね。

時間はかかったけど玄武以外は倒すことに成功した。残った玄武の使うラルゴの能力はとも厄介で結構な時間を使ってしまった。そこで来たのよ。黒の魔法使いヴィントル、そう貴方よ。

・・・まあ、いいわ。そして二人がかりで私に挑んできた。今更一人増えた所で問題ない、・・・それが甘かった。ヴィントルの強さは桁違いすぎた。

親衛隊の更に上に行く強さだったの。そこに玄武のサポートもあり、私は徐々に追い詰められていった。

でも私は諦められなかった。雪美を、妹を救う・・・、私の使命はそれだから。

するとまた声が聞こえてきたわ。

「どうやら苦戦しているようだな。ふむ、少し力を貸してやるとするか。」

すると私にまた新たな力が身に付いた。そして今度こそ彼らを追い詰めたの。

でも向こうの方が上を行ってたわ。

戦いの場所を私に気付かれないように願いの跡地に移していたの。

何か不思議な場所かなと思っていた時にはもう遅かった。ヴィントルは願いの跡地で自らの肉体と引き換えに私を封印した。

でも私も簡単に封印される訳にはいかなかった。力の半分を未来に飛ばしたの、これから生まれる子達に受け継がれるように。自由になったその時こそ妹を今度こそ救うそう決めたから・・・。

意識が戻った梓由は今までの事をすべて覚えていなかった、つまり記憶喪失になっていたの。

玄武は梓由が別世界の人間と知り、王に頼んで梓由の世界に飛んでそこで暮らし始めた。

そしてヴィントルは行方不明になった。きっと身体を失ったから次の機会を狙っていたのでしょうね。妹の魂を使い何をするのかは分からなかったけど、すぐには動けないみたいだったしこっちはこっちで体力回復のために休息を取ったわ。

戻ってきたときすでに3年の時が経っていた。梓由の両親や親戚を見つけれなかった玄武はしばらく面倒を見てくれて、一応感謝しているわ。きっと彼もヴィントルに騙されていたのね、可哀想に・

・。

その後例の事件にヴィントルの災害という名前が付けられたのを知ったわ。いつの間にかそう呼ばれるようになったから、誰がそう仕向けたのか玄武には分からなかったみたいだけど私には分かる。

あの声の主がやったんだって。

梓由は不老不死になっていた。まあ、光の精霊である私を宿してるんだから当然だけどね。玄武は引き剥がそうとしたけれど出来なかった。どうやら雪美を救うまでは離れられないようになっていたみたいね。

その後玄武は結婚すると同時に梓由を養子にするとやってきた。でも彼女は断り信頼のおける施設に預けられた。・・・恐らく名字が変わるのが嫌だったのかもね。

その人達は不老不死である梓由を受け入れてくれた。優しい人達に囲まれて幸せだったのだと思うわ。

それから何十年もの時が過ぎた。そこに来る人に時々怖がられた時もあったけど、ちゃんと話すといい子だって分かってもらえて打ち解けられた。玄武も頻繁に来てたわね、時々家族も連れて。小さい頃の泰人、貴方にもあったことがあるのよ。

時が経つにつれ私も徐々に力を取り戻してきたある日に悲劇が起こった。それが

玄武の死だった。

続く

27. 偽られた歴史2 (後書き)

どうでしたか？

次も見てもらえれば嬉しいです。

28. 偽られた歴史3

6年前の夏ごろだったかな。

玄武は死んだ。90年近く生きてたから寿命だと思う。

でもこれが梓由の今後を左右することとなった。

ディオールで生きていればもっと生きることができたけど梓由のためにこっちで生きることを決めた、それは梓由が自分が玄武の寿命を縮めたと思って仕方なかったのかも。

私も少し悲しかった。いい奴には違いなかったから……。

それから梓由は塞ぎ込んでしまった。大事な存在を失った、そうすると人間強いきっかけがないと立ち直れないものよ。

そしてそのまま5年過ぎた所で更に深刻なことが起こったわ。

施設の取り壊し。梓由の居場所がなくなってしまった。

別の場所を紹介されたけど行く気にはなれなかった。そして行く所もない、いまだに記憶の戻らないそんな彼女はとある川の近くで途方に暮れていた。

そんな時ね。貴方、……茅野泰人と会ったのは。

……そこからは私の記憶からは抜けているわね。どうせもう一人が持っているんでしょうけど。

私の記憶はそこから少し経った後の事、気がつくところあの病院の前にはいたわ。

そして私は自由に梓由の身体を動かせるようになっていた……けど力は四分の一になっていたわ。

残りの力を持っていたのは未来に飛ばした半分の力をサミーと莉麻

が持っていたわ。そして、もう一人の私、本当の宇木風梓由の記憶を持った存在。

でもすぐ見つかったわ。誤算はヴィントルがすでに莉麻とサミーを手にしていたこと。

だから私は宇木風梓由に会って莉麻を手にする話をしたら、時間がかかったけど説得することができたわ。

そして思い出した。願いの跡地のことを。もしかしたら莉麻を生贄にすれば雪美は帰ってくるんじゃないかって。

・・・うふふ、まあ落ち着きなさい。続きが聞きたいでしょ。

だけど邪魔をされた。ヴィントルにね。

その後は彼に取り込まれてここまで来たの。まさか雪美がいるなんて思わなかったから嬉しかったわ。

やっと、ようやく私は役目を終わることができる。雪美を取り戻して邪魔するヴィントルと泰人、貴方達を倒してね。

ヴィントルと分離した時力のほとんどが戻ったわ。全盛期の黒の魔術師には届かないけど、貴方達よりもかなり上はいつてるわね。それで動きやすいようにこの世界を形成している星音を取り込んでこの世界を手にした。後は決着をつけるだけ。

・・・さてこんな感じかしら。

ミーアの話が終わる。

泰人は莉麻の話でかなり怒っていたが落ち着いたようだ。

「・・・なるほどな、大体理解したぜ。だがお前は勘違いしてる。お前に話しかけた声、あれはお前の思っているような優しい奴じゃ

ねえ。お前は奴に利用されているだけなんだよ。」

サミーが話す。今まで話を無関心っぽく聞いていたがちゃんと聞いていたようだ。

「それでもいいわ。どんな手を使ってでも雪美を救う。それだけよ。」

「ここでこの小娘を解放したら大変なことになるって言うても信じねえよな。」

「当然ね。貴方の事は信じないわ、さてそろそろ終わりにしましうか。」

ミーアはそう言うのと右腕を突き出し何かを呟き始める。すると目の前の時空が歪み何かが出てくる。

・・・どうやら金色に輝く鎌のようで、両手で持つ大きいやつだ。それを構えるミーア。どうやら本気のようなのだ。

「・・・ちっ。おいお前ら、ここは一旦引くぞ。今の俺様達では勝てねえ。」

「俺も同意見だ。ここは体勢を立て直すべきだと思う。」

サミーと泰人が言うのと、莉麻と雪美は渋々頷く。

「あら、逃がすと思う？」

そう言って鎌を振りおろす。

するととんでもない衝撃が泰人達の横を通過し少し飛ばされた。

体勢を立て直して衝撃が起きた方を見ると、地面がぱっかりと開いて数キロ続いていた。

「とりあえず今のは外したけど、今度は外さないわ。雪美、早くこっちに来なさい。」

「・・・駄目、こんなことは駄目だよ。」

しかし、雪美は首を振る。明らかに怖がっている。

「やっぱりヴィントルを倒さないと駄目みたいね。今度こそ覚悟しなさい。」

狙いをサミーに絞る。

サミーは避けようとするが明らかに間に合いそうもない。仕方なく何かを唱えようとする。

「終わ・・・。」

振り下ろす寸前、目の前に男が現れその腕を抑える。

男は白いマントを被った男だった。

「まあまあ、待ってください。ここで彼らを倒すのは得策とは言えませんよ。」

ひょこつと白マントの後ろから変な男が現れた。

その男は道化師のような格好をしている、シュパルツだった。

「・・・これもあの声の導きかしら。貴方達、何しに来たの？ 邪魔しにきたなら・・・。」

「いいえ、私達は貴方の助けになるように参上したのですよ。」

その言葉に驚くミア。どうやら彼女は彼らの事を知っているよう
で敵対していたようだ。

「ほら、ヴィントルを見てください。何か唱えようとしていたでし
よう。今は倒すよりも力を封じる方が先ではないですかね。」

「・・・そうね、貴方の言うとおり。じゃあこうするわ!!」

そう言って鎌を投げる。サミーは唱えていた呪文を一度中断し即席
の防御術で盾を展開する。

だが、鎌はその盾を破壊するのではなくすり抜けた。

「・・・・・・・・しまっ」

遅かった。その鎌はサミーを・・・通過した。

「・・・・・・・・え?」

泰人達は茫然としていた。

そのまま鎌はミアのもとに戻っていく。
すると

「ぐ、あああああああ。」

急にサミーが苦しみだす。

そしてサミーから水晶が抜け出てくる。

カートーン

水晶が地面に落ちる。

「サミーーーーーーー！！！」

瞬間ラルゴが光る。すると泰人からフィルディアに姿が変わる。
駆け出し落ちていくサミーに手を伸ばす・・・が

スカッ

空を切る。そして前を見るとミーマの隣でサミーを掌に乗せている
シュパルツがいた。

「お、おかあさ・・・。」

サミーは何かは話そうとしているが身体に力が入らないのかぐった
りとしてしまった。

「さて、今ので少し力を使ってしまったし、今日は明日の説明をし
て終わりましょうか。・・・ちょうどよくお仲間も到着したようだ
しね。」

その言葉に莉麻は振り返る。

すると先ほどミーマが鎌を取り出したように時空が歪み、そこから
3人の少年少女達が出てくる。

そうティルス達だった。

「……えーっと、ここがその世界ですかね？」

そう言って辺りを見回すティルス。すると莉麻が視界に入る。

「あ、莉麻さん！！無事ですか？」

「あ、うん。私は大丈夫。どうやら新しい人達も来たみたいだね・
・ってそれより！！」

そう言ってミーアに向き直す。するとティルス達もその方を見る。

「……！！？」

ミュアがかなり驚いた表情をしていたがミーアは気にせず続ける。

「明日この世界でサバイバルゲームを決行するわ。参加者は総勢100名。そっちは泰人、莉麻とその3人の5人。こっちはこの二人。残りは適当に用意するわ。そして残り15人まで争ってもらって、決勝トーナメントをして決着をつけるの。私は決勝トーナメントからってことだね。そして、見事に優勝したらこのサミーちゃんと私が借りてる身体を持ち主をお返しするわ。でも、貴方達全員がゲームオーバーした場合、雪美を私に渡してもらうからね。開始は明日の朝9時に花火を鳴らすからそこでスタート。気絶したら脱落、この世界から消えてもらいます。まあ、外野は実際にはいない人たちだし問題ないわね。問題は貴方達。貴方達が脱落した場合人質に加わってもらうわ。全滅したら全員消えておしまい。もちろんその地面に落ちてる水晶もね。基本なんでもありよ。生き残ればいいわ。以上だけど何か聞きたいことは？」

シュパルツと白マントは頷く。同意したようだ。そこでティルスが手を挙げる。

「今一理解していないんですけど、サミーと泰人さん達の知り合いが貴方達に捕えられていると。そして断ればおそらく……。」

「そうね、もし参加しないで逃げ出したらサミーには消えてもらうことになるわね。」

びくっとフィルディアが震える。どうやら今の言葉は聞こえていたようだが、どうやら話すほどの力が残っていないようだ。

「さて、私を楽しませてね。それじゃ……。」

「待って!!」

ミュアは声を出して止めようとしたがそれよりも早く止めた者がいた。

雪美だった。

「それって戦争じゃない。……嫌だよ、私の為にみんなが争うなんて。だったら私、貴方と一緒に……。」

「駄目!!」

今度こそミュアが声を出す。彼女は沙汰達と行動している間も基本顔が見えないように過ごしていた。だが、今回は違った。

彼女の素顔が明らかになった。

一緒に風呂に入って一緒に寝ていたティルスさえちゃんと確認でき

なかった素顔が・・・

「・・・・・・・・貴女を止める。」

彼女を光が包みそれが止むとそこには、知らない女性がいた。

背は少し高めでかなり大人っぽい。白くひらひらした服っぽい何かを着ている。

背中には翼が生えて、頭には天使の輪がついているその姿はまさに、空想上の天使だった。

「あれは、・・・光の精霊ミーア。本で見た姿にそっくりです。」

ティルスが呟く。そう彼女は光の精霊ミーアの姿をしていた。

ミュアはミーアと向き合う。

「うふふ、その姿。久しぶりに見たわ。」

「・・・・・・・・これ以上好きにさせない。」

ミュアが銀色の鎌を取り出し構える。

「私は貴女、貴女は私。何故か知らないけど姿が入れ替わってしまった。・・・やはり貴女が何かしたのかしらね。どうなの、宇木風梓由？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ミュア、いや梓由は構えたまま表情一つ変えない。
だが

「・・・姉さん？」

「・・・・・・・・・・！？」

雪美の声に後ろを振り返ってしまう。

すると急にミーアの気配がなくなる。

慌てて梓由は振り返るがミーアもあの二人も、もう誰もいなかった。

「ではまた明日、決戦の日に会いましょう。」

その言葉がその場に響く中誰も動くことはできなかった。

続く

28. 偽られた歴史3 (後書き)

どうでしたか？

次回も見てもらえたら嬉しいです！

29. 決戦前夜

私は正直混乱していた。

いつもママって呼ぶサミーがあの時

はおかさん

って呼ぼうとしていた。

何があったのか、あの子の心境の変化は、とても苦しんでいたのではないか

そればかり考えてしまっていた。

ティルス達はひとまず雪美の屋敷に来ていた。

フィルディアの部屋は学園内にあり危険だと判断し、ミーアの力が影響しないここに来るしかなかった。

全員居間に集まる。いつの間にか泰人に戻っていた。一通りのあいさつを済ませて莉麻が拾っていた水晶を机の上に乗せる。

「・・・・・・・・・・。」

どうやら力が戻っておらず会話ができないようだ。しかしまだ起動していることはなんとなく把握できた。呼吸音が聞こえた気がしたからだ。水晶が呼吸するかは知らないが、エネルギーを供給するための機関が働いていてその音だろう。それを確認し、泰人が話を切り出す。

「まずは情報の整理をする。簡単にまとめると、サミーと星音という少女を助けるには光の精霊が主催するゲームとやらで勝ち残ること。そしてこれには雪美を除くここにいる5人全員強制参加ってことだ。」

そうやって泰人は辺りを見回す。ここにいるのは自分を含めて6人と2つ。

莉麻、ティルス、梓由、雪美、スィング、ヴィントル、フィルディアである。

「とにかく俺もできる限りフォローする。まずは予選とやらを全員で生き残ること。作戦は生き残ることを第一に、とこんな感じか。・・でも強制とはいえ、みんなを危険に合わせたくないしやっぱりミリアと交渉して・・・。」

それに参加者4人は首を振る。

「私は出るよ。お姉ちゃんの大事なお姉ちゃんを取り戻すためにね。」

「僕で力になれるか分かりませんが、精一杯がんばります。」

「・・・・・元々私の問題。・・・参加は当然。」

「危険なんてあんたも同じだろ。じゃあ俺っちも行くさ。」

どうやら参加の意思は固いらしい。泰人は尊重させることにした。

「分かった。だったらやって・・・・・」

「ちょ、ちょっと待ってください!!」

雪美がストップをかける。

「み、皆さんが戦いに行くなんてやっぱ駄目です。私……。」

そんな雪美の手を梓由が握る。

「……大丈夫、みんな強いから。……私たちがきつと全て終わらせて、貴女も、梓由もみんな助けるって約束するから……ね。」

「ねえさん……うん。」

そう言い終えて梓由に抱きついた。相当寂しかったのだろう。梓由もなだめるように頭を撫でている。

「さて……と、そろそろ出てきてもいいぜ。沙汰！」

と泰人は不意に声を出す。しかし誰も答えない。当然である。

「全くあいつも人が悪いな。せつかくの再会だからってドッキリでも仕掛けてるんだろうけど。」

「……あの、泰人さん。沙汰さんのことで少しお話が……。」

そう言って話を切り出した。

沙汰が朱雀との戦いに勝利したが意識不明の重体で病院に入院していることを。

「・・・・・・・・あいつがそんなことになる訳が・・・・。」

泰人は周りを見る。莉麻も驚いているようで梓由とスィングは目を逸らしている。これだけで彼には本当であることが分かる。

「・・・・すみません。僕がもっと早くに沙汰さんの限界に気づいていれば。」

「・・・・・・・・・・沙汰。」

そうポツつと言うと泰人は動かなくなってしまった。相当ショックで理解するのに時間がかかるようだ。

莉麻も泰人ほどではないにせよ落ち込んでるように見える。

「・・・・とりあえず明日のこともあるし部屋割り決めて早めに休んだ方がいいっすね。えーっと、部屋割りは・・・・。」

「・・・・・・・・決めてある。」

梓由はそう言うと言紙を取り出す。どうやらもう決めているらしい。それを机の上に広げる。

そこにはこうあった。

りま、ゆきみ

わたし、ティルス

たいと、スィング、変なの

「・・・後、今の私は梓由じゃなくてミュアだから・・・宜しく。」
そう言い終わる。

「ちょ、ちょっと待ってください！！もう男に戻ったのにミュアさんと一緒ですか!？」

「そうだよ、ね・・・ミュアさん。女性と男性組に分ければ問題ないよ。」

すると梓由・・・ミュアはティルスに近づきポケットから例の道具を取り出し・・・
指にはめる。

「ちょ、ま・・・」

少女になった。

「・・・・・・・・問題ない。」

「ありますよーーーーー!!」

というわけでこの通りの部屋分けになった。

莉麻、雪美部屋

「・・・せっかく会えたのに一緒にいけないのは寂しいかも。」

雪美はそう呟く。二人は一緒に雪美の部屋で泊まることとなった。莉麻は少し立ち直ったようだ。

「莉麻ちゃん、お兄さんのお友達はきっと大丈夫！貴女が信じてあげないとお兄さんも立ち直れないでしょ、ね。」

「・・・うん、ありがとうお姉ちゃん。」

「さあ、じゃあ温泉に行きましょう。今日の疲れを取ってゆっくり寝ましょう。」

ということで二人は温泉へと向かっていった。

ミュア、ティルス部屋

「もう、どうしてここまでして・・・。」

空き部屋を借りたミュアとティルス。もう指輪は取ってしまっていた。

まあ、寝る場所はベッドが二つあるので問題ない。

「……修行する。」

「……え？」

気がつくとも別空間に来ていた。あまり大きくない空間だが小学校の教室位はありそうだ。

「……今の状況で戦えるのは私と泰人だけ。……あの道化師みたいのは何とかなりそうだけど、それでもミアと青……マントの男に勝つことは無理だと思う。……だから貴方にも一通りサポート位できるようになってもraitたいの、少しでも勝算を上げるために……。」

ミュアは本気だった。この一日でティルスを一通りできるサポートキャラに仕上げようというのだ。

「……そうですね。僕も足手まといだけは嫌です。どうかお願いします!!」

「………始める。」

こうして二人のティルス強化訓練が始まったのだった。

泰人、スイング部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一応歩いてきたが椅子に座ってから泰人は言葉を発そうとしなかった。まだショックから立ち直っていないようだ。

「・・・・・・・・どうしようか、うーん。」

スィングはとりあえず泰人落ち着くまで一人にさせることにしたらしく部屋を出ようとする。と水晶が光りだした。どうやら起動を開始したようだ。

「・・・・さてと、ようやく喋れるようになったか。聞け、ラルゴ使
い。」

机の上に置いていた水晶が復活した。だが泰人は相変わらずである。どうやら話だけは聞くようで水晶の方は向いている。

「谷田沙汰のことだ。さっきティルスの話聞いた限り、あの朱雀を倒したらしいな。朱雀を倒したってことはとんでもなくドーピングしたんだろう。大方生命力を力に変換して無理やり強化したんだろうが、普通の奴ならそんな強化したら持たずに即死だ。どうやらまだ生きているらしいが医者たちじゃどうしようもないことだ。このままだと・・・・間違いなく数日で死ぬだろうな。」

「ちょ、ちよっ・・・・・・・・」

スィングが話を切ろうとする・・・・が水晶からの圧力でそれ以上話せなかった。

泰人は変わらないように見える。どうやらそこまでは分かっていたようだ。

「・・・奴の意識を取り戻す方法が一つだけある。」

ガタッ

泰人が立ち上がり机の上の水晶を持ち上げて顔を近づける。

「頼む、教えてくれ！！どんなことでもするから・・・・・・頼む。」

必死に頼み込む。そして水晶を机の上に戻す。

「力に変換した生命力は使用后、使用者の周りを浮いているものだ。それを再び生命力に戻して奴の肉体に戻せば意識を取り戻すだろう。だが、そんな術が使える術師はほとんどいない。俺様位のもんだ。」

水晶は泰人を見る。泰人は頭を下げた状態から動かない。本気で頼んでいることがよく分かった。

「・・・俺も甘くなったな。仕方ない、取引でもするか。」

「取引？」

「ああ、俺を奴の所に連れていけば奴を元に戻してやる。だがそれまでは俺様の命令は絶対服従だ。ミーア、青龍、そして・・・あの悪魔を倒すまでお前には手伝ってもらう。」

「・・・悪魔ってなんだ？」

泰人は気になって聞き返す。そういえばミーアが聞いた声、それなのではないかと考えてみる。

「大方分かっているとは思うがミィアを裏で操ってるいわばボスだな。悪夢神っていうらしいが俺は悪魔って呼んでいる。全ての元凶だ。」

「・・・やっぱりあんたが雪美の魂をここに連れてきたわけじゃないってことか。」

「当然だ。意味のない行動はしない。・・・万が一俺が死んだら全てが終わる。ディオールもお前たちの世界も悪魔の手に落ちるだろう。まあ、そんなことは興味ないんだが玄武の頼みだから仕方ねえ。しょうがなくやってるのさ。」

最後の方は本当にめんどくさそうに言う。どうやら水晶が消滅すると世界が終わるようだ。

「・・・じゃあ協力するしかない。沙汰も救いたいけど、なんか大変になることも阻止したいから。お前の命令に従うよ。」

「いいだろう。さて、作戦会議でもするか。その小僧も来い、ミィアと青龍との対決について説明してやる。」

「え？あ、はい。」

そう言って3人で作戦会議を始めた。

「その前に、おいフィルディア。起きてるか？」

「・・・・・・・・はい。」

ラルゴが反応する。どうやら話は聞いていたようだ。

「……………サミーの事は俺の不注意だ。すまなかった。」

「……………いいえ、気にしないでください。」

「ふん、ならいい。さて始めるぞ。」

水晶は少し照れくさそうにしながらも作戦会議を始めた。

そして思い思いの夜が更けていく。
それを上空から見ている者が一人。

「……………越えてほしいものだな。」

そう呟いた。

決戦の時間が刻一刻と近づいていた。

続く

29. 決戦前夜（後書き）

どうでしたか？

今日はここまでになります。

明日はサバイバル編一日目を投稿予定ですのでよろしければどうぞ！
それではみなさんまた次回元氣にお会いしましょう！！

30. ゲーム開始（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。さて今日も投稿していきましよう。

今日中に向こうの分の投稿終わらせます。目標は高いほうがいいと思っていますよ。
それではどうぞ！

30. ゲーム開始

ミリアは教室にいた。

真夜中の月明かりだけが照らす暗い教室の中、机に座っていた。

彼女は今まで雪美のためだけに行動してきた。それが存在する意味であり、全てだったから。

その為にたくさんものを犠牲にした。・・・玄武もその一人だ。そしてやつと雪美と会えた。例えヴィントルに捕まっているとはいえ喜んでくれると・・・思っていた。

しかし彼女はミリアを拒否した。それが分からなかった、いやヴィントルのせいだと思っていた。

でも何か引かかる。

ちゃんと考えていなかったが何故この夢の空間に雪美がいるのか、何故夢の世界の守り役なんてやっているのか。

そもそもヴィントルは夢の世界に関する術は使えないし雪美が守り役とは知らなかった。

とここから一つの考えに辿り着く。

「……………本当にヴィントルがやったのではないの？」

もし謎の声が全てを仕組んで自分にヴィントルを始末させるつもりだったとしたら。

・・・首を振る。

ここまでできてしまった。もう後戻りはできない。彼女はやるしかなかった。

雪美を救うために。

「私はあの子を救うためだけの存在だから。」

朝

泰人達は再び居間に集まった。朝食を取りある程度の準備は整えていた。

時間は午前8時。開始まで後1時間だった。

「さて、最後の仕上げだ。莉麻、エプロンを出して身につけろ！」

「うん。」

ヴィントルに言われた通り、莉麻はエプロンを身につける。

・・・もちろん服の上からなので問題はないぞ。

「よし、じゃあ俺を掴んで胸の前まで持っていけ。」

莉麻は言われた通り黒い水晶を掴むと胸の前まで持っていく。

すると水晶はずぶずぶと音を立てて胸の中に入っていく。実際はエプロンの中だが。

「・・・あ、あん。」

変な声を上げる。微妙に当たるので仕方がない。
と全部入りきる。エプロンは特に変わった所はない。

「おい、聞こえるか？」

突然エプロンから声がした。どうやらヴィントルのようでエプロンとの融合に成功したみたいだ。

「バッチリ！流石ヴィントルさんだね。」

「別に大したことじゃねえ。念のためにエプロンにミーマの力の欠片を宿しておいたんだ。ミーマの力を宿した物、生物じゃないと融合できないんだ。」

便利な力には必ずと言っていいほど欠点もある。

しかしその場にいたラルゴ・・・フィルディアは考えた。

ヴィントルの持っていミーマの力は全て本人にとられてしまった。

しかしサミーとは合体することに成功している。そして前回のこと・

・・・すべてを組み合わせると・・・。

そこまで考えたが今は他のことに集中しなくてはいけない。彼女は頭を切り替えることにする。

「あの、泰人さん。少しいいですか？」

「ん？」

そこにティルスが泰人に話しかける。どうやら何か用なようだ。

「実はフィルディアさんにお話がありまして、ラルゴを貸していただけませんか？」

「ああ、別にいいぜ。」

泰人はティルスにラルゴを渡す。

ティルスはそれを受け取り、話しかける。

「フィルディアさん、実は相談があるんですけど……。」

・

・

・

・

「という訳なんですが、どうですか？」

「そういうことですか。分かりました、私にできることは喜んでお手伝いさせていただきますわ。」

と二人の間で何かを決めた所で全員の準備が整ったようだ。
居間に全員が準備万端でそろった。

「さて、そろそろ時間だな。お前ら、行くぞ!!」

ヴィントルの掛け声に一同はそれぞれ返事を返して外に出た。

午前9時、花火が上がった。どうやら開始の合図だった。
するとキーンと言う音がする。どうやらマイクの音みたいだ。辺り

を見るとあらゆる所にスピーカーが取り付けられていた。

「はい、皆さんおはようございまーす！私がこの大会の主催者であるミィアです。これから大会の説明をします。ま、雪美と王子隊の人達だけ聞いてもらえればいいんだけど。」

泰人達は屋敷から離れた公園で話を聞いていた。

「どうやら泰人達は王子隊と呼ばれるようだ。そんなことはどうでもいいが・・・。」

「貴方達はこの大会で優勝することを目的にしてもらうわ。誰か一人優勝した場合私は全てを諦めて貴方達に従うわ、約束しましよう。でも全員失格になった場合、雪美は渡してもらうわ。ルールは昨日大まかに説明したけれど、サバイバルね。残り15人まで戦ってもらうわ。失格条件は気絶、もしくはヴィントルの消滅のどちらかね。雪美には手を出さないし同伴も許すわ。後、参加者のほとんどは私の力で作り出しているから気兼ねなく倒してね。思考は普通の人間ベースね。さてこんな所かしら、せいぜい足掻いて生き残ってみせなさい。」

ピンポンパンポーン

と音が鳴り放送が終わる。どうやら始まったようだ。

「さて、どうするか・・・ん？」

泰人は何かを見つける。

公園にあった看板に何か張られている。

そこにはこうあった。

第1回サバイバルゲーム・特別ルール

下記の者を倒した人にはそれにふさわしい物あげますよー。
実力が飛びぬけているので皆さん頑張ってくださいね。

茅野泰人・国1つ

茅野莉麻・高級料理店の食べ放題券、何人様でもOK

ティルス・海外旅行1週間、5名様まで

ミユア・謎の薬

黒い水晶の破壊・何でも願いを3つまで叶える

以上4名＋1つです。では健闘を祈りますよ。

ちゃんと名前の下には写真も載っている。・・・謎の薬とは何なのか。

「・・・俺っちは眼中になしか。」

スィングは自分の名前がないため少し落ち込んだ。

「・・・俺やられると国一つとかおかしすぎだろう。」

「それほどまでに危険視されているということですよ。さてどうしましょう・・・・・・・・。」

ティルスは何かに気付きそっちを向く。すると複数の人間が草むらに隠れていることが分かった。

これも昨日の特訓の成果の一つである。

そのことを何気なく泰人に小声で伝えた。

泰人は頷きラルゴを取り出した所で相手が草むらから飛び出してきた。3人の女性でナイフのような武器を所持していた。

「貴方達には悪いけどやられてもらいます。」

そのなかの一人がそう言って3人の連携で攻めようとするが・・・急に動きが止まった。何もない所で何かにぶつかったようだ。見えない壁があるように。

「いったー、何ですかこれ？」

少女が手を出す。すると前には何かがあるようで触れる。

どうやら周りにそれがあるようで3人娘は動けなくなっている。

そう、ラルゴの結界だった。

「アウトアンドウィップS!!」

瞬間的に結界を解きウィップで急所を突き気絶させた。これがほんの数秒の出来事だった。

「こんなものかな。とりあえず3人片づけた。女の子相手だから手加減しておいたよ。」

「はい、では少し待ってください。・・・あ、ラルゴも貸して下さいね。」

ティルスは気絶している少女の一人に近づきポケットから融合の腕輪を取り出して自分の腕につける。

何も身につけてない手でラルゴも握りもう片方の手で少女の手を握る。

すると少女の身体がビクンビクンと痙攣する。

「えーっと、これマジマジと見ると犯罪している気分になるっすね。」

とスイングが感想を述べると痙攣が止まり大人しくなると目を開く。少女は両手を目の前に持ってきて開いたり閉じたりしている。

見た目から見た年齢は莉麻と同じくらいに見える。童顔だが、本当は18だったりする。

「えーっと、成功したようです。私フィルディアです。」

どうやらフィルディアの精神と少女の肉体を融合したらしい。この方が色々動きやすいと判断したためだ。

話し合っていたのはこのことらしい。ミーアによって生み出された者達は限りなく人間に近い存在なので融合は可能なのである。ティルスはこのことを読んでいた。

「・・・つか、ティルスはよく沙汰の発明を使いこなしてるな。あいつの発明なんて一歩間違えたら危険なものだろう。」

「昨日は特訓しましたからね。使い方はある程度慣れました。」

泰人にラルゴを返しながら話していると目の前に倒れていた少女二人は消えていった。どうやら失格になると消えてしまうようだ。といっても一度気絶している肉体に入っている為、フィルディアは大会参加はできない。

「そういえばこの人の記憶によると車を持っているみたいです。こちらです。」

フィルディアに連れられていくと公園の外れに車が止めてあった。軽自動車であり人数は乗れないようだが。

「よし、じゃあ俺とスィング、ティルスは3人以外は車で移動だな。女の子たちをこれ以上歩かせる訳にはいかないしな。」

ということで泰人、スィング、ティルスは歩きで莉麻、ミュア、雪美、フィルディアは車で移動と決まった。

「お兄ちゃん、何かあったら連絡してね。絶対だよ。」

「・・・信じてる。」

「すみません、参加していない私まで気を使っていたいただいて。」

「運転は大丈夫です。任せてくださいね。」

とそれぞれと挨拶を交わし泰人達は行こうとする。

「ちょっと待て！」

エプロンが泰人を止める。

エプロン・・・ヴィントルの声に泰人は歩みを止めて振り返る。

「いいか、何があっても覚醒スネイラーの使用はするなよ。今の貴様じゃ絶対使いこなせないからな。」

「・・・ま、大丈夫さ。大抵の奴はあれを使わなくても倒せるからな。心配しなくていいぜ、じゃあ行こうぜ。」

そして泰人達は行ってしまった。

「・・・何もなければいいがな。」

フィルディア達も車に乗り込み発進させた。

「さーて、今回は泰人が3人撃破。残りは97人だよ。以上スピーカーの放送でした。」

続く

30. ゲーム開始（後書き）

どうでしたか？

また次回見てもらえたら嬉しいです。

31. 武者蜥蜴隊の罠

学校の放送室にミーマはいた。

一通りの放送が終わり休憩に入るようだ。

「そろそろ私が作った3つの部隊が動く時かしら。どうなるか楽しみね。」

そう呟いてモニターを見ることにした。

午前10時・森の入口

「いや、やめて。来ないで……。」

「おいおい、君も参加者だろう。だったら……ふふふ。」

「兄貴、俺もう我慢できねえよお。」

一人の少女が複数の男達に囲まれていた。どうやら全員参加者らしい。

少女の仲間らしき男は倒れている。どうやらもうやられてしまっているようだ。

少女は座り込んで動けなくなってしまうている。怖いのだろう。がくがく震えている。

手下の男一人が前に出てきて巨大化し少女に襲いかかる。

「んじゃあ、いただきますーす!！」

「え、・・・キャーーーーー!！」

少女はそのまま一口に食べられてしまった。

男はごっくんと飲み込む。そして美味しそうな表情をする。

この男たちは王子隊討伐グループの一つである陸の部隊、武者蜥蜴隊である。

全員で5人。リーダーは兄貴と呼ばれた細身の男。サングラスをかけた優男だ。

そしてでっかい男が一人。残り3人は下っ端のようで二人の後をついてくる。泰人達の世界の住人に見えるがミニアが作ったためこの男たちも能力が備わっている。どんな能力かは分からない。

「さて、狙いは王子隊だな。メンバーはこの手配書を見るに4人か。・・・さて、あれを披露してくれ。」

「おう、調子はいいぜ兄貴。・・・ほら。」

でっかい男は地面に手を当てる。すると目の前が盛り上がっていき、どんどん人の形をとっていく。

数十秒で形成が終わり、そこには先ほどの少女が立っていた。しかし服装がメイド服で目に光はなく無表情である。

「流石分かってるな。いつも通りいい出来だ。さて、そろそろ報告があるはずだが。」

「リーダー!！」

そう言っていると一人の下っ端がやってくる。

「ご報告します。王子隊は二つに分かれたようでAは徒歩、Bは車で移動中です。Aのほうは男3人、手配書の2人と知らない男が一人、車の方はちゃんと確認できませんでしたでしたが全員女のようにでした。」

「なるほど、今はどこにいるのだ。」

「はい。Aはこちらへ、Bの方は町の中心の方へ移動中です。」

「そうか、了解した。今からAの方を仕留める。お前も加われ。」

「はい!!」

一礼して下っ端も隊に加わる。これでメンバーは6人となる。

「さて早速……。」

リーダーの男は先ほど作られた少女の人形の顔を触る。すると目に光が灯りリーダーの男を見ると跪く。

「ご主人様、何なりとご命令ください。」

さっき震えていた少女とはまるで別人である。いや見た目以外は別人だが。

「下っ端どもに作戦は伝えてある。3人いるがこの男の動きを封じる。残りは軽く片づくだろう。」

そう言って少女に針と手配書を渡す。手配書は看板についてあるもののほかにも街の至る所に山積みになっており自由に持っていくことができる。リーダーの男は泰人を指さす。

「了解いたしました。それでは行ってまいります。」

そう言って下っ端3人連れてその場から移動した。

同時刻・町外れ

「ラルゴシュート!!」

泰人はスネイルシューターのトリガーを引くと水の塊が発射され目の前で構えていた男の額に命中し男は倒れて気絶する。

見ると今の男を合わせて3人ほどの男が倒れている。全員泰人が倒したのである。

「流石泰人さんです。3人を1分以内に倒すなんて。」

「だな。俺っち達の出番はねえかもな。」

「そうでもないさ。これからどうなるか分からないからな、気を引き締めていこう。」

3人が決心を新たに進もうとした時だった。

「キャーーーーーー!!」

「今のは！？行ってみよう。」

森の方から叫び声が聞こえた。3人はその方向へと走っていく。するとそこでは一人の少女を3人の男たちが囲んで何かしようとしていた。

「メイドサイコー。」

「メイドサイコー。」

「この誰かに仕えてるって感じがたまんねえな。早速襲っちゃおうぜ。」

「こ、来ないで・・・。」

襲われる寸前のように。

泰人はラルゴをスネイルシューターに変化させて男たちの額に3発撃ち込む。

パン、パン、パン

見事に命中し男たちはドサツと音を立てて倒れる。気絶したようだ。

「大丈夫ですか！？」

駆け寄る泰人。メイド少女は泰人を見ると安心した表情をする。

「はい、助けていただきありがとうございます。」

メイドが立ちあがると残りの二人も追いついた。

「それで、どうしてこんな所に一人で？ 今町は危ないから参加者じゃないなら外に出ない方がいいよ。」

「実はご主人様とはぐれてしましまして探していたのです。ですがどこにもいないので思い出のあるこの森かと思い来たのです。」

3人は話し合う。このままメイド一人で行かせるとまた何があるか分からない。ここが夢の世界でこのメイドが作られた存在だったとしても3人はどうしても見捨てることができなかった。

「何かあったら俺が処理する。だから少しだけ付き合ってやろうぜ。」

その言葉にティルス、スィングが頷く。

「メイドさん、だったら俺たちも一緒に探しますよ。貴女一人だとまた襲われたらどうしようもないし。」

「本当ですか！？ありがとうございます。」

お礼を言うメイド少女。

そしてメイド少女を連れた3人は森へと向かって歩いていった。

「……………ふふふ。」

移動途中にメイド少女が不気味に笑う所を誰も確認できないまま……。

続く

31. 武者蜥蜴隊の罠 (後書き)

どうでしたか？

また次回見てもらえたら嬉しいです。

3.2. 武者蜥蜴隊VSスイング・前編

佐野星音の夢の世界は今、光の精霊ミーアの支配下にある。

そして開始されたサバイバルゲーム。参加者は泰人達以外はミーアによって作られた存在・・・と思われていたがそうではない。

シュパルツ、白マンツの男のようなイレギュラーが存在する。とはいつてもこの二人のような自分から参加した訳ではなく、強制的に参加させられているものもいた。

時の止まっている泰人達の世界の住人や重症者の夢は今とても不安定な状態にあり、このゲームによる影響も大きい。夢の欠片が悪夢に迷い込んでしまうこともあるのだ。

無意識に存在を作りだしたためその事実気づくのが遅れたがミーアはメイドの少女を見たときその事実気づいてしまった。

確認をとる。迷い込んだ欠片の数は・・・7。そのうち2人は知っている人物が残り5人は一般人。メイド少女がその一人だった。夢の欠片がゲームオーバーした場合消滅し、現実からも消えてしまうのだ。

ミーアは考えた。別に自分には関係ない、雪美を救うことには繋がらない。・・・だが手助けしなくてはいけないと思う心があった。何故かは分からないが宇木風梓由と共にいた期間が長かったせいだと思う。

仕方ないと思いつつ放送に入ろうと思った・・・がやめる。武者蜥蜴隊との対決、これに勝てたらご褒美として救済処置をあげよう。そう思った彼女は放送しようとしていた手を止め、再び静かに観戦することにした。

ここはどこ？

私は誰？

気付くと私は森のような場所の入り口にいた。

しかし記憶が曖昧で一般知識以外は全くと言っていいほど思い出せない。

名前も、自分がどこの出身なのかも。

「君どうしたの？」

そんな私に男の人が話しかけてきて説明をしてくれる。

どうやら今ここではサバイバルゲームをしているようで私はその参加者らしいのだ。

でも覚えがない。そんな物騒なことに私が参加するはずがなかった。聞けば今この町全体が戦いの舞台らしくここにいる人達は雪美という女の子を除いてみんな参加者らしい。

でも私はやっぱりサバイバルゲームなんかしたくない、一刻も早くここから離れたい。そのことを男の人に話すとその人は私を町の外に連れ出してくれると約束してくれた。

この人が信用できるのかどうかは分からない、でも今の私にとってはとてもありがたいことだったので頼ることにした。

そんなときに武者蜥蜴隊と名乗る人達が現れたのだ。

私が狙われていたようで男の人は私をかばって大きな人にやられてしまった。

私は逃げ出したが、すぐに大きな手に掴まれてしまった。

怖かった。何をされるか分からない恐怖でリーダーみたいな人の話もちやんと耳に入ってこなかった。

すると大きな人が大きな口を開けて私を食べようとしていた。私はもう駄目だと思った。目を閉じて終わりを確信した。

気がつくとは私はメイドになっていた。身体も自由に動かせなくなつておりリーダーの男の人の操り人形になっていた。

なんか身体が変に感じた。先ほどより重いような、まるで自分が土でできているような感覚だった。

リーダーの人は私に命令をした。どうやら手配書の男の人を騙さなくてはいけないらしい。見ると優しそうな青年だった。私はこの人を騙さなくてはいけないのか、胸が痛かった。

ことはスムーズに運んだ。男の人は私を助けてくれた。演技とは言え凄く嬉しかった。

・・・言いたかった。逃げてと。このままでは私は貴方にひどいことをしてしまう。その前に逃げてほしかった。でもその男の人と残りの二人は私に騙されて森の入口まできてしまった

今私は写真の男の人の後ろにいる。警戒はしていないようだ。このままでは私は・・・。

懷から先ほど渡された針を取り出す。

止めたかった。止まって!!

そう願うも身体は勝手に動いてしまう。

そして・・・ついにはやってしまった。

ブスッ

「・・・え？」

そう言って男の人は倒れた。

・・・やって・・・しまった。助けようとしてくれた、優しい人を私は・・・。

いや、いや、いやあああああああああああああああああああああああ
ああああ！

ドサッと泰人が倒れた。どうやらメイドに刺されたらしい。泰人の右腕には僅かに刺し傷が見え、メイドの手には針が握られていた。

「よくやったね、こっちにおいで。」

森の奥から男の声がして姿を現した。

細い男と大きな男だった。メイドはその声に反応し向こう側へと移る。

「泰人さん!!」

「泰人!!」

ティルスとスィングは泰人に駆け寄る。

泰人はギリギリ意識はあるようだが苦しそうにしており危険な状態だ。

「さて、一番の危険人物を戦闘不能とした。残りは、王子と……
・知らない男だな。まあ敵ではないだろう。」

「兄貴、やっちまおうぜ!」

「……お二人とも頑張ってくださいね。」

そんな会話をしていた。

泰人の応急処置はスィングに任せてティルスは状況を分析する。敵は3人。兄貴と呼ばれた細い男と明らかに強そうな大きな男、そしてメイドである。

こちらは最大戦力の泰人を失い、自分は戦闘能力が低くスィングは未知数。とても勝てそうにない。

逃げた方がいい、そう思ったがもう一度ちゃんと見る。メイドをだ。メイドは笑っているように見えた。2人の男と仲がよさそうに……だがティルスが注目したのは目だった。

メイドの目は曇っていた。明らかに正常な人間の目には見えない。そう……何者かに操られているようなそんな目だった。……助

きたいがティルス達に余裕はない。ティルスは決心する。向こうは泰人を無力化したことで油断しているらしくまだ何か話している。

そんな隙を見てスィングと会話を交わす。

「スィングさん、泰人さんの具合はどうですか？」

「専門じゃないし、よく分からないがこのままだと気絶するのも時間の問題だ。ここは退いて早く薬を探した方がいいな。」

「そうですね。ここは一度退きましょ……。」

「………待て。」

二人の意見がまとまろうとしている所で泰人から待ったが出る。苦しそうに話す。

「………ティルスはわかってるはずだ。あの子は助けなくち

やいけないと。」

「・・・分かっています。でも、僕たち二人では無理です。向こうは操る術を使っている以上強敵と判断しなくてははいけません。泰人さん抜きでは勝つことは・・・。」

「・・・・・・・・スイングに頼むしかない。」

二人同時にスイングを見る。スイングは驚いた表情をしている。

「無茶です。スイングさんではあの人達には・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・いや、分からないさ。こいつには秘策がある。何とかなると思うぞ。」

「・・・・・・・・確かにそうかもしれねえな。」

スイングは頷く。それにティルスが反発する。

「駄目です。無茶はしないでください。僕はこれ以上仲間を失うのは嫌です。」

「・・・だがこう考えたらどうですか、毒を持ってたなら奴らはほぼ100%解毒剤を持っているだろう。それを奪うためなら・・・とかね。それに手負いの泰人連れて強敵から逃げられる訳がない。本当は分かっていたんじゃないっすか。」

「・・・・・・・・。」

確かにそうだった。ティルスは逃げられる可能性が限りなく低いこ

とが分かっていた。でも仲間を失いたくない、だから退くことを選んだ。

「俺っちを信じてほしい。さっき泰人が言った通りヴィントルから奥の手をもらっている。簡単には負けないっすよ。」

「・・・分かりました。泰人さんは僕が守るのでよろしくお願いします。」

ティルスは思った。信じてみると。それが、仲間だというものだ。と決意した所で向こうも話し終わったらしい。

「さてお祈りは済んだかな？そろそろ終わりにしようかな。」

「いいや、そう簡単にはいかないっすよ。」

スィングは立ちあがり男たちの方に向かっていく。すると目の前に下っ端が現れる。

「へへっ、無名の奴なんてリーダー達が動くまでもない。俺がやってやるぜ!!」

右腕を振りパンチを繰り出す。スィングはそれを顔面で受ける。

「さあて、こんなもんじゃ・・・・・・え？」

下っ端が倒れる。見ると殴った右腕からどんどん干からびていくのが見えた。身体の水分が蒸発して行っているのが分かった。

「なるほどね、君は結構やるようだ。身体を鍛えているのかな、も

ろに受けたようだったけど。」

「いや、痛かったっすよ。身体は軽く鍛えているけどね。俺っち漁師っすから!!」

と言い切り戦う構えをとった。

続く

32. 武者蜥蜴隊VSスイング・前編（後書き）

どうでしたか？

また次も見てくださいたら嬉しいです。

33. 武者蜥蜴隊VSスィング・後編

時間は戻り昨晚。

泰人とスィングはヴィントルから力をもらっていた。

「まずはラルゴ使いだな。お前のいつも使っている物、ラルゴ以外で何かあるなら出せ。」

「えーっと、やっぱりこれかな。」

と泰人が力をもらっている間、スィングは考えていた。今のままでは自分はお荷物ではないかと。勿論ここにいるのは場違いであることは分かっていた。だが知ってしまった以上何かしなくてはならない、そう考えていた。泰人達の役に立つことをしたい、サミーを絶対に助けたい、そんな気持ちだった。

「さて、次はお前の番だ。何かあるか？」

「えっ。・・・ああ、これくらいしかないけどいいっすかね。」

スィングは美弥と呼ばれた少女から貰った白く光る石を取り出す。それを見たヴィントルは黙った。そして少し経ってスィングに聞く。

「こいつはどこで手に入れた？」

「えーっと青い森から行ける村にいた少女が洞窟の奥の方で見つけたって聞いたんすけど。」

「……こいつは白魔石はくませきといって魔物が宿っている魔石だ。もう取れなくなったと聞いていたがまだ残っていたのか。それにこの輝き……上級クラスが宿っているようだな。そいつを俺様の近くに置け。」

スィングは言われた通り白魔石をヴィントルの近くに置いた。すると白魔石はカタカタカタッと何回か揺れて止まる。

「これでいい。こいつはお前を主人として認めたようだ。上級ランクなのにまだ子供のようなだが……まあそれは別にいい。この石を持っていて出来ることは二つ、個人能力の強化と宿っている魔物の召喚だ。能力強化は持っているだけで勝手に強化され、召喚も宿っている魔物の声を聞けば簡単にできる。これがあれば十分戦えるはずだ。」

「そうっすか。ありがとうっす！」

スィングは意志を再び手に取りポケットへとしまった。

「一つ言っておく。強化だけならいいが無闇に召喚するなよ、それは秘密兵器みたいなものだからな。」

スィングは頷いた。

現在に戻る。
メイド少女は驚いていた。

もう諦めていた。だが希望が見えたのだ。

スイングが見せたあの力は彼女を少し元気づけたのだ。

もしこの呪縛から解放されたらちゃんと謝ってお礼を言おう、彼女はそう心に決めた。

「さてと、下っ端は他にはいないようだな。どっちでもいいから相手になるっすよ。」

スイングは辺りを見回して他に誰もいないことを確認する。

武者蜥蜴隊の他のメンバーは泰人に倒されたため、残っているのはリーダーの男と巨漢だけだ。

「兄貴、こいつは俺が倒す。後ろで見ててくれ。」

「うん、いいさ。だが気をつけた方がいい。僕が見るにこいつはまだ何か隠していそうだ。」

リーダーの男はそう言って後ろに下がると同時に巨漢が前に出る。

「お前はなかなかやりそうだから名乗っておく。俺のコードネームはガトルだ。召喚術を得意としている。」

「いやあ、名乗ってくれるとはビックリだ。俺っちはスイング。漁師見習いで水関係の効果持ちっす。」

互いに挨拶を交わすとガトルは地面に手をつく。すると地中の中から大型の斧が出てくる。

ガトルはそれを手に取ると構えた。

めり込んでいた箇所からぼろぼろと崩れていき砂となって散った。

「いやあ、この子の力を使って石を相手に当てれば触った時と同じ効果が出るかと思ったたらうまくいったっすね。……ん？」

急に後ろから何やら嫌な予感がして振り向く。するとガトルそこにはガトルがいて左腕を振り上げて今にも殴りかかろうとしていた。どうやら鎧は囚だったようで本命はこっちのようだった。武器を持つていない所を見ると本当に奇襲狙いらしい。

スィングは鎧に目がいつていてガトルの事を忘れてしまっていた。だがまだ避けられる距離だ。

咄嗟に右に飛び出そうとする……が、そこにはメイド少女がいた。

「……………すみません。」

ドン

思いつき押し戻された。

ガトルの方を向くがもう間に合いそうもない。何とか両手でガードしようとするが無理だった。

ドスッ

腹に喰らって倒れた。

何とか意識は保ているようだがかなり痛そうだった。

「よくやった。褒めてやる。」

「……………ありがとうございます。」

途切れ途切れになりながらも言葉を繋げて頭を下げる。
だが彼女の表情は暗かった。本当は喜んでいないように。

「スイングさん!？」

ティルスが駆け寄ろうとするがスイングは右手で制止するようにサインする。

「・・・来るな。何とかする・・・。。。」

そう言って立ち上がる・・・が足がぐぐくに震えてあまり持ちそうになかった。

「とどめだ。」

ガトルは再び斧地面から取り出してスイングに振り下ろす。
動けないスイングに避ける手はなかった。

「スイングさー！ー！ー！ーん!!」

ティルスが叫ぶ。また一人失ってしまうのか、こんなことならやはり止めておけばよかった。ティルスはそう考えずにはいられなかった。

ここにいる誰もがスイングはもう駄目だと思った。・・・ただ一人を除いて。

「・・・・・・・・俺っちはここじゃ消えねえ。」

斧の刃を掴む。すると刃は一瞬で錆つきぼろぼろと散っていった。
そしてその掴んだ腕は・・・・・・・・液状化していた。

「・・・あれは？」

リーダーの男の驚いた。肉体の変化能力は珍しくない。だがスイングは水分調節能力の持ち主だ。リーダーの男もそこはなんとなく分かっていた。だが自らの肉体に変化をつけるのはその能力者の中でも一握りだ。だが彼は知らない。この力は白魔石によるものだ・・。

「・・・何だこれは!？」

驚いたガトルは後ずさる。だがシングの液化化した腕は伸び、ガトルに少しずつ近づいていく。

まさに恐怖だった。ガトルはあまりにも驚いたため我を失った。

「や、やめろ……。来るなああああ！」

右腕を上げる。するとメイド少女が針を持ち自分の首に突き付ける。

「お、俺に手を出してみろ。．．．こいつは自分で命を絶つぞ。」

メイドは自分の首に針を突き付けて今にも刺しそうな勢いだった。流石のスィングもこれには動揺しぴたりと腕の動きを止めてしまった。だがこれでこの男に操られていると確信が持てた。つまりこの男を倒せばいいのである。だが人質がいる以上手が出せない。

ガトルはにやりと笑い再び地面に手を置き武器を取り出そうとする。

「わ・たしは。」

メイドは己自身と戦っていた。もう少しでガトルの呪縛から解放されるのだ。ここで自分が足を引っ張るわけにはいかなかった。彼女は力を振り絞り針を手放した。

「・・・・・・・・後は頼みます。」

カラン

「・・・・馬鹿な!？」

ガトルは驚いた。今までも人をベースにした人形を作ってきたが意思に反したのは初めてだったからだ。

だがそれが隙になってしまった。それを逃さずスィングは液状の腕を伸ばした。

「包め!」

腕が網状に広がりガトルを包むと一気に水分を吸い取っていく。最初は抵抗していたが徐々に力を失っていき最後には意識を失った。

「やった・・・・・・・・っす。」

バタッ

スィングも倒れて気を失って倒れてしまった。

慌ててティルスが駆け寄る。気を失ったら退場、その言葉が頭の中に響いていた。

「その彼なら大丈夫だ。自分で寝たりする分には失格にならない。」

第三者の関与がなければ問題ない。」

そう言ってリーダーの男が出てくる。だが戦う気はないらしい。ティルスに何かが入った袋を投げて渡す。

「解毒剤だ。それで泰人という男も助かるだろう。その代わりこの場は立ち去らせてもらう。いずれガトルの仇は討たせてもらうよ。では。」

そう言い残してリーダーの男は去っていった。ティルスは急いで袋を開ける。そこには液状の薬が入っていた。それを泰人に飲ませる。すると落ち着いたようで呼吸も意識も安定する。

「助かったよ。ありがとう。」

「いえ。僕はスィングさんを診てくるので彼女をお願いします。」

そう言ってティルスはスィングの手当てに向かった。

「さてと、君は大丈夫だったかい？」

「・・・はい、大丈夫です。すみません、私のせいで迷惑を。」

「仕方ないよ、君はあのガトルとかいう男に操られていたんだからね。さてどうしようか・・・」

するといきなり彼女の身体が崩れ始めた。元々彼女はガトルに飲まれて再構築された存在、ガトルがやられた今存在が消えようとしていた。

「どうやら私駄目みたいです。こんな私の為に命がけで助けてくれた貴方達には感謝の言葉では足りないくらいです。ありがとうございます！！」

「駄目だ、消えないでくれ……。」

泰人は腕を掴もうとする……がすり抜ける。

すでにそこには誰もいなかった。

「そ、そんな……。」

泰人はがっくりと肩を落とす。目の前で無関係な女の子が消えてしまった所を見たため無理はなかった。

「……もうしょうがないわね、特別処置をとります！」

突然ミィアの声が聞こえる。すると泰人の目の前に光の粒子が集まり人の形をとる。

それはさっきのメイド少女だった。

「えーっと私、生きてるの？」

「泰人、よく聞きなさい。武者蜥蜴隊をほぼ壊滅させたから特別に教えてあげる。今この世界で無関係な夢の欠片が5つ混じってしまったわ。しかも参加者としてね。その子はそのうちの一人よ。その人達は別に私には関係ないんだけど特別に助けてあげることにしたわ。まあ助けるのは貴方達、私は居場所を教えてあげるだけ。手を出しなさい。」

泰人は手を出す。そこに再び粒子が集まり地図ができる。

「それで探すといいわ。一度確保した欠片の人達には手を出さないけど貴方達が助けないと命の保証はないから注意してね。その人達がゲームオーバーしたら人質に加わらずそのまま消えちゃうから。じゃあ頑張ってね。」

ピンポンパンポーン
放送が終わる。

「あいつ、勝手なことばかり言いやがって。・・・後4人助けるのか。最優先だな。」

「あのいいですか？」

「ああ、そういえば君の名前を聞いていなかったね。なんていうんだい？」

そう言われて彼女は考えた。メイド服という分かりやすい個所はあるがやはり名前は必要だろう。これから泰人達についていくのだから。だが記憶はない。というわけで即興で考えた。

「私の事は・・・メイドアと呼んでください。」

こうしてメイドアが仲間に加わった。

「さて今回で武者蜥蜴隊も1人を残して全滅。後は関係ない所で行われたその他の戦闘を含めて脱落者は15人。残り人数は82人です。皆さん頑張ってくださいね。以上スピーカーの放送でした。」

続く

33. 武者蜥蜴隊VSスイング・後編（後書き）

どうでしたか？

また次も見てくれたら感激です。

34. 道化師の暇つぶし

「さて、体勢を立て直すためにも彼女たちの力を借りようかな。」

武者蜥蜴隊のリーダーはあの後森を早々と抜けて海辺まで常人以上のスピードで走ってきた。

海辺にはビーチがあり、その近くにはステージがある。そのステージでは女の子3人組がリハーサルをしていた。3人とも背は同じくらいで、強気そうな子、天然そうな子、普通の子の3人である。少し派手目な服装から見てアイドルのようだ。

「やあ、ビギンクガールズの皆さん。ちょっと助けてほしいんだ！」

リーダーが話しかけると3人はダンスをやめてリハーサルを中断する。

4人は休憩室に移動して会話する。

「聞いたわよ、無名の男に負けたって。全くあんたたちは駄目ね。」

「姉さん、それは言いすぎだよ。あのスィングって人今まで力隠しててミリア様も把握できていなかったんじゃないかな。」

「そうですね、この子の言うとおりですよ。言いすぎはいけません。」

「・・・むー！」

どうやら3人は姉妹で天然長女、強気次女、普通の子三女のようだ。

「いや、ツンデレちゃんの言うとおりだ。僕の判断ミスだったよ。だからこそうしてお願いに來たんだ。」

「誰がツンデレですって!」

突っかかる次女を長女と普通の子が止める。いつもの事のようにすぐ収まる。

「そうですねー、協力をお願いしましょう。昼過ぎからライブをしますので裏方に回ってくださいると助かりますわ。」

「了解したよ、じゃあ行ってくる。」

そういつてリーダーの男はスタッフルームに移動した。

「お姉ちゃん、いいの? あいつあたし達利用する気だよきっと。」

「うふふ、大丈夫よ。私たちのライブを見ればいくらリーダーさんでも堕ちちゃうわ。」

「だいいけど・・・。」

3人は再びリハーサルに戻った。

午前10時30分・町中

スイングがガトルを倒したところ、莉麻達は車で町を回っていた。いざという時に地の利を生かす為だ。

回ってみた所、ヴィントルが回った時とそれほど変わっていないかった。雪美はある程度しか分かっていなかったのでヴィントルの指示に従って回ったのだ。

しかし変わっている部分もあった。

近くに海があり、どうやらそのビーチで昼ごろからステージでライブがあるようだ。さっき立ち寄った喫茶店で町中の地図を配っていてもっと早く来ればよかったと後悔していた所だ。

「私ライブ見に行きたいな。だってなんか面白そうだもん。」

「………罨。だから反対。」

「私もです。行くならば泰人さん達と合流してからにした方がいいですよ。」

「そうだよ莉麻ちゃん、ここは慎重に行こうね。」

「……残念。」

3人に反対されたため彼女たちはライブを見には行かないらしい。そして再び移動するべく喫茶店から出る。すると目の前に変な男たちがいた。

どうやら大会参加者のようだが海辺のビーチに向かっているようだ。

「おい聞いたか、噂によるとビギンクガールズのライブ見に行くといいことがあるらしいぜ。」

「聞いた聞いた。ダンスや歌に能力向上効果があって聞いた参加者をパワーアップさせてくれるんだってな。」

「最大30人までだってさ。13時からだけでもう行こうぜ。」

そう行って走り去っていった。

それを聞いた莉麻が目を輝かせる。

「それ凄いな、やっぱりみんなで………あ。」

急に莉麻の瞼が落ちる。……目が開くと目つきが鋭く変わっていた。

どうやらヴィントルが身体的所有権を奪ったようだ。

「これは遊びじゃねえ。いいから他の奴らの言うことを聞け。」

「(……はい。)」

ヴィントルが心の中にいる莉麻に説教する。どうやら反省したようだ。

「さて、参加者討伐はラルゴ使い達に任せて俺たちは一度身を隠した方がいい。確か町外れに廃屋があったな。もし誰かいたらぶっ倒してでも確保するぞ。」

莉麻になったヴィントルの一声に他の人達も頷き車へと移動しようとする。

……が一人の男が立ちふさがる。

「き、君達あの手配書の子達だよねえ。……うわぁレベル高いな

あ、いいなあ。」

背は高くなって眼鏡をしていて体格がいい男だった。ちょっと危ない感じがする。

気持ち悪かったのでヴィントルは追い返そうと前に出る。

「おい貴様、通行の邪魔だ。そこを退きやがれ！」

「うおう、言葉使い悪い美少女とか最高！これはお持ち帰りしたいなあ。」

まるで話を聞いていない。

話すだけ無駄だと分かったのかヴィントルはその男を倒そうと構える。

「おう怖いなあ。君ちよつと落ち着いてこっち見てよ。」

「あん!!!？」

その時ヴィントルの視界に男の眼が入った。

ヴィントルの動きがピタリと止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ふひひひひ、いやあ上手くいききましたな。では早速・・・・。」

危ない男がヴィントルに近づこうとする。

だがその前に雪美、ミュア、フィルディアが立ちふさがる。

「やめてください。今すぐ彼女に掛けた術を解きここから立ち去っ

てください!」

フィルディアが男にそう言う。

しかし男はその言葉を聞き流しているらしくヴィントルに近づく。

「うーん上玉だね。持ち帰って飾りましょー。」

雪美とフィルディアが止めようとするがすぐに振りほどかれてしまう。どうやら狙いはヴィントルだけのようだ。

ミュアは正直なところ手加減ができないため攻撃すると男が消滅してしまう恐れがあったがそうも言っていられない状況にある。

「・・・・・・・・仕方ない。」

諦めて鎌を取り出そうとすると・・・

ドスッ

鈍い音がして男が急に吹っ飛ばされる。

何事かと思いい急に気配がした方を見ると道化師の格好をした男が立って蹴りの動作をしていた。

そう、シュパルツだ。

「暇なので見にきましたが、まさかヴィントルがこんな簡単に罠にはまるとは・・・・・・・・情けないですね。」

笑いながら話すシュパルツ。固まったヴィントルを見ては爆笑している。とりあえず危害を加える気はないと思ったのかミュア達はじっとしていた。

すると男が起き上がってくる。

「痛いなあもう。そっちのお兄さん邪魔だよ。痛い目見てもらおうかなあ。」

するとその体格からは信じられないほど俊敏にシュパルツとの距離を詰めて懐からナイフを取り出すと脇腹目掛けて・・・・・・・・刺そうと思ったが

「・・・・・・・・え？」

いなかった。シュパルツは目の前にいなかった。そして男は嫌な予感がして後ろを向くと

「ウォーミングアップにもなりませんね。」

すでにシュパルツの左ストレートが放たれた後だった。綺麗に男の顔に吸い込まれるようにヒットし男はそのまま吹っ飛ばされると店の壁を壊して止まった。すでに意識はなく失格になったようだ。

「いやいや、何か面白いことはないですかねえ・・・・。」

「ま、待ってください！」

そう言って立ち去ろうとするシュパルツをフィルディアが止める。シュパルツは振り向く。

「助けてくれてありがとうございます。ですが何故敵対関係である私たちを助けてくれたのですか？」

「この世界は面白いことが少なく暇でしてね。ヴィントルをからか

いに来たのですが・・・そうだ!」

何か思いついたような表情をして言葉を続ける。

「茅野泰人君に伝えておいてください。残り20人以下になった時貴方との決着をつけに行きますと。それまでやられないで下さいと・・・お願いしますね。」

そう言い終わるとシュパルツはその場から姿を消した。

「・・・・・・・・泰人はやらせない。」

ミュアが最後にそう呟くとヴィントルが意識を取り戻した。

「今回は戦闘が少なかったため脱落者は1人。残り人数は81人です。皆さん頑張ってくださいね。以上スピーカーの放送でした。」

続く

34. 道化師の暇つぶし（後書き）

どうでしたか？ また次も見てもらえたらいいと思います。
感謝です。

35. 恐怖のステージ

あたしたちは3人いつも一緒だった。

両親もいなくて貧しかったけど、町中で3人歌ったり踊ったりして過ごす毎日があたしたちは好きだった。

でもそんなあたしたちの運命を変える出来事がある日起こってしまった。

そう、あの場所・・・クリスタ王国で。

ヴィントル達はあの後車に乗り込み町外れを目指した。

移動中、雪美は泰人にあらかじめ渡しておいた通信機で連絡を取り廃屋で合流するようにと約束をした。

町外れの廃屋は誰も人がおらずここ最近使っていた形跡もなかったため利用させてもらうことにした。

そして少し経って泰人達がやってきた。メイディアはお初だったので軽く自己紹介をし、今までの経緯を説明した。

「・・・なるほどな。まあ、気が向いたらその迷い込んだ奴を助けてやらんこともない。」

ヴィントルはそう言ったが残りのメンバーはそれが照れ隠しであると瞬時に分かったが言うことはなかった。

そしてこれからの作戦を立てることにした。

午後12時40分・廃屋内

「はい、それでいきましょう。」

作戦はこうだった。

ビーチで行われるライブ、これによってどのようなことが起こるのかの確認に泰人、ヴィントル、スィングが向かい残りはここで待機。ミューとティルスは何かあった時のための見張り。このように決まった。

「何があるか分からないから車は使わない方がいいな。移動は徒歩にしようか。」

「分かった。」

泰人とスィングも移動方法を決めて出発しようとした。

「あ、あの！」

「ん？」

メイディアに話しかけられて振り向く泰人とスィング。彼女は何か言いたそうにしていたが首を横に振り言うのをやめたようだ。

「頑張ってください。」

その言葉を受け3人は廃屋を出た。

「さて、俺様は先に行くぞ。お前たちも早く来い。」

ヴィントルは何かを呟くと背中から黒い翼が生えて飛んで行ってしまった。

泰人達はボーっと見ていた・・・

「って、俺達場所知らないんだよ。待ちやがれ！」

が我に返るとヴィントルを追っていった。

午後13時・ビーチ

会場には30人の参加者である男たちが今か今かと待っていた。一般人はどうやらこのイベントには来ていないようだ・・・というより門前払いらしい。

見た所女性の姿はない。どうやらこのゲーム自体の参加者は男性がほとんどのようで女性はこのイベントには興味を持たなかったようだ。

「実は俺、ビギンクガールズって知らないんだよね。新しいアイドルグループなのか？」

「何でもこの大会のために他国で有名な3姉妹の踊り子を主催者がスカウトしてきたんだってさ。」

「マジかよ、じゃあ期待できるな。……お、始まるみたいだぜ。」

ステージに3人の女の子たちが上がってきた。そう、ビギンクガールズだった。

「やつほー、みんな集まってくれてありがとう！」

「ま、どうせ能力アップの為だけに来た人がほとんどなんでしょ。」

「まあまあ、それよりも今日は楽しんでくださいねー♪」

3人別々のあいさつをしてライブは始まった。

同時刻・町外れ

「おい、貴様ら。やる気がないなら先に行くぞ。全く体力のない奴らだ。」

ヴィントルは空を飛びながら呟く。

泰人とスィングは走ってなんとかヴィントルに追いついていたが流石に疲れてきたのかペースが落ちてきた。

「いや、無理だって。……はあはあ、ずっと全力とか無理あるっての。」

ヴィントルの飛ぶ速度は泰人達が全力で走ってようやく追いつく

らいだった。

どうやら加減はしているようだがやはり無理があるようだ。

「・・・仕方ない、地図を落としていくからそれを見て来い。早く来いよ!!」

そう言ってポケットから地図を取り出し地面に話すと同時にスピードを上げて見えなくなってしまった。

「持つてるならもっと早く渡しやがれええええええええええ!!!!」

泰人の叫び声が辺りに響いた。

そんな泰人達を更に上空で見ていた二人の翼を生やした子供がいた。男の子と女の子、双子のようだ。

「今の茅野泰人、スィング、茅野莉麻・・・じゃなくてヴィントル。今いないのはティルス、ミユア、雪美様、一般人2名といったところかな。見た所かなり強そうなメンバーだけど、僕たちの敵じゃないね。」

「だね。私の見た所、海の隊を倒せる確率は6割かな。私たちを倒せる確率は1割・・・っと。私たち、空の隊の敵じゃないけどあの姉妹には辛うじて勝てるかも・・・ステルスして見てみようよ。」

「分かった。彼らの力を間近で見たいのは僕もだから。さあ、行ってみようか。」

そう言って二人は姿を消した。

場所はビーチに戻る。

あれからライブは順調に進み、1曲目、2曲目と終わっていく。ステージは盛り上がり参加者達も能力アップのことなんて忘れて楽しんでいた。

そんな中武者蜥蜴隊のリーダーは裏方の仕事をしていた。

「・・・あれ、こんなはずじゃなかったんだが。」

何も起こらないステージを見て拍子抜けしていた。彼はステージ開始と共に何か起こると考えていたためここまで順調に進むと逆に不安になったのだ。

「彼女たちがこのまま何もアクションを起こさないでライブを終わらせるなんてありえない。・・・何かあるはずなんだ。」

つついステージに集中してしまう。

それを見逃さなかった。彼女はすぐに次女に合図を送る。

次女はそれに頷き前に出る。

「さあ、次はあたしのソロでいくよ！みんなちゃんと見なさいよね。」

すると彼女の衣装が一瞬で変化する。一気に露出度が上がり際どい

衣装になり、それに男たちは釘づけになった。

「じゃあ始めるわよ！」

こうして・・・禁断のステージが始まった。

「さて着いた・・・！！？」

それから少し経ってヴィントルが到着する。

そして彼は見たのだ。男たちが三人の少女に跪いている光景を。

「さてさて、皆さん。この手配書に載っている人達を倒しちゃってください。お願いしますね。」

そう言って長女が一枚の紙を取り出す。それは泰人達が載っている手配書だった。

スィングも追加されている新バージョンのようだ。因みにスィングを倒したものには様々な宝石を与えると書いてある。

「おおおおおおおおおおおお！！！！！」

男たちは雄叫びを上げる。どうやら普通じゃないようで狂っていた。ふと見るとステージには檻があり一人の男が捕まっている。

どうやら武者蜥蜴隊のリーダーのようだ。

「さて、あんたもまんまとかかってくれたわね。精神力が強いみた

いだから身体の自由が利かないくらいで済んだみたいだね。」

「……………」

男は喋らない。どうやら口を利く力も残っていないようだった。

ヴィントルは瞬時に理解した。このステージはやはり罠で参加者を手駒にするつもりだったのだと。

流石に分が悪いと判断しその場から離れようとするが

「…………！姉さん達、そこに誰がいるよ。」

三女が気付く。同時に残りの二人も見る。遠くの物陰から見ていたのだが気付かれてしまった。

逃げるのは無理だと判断したのかヴィントルは素直に出てくる。

「よく気づいたな。結構やるじゃねえか。」

「あ、ありがとうございます。」

ぺこりと頭を下げる三女。何敵にお礼言ってるのよと次女に叩かれていた。

「貴女は茅野莉麻さん……ではなくヴィントルさんですね。うふふ、早速この人達と戦ってくれませんか。」

長女がそう言うのと男たちは一斉にヴィントルに襲い掛かる。

「……上等だ。こんな奴ら蹴散らしてやるぜ。」

そしてヴィントルも戦闘態勢に入った。

そんな中泰人達はまだ走っていた。

「いやいや、俺っちそろそろ限界だな。」

「・・・もういいよ。後少しで着くから歩いていこうか。」

といって歩き始めた。

彼らが着くまでもう少しかかりそうだった。

続く

35. 恐怖のステージ (後書き)

どうでしたか？

次も見てもらえたら嬉しくて感動です。

36. 魅惑の力

私達は歌と踊りで色々な国を回ってきたんだけど、ある時クリスタ王国に立ち寄ったの。

そこはなんかレンガ造りの建物等のどこか昔風の感じがする所だったけど居心地は良かったね。

王女様にもちらりと会ったけど凄くかわいい人だったな。口数が少なくて手を振ってるだけだったけど。

一月ほど経ったある日、私たち姉妹はそろそろこの国を離れようと思っただけで最後に町中を見て回ろうってことになったの。

凄く楽しかった。色々なものを見たり、買ったり、良い一日だった。・・・そのまま終わって欲しかった。

気がつく私達は路地裏にいたの。どうやら道を外れちゃったみたいで急いで戻ろうとしたら・・・見てしまったの。

そこで行われていた・・・人体実験を。

ヴィントルは落ち着いていた。30人もの男達に狙われているというのに全く焦っていなかった。

「・・・あのさ、本当に大丈夫なの？さすがにこれはまずいんじゃない・・・。」

心の中で莉麻が語りかける。どうやら彼女は心配しているらしい。

「問題ねえよ。・・・お前の力を使わせてもらうぜ。」

そう言うのとヴィントルは手を空にかざす。天気は好調だ！男達がすぐそこまで迫っていた。ドスドスととんでもない勢いで走っており目は血走っていて狂っている。

ひゅーん

上から何やら物が落ちてくるような音がした。一斉に上を見ると普通では考えられないものが落ちてきていた。

「えーっと、・・・やかん？」

莉麻はそう呟いたがその通りだった。巨大なやかんが男たちの頭上目掛けて落ちてきた。男達は気付いて上を見たがもう遅かった。

グシャン

物凄い音を立ててやかんは男達を押し潰した。

「・・・やっと着いたぜ。」

「俺っちもさ、流石に疲れた。」

泰人とスイングが到着した。すぐにビーチに向かうと・・・でっかいやかんがあった。数十人の男達が潰されているのが見える。傍に立っていたヴィントルは泰人達に気付き声をかける。

「全く貴様らが遅いからもう終わっちゃったよ。」

二人はボーっとそれを見てこう言うしかなかった。

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

泰人達が感心していると三姉妹が彼らに近づいてきた。

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

なんて言う訳がない。どうやら少し感心しているようだ。

「ふーん、なかなかやるわね。この辺で一度自己紹介でもしようか。」

少女達は横並びに一瞬でなる。これぞ日頃から鍛えている技である。健康そうな足が眩しいぜ！！！！！

「まずあたしたちは海の隊・ビギンクガールズね。あんた達が倒したのは陸の隊・武者蜥蜴隊、後もう一つ空の隊なんてあるけどあいつらの力なんていらない。あたし達だけで十分よ。」

「出来れば私達でなんとかしたいわねー。」

名乗っている時は攻撃してはいけない、それは鉄則なのだ。やかん下の男たちの何人かはもぞもぞと動こうとしていたが名乗りが始ま

った瞬間ピタリと止まった。狂っていても話の分かる奴らである。

「さて名前だけどあたしは次女のサロン、こっちの天然が長女のフロン、でこの普通の子が三女のミカゼよ。」

「あらあら、私は別に天然じゃないですよー。」

「・・・特徴がないのが特徴だもん。」

と一通り紹介が終わる・・・と同時にやかんの下から数人這い出てきた。

どうやら8人ほど無事らしい。一応他の参加者よりは強そうに見える。

「ツンデレサイコウダー!!」

「テンネンノオッパイサイコウダー!!」

「フツウダー!!」

口々に叫んでいる。催眠状態から解けてはいないがやはりイかれていた。

「・・・きめえ。」

「・・・私来ない方が良かったかも。」

「・・・どうでもいいな。」

「俺っちは天然好きっすね。」

泰人達も口々に呟く。若干一名おかしいが……。

「変なこと言っていないで奴らをやっつけなさい!!」

サロンがそう言うのと男達は奇声を上げて再び襲いかかってくる。

だが泰人達は気持ちを切り替えて集中していた。ヴィントルが泰人に視線を向けると泰人はスィングにラルゴを渡す。スィングは受け取り力をラルゴに込めて泰人に返す。

この間約5秒。

男達は目の前まで迫っていて既に攻撃の体勢に入っていた。しかし泰人は瞬時にスネイルシューターに変形させ、男達に向けて八発撃った。勿論近くの奴からだ。

パンッ

軽快な音になり水の塊が発射される。狂っているとはいえ、8人はなかなかの手練れである。すぐに攻撃をやめて避ける体勢をとると楽々避ける。

だが水の塊にはさっきスィングが力を込めた時に追加能力である追尾が搭載していたのだ。塊は急にグルンと軌道を変えて男達に向かっていった。

流石の男達もそれは予定外だったようでそれに当たってしまう。

ドンッ

鈍い音が男達の後頭部から聞こえ全員意識を失い倒れる。どうやらやったようだ。

「まあ、こんなもんだろ。」

泰人はラルゴに戻した。

三姉妹は少し驚いていた。たった数分で30人全員がやられたからだ。でも予想範囲内ではあった。

そう彼女達にはまだ手があったのだ。

「・・・ふふふ、さて始めようかしら。」

「・・・ん？」

サロンの一言に泰人達は一斉に彼女の方を向く。しかしそれが罠だったのだ。

彼女の眼が妖しく光る。まずいと思ったがもう遅くそれを思いっきり見てしまったのだ。

数秒後

「・・・何ともないが、何か効果があるのか？」

ヴィントルはどうやら何ともないようだ。しかし横を見ると

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

泰人とスィングは完全に動けない状態だった。表情は苦しそうで意識はあるようだが意識を保つので精いっぱいのように見える。

「あらあら、大変ですね。」

フロンがにこやかに笑いながら言う。悪気はないようだが今の状態だとそうとられても仕方ない。
今度はヴィントルが追い詰められた。

「だが俺様だけ効かなかったのは……そういうことか!!」

ヴィントルは自分の身体を見る。そう今ヴィントルは茅野莉麻、女の子である。

どうやらサロンの魅惑の力は男の身体にのみ効くようだ。

「今更分かって遅いわ。じゃあ姉さん、宜しく!」

「はい。」

フロンは既に杖を取り出し空中に陣を描いていた。

そしてそれが完成するとそれが光り、陣の中から巨大な角の生えた悪魔が現れる。

「……こりゃ、洒落にならんな。」

ヴィントルは苦笑いを浮かべた。泰人とスィングが動けないこの状況では分が悪いと悟ったようだ。

「うがああああああ!」

悪魔はヴィントルに向かって殴りかかってきた。

「ちっ……。」

ヴィントルは右手の掌を悪魔に向ける。

すると悪魔の攻撃を遮るように巨大なまな板が出現する。

悪魔はそれを思いっきり殴る。一応壊れていないが軽くミシミシと音が鳴っていてあまり持たないのは誰が見ても明らかだった。

「……こいつは終わったかもしれない。」

ヴィントルは諦めモードに入っていた。そうしている時にも悪魔の猛攻は続く。ドスドスと音を立てて殴ってくる。そろそろ突破されそうだった。

だがフロンは追い打ちをかける。

ヴィントルの横に術式が見えた。ヴィントルが見るとそれが何なのかすぐに分かる。

……転移の陣だった。

「……おい、とことんやるつもりか!？」

ヴィントルの言葉には耳を貸さずに陣は完成しそこからティルス達が出てくる。

「……え?ここはどこですか……。」

ティルス達はパニックになっていた。だがそれは三姉妹にとってチャンスだった。

「ティルス!こつちを見なさい。」

「はい?」

ついティルスはサロンの方を向いてしまった。

「馬鹿野郎!! そっちをみるんじゃねえええええええええええええええええ」

ヴィントルは叫ぶ。だが時すでに遅く彼女を視界に入れてしまった。

「これで終わりね。」

サロンの目が妖しく光る。

そしてティルスは光に包まれた。

続く

36. 魅惑の力 (後書き)

どうでしたか？

次回も楽しみにしてもらえたら作者感激です！

37. 攫われた泰人

実験台になっているのはまだ小さな男の子、女の子でした。

私達は見えていられずに止めに入りました。結果は目に見えていますけどね。

私達は捕まり城の牢屋に入れられました。救いだっただのは妹達と一緒にだったことですね。

そしてそこで衝撃の事実を知ることになったのです。そう、クリスタ王国の裏側を・・・

ティルスが光ったことに対してサロンは不審に思う。彼女の力では光は発生しないからだ。魅惑の力が作用するのは肉体と精神である。精神力が高ければ抵抗はできるが肉体にも魅惑が掛かっている為動けなくなるのだ。

そして光が止むとそこに立っていたのは・・・

「・・・またこの格好になるんですか。」

女の子ティルスが立っていた。

数秒前

ティルス達が部屋で休んでいるといきなり見ている景色がビーチへと変わった。

ティルス達がパニックになったがミュアは落ち着いていた。敵対組織の仕業と分かったからだ。

「ティルス！こつちを見なさい。」

「はい？」

ついテイルスはサロンの方を向いてしまった。

[illegible]

ヴィントルは叫ぶ。だが時すでに遅く彼女を視界に入れてしまった。

「これで終わりね。」

サロンの目が妖しく光る。ティルスは何か嫌な予感がしたが目を逸らすことができなかった。

それに対しミューアは瞬時に周りを見て泰人、スイングが動けずヴェントルが動ける今の状況を理解した。すぐにティルスにテレパシーを送る。

「（・・・・・・変身の指輪で女の子になって。）」

「え？」

ティルスは意味を理解していなかったがミユアが何か考えていることは分かった。

何よりこのままでは何か大変の事が起こりそうな予感がしていたのだ。ならばミユアに従うしかない。

瞬時に指輪を身につけると彼は光に包まれた。
そして今に至る。

「あらあら？」

「ちょ、ちょっと！そんなのありなの？」

「え？」

サロン達が明らかに動揺している。それだけこの作戦には自信があったようだ。

ティルスはもじもじしている。

「・・・とりあえず最悪の事態は免れたみたいですがこれ恥ずかしいです。」

変身の指輪では服装は変わらないため男の時のままである。

「・・・・・・・・加勢する。」

今がチャンスだと思ったミュアはヴィントルに近寄り肩に手をおく。

「・・・私の力使って。」

「よし、あれやるか。」

悪魔の一撃でまな板は粉々になってしまったがそれがヴィントルには都合が良かった。

右腕で高速に空中に闇の術式を描き、完成する。

悪魔は一撃を放った後なので体勢が崩れている。

「いくぞ、闇印・ダークスピア！」

術式から黒い槍が飛び出す。前と違い1本だけだが大きい。それは悪魔の左腕を貫く。

「ぐぎゃあああああああああああ！！！」

悪魔は絶叫し消えた。どうやら命の危険になると送り返せるらしい。

「!？」

フロンは驚く。さっきよりも更に驚いている。

ヴィントルの攻撃にはない。傷ついた悪魔のことだった。

常にニコニコしていたフロンから一瞬笑みが消える。

両手で杖を持ち、それを前に出し……

「駄目!!」

ミカゼが止める。どうやら何をしようとしているか分かったらしい。

「あれだけは駄目だよ。ここはじっと耐えないと。……あの子達の為にも。」

「……そうね、ごめんなさい。」

フロンは両手を下げる。どうやら思いとどまったらしい。

「……退き時かな。」

サロンがフロンに目配せをする。

フロンは頷くと自分たちの足元に陣を出現させる。どうやら一度退くようだ。

ヴィントルが見ると泰人、スィング、男が捕まっているステージの檻にも同様の陣が展開されていた。

「まずいな。」

ヴィントルが動こうとしたがもう遅かった。陣はすでに機能を始めていた。

「今日は一度退かせてもらおうわ。次会う時にはあんたたちも倒してやるんだから。」

「泰人さん達は預かっていきますね。ではでは。」

再び笑みが戻ったフロンによって移動が開始された。

[illegible]

「お、おい！」

ヴィントルと無理やり分離した莉麻は泰人の手を掴もうと手を伸ばす。

「・・・頼んだぜ。」

「え？」

莉麻にはそう聞こえた気がした。
そして莉麻の手は空を切った。

続く

37. 攫われた泰人（後書き）

どうでしたか？

また次回も見えて頂けたら嬉しいです。

38. 一日目の終わり

ここはどこなんだろう？僕はいつの間にかステージのスタッフになっていた。

名前、なんだっけ？とりあえず言われるままに働くことにした。

知らないアイドルグループのステージだ。やっぱり何も思い出せなかった。

ステージが開始と同時にスタッフ一同は解散した。よく分からなかった。後片付けとかどうすんだろ？

僕は近くの喫茶店で休んでいたがやっぱりステージが気になった。

僕の失った記憶が戻るかもしれない！

僕は再びステージ裏に戻った。何やら叫び声が聞こえる。気になってステージ裏から顔をだして見ると……

「……大変なことになりましたね。」

ティルスがそう言う。前を見ると誰もいないステージ、周りは疲れて座っているミユアと放心状態の莉麻、そして二人を気付かっている雪美、フィルディア、メイディアの姿だ。

「とりあえずこれを外しましょうか。」

そう言って指輪を外そうとする……

「止めておけ。」

足元から声がする。そこには黒い水晶が転がっていた。どうやら分離してそのままだったようだ。

ティルスは拾う。

「お前の身体にはまだ奴らの術が掛かっている。今戻ったら最悪奴らの操り人形だ。それだけは避けたい。」

「・・・分かりました。」

ティルスは指輪をとるのをやめた。

本当は早くでも男に戻りたかったがそういうことなら従うしかなかった。

「あのー？」

「・・・え？」

ステージの後ろから一人の男が出てくる。

動きやすい恰好、見た目からスタッフのようだ。

年齢は20代後半に見える。

「君達は何者なんだい？・・・いや、それよりここは一体何なのか教えてもらおうと助かる。」

ティルスはその言葉を聞いて大体事情を理解したが確信したのは落

ちていた地図が目に入りそれが光っていたからだ。

恐らく泰人が落としたのだろう。地図というにはほど遠いが4つの黒点と1つの赤点を書いてあり、そのうち黒点一つ赤点が重なっている。どうやらこの男性が夢の欠片の一人らしい。残りの点は半透明なので近くにいないのだと判断する。

「はい、実は僕達は……………」

ティルスは説明を始める。

サバイバルゲームについて、5人の人が記憶を失くしてこのゲームに強制参加していること、自分達がその人達を救うために戦っていること等を説明する。男性はいまいち理解し難いようだったが、さっきの事を目撃している為信じるようだ。というより信じるしかないといったところか。

「そうか、じゃあ僕は何をすればいいんだい？」

「とりあえず今日は一度退こうと思っています。攫われた仲間達を助ける作戦も立てなくてははいけませんから。」

「よし、じゃあ行こうか。」

ティルス達は今日はここまでで一度退くようだ。男性は近くに停めてあった車の鍵を何故か持っており、彼の運転で戻ることにした。大型の車なのでティルス、ミュア、莉麻、フィルディア、メイディア、雪美はきちんと座ることができた。そのまま雪美の屋敷に一度戻り体勢を立て直すようだ。

車が発すると上空から二人組の男女が下りてきた。

「泰人とスィングが戦線離脱か。こりゃもう終わりかもね。」

「……さあ、どうかしら？私の出した確率は変わってないよ。ティルスを捕まえられなかったのが大きいみたい。」

「確かにあの王子？は意外にやっかいかもね。さて、僕達も一度戻ろうか。」

二人組は一通り回りを見渡すと再び飛んでいった。

こうして日も暮れていった。

午後6時

ピンポンパンポーン

「さてさて、1日目も終わりに近づいてきましたね。残りの人数ですがなんと52人！半分まで減ってまいりましたー。いやはや、ライブで一気に減りましたね。さて今から休憩時間に入ります。日が変わるまでは皆さん手を出さないでくださいね。今のうちにゆっくりしてください。ではスピーカー放送終わります。」

ピンポンパンポーン

雪美の屋敷に戻ったティルス達は居間に集まり再び作戦を立てることにした。

莉麻はまだ回復しておらず、部屋に寝かせてある。よほどショックだったらしい。

「あの、僕から提案があります！」

ティルスが手を挙げる。格好が女の子用の服装になっているようで、どうやらミュアに着せられたようだ。

全員ティルスの方を向く。

「ミーアさんのさっきの放送、日が変わるまで休戦ってことは日が変わった瞬間から戦いをしていいと解釈できます。ならこんなのはどうですか？」

ティルスは自分の考えた作戦を説明する。

「……なるほどな。そいつが決まればラルゴ使い達を助け出しかなり有利な状況になるな。だが、奴らが警戒しないわけがない。チャンスは一度きりだ。分かっているのか？」

「それよりもあの方達の居場所が分からなくてはどうしようもない気が……。」

ヴィントルとメイディアが同時に質問する。ティルスは待ってましたと言わんばかりに答える。

「勿論考えてありますよ。まずは居場所ですが・・・・・・・・・・。」

ティルスは懷から導きのビー玉を取り出して覗く。

「・・・分かりました。どうやら船の中にいるみたいですね。船はビーチ近くに停めてあるみたいですが、僕の力なら船の前に一気に移動できます。これなら奇襲が可能です。」

ティルスの案に皆頷く。

「さて、ならば行くメンバーだな。さっきの話だとティルスとフィルディアが奇襲組、俺とミュアは後から合流する。残りは待機とそんな感じだな。」

「はい、それで・・・・・・・・・・。」

「・・・待って!!」

扉が開き莉麻が駆け込んでくる。
急いできたようだ。

「莉麻ちゃん、休んでいた方が・・・。」

「私は大丈夫。だから・・・私も連れて行って!!」

雪美の言葉を遮って自分の意見を言った莉麻。

「いや、休んだ方がいい。俺様が考えるには・・・。」

「いえ、莉麻さんにも来てもらいましょう。」

「・・・何?」

「考えてもみてください。僕達のやることは泰人さん達の救出以外にもこの世界に来てしまった人々を助けるという目的があります。ここは二手に分けましょう。」

最初はざわざわしていたがティルスの一言でまとまったのか全員頷く。

ヴィントルは渋々といったところだが・・・。

「ティルス君、ありがとう!」

「いえ、いいんです。それで分け方ですが・・・。」

とあるビルの屋上。

白マントとシュパルツは夜空を眺めていた。

「さて、このままじゃ終わってしまいますね。ティルス君がどう動くかが楽しみですよ。」

「・・・この程度で奴らはやられないだろう。あるとすれば・・・
・例のイレギュラーだな。」

「あの危ない怨念ですか。あれは流石の私でも勝てませんね。あれの狙いは一体何なのか・・・私には分かりません。」

そんな会話をしていた。

裏路地

一人の男が寝転んでいた。不気味に笑っていて、どこかで見たことがあるような制服を着ていた。

「全ては奴に復讐するため、俺は今ここにいます。覚悟しておけ・・・
・・・・」

こうして時間が経っていった。
それぞれ思い思いの休憩時間を過ごしていった。

そして日が変わった。

続く

38. 一日目の終わり (後書き)

どうでしたか？

少し休憩します。もう少ししたら残りを投稿します。
それでは！

39. 真夜中の決戦・前編 (前書き)

では続けていきましょう。
どうぞ！

39. 真夜中の決戦・前編

クリスタ王国の裏側、それは子供達を使い強力な悪魔を生み出す実験だったのです。

このことは他の人達には知られておらず城の重役の数人が勝手にやっているとのことでした。

許せんせん。

……でもどうしようもできないまま時間だけが過ぎていきました。

そして遂にその時が来ました。次の日には妹のサロンとミカゼが連れて行かれると話を聞きました。私は抗議しました！何故私じゃないのか、私はどうなってもいいから妹達だけは助けてほしいと。

当然聞いてもらえませんでした。

力が欲しい。

妹達を助けることができる力が

欲しい！

欲しい！

欲しい！

そんな思いも虚しく最後の日、私達は眠りにつきました。

（力が欲しいの？）

目の前に女の子が立っていました。

周りを見渡すと白い空間が広がっており夢であると分かりました。

夢ならいいよね？

私はその子に言いました。

「・・・お願いします！」

その子の話では力を与える代わりに私達にゲームに参加して欲しいとのことでした。そのサバイバルゲームで私が予選を突破出来れば現実でも力を使えると。

私達に与えられた力、ミカゼが気配を感知できる力、サロンが男性を誘惑する力。そして私が召喚する力でした。

そう、悪魔となった子供達を召喚する力を・・・。

それに私は了承し、そして今ここにいます。

とある船の中泰人とスィング、武者蜥蜴隊のリーダーは同じ檻に閉じ込められていた。装備品は全部奪われ、別の場所に保管されているようだ。

「さて、どうする？俺っち達は人質みたいだが。」

「ティルス達が助けに来るだろ。心配いらんさ。」

「彼女たちはティルス達を誘きよせるために俺っち達を生かしてるみたいだし、何かいい作戦でも立てていればいいけど。」

サロンの術はすでに解けているようで、普通に会話していた。

「・・・・・・・・・・。」

リーダーは相変わらず話さない。二人とは離れて寝ころんでいた。

午前0時船・入り口

三姉妹は交代交代で見張りをしていた。今、サロンとミカゼが見張りをしていた。

「うーん、眠くなってきちゃったよ。でも、頑張らないと！」

「そうよ、日が変わった今こそ奇襲に来るはず。あんたには期待してるから、気合い入れるわよ！」

二人は気合いを入れ直し辺りを注意深く見回した。

・
・
・
・
・
・

午前0時30分

「まだ来ないね。」

「全く、何をしてるのかしら。今がチャンスでしょ、どう考えても！っていうか、あいつら早く倒しちゃえばいいのよ。」

「駄目、ここで倒したら普通相手怒って強くなったりするものだよ。気づかれないように倒すのは多分無理だと思うよ。」

「むー、・・・分かってるわよ。ここは待つしかないわね。」

30分経っても誰も来る気配はない。二人は気合いを入れ過ぎて少し疲れてしまった。

「・・・しょうがないわね、ちょっと温かい飲み物でも持ってくるから、あんたはもう少し頑張っ！」

「分かった。」

サロンは一度飲み物を取りに船内に戻った。

そしてその直後だった。

シュン

目の前にティルスとフィルディアが現れた。

「・・・え？」

「・・・お願いします。」

ティルスがそう呟くと上空から黒い羽を生やした莉麻が降りてくる。一瞬のことでミカゼもついていけない。

「さて、寝ている。」

莉麻・・・いや、ヴィントルはミカゼの後ろに回り、頭に手を当てる。そして何やら唱え始めると・・・

「あ……………」

ドサッ

そのまま気を失ってしまった。

ティルス達の作戦はこうだった。まず莉麻と融合したヴィントルが気配と姿を消し見張りが一人になるのを待つ。なったらティルス達に連絡を入れ見張りの目の前に登場、動揺している間にヴィントルが気絶させるというものだ。

「この娘には昨日気付かれたからな。だが俺様が本気出せば問題ない。」

どうやら昼気付かれたことを根に持っていたらしく、とても満足した表情を浮かべている。

「さて、俺様はまた上空で待機している。後は頼んだぞ。」

そう言って再び夜の闇に消えていった。

「では始めましょうか。」

「はい。」

ティルスは融合の腕輪を外す。すると、フィルディアは倒れ融合されていた少女と分離し、少女の方は消えてしまった。フィルディアは光となり融合の腕輪に吸い込まれ

る。ティルスは腕輪をもう一度身につけるとミカゼの手を握る。

するとミカゼはビクンビクンと痙攣し始める。

「やっぱり慣れませんね、これ。」

そうティルスが呟くと痙攣が終わりミカゼは目を覚ます。

「……………えーっと、成功したみたいです。」

ニコツとティルスに微笑むミカゼ。

それを見てティルスは頷く。

「はい、ではもう一人が来るまでに準備を終えちゃいましょう!」

「持ってきたわよ……………って!」

サロンは紅茶を淹れて持ってきたが目の前の光景に驚いた。

「おかえり、さっきティルスを捕まえたよ。」

「は、離してくださいよー!!」

そうミカゼがティルスを捕えていたのだ。

いきなりだったためフロンは驚いていたが妹の活躍をようやく飲み込めたのか笑う。

「ふふふ、よくやったわ。ここは私に任せてあんたはティルスを牢屋に入れてきて。・・・っと、忘れてたわ。」

サロンはティルスの指についている指輪を外す。

ボンッと音がしてティルスは男に戻る。腕輪の方には気づかれなかったようだ。

「ま、まさか!?!」

ティルスは驚く。どうやらこれからやられることが分かっているようだ。

「当然! 保険はいくらでも欲しいモノよ。ってことでしばらく大人しくしてなさい。」

「ぐっ・・・・・・・・。。。。。」

ティルスは大人しくなった。元々肉体にかかっていた術が発動したからだ。

だが泰人たちよりも苦しくなさそうだった。ヴィントルが思った以上にティルスの精神力は高いらしい。

「やっぱり操るのは無理か。ま、これで何か考えていたとしても無駄なこと。じゃあヨロシクね!」

「うん。」

頷いてミカゼは船内に入ってしまった。

「さて、これで勝ったも同然ね。周りにまだいるかもしれないから気を付けないと。」

「上手くいきました。指輪を取られちゃいましたが後は予想通りでしたね。」

「・・・・・・・・。」

ミカゼはテイルスを連れながら船内を歩く。

そう、これで内部侵入は成功したのだ。しかし、テイルスは術にかかっており歩くことしかできない。

「後は私次第ですか・・・、責任重大ですが頑張ります！」

ミカゼはそう呟き、ミカゼの記憶を読んで泰人たちが捕まっている場所へと向かった。

続く

39. 真夜中の決戦・前編 (後書き)

どうでしたか？

次回も見てください嬉しいです！

40. 真夜中の決戦・中編

時間は戻り、午後11時・街中

スタッフの運転する車にメイディア、ミユアを乗せて街中を回っていた。散らばった人たちの安全を確保することも重要であり、今の時間なら戦闘を避けれるからである。他のメンバーは作戦に向けて待機中である。夜10時から始めたのだが黒点の一つは素早くなかなか追いつかない。他の二つはずっと半透明のままである。地図はメイディアが持っており、もう一度確認する。

「えーっと、黒点一つに追いつきました。・・・やっぱり残り二つは半透明になってよく分かりません。」

ミユアも一緒になって見る。赤い点二つと黒い点一つが近くにある。よく見るとこの点は路地裏にあることが分かる。

「ここの路地、・・・私だけで行ってくる。地図借りるね。」

ミユアは二人を車に残して路地裏へと入っていった。

路地裏はとても暗かったため、持ってきたライトを付ける。周りを見ても人がいる気配は全くしない。

数分捜す。地図ではここにいる点があるのに、やはり誰もいなかった。

「・・・仕方ないか。」

諦めて路地裏を出ようとしたところだった。

ミ、ミャー

「・・・ん？」

何か鳴き声が聞こえた気がしたミュアは近づいてみる。

そこには、ゴミバケツの後ろには一匹の猫がいた。首輪がつけられており飼猫であることが分かる。

ミャー

また一鳴きしてミュアの方を見ている。少し警戒しているようだ。ミュアはニコツと笑い緊張を解いてしゃがむ。

「・・・大丈夫、こっちにおいで。」

手招きをする。猫は少しミュアを見ていたが、危害を加えないと分かったのか近づいてくる。

ミュアは猫を撫でてあげる。猫は気持ちよさそうにしている。どうやら人懐っこいようだ。

ミュアは地図を見してみる。さっきの黒い点は赤くなっており保護したと分かる。

「・・・猫なんだ。」

どうやらこちら側に来ているのは人だけではないらしい。

ミュアは猫を抱え上げる。猫は全く暴れようとせずじっとしている。

「・・・まずは屋敷へ。」

ミユアは猫を抱えたまま車へと戻っていった。

時間と場所は戻り、午前0時35分・船内

「えーっと、この子の記憶だと……まずはここかしら。」

ミカゼ……いや、フィルディアが辿り着いた部屋は普通の客室のように見える。しかし、中は違うようだ。

「ここに泰人さん達の装備品があるみたいね。入りましょうか。」

フィルディアは部屋の中に入る。見るとやはり普通の客室みたいだが机の上に物が入った袋が置いてあった。中を見てみると、ラルゴや白い石、ドライバーセットといった物が入っておりすぐに泰人達の荷物であると分かった。

「では、早速持って行きましょうか。」

フィルディアが袋を手に取りろうとした所だった。

ガチャッ

「え?」

突然ドアが開く。そして入ってきたのは

「あら、ミカゼちゃんどうかしたの？」

フロンだった。すぐにティルスが目に入る。

「ティルスくんを捕まえたのね。それで彼の装備品をここに置きに来たのかしら。」

その一言は驚いて頭が回らないフィルディアにとってはこれ以上ないチャンスだった。

「そ、そうなの。今から檻に連れて行こうと思って。」

「そうなのね。なら私が見張りを代わるわ。それじゃあ宜しくね。」

フロンは完全に信じていた。そう言ってゆっくりとした足取りで部屋を出て行った。

「危なかったです。」

何とか乗り切り一息つく。だが新たな問題が出た。フロンが入り口へ向かっていった、ということは・・・

「合流させるのは危険ですね。ひとまずヴィントルさんに連絡をとりました。」

フィルディアはティルスのポケットから通信機を取り出す。ティルスの持ち物は指輪以外とられていない、というよりもサロンがミカゼにその辺りは任せたからだ。まあ、今ミカゼはフィルディアなの

だが。

フィルディアは通信機でヴィントルに連絡をとる。

「そちらに長女が行きました。次女を合流前に倒してください。」

「言われるまでもない。」

そう一言返事がきて通信が切れる。

「では行きましょうか。」

フィルディアは袋を持って泰人達が捕まっているであろう場所へ向かっていった。

船入口

「ふむ、では早速行くか。」

ヴィントルは急降下していきなりサロンの目の前に現れる。

「え?」

身構えていたとはいえ一瞬で現れたヴィントルに動揺するも、冷静に距離をとる。

「き、来たわね。さあ、出てきなさい。私の僕達!」

そう一言言々と船の上に配置されていた小屋らしきものから次々に狼が出てくる。

彼女はオスならば動物も自由に誘惑できるようだ。全部で8匹ほどいる。

「ふむ、なかなかおもしれえじゃねえか。」

「余裕ね。それがいつまでもつかしら？」

サロンは狼たちに指示を出すと一斉に攻撃の体制に入る。それを見てヴィントルはニヤリと笑う。そして走り出す。

「やりなさい！」

サロンの言葉で攻撃しようとした狼たちだったがヴィントル行動により動けなかった。

そう、彼はそのままの勢いでサロンに抱きついた。

「・・・ちよつと!？」

サロンは動揺した。ヴィントル・・・いや、莉麻に抱きつかれたのだ。

自分よりも体型が小さいわけだがいきなりのこと動揺し、それが狼たちにも伝わったのか狼たちも慌てふためいている。

「あらゆる状況にも対応せねば真の戦士とは言えねえよ。さて・・・。」

「・・・し、しまった！」

しかしもう遅かった。ヴィントルはすでにサロンの頭に手を置き呪文を唱えていた。
そして唱え終わる。

「・・・ぐぐぐ。」

サロンは必死に耐えていた。ミカゼはすぐに寝てしまったが彼女は耐えている。

一応一般人よりも精神力は高いようだ。だがヴィントルの力のほうが上回っていて気を抜くと意識を失いそうだった。
ヴィントルは彼女が耐えることまでは読んでいた。そう、彼女に意識を保つことに集中させることが目的だったのだ。

アオーン

狼たちはコントロールを失って小屋に戻っていく。
どうやら魅惑が切れると元の場所に戻るようになっていたようだ。
そして、狼たちの効果が切れたということは・・・

「あらあら、ごめんなさいね。遅くなったわ。」

それから少し経ってフロンがようやく到着する。
そして、彼女が見たのは

ドサッ

自分の妹が倒れるところだった。

「サロン!？」

咄嗟に駆けつける。先ほどと違い俊敏だった。本来彼女はそこまで遅いわけではないのかもしれない。

「フ、フロン……。」

今にも気を失いそうだった。だが彼女は最後の力を振り絞って何かを伝えたそうだった。

「サロン……。」

「ごめん、私はもう駄目みたい。だから約束して欲しいの。」

そしてサロンの目から涙が流れる。

「後はお願ひ、お姉ちゃん。」

そう言ってその身体は光となって……消えた。

「ふむ、こんなものか。」

ヴィントルが一息つくこうとする。

フロンは彼の方を見る。いつもの穏やかな表情ではなくとても悲しみに満ちていた。

すると船の中から誰かが出てくる。それはミカゼと・・・

「な・・・なんで!?!」

泰人、スイング、テイルス、武者蜥蜴隊のリーダーだった。

全員術が解けピンピンしていた。リーダーは無表情だったが。

「おう、ヴィントルと莉麻か。助けに来てくれてありがとよ。」

泰人達は再開の言葉を交わしていたが、フロンはもう何も考えられなかった。

するとミカゼが彼女の目の前に立つ。そして

「・・・ごめんなさい。」

そう言うと、力が抜ける。慌ててフロンが支える。そしてすぐに何かがミカゼから抜けると目を開ける。

「ミカゼ、大丈夫? 今すぐ・・・」

「ううん、操られた私が悪かったの。それより約束して欲しいことがあるの。」

聞きたくなかった。ミカゼの最後の言葉なんて。だけど、彼女は聞くしかなかった。

「後はお願ひね、お姉ちゃん。」

そう言ってサロン同様光となって消えた。

「では僕はこれで。今回の礼は必ず返すから。」

そう言ってリーダーはその場を去った。

ティルスはサロンが消えた場所を調べる。すると返信の指輪が落ちていたことに気づき拾った。

泰人はヴィントルと莉麻、ティルスと融合の腕輪にいるフィールデアにお礼を言うと言おうとフロンを見る。

「・・・・・・・・・・。」

フロンは立ち尽くしていた。目の前で妹達二人がやられてしまい傷心状態だった。

「・・・・あの」

泰人が話しかけようとする

「・・・・そうですね。いつまでも悲しんでいても始まりません。」

そう呟くと両手で杖を持ち、それを前に出す。

「・・・・おい、あれはやばいぞ!!!!」

ヴィントルが気づくも既に遅かった。

フロンの目の前に門が出現しそれが徐々に開いていく。

「すみません、妹達のためにも本気で勝たせてもらいます。覚悟してください!!」

そこから出てきたのは・・・巨大な海蛇だった。

続く

40. 真夜中の決戦・中編 (後書き)

どうでしたか？

また次も見ただけならばとても嬉しいです。

41. 真夜中の決戦・後編

時間と場所は戻り船内。

フィルディアはミカゼの記憶を頼りに檻の部屋を見つけた。

ガチャ

扉を開けると檻の中にいる三人の姿が確認できる。

「えーっと、何か用か？」

泰人が警戒しながら聞いてくる。確かに今のフィルディアの姿はミカゼなため仕方ないといえる。

「大丈夫です。私はフィルディアで、皆さんを助けにきましたよ。」

部屋を見渡すと檻から離れた机の上に鍵が置いてある。それを手に取ると檻の鍵を開ける。

「そうだったんですか。ありがとうございます、助かりました。」

「流石っすね。ありがとうございます！」

それぞれお礼を言いながら檻から出てくる。だが一人動かない男がいた。そう、武者蜥蜴隊のリーダーだ。

「・・・・・・・・・・。」

リーダーは無表情で動こうとしなかった。

「……………仕方ありませんね。」

フィルディアは檻の中に入りリーダーに手を差し伸べる。

「……………何の真似だい。僕は無視して行けばいいじゃないか。」

「今回は貸しにしてあげます。後でちゃんと返してください。それに、一緒に逃げた方が効率がいいですよ。」

ニコツと笑いかけて話すフィルディアを見て、…………リーダーは渋々手を取る。表情も戻ってきたようだ。

「いいだろう。僕は借りを作らない男だ。必ず返してみせるさ。」

そしてリーダーも連れて船を脱出した。途中でティルスが意識を取り戻し、ヴィントルがサロンを倒したのだと分かった。

時間は戻り屋敷内

ミュー達は全員居間で待機していた。雪美には寝るように言ったのだがどうしても待つと聞かなかったらしい。猫は雪美の許可をもらい猫用の部屋を設けてもらった。それぞれ思い思いに時間を潰し、何も起きずに過ぎていく。みんな暇そうにしていたが

「・・・ん？」

ミアは何かを感じ取った。ビーチの方で強大な力を感知する。

「・・・・・・・・嫌な予感。」

ミアはスタッフに車を出してもらうように話をつける。メイディアと雪美も行きたそうにしていたが、危険なため説得し残ってもらうことにした。

「・・・猫を宜しく。」

そう言ってミア達はビーチへと向かった。

そして現在。フロンが海蛇を呼び出した。

「では、蛇さん。彼らに攻撃をお願いします。」

フロンが指示すると海蛇は海へと飛び込む。その後を追うようにフロンも海へとダイブする。一同が驚く中、フロンは上手く海蛇の頭に着地する。地面ではないが。すると海蛇の口が大きく開く。

「や、ヤバいぞ。早く船から離れろ！」

ヴィントルの一声で船から離れる泰人達。
そして・・・

グオォー

もの凄い音が鳴ると同時に竜巻が発生し船を飲み込む。もうなんの音か分からない位の騒音で船が完全に沈んだ。元々暗かったのもあるが完全に跡形もない。

「・・・これは洒落にならないっすね。」

一同呆然とした。一瞬で目の前の船が消えれば驚かない方が珍しい。

「逃げましたか。ならこちらに来てもらいましょう。」

そう言うとき海蛇が大きく息を吸い込んだ。とんでもない吸引力に全員引き寄せられる。

「ぐ・・・、この俺様も引き寄せられるだ！」

それほど凄いのだ。そして全員真夜中の海に入る一歩手前まで来る。

「あらあら、来ましたね。さてそれでは・・・」

何やら攻撃の指示をしようとしているフロン。泰人たちは踏ん張るので精一杯で他に手が回らない。

「それではこれで・・・？」

キキーツ

後ろで車が急ブレーキをかけた音がする。
そして

「・・・好きにさせない。」

ミユアが飛び出してくる。既に何かの術を完成させている。
いきなり現れたミユアにフロンの指示が遅れてしまった。

「しまっ・・・」

「皆、目を閉じて。・・・光印・フラッシュレイ！」

ミユアの言葉に泰人たちは従い、目を閉じる。
すると

ピカッ

強力な光が術式から放たれる。といっても光るだけだが。
だがそれを見たフロンと海蛇には効果が現れる。

「グギヤアアアアア！」

「あらら？目が見えませーん。」

どうやら強力な目眩ましのようだ。発生していた竜巻も収まり吸引も消えた。

「今がチャンスだな。でっかいの一撃で決めてやるよ。」

ヴィントルは何やら強力な術式を描こうとしたが・・・ミユアに止められる。

「・・・倒しちゃいけない。この海蛇、ただの召喚された魔物じゃない。」

ヴィントルは魔物をよく見る。

すると僅かだが継ぎ接ぎのような箇所が見える。
それを見てヴィントルは確信する。

「人口で作られた魔物、見たところ生贄は人間のようだが。」

「・・・そう、恐らくこの人たちの目的って。」

「つーことは、昨日の奴もか。・・・糞が!!」

仕方なく術式を描く手を止めるヴィントル。流石にやってはいけないと思ったのだろう。

すると暴れていた海蛇も徐々に収まりフロンにも視力が戻る。

「あら、まだ何とかなっているみたい。では、改めて・・・」

「おい、聞け小娘!!」

強くヴィントルが叫ぶ。まあ莉麻の声だから凄みはないのだが。それでもフロンは止まった。ヴィントルの話を聞く気はあるようだ。

「お前、目的はなんだ？その魔物みたいなのを生み出して戦わせるのが目的だって言うなら・・・本気でぶっ倒すぞ！」

「・・・・・・・・・・そうですね。仕方ありません、少し私の話を聞いて下さいませんか？」

そう言ってフロンは話し始めた。

自分たちが様々な国を旅しているときに立ち寄った、クリスタ王国で見た魔物を生み出す実験を。

そしてそれを目撃したため捕まってしまったこと。

もうすぐ妹達も生贄にされてしまうこと。

それを防ぐためにミィアにお願いして力を得たこと。

3姉妹のうち誰か一人でも予選を通過できれば現実世界でも能力を使える状態にしてくれること。

「私は負けられないんです。本当はこの子達を戦わせたくはないけど、これしか方法がないから。私はどんなに恨まれてもいい。この子達を、妹達を救うためなら私は何だってしてみせます。」

決意に満ちた表情はとても嘘を言っているようには見えなかった。思わずヴィントルも黙ってしまう。

「・・・・・・・・クリスタ王国ですか!？」

「・・・・・・・・クリスタ王国だと!？」

二人ほど反応する。泰人とティルスだった。
ティルスは一度行ったことがあるから分かるのは当然である。
では泰人は……

「どっかで聞いたことあるんだけど。前にネットで調べたときにそんな言葉があったような……？ 沙汰なら知ってるかもしれんが。」
なんてことを考えていた。

「さて、私の言いたいことは全てです。……それでは再開しましょうか。」

再び海蛇に指示を出そうとするフロン。

「って、ちょっと待ってくれ。そういうことなら俺たちと一緒にい
かないか？ 目的は同じなら……」

「それはお断りします！」

思いつき拒否される。驚く泰人。

「私は海の隊の一人です。貴方たちを倒すように言われている部隊
の一人なんです。それに貴方たちに妹達がやられたのは事実です。
もう、……戦うしかないんですよ。」

すごく悲しい目をしている。だがそれで分かる。
フロンの決意は固い。そう簡単には変わらないだろう。

「……だったら、俺たちがその海蛇を無力化できたら貴女は俺た

ちの仲間に来てもらう。それでどうかな？」

「・・・あらあら、貴方は面白い人ですね。いいでしょう。ただしこちらは手を抜きませんよ。では蛇さん、お願いします！」

グリャアアアアアアアアアア

海蛇は声を上げる。すると周りに竜巻が発生する。そして思いつき風が吹く。

「・・・!？」

今度は先ほどと逆、思いつき吹き飛ばされる。

泰人達は予想していなかったためそのまま飛ばされてしまい壁に激突し思いつき背中を打つ。

「・・・ぐあああ!!！」

全員悶絶中。相当痛いようだ。なおも続く強風で、このままだと風圧に全員潰されてしまう。

「ラ、ラルゴ使い。結界を展開しろ!このままじゃ全滅するぞ。」

「分かってるさ。蝸牛結界・守!!！」

痛みに耐えてそう言うと、ラルゴが光り泰人たちを包むように結界が展開される。

だが強風に押され少しずつ小さくなっていく。

「駄目だ、向こうの力の方が明らかに上だ。・・・このままだと。」

」

泰人の思ったとおり蝸牛結界はどんどん小さくなっていく。
そして誰もが諦めかけた時だった。

「ますたーもカタツムリさんもまだ諦めないでよ。」

「ん？」

スィングのポケットから何かが飛び出した。

小さい精霊のようだがどこかで見たことあるような姿をしている。

そう、白魔石をスィングに渡したあの少女・美弥にそっくりだった。

「何か出てきたっすね。いやでも今忙しいから後で・・・」

「あたしはシロミヤーだよん。」

話を聞いていなかった。

彼女は周りを見渡す。

「ふーん。キツイけど、あたしが来たからもう大丈夫っしょ。じゃあ行ってみよう♪」

やたらテンションが高い精霊である。ちょこんとスィングの肩に乗る。

「ますたー、今ならちょーヤバい力使えるかも。とりあえずあたしの5割の力貸すから一緒にカタツムリさん手伝っていいー!」

「分かった。」

シロミヤーが肩に乗った瞬間からスィングには何か強力な力を得た感覚がした。

「これならいけるっすね。」

スィングはラルゴに触れて力を強化する。すると

グググッー

徐々に結界が広がっていくのが分かる。海蛇の竜巻を押している。

「・・・仕方ないな、ラルゴ使い！蝸牛結界をあの竜巻にぶつけて相殺しろ。俺はミュアとあの海蛇を門に帰す術式を組む。」

「ああ、頼むぜ！」

「・・・了解。」

泰人とミュアが頷くと莉麻から黒い水晶が飛び出しミュアに入る。ミュアは集中し術式を描き始めた。

「・・・背中痛いよ。」

「結構効きましたね。」

莉麻とティルスは痛がっている。元々打たれ弱い二人なので仕方ない。そうこうしている間にも結界が徐々に押している。

「あらら、泰人君達も本気できたわね。」

いきなり押され始めたためフロンも少し焦っていた。

「ならこちらでも本気でいきましょう。蛇さん、お願いします。」

グリャアアアア

竜巻が更に大きくなり風の強さも増す。再び結界が押され始める。

「……ぐ、あの海蛇の強さヤバいな。白虎倒した俺がスイングの力を借りても押されるか。」

「俺っちも全開なはずなんだがな……。」

だがやはり押されている。泰人もスイングも先ほどのダメージもあり限界に近かった。

「うーん、まだ足りないのね。相殺の力加減が難しいのよね。じゃ、5割から7割に力を上げるからますたーもカタツムリさんも頑張って耐えてね♪」

グンッ

「うわっ!？」

スイングの力が更に強化される。スイングはいきなり力が上がったため驚いたが、すぐに落ち着き泰人に強化された力を送る。

「……これはいけるかもな。蝸牛結界全開だ!」

グググググッ

再び結界が押し始める。先ほどよりも更に勢いがついてとんでもない力の塊であると分かる。フロンはかなり驚いた。

「だ、駄目。私は負けられないの。妹達の為に……も……」

だが海蛇の力はもう限界だった。そのまま竜巻に接触し、消滅する。

「そんな……な……」

「……後は任せて。」

術式を組み終えたミュアは一気に海蛇に近づき術を放つ。

「門よ開け。この者を元の世界へ！」

すると先ほどの門が開き、海蛇を吸い込んだ。だが海蛇のみを吸い込んだため、足場をなくしたフロンが落下する。

「あらららー？」

シュルルル
パシッ

「……あら？」

落ちなかった。見るとフロンはムチのようなもので支えられていた。そう、ラルゴウィップだった。

「さて、俺達の勝ちだぜ。仲間になってくれるよな。」

フロンは何も考えられなかった。だが、もう答えは決まっていたためすんなり言葉に出た。

「はい、お願いしますね。」

上空

「何なんだあの力!!? あの海蛇は力だけなら朱雀以上はあるはずなのにそれを力で返すなんて。」

「……あの白魔石の精霊、白魔石だけでもレアアイテムなのにあの精霊の力は異常。計算し直さない!」

双子の少女の方は計算を始めすぐ終わる。

「終わった。私達が勝てる確率は……4割。」

「……嘘だろ。あれだけでこんなに上がるなんてありえないよ!

!!
」

「落ち着いて。ひとまず戻ろうよ。」

少女が少年を宥めて再び暗闇に消えた。

午前1時30分・ビーチ

フロンと分かり合った泰人達はひとまず帰ることにした。もう全員満身創痍だからだ。フロンを連れて無事だったスタッフの車に乗り雪美の屋敷へと戻っていった。シロミヤーはあの後すぐに石に戻ってしまった。

こうして泰人達の二日目最初の戦いは幕を閉じた。果たしてこれからどのような戦いが待ち受けているのか？

「必ず地獄に送ってやる。待っているよ、泰人お!!」

泰人達が屋敷に戻っている時、路地裏にいた男はそう叫んだ。

続く

41. 真夜中の決戦・後編 (後書き)

どうでしたか？

それではまた見てくだされば嬉しいです！

42. 復讐者暗躍

二日目、午前4時・路地裏

一人の男が寝そべっていた。彼は今ある人物に復讐するために計画を立てていた。だがなかなか決まらないようだ。

「奴の精神を弱らせたいがタイミングが難しい。どうするかな。」

ブツブツ呟き考えていると本通りの方が何やら騒がしいのに気づく。

「なんだ？ また戦闘でもあったのか。」

気になった男が見に行くと、そこには10人の集団がいた。どうやら今結成したらしい。

「よし、俺達が力を合わせりゃ王子隊なんて楽勝だよな。」

「当然だろ。このメンバーで本戦に残るんだよ。」

どうやら本戦に残るため残った選手達が手を組んだらしい。狙いは泰人達のようなだ。

「なるほど。奴らを上手く使えば泰人を追いつめられるかもな。」

そう思った男は集団と接触しようとするが、……突然足を止める。

「……何か来るみたいだ。まずは様子見だな。」

再び身を隠す。すると本通りに現れたのは・・・一人の少年だった。年は10歳前後で服はボロボロ、手に刀を一本握っている以外は何も持っていない。目に光はなく明らかにおかしいと分かる。

「あの少年、かなりやべえ。どうやらあの集団と接触するみたいだな。」

男の思った通り、少年は集団の前で止まる。

「あれ、どうしたのかな。子供がこんな時間に歩いてちゃ・・・」

「馬鹿！そのガキヤバいぞ。」

一人気づくがもう遅かった。

ジャン

その音が聞こえらるともう終わっていた。一瞬で全員が斬り伏せられていた。

「ほう。」

集団は光の粒子となり消える。それを見届けると少年はその場を去っていった。慌てて男は大通りに出るがもう少年の姿はなかった。

「10人を一瞬か。なかなかの実力だ。俺には勝てないがな。」

男はかなりの自信過剰らしい。そこに上空から誰かが来る。これまた集団のようだ。

「その男、止まりなさい！」

男は呼ばれたので素直に止まった。彼は警察が苦手なため、その集団を警察だと思ったからだ。

「こんな所にも警察がいるのかよ。」

そうばやいていると集団のリーダーらしい人物が前に出る。さっきのとは違うタイプで賑やかそうな少年だった。

「僕は空の警備を担当する空の隊です。ここでかなりの人が一瞬でリタイアしたと聞いてきたのですが、あなたは知りませんか？」
だが口調は丁寧のようだ。

「知らん。じゃあな！」

そう言って去ろうとするが

「待ちなさい！」

止められる。

「彼からは危険な力を感じます。ここは捕まえた方が・・・」

「ほう、この俺を捕まえる気か。」

男は話を最後まで聞かずに勝手に解釈して身構える。

「・・・分かりました。威嚇の発砲を許可します。」

少年の掛け声で隊員は身構える。全員空を飛んでいるため上から狙われる形になるのだが

「えーっと、あの子供を合わせないで15人か。あの少年は見えないが格の違いを見せようか。」

誰に見せるのかは聞かないでください。

隊員達は威嚇発砲をするが男は全く気にせずにかかしようとしている。

「隊長！彼には威嚇は意味がないようですが。」

「仕方ありません。彼も敵対するみたいなので発砲を許可します。」

了解と全員で声を合わせて発砲を開始する。どうやら弾は空気らしく何発でも打てる優れものだ。だがそんなのお構いなしに男は全て避ける。

「じゃ、いきますか！」

ピーー

男は空に響くように高く指笛を鳴らした。

場所は変わって雪美の屋敷

屋敷内から僅かに音がすると思えば一匹の猫が屋敷から飛び出していった。メイド達は他の仕事をしていたため気づいていないようだ。

場所は戻って本通り

相変わらず男は弾を避けていた。すると・・・

ミャー

鳴き声がして一匹の猫が彼の胸に飛び込んだ。

「ようプレスト、奴らの偵察は順調みたいだな。頑張ってるじゃないか。」

ミャー

弾を避けながら何か話していた。そして猫の名前はプレストというらしい。

「じゃ、やろうか。プレスト、甘噛みで頼むぞ。」

三十一

プレストが鳴き声を上げると男の左の薬指にかぶりつく。するとプレストは光り出し男と一体化する。すると男にも変化が現れる。背が縮み、服装がセーラー服になり少女のようになる。猫耳と尻尾まですべて生えている。

「な、なんなんだあれは!？」

隊員たちは驚くがそれは無理もない。目の前の男が猫と合体して少女になったら誰でも驚く。

「うーむ、プレストがメスだから合体すると性別変わっちゃうんだよな。そこが残念だが・・・まあいいさ。」

猫少女がうんうんと唸っている。その間も弾をすべて避けていた。

「な、なにものなんだ？　今までのを全て避けて合体までとは・・」

隊員たちは怯えていた。今まで彼らはエリートとして生み出されて過ごしてきたがこれほどの力の持ち主にはあったことがなかったからだ。

「……じゃ、行ってみようか！」

目の前の猫少女の姿が消えた。隊員達は周りを見渡すが少女はいない……が変化はすぐに訪れる。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

隊員たちは叫び声を上げて次々に墜落していく。見てみるとどうやら背中に深い切り裂かれた痕があった。

スタツ

猫少女は屋根の上に着地する。見ると爪は鋭く尖って血がついているのが分かる。

そして少年一人を残して全員墜落するのを見てニヤリと笑う。

「一瞬で全滅・・・、何が起こっているんだ。」

少年は混乱していて何も考えられなかった。

だがそこに応援が来る。女の子のようだ。

「心配だから見に来たけどどうなって・・・」

女の子はも驚いた消えかかってはいるが隊員全員がやられているところを見たからだ。

「大したこと無いな。さて、君たち双子っぽいしこいつらのまとめ役みたいで結構強そうだけど・・・」

殺気を感じた。だが双子は二人とも動かない・・・いや、動けないのだ。何か強烈なプレッシャーを感じる。

「さあ、お楽しみはこれからだよ。」

猫少女はそう言い双子へと向かっていった。

続く

42. 復讐者暗躍 (後書き)

どうでしたか？

また見ていただくと作者が喜びます。
では！

43. 最悪の再会

今朝の戦いの後、ティルスはフィルディアをラルゴに戻し、ミューアとヴィントルは分離した。

屋敷につくとスタッフ達が出迎えた。猫の存在を教えた後、疲れたのか全員すぐに寝てしまった。そして戦い初日の夜が過ぎて陽が昇る。

午前6時・雪美の屋敷

「うーん、朝一番の温泉はやっぱりいいものね。」

メイディアは温泉に入っていた。他のメンバーは疲れて寝ているため彼女一人である。

「さて、昨日から気になってた露天風呂でも行こうかな。」

上機嫌なメイディアは露天風呂へと向かう。

ガラガラッ

・・・そこには武者蜥蜴隊のリーダーが立っていた。
メイディアは一応タオルは巻いているもののほぼ裸である。

「都合がいい。大変なことになっ……」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

キャー――――！！！！！！

その後リーダーはボコボコにされた。その騒ぎがあったか皆起きて居間に集まっていた。……一人を除いて。

「それで、覗き魔は何しに来たんっすか？」

「覗きとかちょーキモいんですけど。ていうかましたー、何しに来たかって覗き魔は覗き以外にすることないじゃん♪」

いつの間にかシロミヤーまで出てきて散々な言われようである。メイディアは恥ずかしくて顔を赤くし俯いている。

「……それより気づかないか？誰かが足りないのでは。」

これ以上覗きのことを言われると正直泣きそうなりリーダーは話題を変えようとする。

「……お兄ちゃんがない！」

いち早く莉麻が気づく。

そう、その場には泰人がいなかった。勿論フィルディアでもある。

「俺っちが起きたときにはもういなかったから先に来ていると思ったんですけどね。」

「……………おい、まさか貴様が言いたいのは。」

頷くリーダー。どうやらヴィントルは分かっただけらしい。

「茅野泰人は戦地へ向かった。」

今から数十分ほど前まで戻る。

泰人は眠っていた。流石に一日目は色々ありすぎて疲れきっていたからだ。…………だが

泰人、起きろ、泰人

直接脳に響く声がして泰人は仕方なく起きる。

「……んむ、まったく何処の誰だよ。」

僕は空の隊、隊長のディアルだ。君と少し話をしたい。誰にも気づかれずに一人で外に出てきてもらえないか。

空の隊という言葉で泰人は完全に起きた。

「……分かった。その代わり、屋敷に攻撃なんかするんじゃないぞ。」

そう言って泰人は机の上のラルゴを手取る。

「あれ、泰人さん。朝早いですね。おはようございます。」

「おはようございます。急ですみませんが話を聞いてください。」

泰人は空の隊、隊長が屋敷の前まで来ていて自分が呼ばれていることを話す。

「そうですか。分かりました、一緒に行きましょう。」

「ありがとうございます!」

泰人はラルゴを使い蝸牛結界を展開し屋敷前まで飛んだ。屋敷の前

では一人の少年が待っていた。

「来たか。じゃあ、近くの公園に行こう。その方が話しやすい。」

「分かった。」

二人は近くの公園まで歩いていった。公園まで歩いている中で泰人はあることに気付く。

「人の気配がないな。少なくとも参加者はいるはずなんだが。」

「そのことも着いたら話す。」

そう言って少し歩き公園に到着する。二人はベンチに腰掛ける。

「それで話ってなんだ？俺をここで倒すとか。」

ディアルは首を振る。

「実は君を待っている人がいる。それで僕がその人に君を連れてくるように言われたんだ。」

「ちょっと待てよ。隊長ならそんな部下に任せればいいじゃないか。」

・・・ディアルは俯く。そして辛そうにしながらも話す。

「全員そいつにやられたんだ。15人の精鋭達が一瞬で。それだけじゃない。そいつはその前にも大量の参加者をこれまた一瞬で倒している。桁違いの強さだよ。」

「マジかよ。そんな奴に呼ばれているのかよ。」

流石の泰人もその人物の実力がその説明だけで分かる。

「今は遠慮するよ。まだヴィントルに覚醒スネイラーの発動許可も
らっていないし。俺はこんなところで負けられないからね。そいつとは
本戦で戦うって言っといてくれ。」

そう言って立ち去ろうとする泰人だが、ディアルに腕を引っ張られ
る。

「お、お願いします。君を連れて行かないと僕の姉さんが・・・や
られちゃう。」

「・・・何!？」

泰人は足を止めて振り向く。

「僕の双子の姉さんが人質にとられて、君を連れていかないと・・・
・・・」

ディアルは今にも泣きそうだった。

泰人には分かる。これは演技じゃない。家族を思う男の姿だ。

泰人は考える。はっきり言って聞いた限りの実力者なら勝てるわけ
がないからだ。精鋭達15人を一瞬で倒す相手では白虎でも無理だ
ろう。全盛期の玄武やヴィントルと並ぶくらいか。

「・・・・・・・・うーん。」

だが目の前の子の家族は救いたかった。
と悩んでいると

「悩んでいる時はこの言葉を言うように言われたんだ。」

そして一息つくと

「きいな・・・」

ガッ

気が付くと泰人はディアルの襟首を掴んでいた。

グググッ

「ぐっ、ががが。」

絞まっていた。泰人は明らかにおかしかった。

「た、泰人さん落ち着いて。隊長さんが危険ですよ。」

「・・・あ。」

フィルディアの言葉に我に返ったのか手を離す。

「す、すまん。・・・分かった、連れていってくれ。俺の予想が正しければそいつを野放しにはしておけない。」

頭を下げて謝ると連れていくように頼む。

「いえ、僕こそトラウマを呼び起こすようなことを言ってごめん。じゃあこれを受け取って欲しい。」

そう言って渡されたのはオレンジ色に輝く宝石だった。泰人が受け取るとディアルは説明を始める。

「それは持っているだけで空を飛べる。では僕についてきてください。」

そう言ってディアルは飛んでいく。

泰人も宝石を手には飛びたいと願うと飛ぶことができた。

「仕組みは知らないが夢の世界なら何でもありだよな。さて行こう。」

泰人もディアルの後に続いていった。

それをリーダーは隠れて見ていたのだった。

「きいなんて……まさか!?!」

話を聞いた莉麻が反応する。どうやら知っている言葉のようだ。

「莉麻ちゃん・・・知っているの?」

「・・・多分合ってると思う。恐らくお兄ちゃんを呼んだ人って・・・」

泰人とディアルは目的地についた。その場所とはある拓けた場所でも、ただっ広く原っぱが続いている。

そこにひとりの男と少女が立っていた。男はニヤニヤと笑っており、少女の目には光が宿ってなく普通じゃないとわかる。

「来たか。久しぶりだな、泰人お!!」

男は凄く嫌味ったらしく話す。泰人は目を細めその男と向き合う。そして名前を口にする。

その男の名は

「やっぱりお前だったか。
・
・
・
・
・
零渡祇亞^{れいどぎあ}!!」

続く

43. 最悪の再会（後書き）

どうでしたか？

また次も見えていただければ幸いです。

44. 戦いの裏で

ティルス達が夢に旅立った後、悪夢神は動き出した。巨大な石像の姿で。

沙汰が意識不明、戦えないティライズ。主力がいなくなってしまうたディオールでは

「さて、邪魔者は今いない。ようやく計画が実行できるな。」

城の内部にあった巨大な像が動き出した。壁を壊し、町を踏みつぶしながらある場所へと向かう。そのせいで城下町はパニックになる。今ディオールには実力者がいないため止めようもない。

「この辺りだな。」

城下町の広場で止まる。広場は巨大な像が立っていても問題ない広さだ。像は両手を掲げ何やら呟き出すとすぐに変化が起きる。その変化とは周りがどんどん歪み始め、その歪みが広がっていく現象として現れた。

道を開けてくれ！

うちの子はどこ！？

助けてお母さん！

パニックになった人々の悲しみに満ちた叫び声が聞こえる。だが歪みは止まらず歪みに取り込まれた人々はどんどん融けていく。まるでディオールと一つになるようだった。

そしてどれくらいの時間が経ったか分からないがディオールはすべて一つとなった。

像……いや、悪夢神は周りを見る。そこには何もないようにみえるが何でもあるように感じる。

「ディオールの夢化計画がようやく成功したな。」

そう、ディオールは夢となった。悪夢神が自由にできる世界となったのだ。……だが

「ん？」

悪夢神は違和感を感じる。まだ掌握できてない場所があるような感覚だ。

「まあ、気にしなくても大した問題じゃない。」

そう考え悪夢神は次の手を打つことにした。今悪夢ではミリアのゲームが行われている。万が一でも彼女が負けてしまえば王の資格を手に入れたティルスや泰人達がここに来てはディオールを取り返される危険があった。そのためいくつもの難題な試練をティルスに与えた。だが彼は全て乗り越えた。それは全て玄武の孫、泰人が関係している。

「多少抵抗をしているようだが青龍は我の手駒にあり、死に損ない

のヴィントルは敵ではない。となると危険分子は茅野泰人だな。ラルゴの究極の力を手にされてはいくらミーンでも負ける可能性が出てくる。」

悪夢神が恐れているのはラルゴの究極の力らしい。だがそれだけじゃないようだ。

「そういえば上級精霊の力を秘めた白核石はくかくせきは何処へいったのだろうか。変な男が持ったまま姿を消したんだが、奴らの手に渡ってなければ問題ないな。」

こうして意見をまとめた。

「茅野泰人を倒せる存在を悪夢へ送る。」

そう言って他の夢の世界を見て泰人を倒せる人材を探す。だがなかなか見つからなく時間が過ぎるばかりだった。やはり基準が泰人を精神的に追い詰めて且つ強いのは難しいようだ。仕方なく一区切りつけようと思った時だった。

・・・憎い

あいつ、茅野泰人が憎い
奴に復讐したい

「む?。」

雰囲気が違う欠片を見つける。いや、夢の欠片ではなく、死人の魂だった。どうやら黄泉の世界から夢の世界に迷い込んだらしい。その魂は憎しみで存在を保っていたようだ。

「・・・ほう、これはいい。」

悪夢神はその魂に何かを感じた。能力的なものではなく能力を与えれば最高の使い方をしてくれる才能だ。

「興味がある。この者の記憶を見てみるか。」

悪夢神はその魂の記憶を探る。見ていくことに悪夢神はなにやら思いついたようだ。

「これは面白い。茅野泰人を追い詰める為に必要な最高の人材ではないか。」

悪夢神は更に魂の近くを見渡す。すると今にも消えそうな魂を二つ感じる。

「これか。・・・ならばこうするか。とっておきを与えてやろう。」

悪夢神が念じると消えそうな二つの魂は合わさって一つとなる。そして何やら強力な力を与えたようだ。

「さて、これで一番の邪魔者を排除できる。我の野望の完成は目の前だ！」

悪夢神は声高らかに笑った。

ディオールが夢となってしまった。そしてその夢の欠片は今戦いが行われている悪夢へと流れ着く。だが不都合が起き泰人たちの世界の止まっている人々の夢も混ざってしまった。それが7つの夢の欠片の正体だった。

メイディア

スタッフ

猫のプレスト

零渡祇亞

謎の少年

そしてミユアが知っている二人

その欠片がこの7人？である。

午前7時・雪美の屋敷

「恐らくお兄ちゃんを呼んだ人って………零渡祇亞さんじゃないかな。」

「そいつはどんな奴だ？一体ラルゴ使いとどんな関係がある？」

莉麻がその問いに答えようとすると急に別なところからここに来たような気配がする。

「それは私も気になるわね。」

「・・・え!？」

全員声がした方を向く。そこには精霊ミーマが立っていた。

「急用ができたから結界破らせてもらったわ。大丈夫、危害は加えない。それでその祇亞って子について聞きたいんだけど。」

戸惑いながらも信用したのか莉麻は頷くと話を続ける。

「詳しいことは分からないけど、3年前・・・お兄ちゃんが中学2年生の頃にその人は交通事故で亡くなったはずなの。・・・思い違いかな。」

そう言ってうんうん考える莉麻。

「・・・その子、泰人の事とても憎んでいたみたい。これで何かわかる?」

「・・・!？」

驚いた表情をする莉麻。どうやら心当たりがあるらしい。

「どうやら心当たりがあるようね。教えてくれないかしら? どうやらその子、一番危険かもしれないの。情報は色々仕入れておきたいわ。」

「・・・さっきのきいなって言葉、そして憎んでいたらしいってこと。これらが当てはまるのはやっぱり祇亞さんしかいないよ。」

でもあの人は……詳しく説明できない。思い出したくないよ。」

すごく辛そうな表情をする莉麻。一番嫌なことを思い出したかのような……そんな痛々しい表情だった。

「分かった、ありがとう。さてあなたたちに話さなくてはいけなことがあるわ。これからについて……ね。」

そしてミーアは急に真面目な顔になる。

「まず最初に残り人数のことよ。今朝、何者かの手によって30人前後の参加者がほんの2、3分で姿を消した。そしてその犯人は……祇亞って子だと思う。その子の実力は私と同じかもしれない。それ以上かもしれない。それで残りの参加者は20人。そろそろ予選も終わるわね。」

ザワザワと騒がしくなる。前日は50人前後で朝起きたら20人である。更にミーアクラスの敵の登場。驚かないほうがおかしい。

「次に迷い込んだ夢の欠片の話。そこにいる二人以外に後5人いるわ。分かってるのでさっきの祇亞を含めて3人ね。残りの二人はまだ把握しきれてないんだけど……」

「……その把握している3人の中に猫いる？」

ミュアが疑問に思い、話に割り込む。するとミーアは少し考えると

「……いないはずよ。全員人だったはずだわ。」

「……………」

ミューは黙る。するとメイドの美納下が慌てて入ってくる。

「大変です。昨日の猫ちゃんが部屋にいません！」

全員で部屋まで移動してきた。だが見たところ猫の姿はなかった。ミューは部屋全体を見渡して一つの事実に気づく。

「……この部屋にいたのって本当に普通の猫なの？ ちょっと危ない力を感じるのだけど。」

「ああ、そうだな。昨日は気付かなかったが……これは本気でまズいぞ。」

水晶のヴィントルはメイディアに抱えられたまま話す。

「その猫が祇亞って子の可能性が高いわね。だったら今の泰人じゃ絶対に勝てないわ。」

「……お兄ちゃんを止めなくちゃ!!」

慌てて部屋を出ていこうとする莉麻をミューが止める。

「待って！ まだ話は終わってないわ。最後の話はこれから私も一緒に祇亞の所まで行ってあげるってことなんだから。」

「・・・・・・・・・・。」

理解したのか莉麻は立ち止まる。

それを見てミリアは言葉を続ける。

「本当は敵対している貴方たちと組みたくはないけれどそんなこと言っている場合じゃないのよね。仕方ないから貴方たちと一時的に組んであげる。危険分子である祇亜を捕まえに行きましょう！」

その言葉に全員頷く。

そして話し合ったところ行くメンバーはリーダー、ティルス、スイング、フロン、ミリア、水晶ヴィントルということになった。莉麻はどうしても行きたいといったがミュアと雪美が説得し渋々納得した。

「じゃあ行きましょうか。居場所はだいたい分かっているわ。まずは外に出て。」

行くメンバーが外に出ていく。スイングも続こうとするが

「・・・・ぐっ！」

痛みで立ち止まってしまった。シロミヤーが心配そうにしている。

「ますたー、ちょっとまズくナーい？あの戦いであたしの力7割貸したの結構響いてるよね。無理して普通のふりしてたみたいだけど。」

「正直かなりキツイね。だけど俺たちは泰人を助けに行きたいんだ。」

あいつは俺っち達の希望なんだから。さあ、石に戻れ。」

そう言うときロミヤはならいいけどと言って石に戻った。
そしてスィングはそれをポケットに入れるとミィアたちを追っていた。

午前7時10分・とある拓けた場所

「・・・・・・・・零渡祇亞!!」

泰人は祇亞を睨みつけながらそう言った。どうやら何か嫌なことも思い出したかのような表情だ。

「待っていたぞ、泰人。お前とこうしてまた会うのを・・・・復讐で
きる機会が巡ってきたことをな!!」

睨み返す祇亞。その目には憎しみの炎が宿っているように見える。

「・・・・・・・・あれは自業自得だ。貴様のやったことの償いだと思
え。」

「俺は何も悪いことはした覚えはないぞ。ただ純粹にあれを楽しんでいただけだ。それをお前が邪魔したんだよ。」

「楽しみだと・・・、貴様あああああああ!!!!!!」

そう叫びラルゴシューターに変化させて祇亞目掛けて打つ。普通の人なら避けられないスピードだが

ヒョイ

祇亞は軽く身体をひねると楽そうにラルゴシューターの一撃を避ける。

「その程度か。もっと強いと思っていたんだがな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

一撃を避けられたことで泰人は思い出していた。祇亞が今回しでかしてきたことを。

そして相変わらず睨みながら言葉を紡ぐ。

「今回も相当やったらしいな。全部俺をおびき寄せるためってことか。」

「その通りだ。貴様に復讐するためなんだってやってやるさ。女、命令がある。よく聞け！」

「・・・はい。」

少女が虚ろな目で頷く。ディアルは複雑な表情をしていた。

「恐らくこいつの仲間がここに来るだろう。そいつらの足止めをし
ろ。別に消しても構わん。」

「な、・・・お前!!?」

「・・・了解しました。」

それに少女が頷き大地を蹴ると空高く飛び上がった。
どうやらディあると同じ力をもっているらしい。

「待て、おい!」

泰人の静止も聞かず少女は雪美の屋敷の方へと向かった。

「ヤバイ、追うしか・・・。」

「待って!!」

ディアルから止められる。

泰人がそっちを向くと決意をした目をしていた。

「僕があの人を・・・姉さんを止める。だから泰人はその男と何も
気負わずに戦ってくれ。」

「・・・ディアル。」

泰人は来た時から薄々分かってはいた。さっきの少女が彼の姉であ
ると。そして彼は姉を止めるという。その言葉の意味は・・・よく
分かっていた。

「正直僕と姉さんは君たち王子隊を倒すために生み出されたに過ぎない。だけど僕は姉さんを勝手に憎しみに染めて操ったこの男は許せない。だから止める。それだけだから勘違いはしないで欲しい。」

「……………」

何も言えなかった。でも何となく感謝されているのだということは感じる事ができた。

「……こいつなんか絶対負けないでよ。」

「ああ、当然だ！お前も頑張れよ。」

男と男の約束を交わしディアルは少女を追うべく雪美の屋敷へと飛んでいった。

「泣けるなあ。いいものを見させてもらったよ。」

明らかにふざけて笑いながら祇亜は言う。

誰が見ても感動しているようには見えなかった。

「強くなっても変わってないな。相変わらずの外道だ。」

「ふふ、褒め言葉として受け取ろう。さて、始めようかな。」

ピーー

祇亞が指笛を鳴らす。するとすぐに猫のプレストが現れる。

ミャー

それを見た泰人は驚きの表情を浮かべる。

「・・・プレzzo・・・か？何で祇亞と一緒にいるんだよ、そいつに殺されたんじゃない・・・。」

泰人はその猫を知っていた。しかも名前まで。だが祇亞の言っている名前と少し違う。

「そういやそんな名前だったな。まあ、どうでもいいけど。それよりもお前に懐かしい奴に会わせてやるよ。プレスト、甘噛みで頼むぞ。」

ミャー

プレストが鳴き声を上げると祇亞の左の薬指にかぶりつく。するとプレストは光り出し祇亞と一体化する。背が縮み、服装がセーラー服になり少女になる。猫耳と尻尾まで生えている。

「まったく、性別変わるのとか慣れないな。それにこの身体奴のだし・・・。」

「・・・」

泰人は黙ってしまった。驚愕の表情を浮かべながら何とか言葉にした。
その言葉が・・・

「・・・・・・・・希衣^{きいな}成？」

続く

44. 戦いの裏で (後書き)

どうでしたか？

ついに追いつきましたね。いやはや、ご迷惑をおかけしたと思いますがこれからも頑張っていきますのでまた見てもらえたら嬉しいです。

さて次回はやはり未定です。少し危なくなってきた忙しいので。では皆さん、風邪に気を付けてまた次回お会いしましょう！！

45. 激突！シュパルツVS祇亞（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。遅くなりましたがクリスマスに間に合いましたね。

さて、今回はタイトル通りの内容ですが少し戦闘短めかもしれません。

それではどうぞ！

45. 激突！シュパルツVS祇亞

過去

泰人君こんなところに呼んでごめんね。

いや別にいいんだが一体何のようだ希衣成？

えーっと、あのね・・・その・・・。

???

・・・あの、私・・・泰人君のことがその・・・

いや、無理しなくていいぞ。祇亞の奴がまた何か

ううん、言わせて欲しいの。私は・・・貴方が

好きです！

現在

「なんで・・・希衣成がここに・・・？」

「何故あの時死んだ希衣成がここに居るかってか。・・・まあ、そうなるのは分かっていた。優しい俺は軽く説明してやることにする。」

少女の姿をした祇亜は思い出すように語りだした。

「ずっとどこかをさ迷っていたんだが、気がついたらこの街の路地裏にいたんだよ。そんでなんか見覚えのある猫、プレストって名前が首輪にあるんだがこいつと一緒に、急に噛み付いたと思ったらこの女、希衣成の姿になってな。能力アップだけは凄くて嬉しいんだがこの姿は慣れん・・・と思っていたがそうでもないかもな。」

急にニヤリと笑う少女祇亜は中学生位に見える少女とは不釣合な笑みを浮かべている。

「お前に復讐するならこの姿の方が効果的だ。そうは思わないか？」
そう言ってゆっくりと泰人に近づいてくる祇亜。対して泰人は

「い、一体何が起こって・・・。」

目の前で起きた出来事についていけずにパニックを起こしてしまっていた。

「泰人さん！正気に戻ってください。相手来ますよ！！」

ラルゴが呼びかけるが一向に正気に戻る気配はない。
あっという間に距離を詰められた。

祇亜が右手を前に出すと急に爪が長く鋭く尖る。

「ふはは、希衣成に愛されながら死ね！」

「・・・あつ。」

爪が降り下ろされる。もう駄目だとラルゴは思った。
だが急に人影が割り込んでくる。

キンッ

甲高い鉄がぶつかる音がする。

目の前にいたのは・・・ナイフを持ったシュパルツだった。

「間一髪でしたね。今のうちに泰人君から身体の所有権借りて下が
っててください。」

「・・・あ、はい！」

フィルディアは驚いたがまた助けてくれるようなのでその通りにす
る。

泰人から身体的所有権を奪うと姿がフィルディアになる。

フィルディアは乱戦に巻き込まれないように二人から距離をとる。

「ほう、俺の邪魔をするのか。いい度胸だな！」

「元々私は泰人君と戦いたかったですからね。君の方が邪魔ですよ。
」

ギンッ

甲高い音を立てるとお互いに距離をとる。このままでは進まないからだ。

「あんた、マジで俺に勝てると思ってるのか。とてもそうには見えないけどな。」

「うーん、負けるでしょうね。しかし、ここで貴女に泰人君が倒されてはこちらの計画に支障が出るんですよ。それは避けたいので仕方なく戦うことにしましょう。」

そう言ってシュパルツは構えた。・・・それが合図だった。

場所は変わって雪美の屋敷前

ミーアが泰人たちの場所を探し転移の術式を作り上げるまでフロンは他のメンバーに泰人のことを聞くことにした。どうやら自分を全力で助けた泰人に興味を持ったようだった。誰に話そうか悩んだがティルスに話しかけた。王子隊のリーダーだから泰人のこともよく知っていると思ったからだ。

「ティルス君、ちょっといいかしら〜？」

「あ、はい。何でしょう？」

昨日の戦いの後、服装は少女ものではなく動きやすそうな格好になっていた。フロンは少女ティルスを結構気に入っていたので少し残念そうだったが、普通のティルスも気に入っているので問題ない。どうやら可愛ければいいらしい。

「泰人君について教えて欲しいの。彼はどんな人なのか・・・とかね♪」

「泰人さんの人柄ですか・・・。」

ティルスは考えた。ティルスは泰人よりも沙汰との付き合いの方が長いが少しの間で感じたことをまとめる。
ティルスは少し寂しそうに

「人付き合いが苦手な人だと思います。だから一人で抱え込んで自分を犠牲にして莉麻さんや沙汰さんを助けようと考えているんだと思います。僕達の旅にも最初は乗り気じゃなかったのですが、何だかんだ言っても来てくれました。本当は他の人よりも精神的に強くないからもっと仲間を頼ってもいいのに。だからこそ一番辛いであろう思い出と向き合っている今の泰人さんは危険すぎます。すぐにでも助けなくちゃいけない・・・そう思うんです。」

「・・・少し分かった気がするわ。ありがとうね。」

どういたしましてと返しティルスはミーマの方へ向かった。フロンは自分と似ているんだと思った。妹たちを救う為に自分を犠牲にしようとしていた彼女自身と・・・そして

「多分私たちも助けようとしているのね。」

泰人がフロンたちも助けようと思っていたことも理解する。

「でもあの子を犠牲にしてまで助かりたいとは思わないわね。．．．もし泰人君がやられそうなら私は．．．。」

「準備できたわ。すぐにでも出発するわよ！」

そうこうしているとミーアの術式が完成する。そして全員中へ入りで手を繋ぐ。

「何があるか分からないし、別々に飛ばされるのは避けたいからね。．．．．．じゃあ行くわよ！」

そう言ってミーア達は術式に吸い込まれるようにその場から消えた。

シュパルツたちの戦いは続いていた。

祇亜が恐るべきスピードでシュパルツに切りかかったと思うと、既に姿はなくそのシュパルツは背後に回って一撃を決めようと繰り出す。避けられて祇亜が再び切りかかる。．．．の繰り返しでお互いに決定的ダメージを与えられずにいた。

「．．．しつこい奴だな。まさか一瞬で背後に回られるとは。俺と似たような速度アップ能力なのか。」

「やはり手強いですね。ですが・・・このまま付き合ってもらいますよ。」

そう言って再び構えるシュパルツ。

しかし祇亞は何か違和感を感じていた。シュパルツは祇亞を倒そうという気が感じられない、そう思った。

「（時間を稼いで何をするつもりだ。・・・なるほどな。）」

何かに気づいた祇亞。シュパルツの一撃を避けて話しかける。

「よく分かった。予選が終わるまで時間を稼ぐつもりか。・・・茅野泰人がこれから俺より強くなるあてでもあんのかな。本当はもっと苦しめてやりたいがこっちも失敗したくないからな。・・・さっさとケリつけるか！」

「・・・む。」

祇亞は意外に勘が鋭く用心深いようだ。そして一気に力を高める。その周囲を漂う力の波動のようなものは白虎・・・そして朱雀を超えていた。

「・・・これはまずいですね。一旦退いて・・・」

「プレスト
pre st！」

気づいたときにはもう遅かった。

シュパルツは鋭い爪で刺されていた。爪は左胸を貫通し傷は深かつ

た。

ドサツ

そのままシュパルツは倒れた。

「だ、大丈夫ですか!!?」

フィルディアは駆け寄る。だがシュパルツは既に瀕死の状態だった。

「……いやはや、まさか真の名まで使ってくるとは。……………予想……がはぁ。」

「ちょ、ちよつと!?!」

血を吐き出すシュパルツに驚くフィルディア。
だがシュパルツは続ける。

「……泰人君、聞こえていますね。今すぐ逃げなさい。今の君では瞬殺されて……しまいます。」

ハアハアと荒い呼吸をしながら話すシュパルツはとても苦しそうだった。

フィルディアは泰人に身体の主導権を返す。すると再び泰人の姿に戻る。

「それよりあんたの方が危ないだろう。今すぐ蝸牛結界で……」

「最後に・・・一つだけ・・・。」

シュパルツの勢いに押されて黙る泰人。シュパルツの最後の言葉を聞く。

「ヴィントルの許可があるまで覚醒スネイラーは使わないでください。例えどんなに挑発されても・・・ね。・・・頼みましたよ。」

そう言って光の粒子になって消え・・・

「ふむ、まさかこんなに強いとは予定外だったな。」

・・・る直前白マントの男が現れ手を挙げると粒子が全て吸い込まれるように集まり白マントの体内に吸収された。

「あ、あんたは？」

「・・・とにかく予選を生き延びろ。そうすれば全てを教えてやる。」

そう言って白マントは立ち去っていった。

その場をゆっくりと見ていた祇亞。

退屈そうに欠伸をしながらようやく終わったのかと言い

「これくらいは待ってやろうと思ってね。さて邪魔者も消えたし、お前も希衣成の所に送ってやるから覚悟しとけ！」

「・・・・・・・・俺は、一体どうすれば？」

泰人はやはり祇亞と希衣成のことにまだ動揺しているようだった。そして身体を赤く染めた少女は泰人に一步一步近づいていった。

続く

45. 激突！シュパルツVS祇亞（後書き）

どうでしたか？

最初の方からいたキャラクター、シュパルツが遂にやられてしまいましたね。

最初はここまで重要キャラクターにする予定はなかったのですが、僕の姉もお気に入りだったのでここまで残しました。

今後の予定ですが、年内に予選は終わらせたいのでそれまでは頑張ろうと思います。次は明後日辺りを予定しています。

それでは皆さん、風邪には気を付けてまた次回お会いしましょう！

46. 予選最後の戦い・前編（前書き）

おはようございます、ロンロンの弟子です。
遅れてすみません。まとめ方が難しかったので。
という訳で予選最後は前後編でいきます。
では本編をどうぞ！

46. 予選最後の戦い・前編

回想

午前4時・路地裏、祇亞と双子戦闘中

「さあ、お楽しみはこれからだよ。」

そこからは地獄だった。一方的にやられていた、まさに格の違いを見せられたといったところだろう。

双子は気づくと全身傷だらけで倒れていた。双子はなんとか痛む身体で立ち上がるがもう戦うほどの力も残っていなかった。

「もう戦えんだろう。君たちには俺の駒になってもらおうか。」

そう言って祇亞は近づいてくる。

双子の姉は弟のディアルの方を見る。気づかないうちに彼女が守っていたのかディアルの方がダメージは少ない。この場から逃げるならば・・・

「…………仕方ない…………か。」

そう呟くと双子姉は集中し始めようとするが

「…………と思ったけど片方だけでいいや。もう片方は泰人を呼んできてもらいたいし。」

「え?」

一瞬何がなんだか分からなかったがすぐに理解する。

つまり・・・一人はこの場を逃がせるということだ。そうすると彼女はどう答えるか決まっていた。

「私が高質になる。弟の方は逃がして欲しい。」

「・・・ちょ、ちょっと、勝手に決めないでよ。ここは男の僕が・・・って。」

ギョッ

反論するディアルを抱きしめる姉。
突然のことで黙ってしまふディアル。

「私の計算ではディアルの方が適任。というかそれ以前に貴方の方がダメーじ少ないし当然よ。・・・頑張ってね。」

「・・・・・・・・分かった、絶対助けに来るから待ってて！」

そう言い二人は離れる。

それを見て祇亜はケラケラと笑いながら

「感動したよ。これが姉弟愛ってやつか。俺には兄弟なんていなかったから余計いいもんだって思わなくもないよ。・・・じゃあ弟の方は行け。ちゃんと泰人を連れてこなかったら姉のほう消すからよろしく。」

軽くふざけて言う祇亜にとっても腹が立ったが今のままではとてもではないが敵わない。

ディアルは心の中で姉に何度も謝罪しながらその場を飛び立つ。

「そうだ。もし奴が乗り気じゃなかったらこう言えば絶対来るよ・・・きいなんてな。」

最後そんな言葉を聞いた気がした。

そして彼が去った後

「・・・さてお姉さんの方は操り人形になってもらおうか。俺の憎しみの力分けてやるからありがたく思いな。」

「・・・信じてるよ、ディアル。」

そして今

「僕が姉さんを止めなくちゃいけない。・・・たとえこの身を犠牲にしてもやるんだ！」

ディアルは移動しながら決意を固めていた。

雪美の屋敷前

「……じゃあ行くわよ！」

ミーア達は術式に吸い込まれるようにその場から消えた。目指す場所には泰人がいる原っぱである。

ミーアの術のため他のメンバーも安心してた。実際、途中までは順調に移動をしていた……が突如何らかの衝撃を受ける。

「……な、何!？」

ミーア達は気づく。衝撃は何回かに分けてきている。このまま衝撃を受け続けては異空間に飲み込まれてしまう。

「皆! 一回転移中断するわ。手を離さないで降りるわよ。」

そう言って一同は降りる。

降り立った場所は無限に闇が広がる空間、術式空間と呼ばれる場所だ。ここで作られた術が術式等を通し現実世界に送られる、全ての原点で、泰人とフィルディアが飛ばされた場所でもある。

そんな場所で彼女たちの前に立ちふさがる少女が一人。

「待っていた。王子隊とその他数名。」

それはディアルの双子の姉だった。目に光は宿ってなく明らかに普通ではないと誰が見ても分かった。

「貴女は空の隊の双子の姉、ディアスね。憎しみの力を感じるし恐らく祇亜に操られてると考えられる。じゃあ悪いけど一気に決めさせてもらおうわよ!」

そう言って術式を描こうとするミーアだが

「・・・あれ、何で術式が反応しないの？」

完成した術式からは何も反応しない。普通であればこの空間でも術式は使えるはずである。

「無理。今ここは私のフィールド。周りを見て。」

ミーアたちは周りを見る。すると彼女たちを囲うようにサークルが描かれている。

これによってすべての術式や能力を封じているようだ。

「だったらここから出れば・・・。」

そう言ってミーアはサークルから出ようとするが

バチバチッ

「・・・キャッ。」

弾かれる。どうやらこのサークルからは出られないようだ。

サークルは彼女たちをぐるっと囲うように全長10m位ある。

「無理。ここからは出られない。そして貴女たちは能力が使えなくても私は問題なく使える。」

するとディアスがミーアたちに手を向ける。そこからいくつもの気弾が発射されミーアたちを襲う。

能力を使えなければミーアもただの少女である。

「ちょっとこれは……。」

「仕方ないな、僕に任せてくれ！」

ミーア達を守るように武者蜥蜴隊のリーダーが前に出る。
そしてすべての気弾を全て受け止める。

「これは予定外。」

「まあ、一応リーダーだからね。これくらい出来て当たり前だよ。」

「……だったらこれでどう？」

そう言って彼女は再び気弾を発射する。その大きさはさっきの比ではなく2mクラスの巨大なものでかなりの力を感じる。まともに受けてはひとたまりもない。

だがリーダーが避けると後ろにいるミーアたちが受けてしまう。それは嫌だった彼はこれを受け止めようと両手を出す。

「ちょっと、それを受け止めたらあなたやられるわよ。」

ミーアの静止も聞かず向かってきた気弾を正面から受け止める。

ググググッ

明らかに押されていた。能力なしでこれを受け止めるのは不可能に近かった。

「僕はミーア様を守るために生み出されたし、そこにいる王子隊には借りもあるからね。……ここは命を賭けても止めるさ。」

そう言って彼は全身に力を込める。どうやら自分の力をぶつけて相殺するつもりだ。

「だ、駄目よ。ここは一時的に夢の空間から外れた場所。ここで消えたらあなたもう再生できない・・・」

言い終わる前にリーダーは振り返りほほ笑みかける。
もう覚悟を決めたような笑みだった。

「あのメイド少女に伝えておいてくれ。本当にすまなかった・・・と・・・」

それが彼の最後の言葉だった。

・・・武者蜥蜴隊リーダーは気弾と共に消滅した。

「そ、そんな・・・。」

一人やられてしまった。

ミィアたちは息消沈してしまう。いくら変な奴だったとしても彼女たちを守ってくれたことには違いなかったからだ。

「一人消滅を確認。残りは戦闘能力あるものなし。勝利する可能性・・・99%！」

もう何もできなかった。このままやられるのを待つしかなかった。

「私、能力無効にされただけでこんなに無力だなんて。・・・本当、駄目ね。」

「攻撃開・・・」

ディアスが攻撃をしようと手を向けた時だった。

「止めに来たよ姉さん!!」

「え？」

バチバチバチバチッ・・・パキーン

サークルが消えていく。どうやら外部からの攻撃を受けて消滅していくようだ。

「大丈夫ですか、ミリア様!？」

そこに駆けつけたのは

「・・・ディアル確認!」

空の隊、ディアスの双子の弟のディアルだった。

続く

46. 予選最後の戦い・前編（後書き）

どうでしたか？

少し設定について語りましょう。今現在こんな考えで書いています。基本ミリアの作り出したキャラは再生可能ですが、海の隊といった外部から来た人や夢の世界外でやられた場合は無理です。

そして闇の空間ですがディオールで使われる術の場合、この空間で作られディオールに送られるという術をつくる場所とされています。勿論例外はありますが、大抵はそういう考えです。不思議なところでは。能力は個人に宿る力なため術式関係の能力以外はこの空間を必要としません。

とはいっても泰人たちの世界では術は使えません。これまた例外はありますがそれは後ほど。能力は使えるものもあります。ティルスの空間移動がそれですね。

大まかにはそんなところです。詳しくは進めているうちに分かると思います。

さて次回ですが今年中にあと一つ投稿します。次で予選終わりますからね。

果たして双子はどうなるのか、泰人と祇亜の対決の行方は、すべて次回でまとめます。

それでは皆さん今年の汚れは今年のうちに。

また次回お会いしましょう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698g/>

Mystic world

2011年12月29日01時52分発行